

京都府遺跡調査報告書

第 1 冊

豊富谷丘陵遺跡

1983

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく2年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切に考える考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、この報告の豊富谷丘陵遺跡も国鉄の電車基地建設工事に伴う事前調査であります。調査によって発見された遺跡の多くは調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅してはいけません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この『京都府遺跡調査報告書』は、遺跡の重要性を理解していただくために、またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用を図るために刊行するものであります。この報告書のほかに、調査結果を掲載した『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、福知山市教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに炎暑の下、極寒の中、熱心に作業に従事していただいた多くの方があります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申しあげます。

昭和58年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

本文目次

はじめに	1
第1章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の経過	6
第3章 墳墓の調査	9
第1節 各墳墓の概要	9
第2節 墳丘について	76
第3節 埋葬施設について	83
第4節 墳墓出土遺物	85
第4章 狸谷城跡の調査	105
第1節 狸谷城跡第Ⅱ地点	105
第2節 狸谷城跡第Ⅲ地点	105
第5章 大道庵寺跡の調査	109
第1節 立地と現状	109
第2節 検出遺構	109
第3節 今安庵寺跡の立会調査	118
第4節 出土遺物	119
第5節 大道庵寺跡について	124
まとめ	128
付載 大道寺経塚出土埋納紙本経の保存修理とその意義	130

挿 図・付 表 目 次

第 1 図	調査地周辺の遺跡分布図……………	4
付 表 1	調査進行表……………	7
第 2 図	豊富谷丘陵遺跡分布図……………	11
第 3 図	TT 1～5号墳地形図……………	13
第 4 図	第5主体部出土遺物実測図……………	15
第 5 図	TD 3号墳地形図……………	22
第 6 図	SG18・22号墳地形図……………	25
第 7 図	出土遺物……………	27
第 8 図	TD 4号墳地形図……………	28
第 9 図	TD 7号墳地形図……………	29
第 10 図	TD I 地点地形図……………	30
第 11 図	TD16号墳地形図……………	32
第 12 図	TD11・17・18号墳地形図……………	33
第 13 図	出土遺物……………	35
第 14 図	RD 6号墳地形図……………	44
第 15 図	DD13号墳地形図……………	50
第 16 図	DD14号墳地形図……………	51
第 17 図	DD17・18号墳地形図……………	53
第 18 図	DD 7・19号墳地形図……………	54
第 19 図	DD 5・6号墳地形図……………	57
第 20 図	DD 4・20・21号墳地形図……………	63
第 21 図	DD22号墳地形図……………	67
第 22 図	DD23号墳地形図……………	69
付 表 2	調査成果一覧表……………	70
付 表 3	墳墓群時期区分表……………	78
付 表 4	墳墓出土土器観察表……………	87
付 表 5	墳墓出土鉄製品観察表……………	99
第 23 図	出土遺物実測図……………	106

第 24 図	大道廃寺跡遺構平面図	111
付表 6	大道廃寺跡古墓形態表	116
付表 7	大道廃寺跡出土遺物観察表	119

図 版 目 次

- 図版第 1 (1)TT 1 号墳主体部配置図 (2)TT 1 号墳第 1 主体部実測図
(3)TT 1 号墳第 2 主体部実測図 (4)TT 1 号墳第 3 主体部実測図
- 図版第 2 (1)TT 1 号墳土坎実測図 (2)TT 1 号墳第 5 主体部(中世墓)実測図
(3)TT 3 号墳主体部配置図 (4)TT 3 号墳主体部実測図
- 図版第 3 (1)TT 4・5 号墳主体部配置図 (2)TT 4 号墳第 1 主体部実測図
(3)TT 4 号墳第 2 主体部実測図 (4)TT 4 号墳第 2 主体部内遺物出土状況
- 図版第 4 (1)TT 4 号墳西北側溝内遺物出土状況
(2)TT 4 号墳第 1 主体部東北側遺物(須恵器)出土状況
(3)TT 5 号墳第 1 主体部実測図
(4)TT 5 号墳第 2 主体部(中世墓)実測図
- 図版第 5 (1)SG 1 号墳主体部配置図 (2)SG 1 号墳第 1 主体部実測図
(3)SG 1 号墳第 2 主体部実測図 (4)SG 7 号墳トレンチ配置図
- 図版第 6 (1)SG 8 号墳主体部配置図 (2)SG 8 号墳主体部実測図
(3)SG10号墳主体部配置図 (4)SG10号墳主体部実測図
- 図版第 7 (1)MY 7 号墳・TD 1 号墳主体部配置図 (2)TD 1 号墳主体部実測図
(3)MY 7 号墳主体部実測図
- 図版第 8 (1)TD 2 号墳主体部配置図 (2)TD 2 号墳第 1 主体部実測図
(3)TD 2 号墳第 2 主体部実測図 (4)TD 2 号墳第 3 主体部実測図
- 図版第 9 (1)TD 3 号墳主体部配置図 (2)TD 3 号墳第 1 主体部実測図
(3)TD 3 号墳第 2 主体部実測図 (4)TD 3 号墳第 3 主体部実測図
- 図版第10 (1)TD 3 号墳土坎実測図 (2)SG18号墳主体部配置図
(3)SG18号墳主体部実測図 (4)SG22号墳主体部配置図
(5)SG22号墳主体部実測図
- 図版第11 (1)TD16号墳・主体部配置図 (2)TD16号墳主体部実測図
(3)TD-I 主体部配置図 (4)TD-I 第 1・2 主体部実測図
- 図版第12 (1)TD18号墳主体部配置図 (2)TD18号墳主体部実測図
(3)TD18号墳第 2 主体部実測図 (4)TD18号墳主体部遺物出土状況
(5)TD18号墳東側溝遺物出土状況
- 図版第13 (1)TD17号墳主体部配置図 (2)TD17号墳第 1 主体部実測図

- (3)TD17号墳第2主体部実測図 (4)TD17号墳第3主体部実測図
- 図版第14 (1)RD9号墳主体部配置図 (2)RD9号墳主体部実測図
(3)RD9号墳溝遺物出土状況 (4)RD2号墳第4主体部実測図
- 図版第15 (1)RD9・2・10号墳主体部配置図 (2)RD2号墳第1主体部実測図
(3)RD2号墳第2主体部実測図 (4)RD2号墳第3主体部実測図
(5)RD10号墳主体部実測図
- 図版第16 (1)RD3号墳主体部配置図 (2)RD3号墳第1主体部実測図
(3)RD3号墳第2主体部実測図 (4)RD3号墳第3主体部実測図
- 図版第17 (1)RD4号墳主体部配置図 (2)RD4号墳第1主体部実測図
(3)RD4号墳第2主体部実測図 (4)RD4号墳第3主体部実測図
(5)RD5号墳主体部配置図 (6)RD5号墳第1主体部実測図
(7)RD5号墳第2主体部実測図
- 図版第18 (1)RD7号墳主体部配置図 (2)RD7号墳第1主体部実測図
(3)RD7号墳第2主体部実測図 (4)RD6号墳主体部配置図
(5)RD6号墳主体部実測図
- 図版第19 (1)DD24号墳主体部配置図 (2)DD24号墳主体部実測図
(3)RD11号墳主体部配置図 (4)RD11号墳第1主体部実測図
- 図版第20 (1)RD11号墳第2主体部実測図
(2)RD11号墳第1主体部掘出土状況実測図
(3)RD11号墳第2主体部掘出土状況実測図
(4)RD12号墳主体部配置図
(5)RD12号墳主体部実測図
- 図版第21 (1)DD1号墳主体部配置図 (2)DD1号墳第1主体部実測図
(3)DD1号墳第2主体部実測図 (4)DD1号墳第3主体部実測図
(5)DD1号墳第4主体部実測図 (6)DD1号墳第5主体部実測図
(7)墳丘南側斜面出土遺物実測図
- 図版第22 (1)DD13号墳主体部配置図 (2)DD13号墳主体部実測図
(3)DD14号墳主体部配置図 (4)DD14号墳第1・2主体部実測図
- 図版第23 (1)DD17・18号墳主体部配置図 (2)DD17号墳主体部(中世墓)実測図
(3)DD18号墳主体部実測図
- 図版第24 (1)DD7号墳主体部配置図 (2)DD7号墳第1主体部実測図
(3)DD7号墳第2主体部実測図 (4)DD7号墳第3主体部実測図

- 図版第25 (1)DD 6 号墳主体部配置図 (2)DD 6 号墳第 1 主体部実測図
(3)DD 6 号墳第 2 主体部実測図 (4)DD 6 号墳第 3 主体部・焼土坑実測図
- 図版第26 (1)DD 6 号墳第 4 主体部実測図 (2)DD 6 号墳第 5 主体部実測図
(3)DD 6 号墳第 6 主体部実測図 (4)DD 6 号墳南溝遺物出土状況
(5)DD 6 号墳第 7 主体部実測図
- 図版第27 (1)DD 5 号墳主体部配置図 (2)DD 5 号墳第 1 主体部実測図
(3)DD 5 号墳第 2 主体部実測図
- 図版第28 (1)DD 5 号墳第 3 主体部実測図 (2)DD 5 号墳第 4 主体部実測図
(3)DD 5 号墳第 5 主体部実測図 (4)DD 5 号墳第 6 主体部実測図
- 図版第29 (1)DD 4 号墳主体部配置図 (2)DD 4 号墳第 1 主体部実測図
(3)DD 4 号墳第 2 主体部実測図 (4)DD 4 号墳第 3 主体部実測図
- 図版第30 (1)DD 4 号墳第 4・5 主体部実測図
(2)DD 4 号墳第 6 主体部・焼土坑実測図
(3)DD 4 号墳第 7 主体部実測図
- 図版第31 (1)DD20・21号墳主体部配置図 (2)DD20号墳主体部実測図
(3)DD21号墳第 1 主体部実測図 (4)DD21号墳第 2 主体部実測図
- 図版第32 (1)DD22号墳主体部配置図 (2)DD22号墳第 1 主体部実測図
(3)DD22号墳第 2 主体部実測図
- 図版第33 (1)DD23号墳主体部配置図 (2)DD23号墳主体部実測図
- 図版第34 (1)TDⅢ地点遺構配置図 (2)1・2・3 号墓実測図
(3)4 号墓実測図
- 図版第35 (1)焼土坑 1 実測図 (2)焼土坑 2 実測図 (3)土坑実測図
- 図版第36 大道廃寺跡建物平面図
- 図版第37 古墓実測図 1
- 図版第38 古墓実測図 2
- 図版第39 古墓実測図 3
- 図版第40 古墓実測図 4
- 図版第41 古墓および方形壇実測図
- 図版第42 経塚実測図 1
- 図版第43 経塚実測図 2
- 図版第44 大道廃寺跡古墳時代埋葬主体部実測図
- 図版第45 墳墓 出土遺物実測図 1(土器)

- 図版第46 墳墓 出土遺物実測図2(土器)
- 図版第47 墳墓 出土遺物実測図3(土器)
- 図版第48 墳墓 出土遺物実測図4(土器)
- 図版第49 墳墓 出土遺物実測図5(土器)
- 図版第50 墳墓 出土遺物実測図6(土器)
- 図版第51 墳墓 出土遺物実測図7(鉄製品)
- 図版第52 墳墓 出土遺物実測図8(鉄製品)
- 図版第53 墳墓 出土遺物実測図9(鉄製品)
- 図版第54 墳墓 出土遺物実測図10(鉄製品)
- 図版第55 大道廃寺跡出土遺物実測図1(土器)
- 図版第56 大道廃寺跡出土遺物実測図2(土器)
- 図版第57 大道廃寺跡出土遺物実測図(経塚・墳墓主体部出土)
- 図版第58 (1)西北からみた豊富谷丘陵 (2)第Ⅰ区(TT1～5号墳, SG1・7・8号墳)
- 図版第59 (1)第Ⅱ区(TD11・17・18号墳, TD-Ⅱ・Ⅲ地点)
(2)第Ⅲ区(RD2～7・9～12号墳, DD1・13・14号墳)
- 図版第60 (1)第Ⅳ区(DD4～7・17～23号墳, 大道廃寺跡)
(2)西北からみた第Ⅲ区(RD6・7・11～13号墳, DD1・13・14号墳)
- 図版第61 (1)TT1～4号墳調査前全景(東南から)
(2)TT1号墳主体部全景(北上から)
- 図版第62 (1)TT1号墳第1主体部遺物出土状況(北から)
(2)TT1号墳第2主体部遺物出土状況(南から)
- 図版第63 (1)TT1号墳壺出土状況(南から)
(2)TT1号墳中世墓遺物出土状況(西から)
- 図版第64 (1)TT3号墳(手前)・4号墳全景(西北から)
(2)TT3号墳主体部全景(西南から)
- 図版第65 (1)TT4号墳第1主体部全景(西から)
(2)TT4号墳第2主体部全景(東北から)
- 図版第66 (1)TT4号墳溝全景(東北から)
(2)TT5号墳主体部全景(西北から)
- 図版第67 (1)SG1号墳主体部全景(西南から)
(2)SG8号墳主体部全景(北から)
- 図版第68 (1)SG10号墳主体部全景(東から)

- (2)SG18号墳調査前全景(北から)
- 図版第69 (1)SG18号墳主体部全景(西南から)
(2)SG22号墳主体部全景(西から)
- 図版第70 (1)MY 7号墳調査前全景(北から)
(2)MY 7号墳主体部全景(西北から)
- 図版第71 (1)MY 7号墳・TD 1号墳全景(西から)
(2)TD 1号墳主体部全景(西北から)
- 図版第72 (1)TD 2号墳全景(東から)
(2)TD 2号墳第 2 主体部(西から)
- 図版第73 (1)TD 3号墳主体部全景(西南から)
(2)TD 3号墳第 3 主体部全景(東北から)
- 図版第74 (1)TD- I 地点調査前全景(南から)
(2)TD- I 地点第 1・2 主体部全景(西から)
- 図版第75 (1)TD16号墳全景(東南から)
(2)TD16号墳主体部全景(西北から)
- 図版第76 (1)TD17号墳第 1 主体部全景(西南から)
(2)TD17号墳第 2 主体部全景(西南から)
- 図版第77 (1)TD17号墳第 2 主体部土師器及び鏡片出土状況(西北から)
(2)TD17号墳第 2 主体部全景(西南から)
- 図版第78 (1)TD18号墳主体部全景(西から)
(2)TD18号墳主体部遺物出土状況(北から)
- 図版第79 (1)RD 2・9・10号墳遠景(西南から)
(2)RD 2号墳全景(東南から)
- 図版第80 (1)RD 2号墳北溝内遺物出土状況(東南から)
(2)RD 2号墳第 4 主体部全景(西北から)
- 図版第81 (1)RD 9号墳全景(東南から)
(2)RD 9号墳主体部全景(東北から)
- 図版第82 (1)RD 3号墳・4号墳(中央)調査前全景(南から)
(2)RD 3号墳主体部全景(西から)
- 図版第83 (1)RD 3号墳・4号墳(中央)全景(東南から)
(2)RD 4号墳主体部全景(北から)
- 図版第84 (1)RD 5号墳遠景(東南から)

- (2)RD 5号墳第1主体部全景(西から)
- 図版第85 (1)RD 6号墳調査前全景(北から)
(2)RD 6号墳主体部全景(西から)
- 図版第86 (1)RD 7号墳調査前全景(南から)
(2)RD 7号墳主体部全景(東から)
- 図版第87 (1)RD13号墳全景(西から) (2)RD13号墳主体部全景(西北から)
- 図版第88 (1)RD11号墳調査前全景(東北から)
(2)RD11号墳第1主体部全景(西北から)
- 図版第89 (1)RD11号墳第1主体部刀出土状況(西北から)
(2)RD11号墳第2主体部全景(東南から)
- 図版第90 (1)RD12号墳調査前全景(東北から)
(2)RD12号墳主体部全景(西南から)
- 図版第91 (1)DD 1号墳調査前全景(東南から)
(2)DD 1号墳主体部全景(東南から)
- 図版第92 (1)DD13号墳調査前全景(東北から)
(2)DD13号墳全景(東北から)
- 図版第93 (1)DD14号墳主体部全景(東から)
(2)DD17号墳(手前)・18号墳全景(南から)
- 図版第94 (1)DD17号墳中世墓(蔵骨器)出土状況(東から)
(2)DD18号墳主体部全景(西から)
- 図版第95 第Ⅳ区南尾根遠景(東から)
- 図版第96 (1)DD 7号墳全景(南から)
(2)DD 6号墳主体部全景(北から)
- 図版第97 (1)DD 6号墳壺棺出土状況(南から)
(2)DD 6号墳第3主体部及び土塚全景(東から)
- 図版第98 (1)DD 6号墳第5主体部全景(西から)
(2)DD 6号墳第6主体部全景(東から)
- 図版第99 (1)DD 5号墳全景(北から)
(2)DD 5号墳第2主体部全景(東から)
- 図版第100 (1)DD 5号墳第4主体部全景(西から)
(2)DD 5号墳第4主体部遺物出土状況(北から)
- 図版第101 (1)DD 4号墳全景(南から)

- (2)DD 4号墳第8主体部全景(北から)
- 図版第102 (1)DD20号墳主体部全景(東から)
(2)DD21号墳全景(西南から)
- 図版第103 (1)DD21号墳第1主体部全景(東南から)
(2)DD22号墳第1主体部全景(東南から)
- 図版第104 (1)DD22号墳第2主体部全景(東北から)
(2)DD22号墳第2主体部全景(東南から)
- 図版第105 (1)TD-II地点調査前全景(西から)
(2)TD-II地点トレンチ全景(西南から)
- 図版第106 (1)TD-III地点調査前全景(南から)
(2)TD-III地点墳墓全景(南から)
- 図版第107 (1)墳墓の墓壇(東北から)
(2)TD-III地点4号墓(西から)
- 図版第108 (1)TD-III地点全景(南から)
(2)TD-III地点全景(西から)
- 図版第109 (1)今安廃寺跡立会調査トレンチ全景(東南から)
(2)今安廃寺跡立会調査トレンチ全景(東から)
- 図版第110 (1)大道廃寺跡調査前全景(東北から)
(2)中世墓群調査前状況(東から)
- 図版第111 (1)建物跡SB01(東から) (2)建物跡SB02(東から)
- 図版第112 (1)建物跡SB03(東から) (2)建物跡SB04(東から)
- 図版第113 (1)C地区中世墓群(東から) (2)6号墓(東北から)
- 図版第114 (1)25号墓(西南から)
(2)15号墓蔵骨器出土状況(西北から)
- 図版第115 (1)経塚集石状況(北から)
(2)経塚副室内和鏡出土状況(西南から)
- 図版第116 (1)経筒外容器埋納状況(西から) (2)経筒埋納状況(西から)
- 図版第117 (1)経筒外容器出土状況(東から) (2)経筒外容器取り上げ後(東から)
(3)経筒外容器下部底面(東から)
(4)経塚完掘状況(東から)
- 図版第118 出土遺物(1)
- 図版第119 出土遺物(2)

- 図版第120 出土遺物(3)
図版第121 出土遺物(4)
図版第122 出土遺物(5)
図版第123 出土遺物(6)
図版第124 出土遺物(7)
図版第125 出土遺物(8)
図版第126 出土遺物(9)
図版第127 出土遺物(10)
図版第128 出土遺物(11)
図版第129 出土遺物(12)
図版第130 出土遺物(13)
図版第131 出土遺物(14)
図版第132 大道寺経塚出土紙本経

凡 例

1. 本報告書は、昭和55年5月から昭和57年3月まで実施した京都府福知山市字篠尾・新庄・半田・今安に所在する豊富谷丘陵遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、日本国有鉄道大阪工務局の依頼を受け、昭和55年度は京都府教育委員会が、昭和56年度は財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターがそれぞれ主体となって実施した。本書作成にかかる経費は、全額日本国有鉄道大阪工務局が負担した。
3. 出土遺物の実測・トレースは、主に増田孝彦・雲出美智子・加藤由美・東山結花・小堀淳子・北山貴美子が行った。
4. 本書に掲載した写真は、遺構については主に竹原一彦・増田孝彦が撮影し、遺物については元文部技官高橋猪之介氏に撮影を依頼した。
5. 本書の執筆は、はじめに・第1章第1節を堤圭三郎、第1章第2節を田中 彰、第2章・第3章第1～3節・第4章を増田孝彦、第3章第4節・第5章を竹原一彦、まとめを増田・竹原が担当し、付載として京都国立博物館難波田徹氏に寄稿を願った。
6. なお、本文中の墳墓群等に冠した地名の略号は、以下のとおりである。

TT：谷尾谷，MY：向山，TD：狸谷，RD：論田，DD：大道寺，
SG：セイゴ

豊富谷丘陵遺跡発掘調査報告書

はじめに

豊富谷丘陵遺跡は京都府福知山市字篠尾・新庄・半田・今安に所在する。福知山市街地の中心部から北西に約2.5km離れた南北に細長い標高約40～50mの丘陵上に点在する遺跡である。日本国有鉄道大阪工事局では、この豊富谷丘陵の一部に福知山電車基地を建設することになり、当地域の埋蔵文化財の取り扱いについて、昭和54年10月に京都府教育委員会に協議があった。京都府教育委員会が昭和47年に刊行した『京都府遺跡地図』では、この丘陵地は遺跡の空白地になっていたが、同委員会がその後実施した分布調査によって若干の遺跡が確認されていた。

京都府教育委員会では、これまでに確認されていた遺跡のほかにも多くの遺跡が存在する可能性があることを懸念して、昭和54年11月に約1週間をかけ、当丘陵地の分布調査を実施した。その結果、当丘陵地には81か所の古墳や寺院跡があることがわかり、福知山電車基地建設予定地内には、そのうちの33か所の遺跡が含まれることが判明した。この分布調査の結果に基づき、京都府教育委員会と日本国有鉄道大阪工事局との間で協議が行われ昭和55年度から3か年にわたり、電車基地建設予定地内の発掘調査及び出土遺物等の整理を行うことになった。

昭和55年度の調査は京都府教育委員会が主体となり、京都府教育庁指導部文化財保護課が担当して実施した。昭和56、57年度は京都府教育委員会が新たに設立した財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが引き継いで調査を実施した。発掘調査は昭和55年5月6日から4日間実施した今安廃寺の立会調査を皮切りに、昭和55、56両年度にわたって実施し、昭和57年度は現地の一部補足調査を行い、大部分は出土遺物の整理事業に費した。

分布調査の結果、33か所の遺跡を対象として発掘調査に着手したが、樹木伐採を行い調査が進行するにしたがい新たに遺跡と判断されるものが増加し、最終的には60か所に及ぶ地点の発掘調査を実施した。現地調査を担当したのは、昭和55年度が堤圭三郎、松井忠春、増田孝彦、小泉信吾、田中 彰の5名、昭和56年度が松井忠春、増田孝彦、竹原一彦の3名であり、昭和57年度の遺物整理は竹原一彦、増田孝彦が中心となり、松井忠春、小池 寛がこれを補助した。

調査に当っては日本国有鉄道大阪工事局及び同福知山工事区と連絡調整を綿密にしたが多量の点について配慮いただいた。また、福知山市教育委員会、福知山市総務部企画課、

福知山市史編さん室、福知山史談会、京都府立丹後郷土資料館、(財)元興寺文化財研究所には多大の協力をたまわった。さらに、今安、半田、新庄、笹尾地区の有志の方がた、多数の学生有志の方がたの協力に対し、感謝の意をのべるものである。

福知山市の面積は26,443km²、人口は約64,000人で、市街地は東から流れて来た由良川がその支流である土師川と合流して大きく90度曲り北へ流れるその合流点の西側に展開している。現在の市街地はもともと由良川と土師川の合流・氾濫原に当たっているが、江戸時代に有馬豊氏が入部して、福知山の城郭を完成させると、城下町もほぼ完成し、発展し現在の市街地の基礎が整備されたのである。

福知山盆地周辺の水系は、太古の昔は加古川と連続し、瀬戸内海に流れ込んでいたが、地殻変動により現在の兵庫県水上郡市島町石生付近が隆起したため河川が南北に二分され南へ流れていた水流が福知山地域で淀んで福知山湖と化し、やがて北流し現在の由良川ができたと推定されている。東から流れて来た由良川が、福知山盆地で急に方向を変え北流しているが、この転換点で土師川と合流し、弘法川、和久川、牧川などを合わせて広大な沖積平野を形成している。これらの支流との合流地点では氾濫の被害も多く、市街地中心部を除けば、ほとんどの集落は標高20m以上の丘陵地や台地上に営まれている。古代の遺跡もまた同じように、合流河川周辺の丘陵地や台地上に多く分布している。

福知山市は京都府の北部に位置するものの日本海よりやや南に離れており、周囲を山地に囲まれた山間盆地であるため、日較差が大きく内陸性の気候条件を備え、丹波地方特有の霧の発生しやすい土地である。

地質的には福知山市北部を舞鶴地溝帯が走り、豊富谷丘陵とその周辺に明瞭な断層線が認められるが、その生成時期は明らかになっていない。

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

福知山市は南北に細長い京都府の北部にあり、京都府、滋賀県、福井県の県境に源を発し、日本海に注ぎ込む由良川の中流域を占めている。福知山市の北西にある夜久野町と南東にある三和町とともに、もとは天田郡に属し、たびたびの町村合併により誕生した市であるが、現在ではその面積26,443km²、人口約6万4千人の京都府北部における主要都市になっている。北は加佐郡大江町、東は綾部市、東南は天田郡三和町、南は兵庫県氷上郡市島町、西は兵庫県氷上郡青垣町、西北は天田郡夜久野町とそれぞれ接している。

京都府を縦断する国道9号線が旧山陰道に沿って走り山陰方面に通じている。舞鶴市と兵庫県氷上郡市島町を結ぶ国道175号線が、福知山市内で国道9号線と交叉し、この二つの幹線道路により、市街地が二分されている。集落は市の中央部を流れる由良川の流域とその支流の谷平野に分布している。すなわち、東方の綾部市域を経て西流してきた由良川はその一大支流である土師川と合流した後、直角に屈曲して北へ流れるが、その屈曲点の外側に市街地が展開している。現在の市街地の広がる地域は、もともと由良川と土師川の合流、氾らん原に相当する。

第2節 歴史的環境

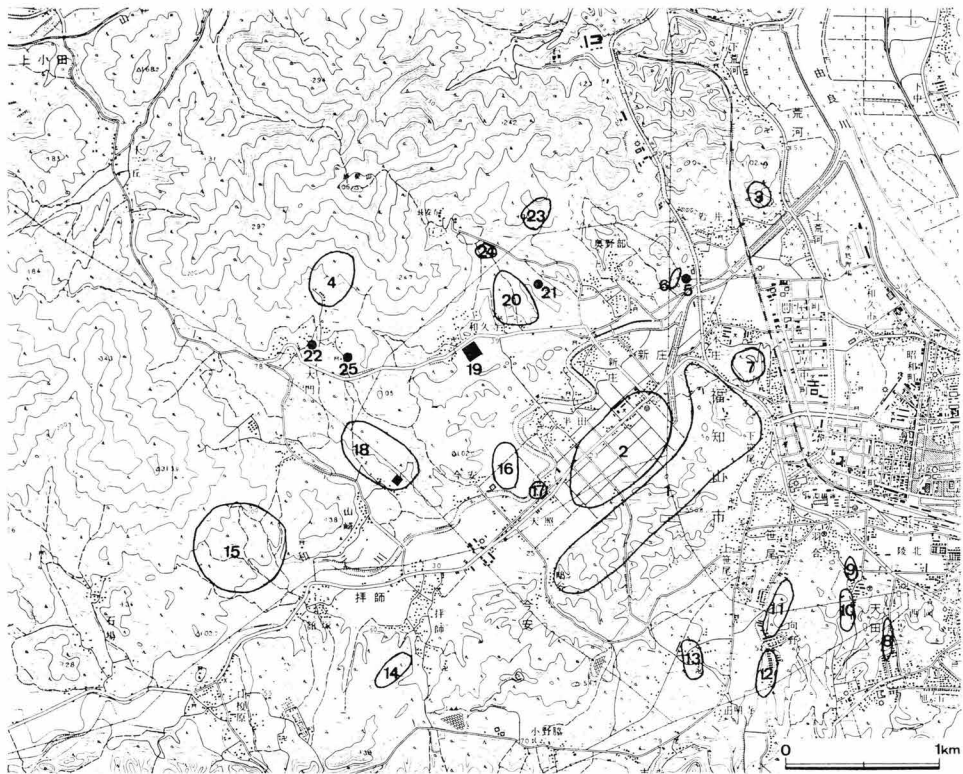
豊富谷丘陵遺跡の位置する京都府福知山市字笹尾から同字今安にかけての地域は、律令制下においては、丹波国^{あまた}天田郡^{やく}和久郷に属していた。

丹波国は、山陰道8か国中の最大の国であり、北は丹後国・若狭国、東北は近江国、東は山城国、南は摂津国、西は但馬国、西南は播磨国に接しており、海には面していない。当初、桑田^{くわた}・船井^{ふない}・多紀^{たき}・氷上^{ひかみ}・天田^{あまた}・何鹿^{いかるが}・加佐^か・与謝^よ・丹波^さ・竹野^{たには}・熊野^{たかの}の11郡が置かれたが、加佐郡以下の5郡は、和銅6(713)年4月に分割されて丹後国とされたことが『続日本紀』に見える。なお、丹波国府・国分寺・国分尼寺・一ノ宮(出雲神社)は畿内に最も近い桑田郡(現亀岡市内)にあった。

天田郡の地名が文献に最初に現れるのは、天平19(747)年9月26日付けの勅旨(『東大寺要録』所収)で、金光明寺に宛られた食封の中に「丹波国天田郡五十戸」とある。この天田郡には『和名類聚抄』によると、^{むと}六部^べ・^{むと}土師(土部)・^{そが}宗部^へ・^さ雀部^{さい}・^わ和久^く・^は拝師^し・^あ奄我^ん・^か川口^が・^わ夜久^{くち}・^や神戸^べの10郷が置かれていた。このうち比定不明の神戸郷と現天田郡夜久野町内に比

定される夜久郷を別にして、福知山盆地の今安・半田・新庄・上天津・土師・前田・観音寺などの水田地帯には条里制の遺構がみられ、市の東部^{おきたの}長田野周辺では良質の陶土が得られたために早くから陶工が住んだといわれ、『日本書紀』雄略天皇17年3月条にみえる、費土師部をおいたという記事はこの辺りのことという説もある。現在も土師の地名が残る。また、和久寺には白鳳期の寺院跡があり、三重塔のものと推定される心礎が残っており、付近一帯からは古瓦片が採集されている。六人部谷の^{とおのいち}多保市にも塔の礎石があり、七堂伽藍を備えた寺があったとも伝える。なお、『延喜式』神名帳に記される天田郡の神社は、生野神社・奄我神社・天照玉命神社・荒木神社の四座であるが、いずれも福知山市内に同名で現存している。

ところで、『日本書紀』・『古事記』に現れる丹波関係の記事を拾ってみると、『日本書紀』開化天皇6年正月14日条に、天皇が丹波竹野媛を妃とし、竹野媛は彦湯産隅命を生ん



第1図 調査地周辺の遺跡分布図

1. 豊富谷丘陵遺跡, 2. 半田遺跡, 3. 黒山古墳群, 4. 日頭古墳群, 5. 吉見古墳, 6. 吉見古墳群,
7. 茶臼山遺跡, 8. 五位坂古墳群, 9. 稲子谷竈跡, 10. 川上古墳群, 11. 向野古墳群, 12. 向野西古墳群,
13. 中ノ段古墳, 14. 小谷古墳群, 15. 額塚古墳群, 16. 今安遺跡, 17. 天照神社,
18. 妙見山古墳群, 19. 和久寺跡, 20. 下山古墳群, 21. 奥ノ部古墳, 22. 大門古墳, 23. 奥ノ部古墳群,
24. 長安寺古墳群, 25. 昆沙門古墳

だとある。また、『古事記』では、若倭根日子大毘毘命(開化天皇)の娶った竹野比売は丹波の大県主由基理の女である。また開化の子日子坐王の子摩須郎女を娶って大帯日子淤斯呂和氣(景行天皇)の母にあたる比婆須比売命を産んだとある。さらに『日本書紀』垂仁天皇15年春2月甲子条には、垂仁天皇は丹波道主王の5人の女を喚したが、その5人目を竹野媛といい「形姿醜きに困りて」丹波に返されたとしている。第一の日葉酢媛は皇后となって景行天皇を産み、倭姫命を産んだとある。

以上のように、丹波国とヤマト政権との濃密な婚姻関係を示す伝承が記録されているが、ここでいう「丹波国」とは登場する人名・地名から、後の丹後国にあたる地域を示すことは疑いないのである。すなわち当時の「丹波国」の中心は丹後地域なのであり、そこを本拠とする豪族がヤマト政権と交渉をもっていたことになるわけである。

このことは、古墳の存在にも表われている。丹後では前・中期に日本海沿岸最大の大型前方後円墳が築造される。全長145mの畿内型前方後円墳である与謝郡加悦町蛭子山古墳に始まり、直径70mの大型円墳の中郡峰山町カジャ古墳、加悦町丸山古墳、そして5世紀初め頃には全長200mに達する前方後円墳の竹野郡網野町銚子山・丹後町神明山古墳と続いている。前・中期の大型前方後円墳5基(100m以上)、大型円墳約20基(40m以上)は加悦町・峰山町・網野町・丹後町の一角に集中して築造され、この辺りに周辺地域を圧する勢力をもった豪族を想定することができる。

これに対して丹波では、地方色の濃い福知山市宝蔵山4号墳の方墳に始まるが、前期古墳の乏しい地域である。中期の丹波は方墳文化圏であり、墳丘に埴輪をめぐらす大型方墳が盛行する。中期後半に入ると、丹後では前方後円墳が姿を消し、逆に丹波に前方後円墳が築造されるようになる。すなわち、丹後と丹波の勢力関係が逆転するようであり、これは後期に入っていっそう鮮明になる。

今回の豊富谷丘陵の古墳群の調査は、文献の少ない、また前・中期の古墳の少ない丹波地域での調査例として、丹後の勢力とのかかわり、あるいは、ヤマト政権とのかかわりを知る上で非常に貴重なものといえる。

第2章 調査の経過

初年度の発掘調査は、京都府教育委員会が主体となり、昭和55年5月6日から4日間、電車基地建設工事工程の関係上、今安廃寺跡の立会調査を実施した後、同年7月21日より本格的に調査を開始した。前半は第Ⅲ区RD地区を中心とし、後半は第Ⅳ区DD地区の調査を行うとともに、第Ⅱ区北端のTD・MY地区の古墳の一部の調査にも着手した。

昭和56年度は、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが事業主体を引き継ぎ、昭和56年5月6日より開始した。上半期は第Ⅱ区TD地区および第Ⅳ区大道廃寺跡を並行して行い、下半期は第Ⅰ区TT・SG地区を主として行った。その間の調査経緯は付表1を参照されたい。このうち、TDⅠ地点は、関西電力株式会社の送電線用の鉄塔が建っている関係上、鉄塔基礎部分のみ調査を行うことができず、鉄塔が除去されるのをまち、昭和57年5月前半に3日間調査を行ったため、2年度にわたった。

また、調査対象地は当初33か所であったが、樹木伐採により遺跡数が増加・確認され、2か年を通した調査件数は計59か所におよんだ。その内、何らかの遺構が検出されたり、古墳として確認されたものは48か所を数え、その多くは方形台状墓や古墳であった。

この調査結果からみる限り、電車基地造成予定地周辺の丘陵尾根上には、昭和54年度に豊富谷丘陵西半部の分布調査で確認されている古墳・諸遺跡以上に、より多くの遺跡一特に方形台状墓や古墳が密に存在する可能性がある。また、未調査である同丘陵東半部での調査も行われるべきであろう。

付表1 調査進行表

番号	古墳番号	55年度			56年度			57年度		
2	TT1号墳								—	
3	TT2号墳								—	
4	TT3号墳								—	
5	TT4号墳								—	
6	TT5号墳								—	
13	SG1号墳								—	
18	SG7号墳								—	
19	SG8号墳								—	
20	SG9号墳									
21	SG10号墳								—	
22	SG11号墳			—						
29	SG18号墳						—			
100	SG22号墳						—			
39	MY7号墳			—						
40	TD1号墳			—						
41	TD2号墳			—						
42	TD3号墳						—			
43	TD4号墳						—			
46	TD7号墳							—		
47	TD8号墳							—		
48	TD9号墳							—		
49	TD10号墳							—		
50	TD11号墳							—		
99	TD16号墳						—			
101	TD17号墳								—	
102	TD18号墳								—	
51	狸谷城跡第I地点						—		—	
52	狸谷城跡第II地点						—			
63	狸谷城跡第III地点							—		
61	RD2号墳								—	

番号	古墳番号	55年度	56年度	57年度
62	R D 3号墳	┌──┐		
63	R D 4号墳	┌──┐		
64	R D 5号墳	┌──┐		
65	R D 6号墳	┌──┐		
66	R D 7号墳	┌──┐		
82	R D 9号墳		┌──┐	
83	R D 10号墳		┌──┐	
84	R D 11号墳		┌──┐	
85	R D 12号墳		┌──┐	
95	R D 13号墳		┌──┐	
68	D D 1号墳	┌──┐		
71	D D 4号墳		┌──┐	
72	D D 5号墳		┌──┐	
73	D D 6号墳		┌──┐	
74	D D 7号墳	┌──┐		
86	D D 12号墳		┌──┐	
87	D D 13号墳		┌──┐	
88	D D 14号墳		┌──┐	
89	D D 15号墳		┌──┐	
90	D D 16号墳		┌──┐	
91	D D 17号墳		┌──┐	
92	D D 18号墳		┌──┐	
93	D D 19号墳		┌──┐	
94	D D 20号墳		┌──┐	
96	D D 22号墳		┌──┐	
97	D D 23号墳		┌──┐	
98	D D 24号墳		┌──┐	
80	大道廃寺跡		┌──┐	
81	今安廃寺跡	H		

第3章 墳墓の調査

第1節 各墳墓の概要

調査を実施した各墳墓の立地・外形・規模・埋葬施設・外部施設の計測値、遺物の出土状況は末尾の調査成果一覧表(付表2)に記したが、代表的なものや特徴があるものについては、本文中でもふれた。

(1) TT1号墳(第2図)

調査地東端、尾根が南東側へ傾斜し始める肩部、北側にのびる尾根との分岐点に位置する。この北側にのびる尾根には、本古墳と墳丘裾を接して1基、さらにその北側にも1基の古墳が存在する。墳丘東側・北側は比較的緩やかな自然地形であるが、南西側は急崖となっている。

① 墳丘(第3図)

自然地形の高まり部分を最大限に利用し、墳丘頂部・基底部分を削り出し円錐台形状に成形する。盛土は、後世の削平を部分的に受けていたが、約0.5mを確認した。北側に位置する古墳との間には外部施設として溝が設けられていると思われるが、墳丘北東側1/5は造成予定地外となるため確認することができなかった。基底部分は、地山面を削り出した際に幅約1.1m程の平坦部が造り出されており、それにより自然地形と区画される。福知山市街を一望できる位置にあり、市街地から見た場合かなり量感がある。

② 埋葬施設

墳丘頂部中央で大型墓壇1か所、その両側で小墓壇2か所の計3か所、また大型墓壇上では、中世墓1か所、壺を埋納した土壇1か所も検出した。埋葬施設は、中世墓や後世の部分的な削平により、盛土があるにもかかわらず、墓壇全体のプランは地山削平面に至るまでつかむことができず、基底部分のみ確認した。

第1主体部(図版第1.2)

墳丘頂部中央で検出したもので、主軸をほぼ東西方向に置く本丘陵古墳群中最大規模を誇る木棺墓である。地山削平面での規模は、長さ6.4m・幅2.8m・深さ0.1mを測り、墓壇平面形は、隅丸長方形を呈する。木棺はすでに不朽消滅していたが、墓壇埋土中央部に圧痕として遺存しており、その概要を知ることができた。木棺は、墓壇中央に置かれ、木棺と墓壇の間は、黄褐色礫混り粘質土により埋められている。底面は水平面を保ち、側壁は「U」字型をなす。棺長4.8m・幅0.5mを測る。形状から割竹形木棺の使用が考えら

れる。

副葬品は、棺内中央付近より表を上にした仿製小型内行花文鏡1面(図版第53. 81)・切先を西に向けた鉄剣1(図版第54. 72)が出土した。いずれも棺底より出土しているため、被葬者ととも棺内に副葬されたものと思われる。なお、鏡周辺や棺内埋土等の精査を行ったが、玉類の副葬は認められなかった。

頭位方向は、副葬品の位置、剣の切先方向等から東枕であったと推定される。

第2主体部(図版第1. 3)

第1主体部の中央よりやや北西側で検出した墓塚であり、第1主体部に近接し、主軸はほぼ東西方向に置く。掘形・底面とも隅丸長方形に近い平面形を呈し、底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。地山削平面での規模は、長さ1.56m・東幅0.7m・西幅0.5m・深さ0.17mを測る。

副葬品は、墓塚検出面上において切先を東に向けた鉄鏃2(図版第51. 1. 2)と、鉋5(図版第51. 4~7. 10)が出土した。木棺痕跡が認められないことや、遺物が底面から出土していないことなどからすると、木棺は使用されず、被葬者を葬った後に副葬品として埋納されたものと考えられる。

頭位方向については、墓塚幅の違いからすれば、第1主体部同様東枕と推定される。

第3主体部(図版第1. 4)

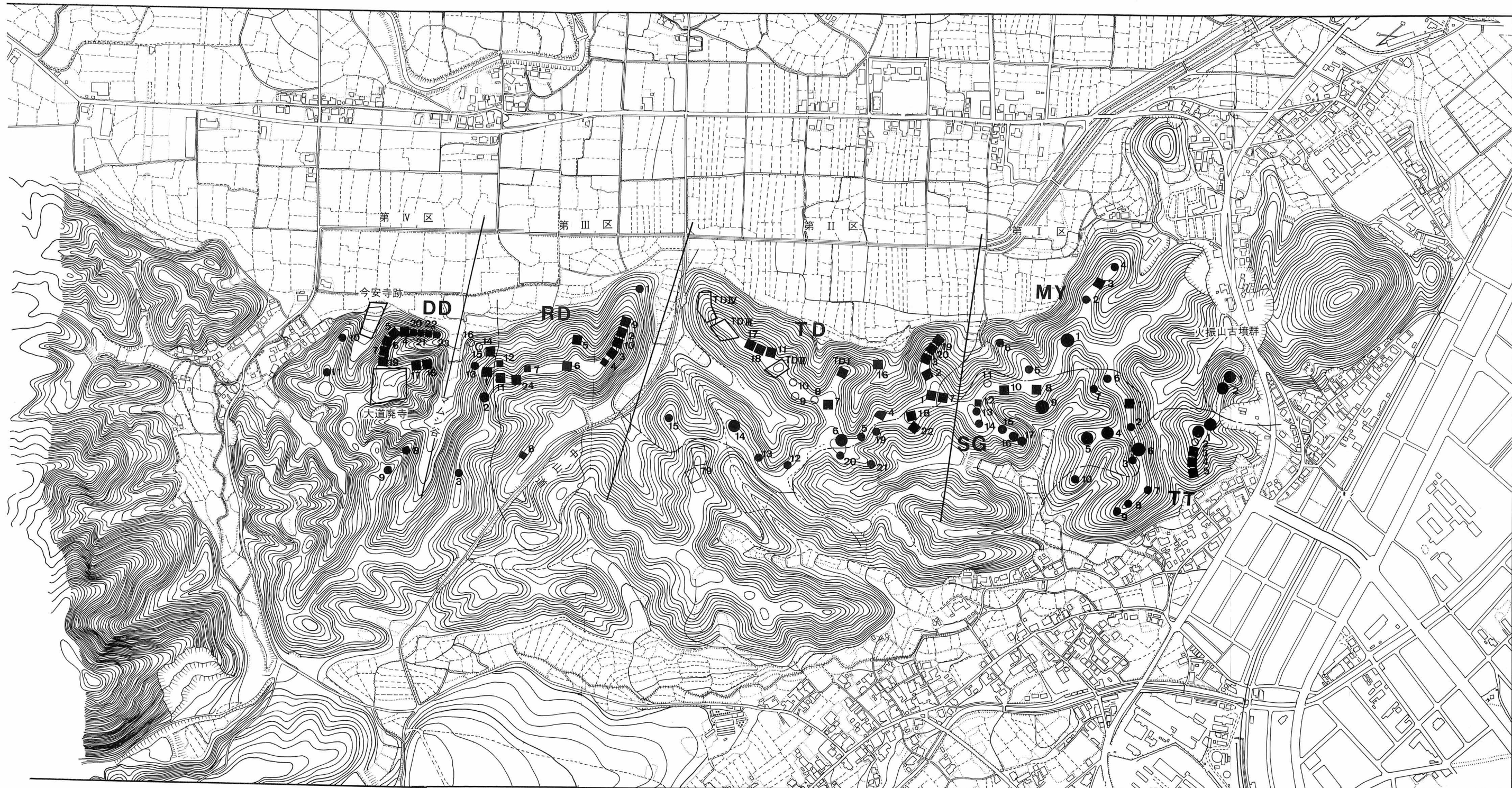
第1主体部の中央よりやや南西側で検出した墓塚であり、第1主体部に近接し、主軸はほぼ東西方向に置く。掘形・底面とも隅丸長方形に近い平面形を呈し、底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。地山削平面での規模は、長さ1.9m・幅0.6m・深さ0.06mを測る。

副葬品は、中央付近底面より切先を東に向けた刀1(図版第53. 66)が出土した。なお、この刀には刀身に平行しない木質が付着しており、木箱に納められていたものか、木棺の木質が付着したものか不明であるが残存している。ただ、埋土中においては木棺痕跡は認められなかった。

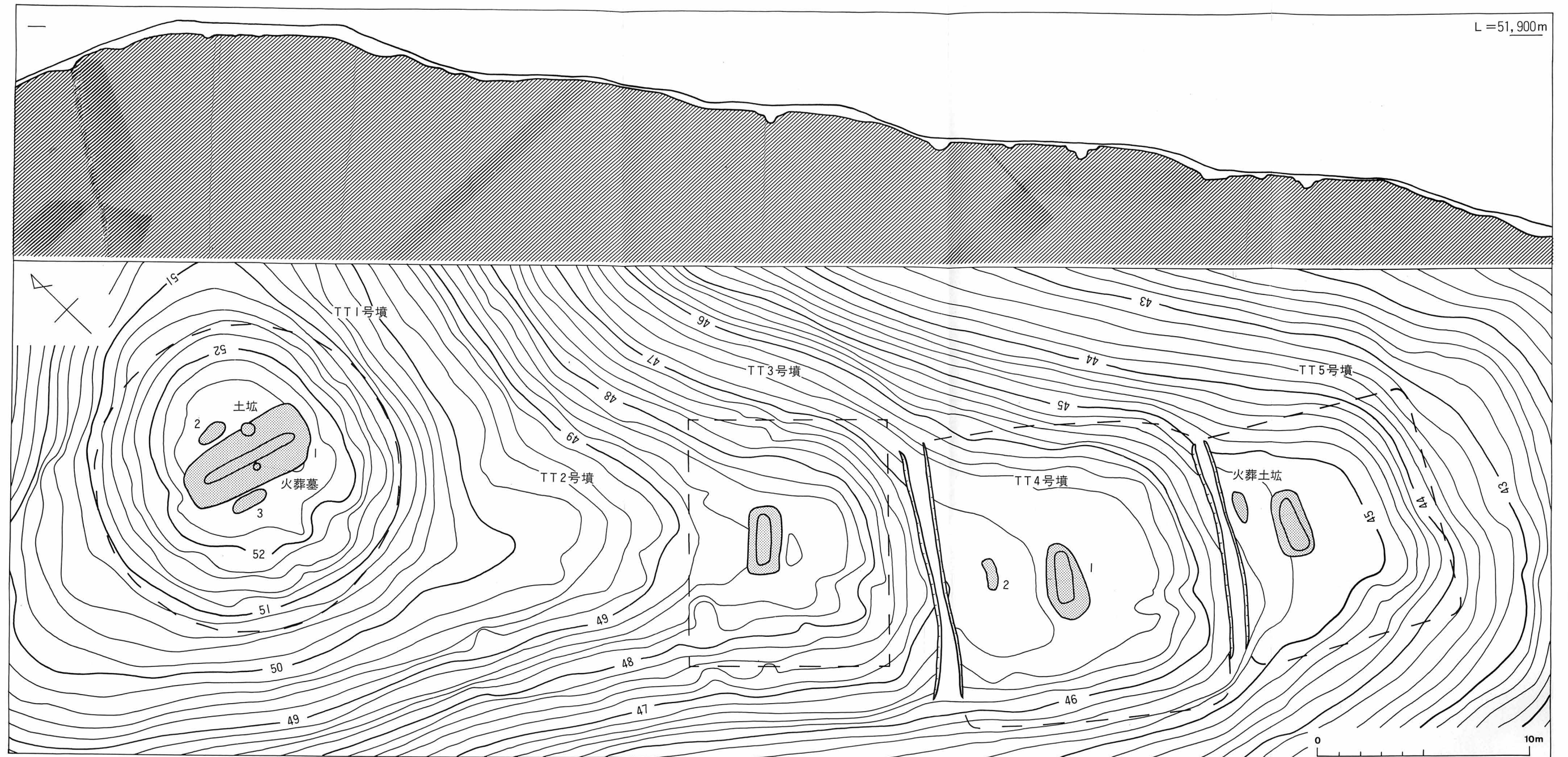
頭位方向については、刀の切先方向からすれば西枕となり、第1・2主体部の方向と逆になる。

第4主体部(図版第2. 1)

墳頂部中央よりやや北側の第1主体部北辺上で検出したものである。土塚は、隅丸五角形状の平面形を呈し、掘形底面は地山削平面に達しない。土塚内埋土は3層に分かれ、第1層目には、口縁を東方に向けた土師器壺(図版第45. 1)を横位で置いていた。第2・3層からは遺物の出土はみられなかった。この置かれている壺に比して土塚がかなり大きく、



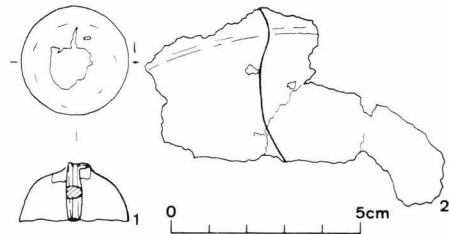
第2図 豐富谷丘陵遺跡分布図



第3图 TT1~5号墳地形图

壺自体が土坑掘形底面に達しておらず、一度埋めるか埋まってから置かれており、壺の½が掘形の上方に出ている。壺内部からは、人骨・副葬品等は認められなかった。

このようなことから、この壺を土器棺墓として把えるには疑問があり、墓上祭祀に係る土器埋納土坑と考えられよう。



第4図 第5主体部出土遺物実測図

第5主体部(中世墓)(図版第2.2)

墳丘頂部中央に位置し、盛土を一部削平した後土坑を穿つもので、掘形底面は地山削平面には達しない。土坑は隅丸正方形の平面形を呈し、内部に瓦質の筒形容器(図版第45.5)を立位で納めていた。この容器は焼成後、底部穿孔している。蓋となるような土器類はみられなかったが、内部より少量の火葬骨片と、仏具の一部と思われる銅製で内部に舌のつく風鈴様のものと(第4図1)、それに付属していたと思われる銅板(第4図2)が出土した。

(2) TT2号墳(第3図)

TT1号墳のすぐ南東側の緩やかな尾根上に位置するものであるが、調査の結果、地山削り出しも行われておらず、埋葬施設もなく古墳でないことが明らかとなった。

(3) TT3号墳(第2図)

TT1号墳より南東へのびる尾根稜部に位置するもので、TT2号墳が古墳でなかったため、TT1号墳より南東側14mの所にあり、北東側は緩やかな、南西側は急崖な自然地形を呈する。

① 墳丘(第3図)

北西側背梁部・基底部を削り出し方形台を成形する。墳丘は尾根主軸に平行し、基底部は北東辺、南西辺のみ削り出した際に幅狭な平坦部が設けられ、北西辺は背梁部削り出し部分、南東辺は明確に区画された部分は認められなかったが、削り出し面と自然地形の傾斜変換点により求めると、標高47.6m等高線付近が基底部となる。

市街地からは、本古墳より1.4m低位置にTT4号墳が存在するため、実際の高さより高くみえ量感がある。

② 埋葬施設

墳丘頂部中央よりやや東側において、主軸を尾根に直交する木棺墓1か所を検出した。墓坑は、表土下0.3mの地山削平面において、掘形上端部分を検出した。墓坑平面は隅丸長方形を呈する。木棺は、墓坑埋土中央部で圧痕として検出した。棺底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

副葬品は、棺内北東端より鉈1(図版第51. 9)が出土した。頭位方向は決定づけられないが、棺底の両端幅を比した場合、南西側が広くなっており、南西枕の可能性はある。

(4) TT4号墳(第2図)

TT3号墳の南東側に位置し、尾根自体が3・4号墳の接点でわずかに東側に方向を転じる。北東側は緩く、南西側は急崖な自然地形を呈する。

① 墳丘(第3図)

尾根が東側に方向を転じ、稜部面積の広がった所を利用し、墳丘頂部・基底部を削り出し方形台に成形する。北東側には、尾根に直交する溝を設けており、北東端底面からは、大型の土師器甕(図版第4. 1・45. 6)が出土している。墳丘北東・南西辺の基底部は、削り出した際に幅狭な平坦部を造り出し自然地形と区画し、南東側はTT5号墳の溝により区画される。盛土はほとんどなく、墳丘頂部北端で須恵器類(図版第4. 2・45. 29~34)が出土しており、部分的に削平を受けているようである。

② 埋葬施設

墳丘頂部中央で1か所、北西側溝寄りの所で1か所の計2か所の墓壇を検出した。

第1主体部(図版第3. 2)

本古墳の中心主体であり、墳丘頂部中央に位置し、主軸を尾根に直交する木棺墓である。墓壇は、表土下-15cmの地山削平面において掘り込み上端を検出し、平面形はややいびつな隅丸長方形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。棺底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

副葬品は認められなかったが、墓壇埋土中より土師器細片が出土している。また、墓壇検出面付近では、墳頂部が削平された際に壊れたと思われる土師器壺・高杯・器台の破片(図版第45. 6~27)が散乱していた。頭位方向は不明である。

第2主体部(図版第3. 3,4)

北西側溝寄りに位置する墓壇であり、その主軸は尾根に直交する。掘形は、地山削平面より穿ち、ややいびつな隅丸長方形を呈する。削平が著しいためか墓壇はかなり浅くなっている。墓壇中央より土師器壺(図版第45. 7,8)が出土した。木棺痕跡は認められなかった。

一方、第1主体部北東側0.5m付近には奈良時代に比定される須恵器片(図版第45. 29~34)が多数散乱していたため、遺構の存在が期待されたが何も検出されなかった。墓上祭祀の痕跡を示すものであろうか。

(5) TT5号墳(第2図)

TT4号墳のすぐ南西側にあり、尾根の先端、尾根が急傾斜で下降しはじめる肩部に位

置するもので、北東側は緩く、南西側は急崖な自然地形を呈する。TT 3・4・5号墳は、いずれも階段状地形を呈するため、市街地から見た場合量感がある。

① 墳 丘(第3図)

尾根脊梁部、基底部を削り出し、方形台を成形する。尾根高位側には、外部施設として尾根に直交する溝をもつが、溝内からは遺物の出土は認められなかった。各辺の基底部は、地山面を削り出した際に、幅狭な平坦部を造り出し自然地形と区画する。この平坦部のうち、北東辺基底部のみ他の2辺に比して幅広く約1mを削り出している。平坦部からは、少量の土師器片が出土した。盛土はほとんどなく、表土(腐植土)直下が地山面となっている。

② 埋 葬 施 設

墳丘頂部中央で1か所、北西側溝近くで中世墓と思われる火葬骨を埋葬していた土塚1か所の計2か所を検出した。

第1主体部(図版第4.3)

墳丘頂部中央に位置し、主軸は尾根に直交する木棺墓である。墓壇は表土除去後すぐ検出され、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として検出した。棺と墓壇の間は、黄褐色粘土により埋められ、底面は南西下がりの面をもち、側壁は「U」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

副葬品は有していなかったが、棺内中央・北東端付近より少量の土師器壺・台付壺脚片(図版第46. 35~37.45~48)が出土した。頭位方向は不明であるが、棺幅からみた場合、南枕の可能性もある。

また、表土中からは多量の土師器片(図版第46. 38~44.49~54)が散乱して出土しており、次に述べる中世墓を造る際に墳丘を削平したため、壊された可能性がある。

第2主体部(中世墓)(図版第4.4)

第1主体部の北西2m、溝の南東横に位置し、主軸は尾根に直交する。表土直下の地山削平面より墓壇を穿つもので、長楕円形の平面形を呈し、掘り込み側壁は「U」字型をなす。墓壇底面は、長軸方向がやや南東下りの傾斜をもつ。内部埋土は2層からなり、第1層は焼土・炭を含む淡赤褐色粘質土であり、第2層は、第1層よりも更に焼土・炭を多く含む赤褐色粘質土となっている。また、第1層と第2層との境には扁平な河原石が墓壇中央部に置かれていた。墓壇壁面は、赤褐色に酸化しており野焼きされた可能性もある。土器類は出土しなかったが、墓壇底面より少量の火葬骨片が出土した。時期については不明であるが、TT 1号墳の例があるため中世墓とした。

(6) SG 1号墳(第2図)

ほぼ東西方向にのびる尾根の最高所に古墳は位置する。尾根筋の東西方向は比較的なだらかな傾斜をもって下るが、尾根の南北側は急崖となっている。

① 墳丘(図版第5.1)

自然地形を最大限に利用し、墳丘を形成している。墳丘は東西方向の両端を若干削り出すことにより方形に整えている。墳丘を画する尾根切断の溝は当古墳には認められず、墳丘の裾まわりの確定はむずかしいが、墳丘規模が東西約12.5m・南北約9.5mの方形墳と判断する。墳丘中央で尾根に直交する南北方向の溝を検出したが、この溝は現代の樹木切出しに伴うものであった。盛土中より縄文時代のスクレイパー(サヌカイト製)1点出土。

② 埋葬施設

墳丘中央部に埋葬施設2か所を確認した。いずれも木棺直葬であるが、墓壇の主軸を異ならせている。後世の削平が墳丘頂部に加えられたとみられ、墓壇の下部を検出したにとどまった。

第1主体部(図版第5.2)

墳丘のほぼ中央にあり、主軸は尾根筋と同様東西方向にとる。墓壇の東端部は後世の溝により破壊されているが、墓壇は長さ約3m(推定)・幅約1.4m・深さ約30cmを測る。墓壇の平面形はややいびつな長方形を呈している。木棺痕跡は判明せず、木棺の規模は不明。墓壇底は水平を保つ。墓壇内に副葬品は認められない。

第2主体部(図版第5.3)

第1主体部の西に存在する。墓壇の主軸は第1主体部と異なり南北方向にとる。墓壇の平面形は長方形を呈し、長さ約2.2m・幅約0.9m・深さ約30cmを測る。墓壇底は水平を保つ。木棺痕跡・副葬品の出土を認めない。

(7) SG 7号墳(図版第5.4)

SG 1号墳の存在する尾根の西に隣接する尾根上に位置する。尾根は北から南へ緩く下がる傾斜をもち、SG 7号墳推定部はややテラス状に開けていた。尾根筋にトレンチを5本設定し主体部の検出をめざしたが、確認できなかった。トレンチ内から、須恵器と土師器の小破片が出土したのにとどまった。このSG 7号墳は古墳の可能性は薄いと判断する。

(8) SG 8号墳(第2図)

尾根の最高所に位置し、東・北・南の3方向へのびる尾根の分岐点にあたる。墳丘の西側は急激に下がるが、頂部から約4m下がったあたりで平坦地が広がる。本古墳の東と西方向の尾根上には各々1基の古墳が存在する。

① 墳丘(図版第6.1)

自然地形を利用して墳丘を造るが、墳丘裾部を部分的に削り取るだけで、盛土はほとんど施していない。墳丘の地山面による傾斜変換線からみて、墳丘の規模は、長辺約10.5m・短辺約7.5m・高さ約3mを測る方形墳である。

② 埋葬施設(図版第6.2)

墳丘中央部に埋葬主体1か所を確認した。埋葬主体部の主軸は墳丘の主軸に直交する。墓壇は長さ約2.2m・幅約1.3m・深さ約10cmを測る。墓壇の中心から南にずれた位置に木棺を設置したとみられる墓壇を検出し、埋葬主体部の墓壇は二段墓壇であることが判明した。棺用墓壇の規模は長さ約2.6m・幅約0.9m・深さ約10cmを測る。棺用壇底は水平を保つ。棺用壇の北側小口部が南側小口部より幅が約10cm長いことから、被葬者の頭位は北側にもっていたものと判断する。副葬品は認めない。

(9) SG10号墳(第2図)

尾根筋でも高所の平坦地上に位置する。東南から西北方向にかけて幅約23mの平坦地がのびており、この平坦地の中央部南隅に古墳は築かれている。古墳の存在する平坦地は、当古墳群の存在する尾根群の基部丘陵の一部であるが、西北側眼下には豊富谷を望める地点でもある。

① 墳丘(図版第6.3)

墳丘が存在する平坦地は人為的に削平されており、墳丘は旧地形の高まりを削り残し、また部分的に盛土を行って方形に墳丘を整えている。墳丘はほぼ正方形に近く、一辺約11~12m・高さ約4mを測る。墳丘の西側隅部は崩落により一部壊れている。

② 埋葬施設

墳丘頂部の中央に埋葬主体部1か所を確認した。墓壇の主軸は墳丘の軸線に合わせておらず、ほぼ南北方向に向いている。墓壇は長さ約4.1m・幅1.7m(南側木口部)・同約1.1m(北側木口付近)・深さ約40cmを測る。墓壇の南端部は後世の攪乱壇により削られている。木棺痕跡は認められない。

副葬品として鉄製鋤先(図版第51.11)が墓壇底の北端中央部から出土した。

被葬者の頭位は、墓壇の形状、副葬品の位置から北枕とみることができる。

(10) SG11号墳(第2図)

SG10号墳の北西側の尾根張り出し部分に古墳状の隆起が認められたが、調査の結果、地山削り出しも行われておらず、埋葬施設もなく、自然地形の隆起であることが判明し、古墳ではないことが明らかとなった。

(11) MY7号墳(第2図)

SG18号墳の南側に位置し、隣接するTD1号墳とともに前方後円墳状の地形を呈しており、前方後円墳を想定し調査を行った。その結果、前方後円墳ではなく、方形墳2基が近接して築かれていることが明らかとなった。また、ここはSG18号墳・TD2号墳・SG10号墳へと尾根が3方向に分かれる分岐点でもある。古墳周囲は尾根稜部面積が比較的広く、緩やかな地形を呈する。

① 墳丘(図版第19.1)

自然地形の高まりを利用し、墳頂部・基底部を削り出し方形台に成形するが、明確な古墳の区画が認められない。基底部が明確でないためその規模は推定となるが、長辺14m・短辺12m・高さ約1mの古墳が復元される。

② 埋葬施設(図版第9.3)

墳丘頂部中央で主軸を尾根に直交する木棺墓1か所を検出した。墓壇は、地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈し、一部二段掘形となっている。木棺は、北西壁のみ地山を二段に掘り下げており、木棺部分は明瞭に判別できたが、その他の面については、墓壇埋土中に圧痕として確認した。棺底面は水平面を保ち、側壁は「U」字形をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物は、墳丘・墓壇内ともまったく有していなかった。頭位方向については、決定づける要素に欠けるため不明である。

(12) TD1号墳(第2図)

MY7号墳の南西隣に位置し、南西側は急崖な自然地形を呈するが、他は比較的緩やかな傾斜となっている。

① 墳丘(図版第19.1)

自然地形の高まりを利用し、墳頂部・基底部を削り出し墳丘を成形するが、MY7号墳同様、明確な古墳区画が認められない。墳形も、方形を意識して築造したと思われるが、四隅が丸く円形に近い方形となるようである。推定される規模は、一辺約14m・高さ約1mが復元される。

② 埋葬施設(図版第9.2)

墳丘頂部中央で主軸を尾根に直交する木棺墓1か所を検出した。墓壇は、地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、北東辺は地山を二段に掘り下げ、MY7号墳の主体部同様の形態をなすが、南西側、北西側は底面付近のみ浅く地山を掘り込んでおり、二段に掘り込まれていない面は南東側のみである。木棺下部の安定をはかるために

掘り込まれたものと思われる。棺底面は水平面を保ち、側壁は「U」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物は、墳丘・墓壇内ともまったく有していなかった。頭位方向については、棺幅の違いからみた場合北西枕となる。

(13) TD 2 号墳(第 2 図)

TD 1 号墳より北西へのびる尾根上に位置し、本古墳より尾根は北に方向を転じのびていくが、尾根先端にかけ 3 基の古墳が築造されており、隣接する TD 3 号墳からは、段差の少ない階段状地形を呈しており、その起点となる部分でもある。尾根両側面は、急崖な自然地形を呈し、古墳の両端は尾根が急にやせ細り、稜部面積が極端に狭くなっている。

① 墳 丘(図版第10. 1)

馬の背状のやせ尾根であり、比較的稜部面積が広い所を利用し、自然地形の高まり部分を削り出し方形台に成形する。墳丘短辺側は、傾斜変換点により基底部を確認することができたが、長辺側は顕著な痕跡をみいだすことはできなかった。

② 埋 葬 施 設

墳丘頂部中央で主軸を尾根に直交し、平行して並ぶ 3 か所の墓壇を検出した。いずれも地山削平面より墓壇を穿ち、深い掘形を有する。

第 1 主体部(図版第10. 2)

墳頂部北端に位置し、最も規模の小さいものである。墓壇平面は、隅丸長方形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。棺底面は東端がやや膨み、側壁は「U」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物はまったく有していなかった。頭位方向については不明である。

第 2 主体部(図版第10. 3)

墳丘頂部中央で検出した本古墳の中心主体となるもので、一部二段掘形を有する木棺墓である。墓壇平面は、隅丸長方形を呈し、木棺は、両木口部分のみ二段に掘り込まれているが、木棺自体はそれより上方に出ており、埋土中に圧痕として確認した。それにより、木棺の上端は、ほとんど掘形検出面近くまでであったようである。棺底面は中央部がやや凹み側壁は「U」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物はまったく有しておらず、頭位方向についても決定づけられないが、棺幅の違いから見た場合、西枕の可能性がある。

第 3 主体部(図版第10. 4)

墳丘頂部南端で検出したもので、墓壇平面は隅丸長方形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として検出したが、第2主体部同様、その痕跡は浅い所で認められたため、木棺部分はかなり深くなっている。また、底面はやや凹凸があるが、北辺側底面のみ浅く二段に掘り込まれている。側壁は「□」字型をなし、形状から箱形木棺の使用が考えられる。

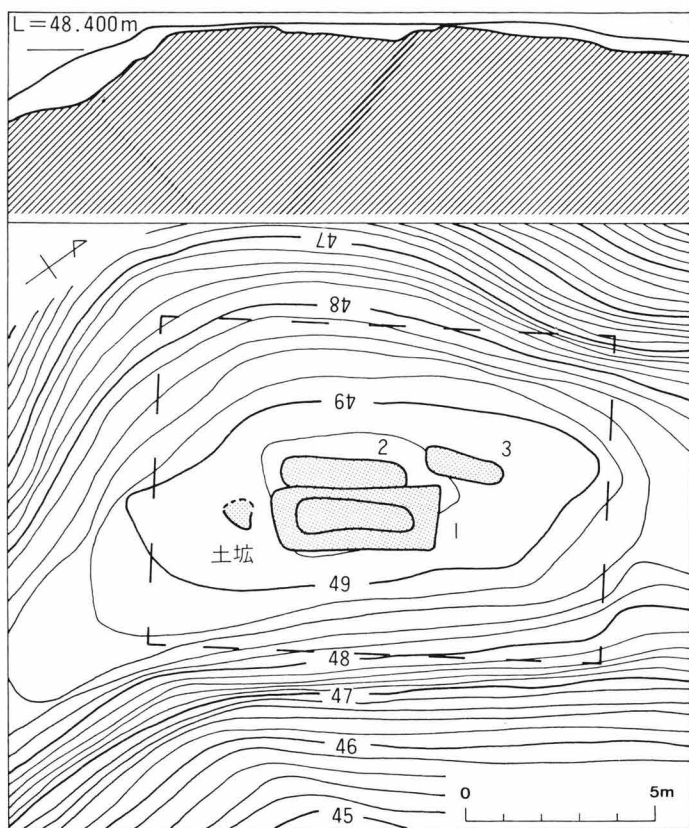
遺物は、墓壇東端埋土中より、土師器高杯頸部片1(図版第46. 55)が出土した。頭位方向は不明である。

(14) TD3号墳(第2図)

TD2号墳の北西側10mの所に位置する。本古墳の位置する尾根は、稜部の幅員がほとんどないやせ細った馬の背状尾根で、尾根が下降傾斜しはじめる肩部に築造されている。ここから、先端にかけては、2基の古墳が存在しており、I区北尾根の古墳同様、墳丘裾を接するかのよう階段状に築造されている。

① 墳丘(第5図)

狭小な尾根稜線部に、墳頂部、基底部を削り出し方形台に成形する。盛土は、墳頂部上



第5図 TD3号墳地形図

ではほとんど認められなかったが、尾根両側面には流出した盛土と思われる土砂の堆積がみられた。外部施設等はなかったが、墳丘基底部は、削り出した際に幅40cm程度の幅狭な平坦部が設けられており、それにより自然地形と区画する。

② 埋葬施設(図版第7.1)

墳丘頂部中央で2か所、それよりやや北側で1か所の計3か所の墓壇と、中央土壇の南西側で甕を

埋納した土坑1か所を検出した。

第1主体部(図版第7.2)

墳頂部中央に位置し、その主軸を尾根に平行する木棺墓である。盛土がほとんどないため、表土直下の地山削平面で墓坑掘り込み上端を検出した。墓坑は、隅丸長方形の平面形を呈する。棺は、墓坑埋土中央部で圧痕として確認した。棺底面は、ほぼ水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

副葬品等は有していなかったが、墓坑検出面と墓坑埋土中より少量の土師器類(図版第46.56~70)が出土した。

頭位方向は決定づけられないが、棺両木口幅を比べると、南西側がやや広くなっており南西枕の可能性もある。

第2主体部(図版第7.3)

墳丘頂部中央に位置し、本古墳の中心主体となるものであるが、北東辺が第1主体部と切り合い関係を有し、第1主体部に先行する。主軸は第1主体部同様尾根に平行する。墓坑は、地山削平面より穿ち、底面は水平面を保つ。掘形、底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、側壁は「∟」字型をなす。木棺直葬墓と思われるが、木棺痕跡は認められなかった。

遺物は、南西寄りの墓坑中央部より弥生式土器長頸壺1(図版第46.58)が出土した。

頭位方向は、第1主体部同様決定づけられないが、底面の形状からすると南西側が極端に狭くなっており、北西枕の可能性が考えられる。

第3主体部(図版第7.4)

第1主体部の南西側0.5mの所で検出したもので、表土直下の地山削平面より掘形を穿ち、隅丸三角形の平面形をなし、底面は中央部がやや凹む。内部に弥生式土器甕(図版第46.60)を立位で埋納しているが、土圧等により底部付近が外側に開いている。甕底部は、焼成後穿孔しており、内部からは人骨・副葬品等は出土していない。TT1号墳の第4主体部と同様、埋納されている甕に比して土坑がかなり大きく、甕自体が掘形底面に達せず、一度埋めるか埋まってから甕が置かれたようで、甕の一部が掘形の外方にまで出ている。TT1号墳の例と同じく、墓上祭祀に係る土器埋納土坑と考えられよう。

(15) SG18号墳(第2図)

TD1号墳の南側20mの所に位置する。南北にのびる尾根の張り出し部分にあたり、尾根稜部が平坦なのに対し、張り出し部分は亀甲状に隆起しており、尾根稜部の平坦部との比高差は約2m程みられた。隆起した部分は、かなり削平を受けており、小起伏がところどころにみられた。

① 墳 丘(第6図)

自然地形の高まり部分を利用して、墳頂部・基底部を小規模な削り出しを行い方形台に成形する。外部施設を有しないため、各辺基底部は削り出した際に幅狭な平坦部を設け、それにより自然地形と区画する。地形図から想像される規模よりもかなり小さく、盛土により墳丘が形成されていたと考えられるが、削平されてその大半を失っており、張り出し部分の両側面にその堆積が認められた。墳丘基底部長辺は、張り出した尾根に平行する。

② 埋 葬 施 設(図版第8.3)

墳丘頂部中央より北東寄りの所で墓壇を検出した。後世の削平を受けているため、北東辺の一部を欠く基底部のみ残存していた。主軸は尾根に直交し、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形をなす。底面は、南東側が高く北西側へと傾斜しており、掘り込み側壁は「∟」字型を呈する。木棺痕跡は認められなかった。

副葬品等は有していないが、墳丘南側斜面流土中より6世紀前半頃に比定される須恵器壺口縁部片(図版第46.72)が出土している。

(16) SG22号墳(第2図)

SG18号墳の南東側にあり、張り出した尾根が下降傾斜しはじめる肩部に位置する。

① 墳 丘(第6図)

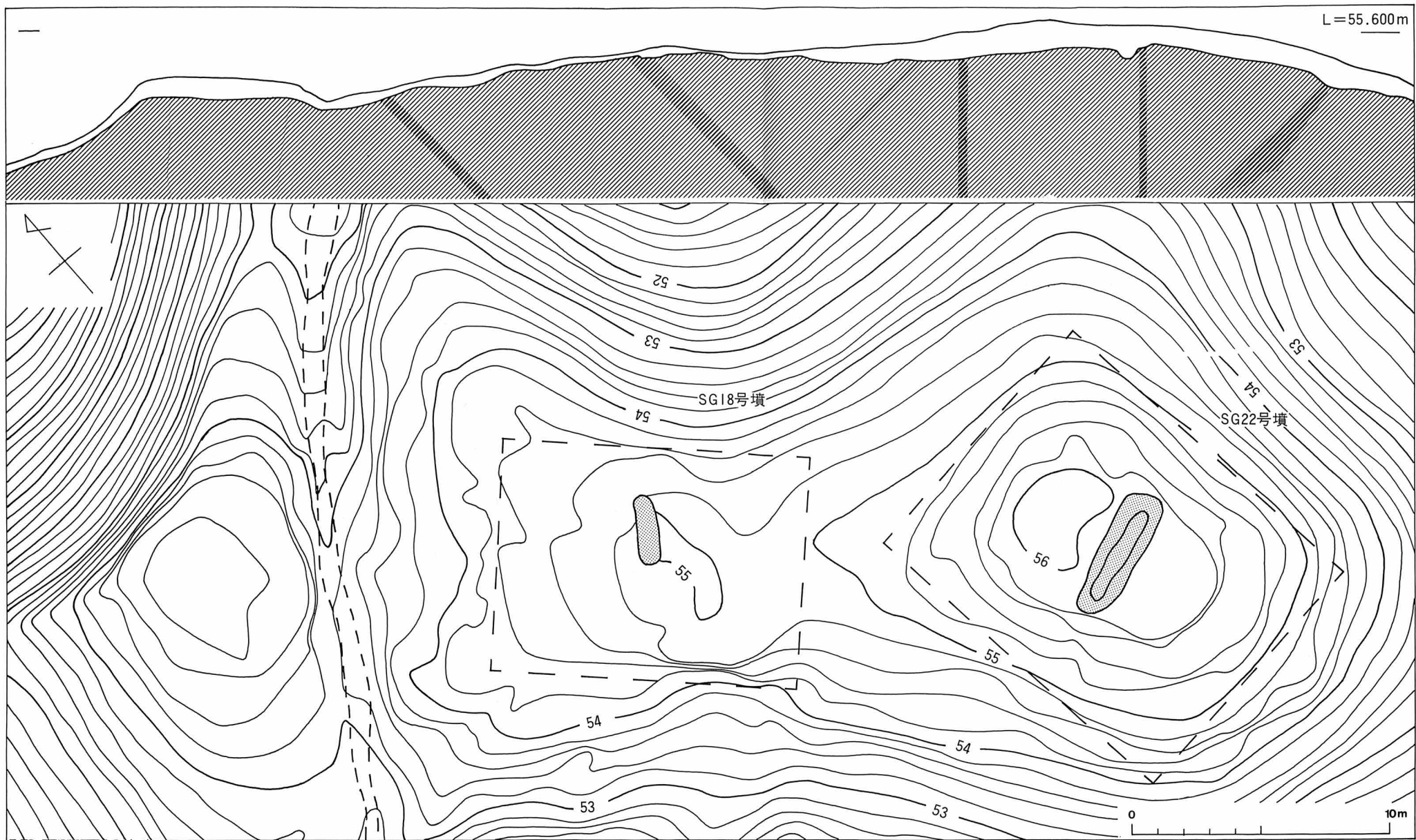
SG18号墳に比して墳丘規模はかなり大きくなるが、これは張り出した尾根がSG18号墳南東側基底部付近でくびれ、本古墳に至って急激に広がるためと思われる。墳丘は、自然地形の高まりを利用して、墳頂部・基底部を削り出し方形台に成形する。基底部の自然地形との区画は、削り出した際に幅狭な平坦部が設けられておりそれにより区画する。SG18号墳と本古墳とは、墳頂部地山削平面がほとんど同レベルであるが、盛土が0.8m施されていた。

本丘陵古墳群では、直列して並ぶ古墳間には高低差により明確な境をみいだすことができない場合以外は、必ず溝により区画しているが、本古墳とSG18号墳との間にはそれが見られなかった。これは、両古墳が直列して並ばず、SG18号墳南東側基底部中央に本古墳の北西角がくる形となっているため、溝により区画する必要がなかったとも考えられる。

このように、本丘陵古墳群中でも特異な並び方となったのは、自然地形を最大限に利用し築造を行ったためと思われる。また、SG18号墳が古墳の対角線が各方位を差したのに対し、本古墳では各辺が方位を示している。

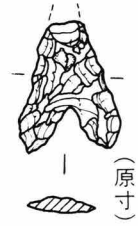
② 埋 葬 施 設(図版第8.5)

墳丘頂部中央において大型の木棺墓1か所を検出した。主軸は墳丘短辺に平行せず、若



第6图 SG18·22号墳地形图

干北に傾く。墓壇は地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形をなし、断面は舟底形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。棺と墓壇の間は灰白色砂質粘土により埋められており、棺底面はほぼ水平であり、側壁は「U」字型を呈する。形状から割竹形木棺の使用が考えられる。副葬品等は有していなかった。



第7図 出土遺物

頭位方向は決定づける要素に欠けるため断定はできないが、棺幅の違いから見れば南西側よりも北東側が広く、北東枕であった可能性がある。

古墳に直接関係する遺物は出土しなかったが、墳丘盛土中からは縄文時代に比定される石鏃1点(第7図)や、7世紀後半頃に比定される杯身1点(図版第46. 71)も出土している。

(17) TD4号墳(第2図)

SG18号墳より南西へ30mの所にあり、本古墳から更に西側にのびる狭小な支尾根があり、その分岐点、支尾根が下降傾斜をしはじめる肩部に位置する。

① 墳丘(第8図)

丘陵頂部の自然地形の高まりを利用し、墳頂部・基底部を削り出し方形台に成形する。各辺の基底部は、削り出した際に幅狭な平坦部が設けられており、それにより区画される。東・西・南側の墳丘基底部各辺コーナーは存在するが、北側のコーナーは急崖な自然地形の中に入ってしまう存在しない。築造当初にはこのコーナーが存在していたとは地形的に考えがたく、現状のままであったと考えられる。なぜこのような築造を行ったか不明であるが、地形的な制約の中で造営を行ったため一部不合理な面が生じたのかも知れない。ただ、平野側から見れば急斜面上に位置するため、コーナーまで認識できるわけではなく、コーナーは不要であったのかも知れない。本丘陵古墳群中、当古墳のみが特異な墳形を呈している。平野側からみれば、かなり大きな古墳の存在が認められるほど量感がある。

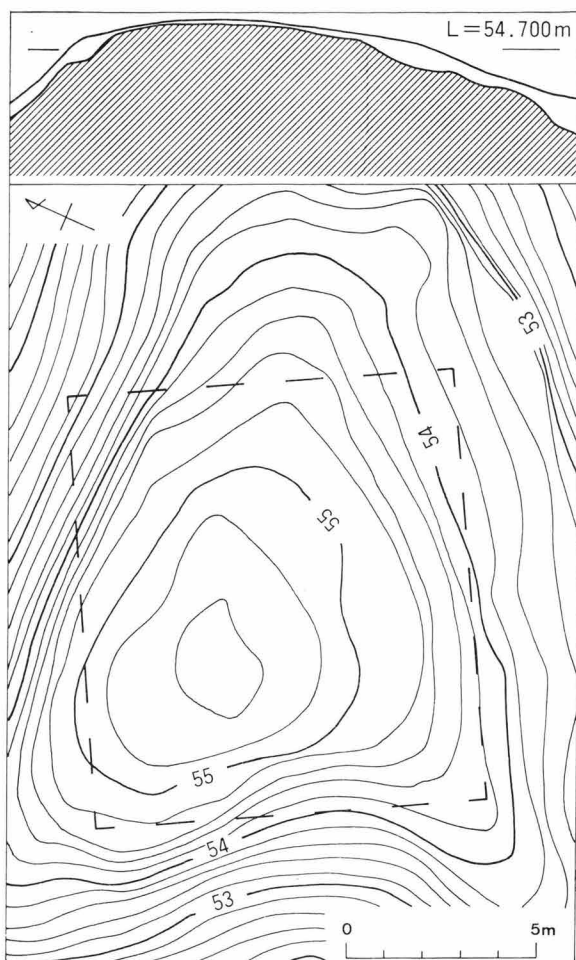
② 埋葬施設

墳丘はかなり削平を受けており、主体部は確認されなかった。谷一つ隔てたTD7号墳以西の丘陵全域が、大規模な開墾を受けており、本古墳周辺でも畝跡がみられることから開墾により削平されたものと思われる。

北東辺基底部より、北東へ2mの位置で6世紀初頭に比定される須恵器杯蓋片が出土した。本古墳に伴う遺物ではないかと思われる。

(18) TD7号墳(第2図)

TD4号墳より谷1つ隔てた南側の丘陵頂部にあり、尾根が東から南西へと方向を転じていく部分、北へはTD1地点へと続く馬の背状尾根がのびており、この分岐点に位置する。



第8図 TD4号墳地形図

① 墳丘(第9図)

自然地形の起伏を利用し、墳頂部・基底部を削り出し方形台に成形したようであるが、墳丘南半分は開墾により大きく削りとられ、墳頂部はもとより、削りとられた部分も畑地として利用されていたようで畝跡が各所にみられた。開墾のため墳丘南西辺、南東辺の大半は不明であるが、一部残存する部分からみれば、基底部は削り出しを行った際に、幅狭な平坦部を設け区画される部分も認められた。東・西辺については、自然地形が急傾斜を始める付近にあたり、部分的ではあるが削り出し傾斜面と自然地形の傾斜との傾斜変換点により認めることのできた面もある。西辺で55.6m・東辺で55.8m等高線付近がそれにあたる。これらのことにより本古

墳の復元規模を求めると、長辺20m・短辺15m・南西辺からの高さ1mとなる。

② 埋葬施設

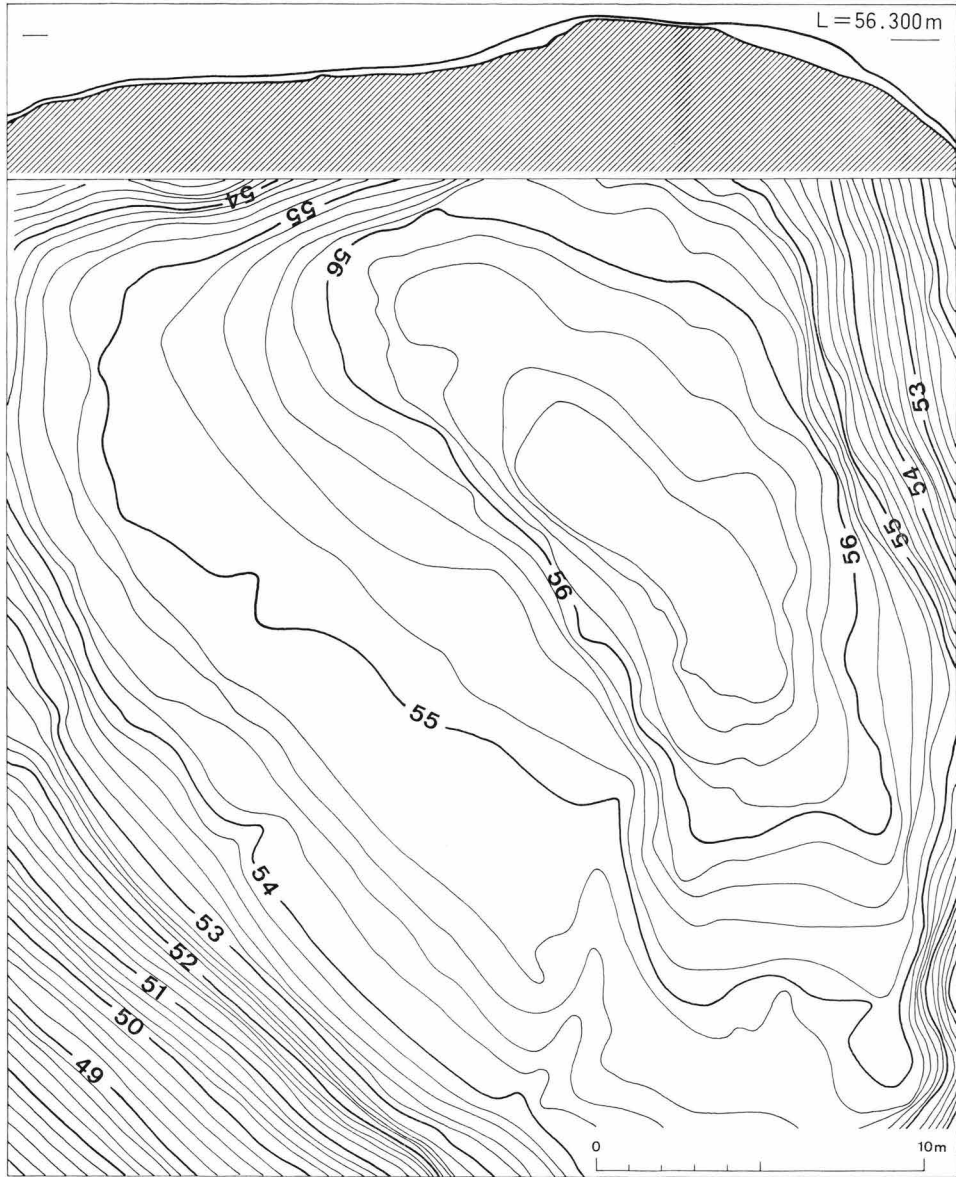
開墾による削平を受けているため、主体部・遺物等はまったく検出されなかった。

(19) TD8・9・10号墳(第2図)

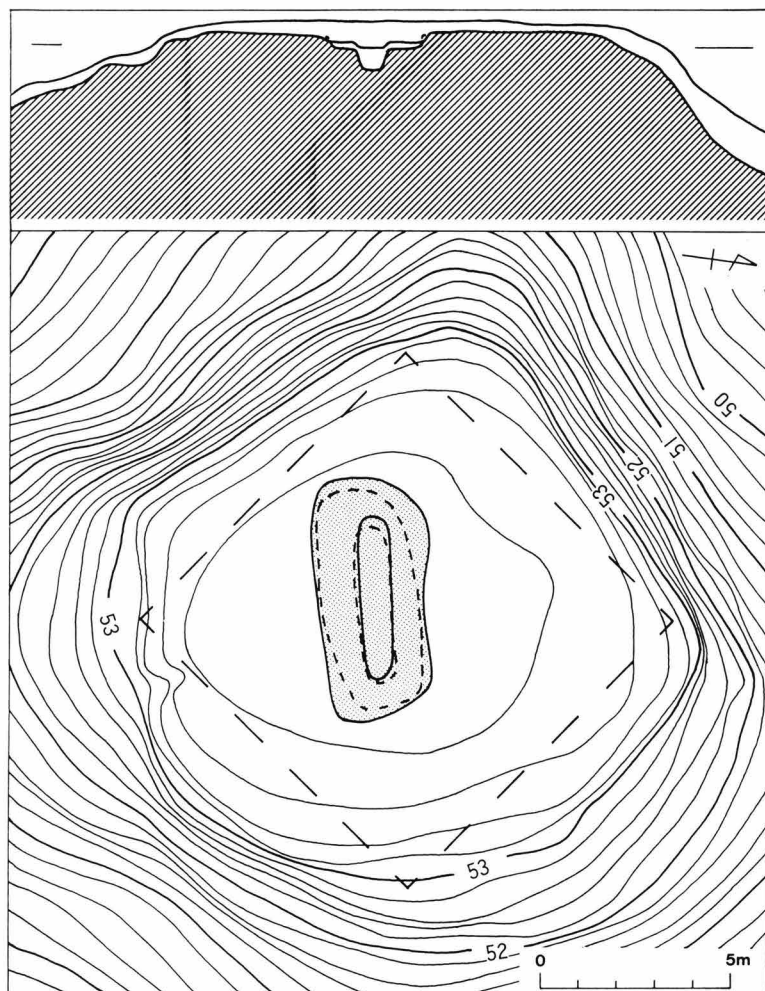
TD7号墳より南西へのびる尾根上にあるもので、樹木伐採後わずかな高まりが認められたが、TD7号墳同様、この尾根筋はTDⅢ地点に至るまで大規模な開墾を受けており、調査の結果、この小起伏は自然地形の高まりであり、古墳でないことが明らかとなった。

(20) TDⅠ地点(第2図)

TD7号墳から馬の背状にのびた支尾根の先端、最高所に位置し、他の丘陵に比べ独立した丘陵に見える。四周を急崖な自然地形により形成されており、地形的な特性から狸谷



第9図 TD7号墳地形図



第10図 TD I 地点地形図
(実線第1主体部・破線第2主体部)

城跡に関連する郭跡の可能性を秘めていた。これは、和久川により形成された平野を端々まで見渡すことができる要地でもあり、防御的にも急崖な自然地形により妨げられるという好条件を満たしていた。また、12m下方のTD16号墳の位置する平坦部は、郭跡に関連する施設の存在をもうかがわせる形態を示していた。

調査の結果、城跡に関連する遺構・遺物等も検出されず、代って古墳が確認された。

① 墳 丘(第10図)

墳丘頂部中央には、関西電力株式会社の送電線ケーブル用の鉄塔が建てられており、鉄塔建設時にかなり削平されたようで平坦化していた。墳丘は自然地形の高まりを利用し、墳頂部、基底部を削り出し方形台に成形する。基底部は、削り出した際に幅狭な平坦部を

設けるものと、自然地形との傾斜変換点で求められるものがある。基底部対角線が各方位を示し、平野側からみれば独立した地形上遮ぎるものがないため圧感である。

調査は、鉄塔支柱の基礎が埋設されているため、その倒壊を避ける形で実施したため、墓壇内棺両端部分の調査ができず、いったん埋め戻し鉄塔が撤去されるのを待って棺両端部分の調査を行った。そのため、調査は昭和56・57年度の2年度にわたった。

② 埋葬施設

墳丘頂部中央よりもやや南側において、同じ場所に重なり合った状態で、ほぼ同規模の2つの木棺墓を確認した。

第1主体部(図版第11.4)

主軸を墳丘対角線上、東西方向に置き、地山削平面より墓壇を穿つ。墓壇平面形は隅丸長方形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部に圧痕として検出した。棺底面は水平面を保ち、側壁は「∪」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

墓壇西寄りの埋土中より、土師器高杯杯部(図版第46.73)が出土したのみで、他に副葬品等は有していなかった。

第2主体部(図版第11.4)

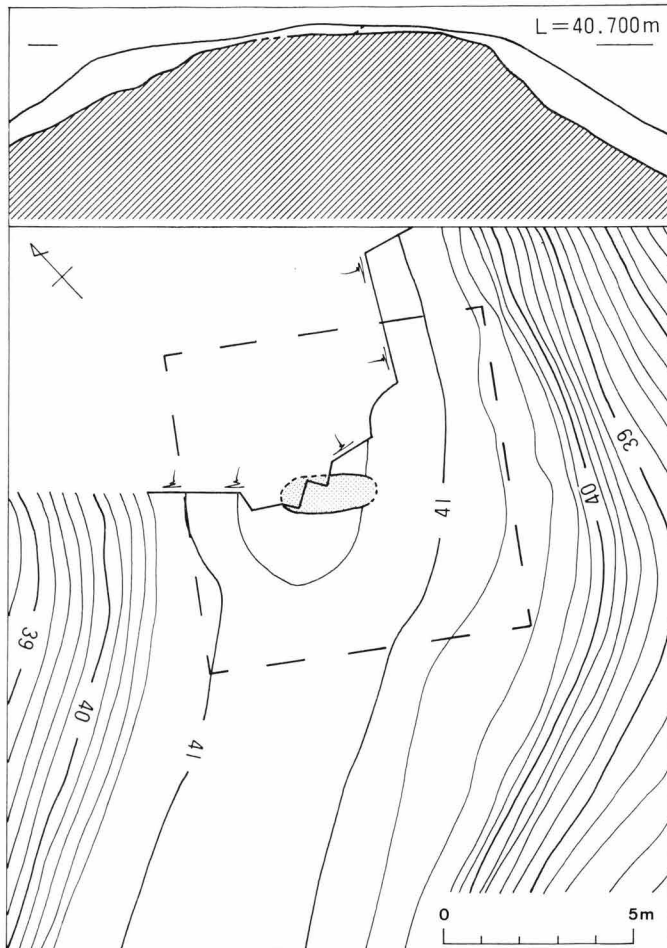
第1主体部の真下で検出した墓壇で、第1主体部よりやや規模が小さい。主軸は第1主体部同様、東西方向に置き、墓壇平面形は隅丸長方形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部に圧痕として確認した。棺上方部分は、第1主体部により削平されているが、棺底面はほぼ水平で、側壁は「∪」字型をなす。墓壇掘形底面は、木棺底面部分だけ二段に掘り込まれており、掘り込み側壁は「U」字型をなしている。この掘り込み部分は、実際に使用された棺よりも大きく、二段に掘り込まれた部分はその外側になっている。棺部分のみ二段掘形をもつ例は本丘陵古墳群中でも認められるが、それらはすべて片面的しは部分のみであり、棺全周を二段に掘り込む例は、DD22号墳第2主体部と本主体部の2例だけである。使用された木棺は、形状から箱形木棺と思われる。副葬品等は有していなかった。

頭位方向は、第1・2主体部とも決定づける要素に欠けるため不明である。

(21) TD16号墳(第2図)

TD I 地点より下方12mの所に位置し、尾根が下降傾斜しはじめる肩部にある。10m×30mの比較的広い平坦部を有していたため、TD I 地点に関連する城跡関係の遺構の存在が期待された。

調査は電車基地造成に伴い、造成業者が急掘採土を開始したため工事を中止し実施した。その結果、城跡に関連する遺構・遺物等は検出されず、尾根先端部分に古墳が1基存在することが明らかとなった。



第11図 TD16号墳地形図

① 墳丘(第11図)

平坦地全域が開墾を受けており、墳頂部が大きく削られ東・西側丘陵斜面にその土砂の堆積がみられた。墳丘は、北側1/4を採土のためバックホーにより削られている。削平が著しいため墳丘基底部しか残存しないが、墳丘は自然地形の高まりを利用し、墳頂部・基底部を小規模な削り出しにより方形台に成形したものと考えられる。基底部は、北東・南西辺は削り出しにより周辺が平坦部となっており、他の2辺は傾斜変換点で自然地形と区画される。

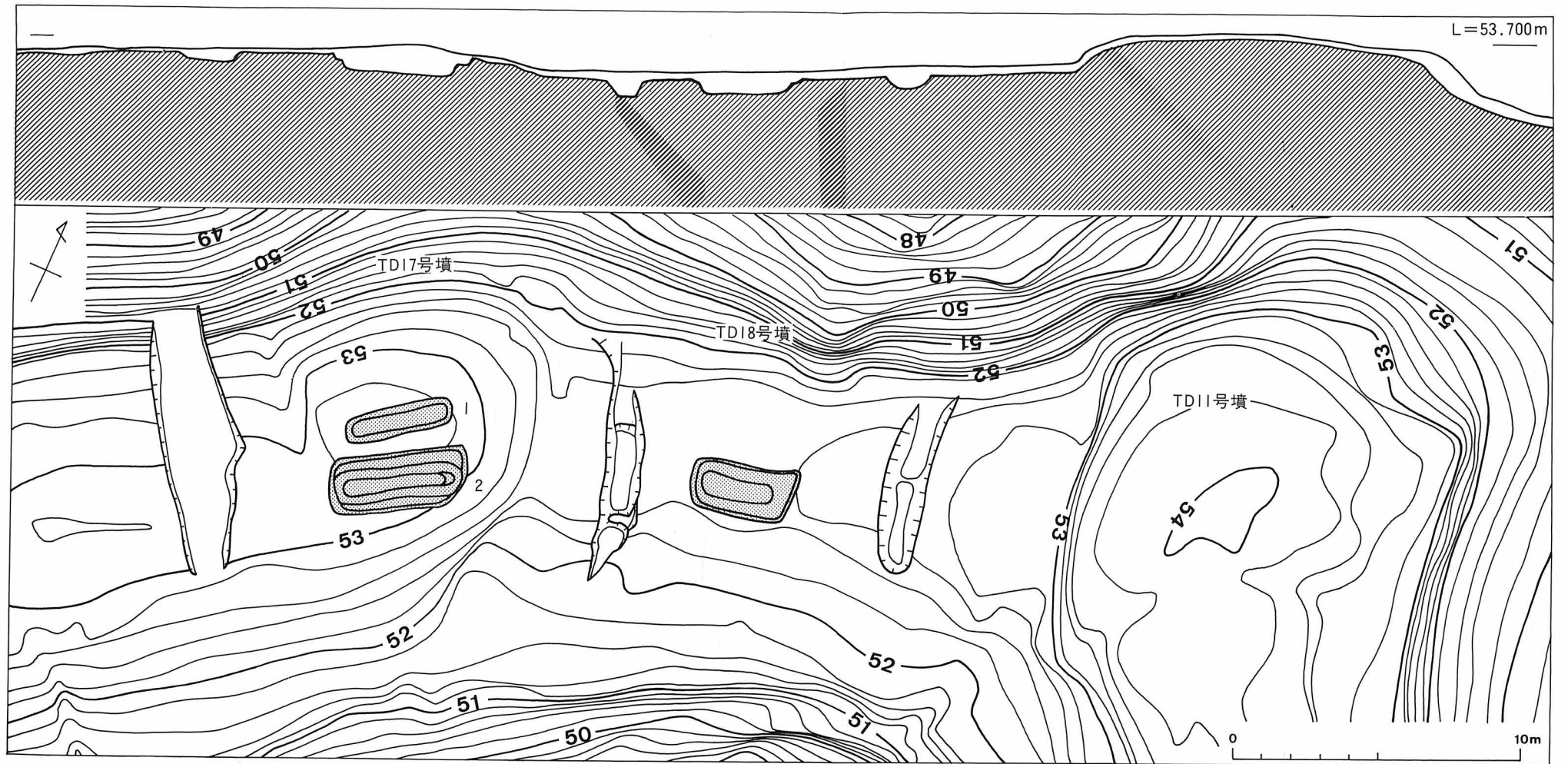
② 埋葬施設

墳丘頂部中央で主軸を尾根に直交する墓壇1か所を確認した。主体部北西側はバックホーにより大きく削られ、また開墾により削平を受けているため、基底部のみ残存していた。墓壇は、掘形、底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。木棺痕跡は認められなかった。

副葬品として、墓壇中央部で切先を西に向けた鉄剣1(図版第54.77)が出土した。鉄剣は墓壇主軸に対し斜めに副葬されており、被葬者の腰部分に置かれていたものと推定される。このことからすれば、頭位方向は南東枕と考えられる。

土器類は、墳丘南側の開墾土中よりごく少量の土師器細片が出土した。

また、本古墳南西側には10m×20mの平坦部があるため古墳の存在が考えられたが、開



第12图 TD11·17·18号墳地形图

壑により削平消滅してしまったのか、基底部すら確認することはできなかった。

(22) TD11号墳(第2図)

TDⅡ地点より北西へのびる尾根が、その方向を直角に転じ、TDⅢ地点へと続いていくが、この直角に方向を転じる部分に位置する。付近一帯は開墾を受けており、尾根平行に畝跡をよく残している。また、尾根北東・東・南側は斜面を削り3段～5段の段々畑が形成されている。

① 墳丘(第12図)

墳丘頂部は大きく開墾による削平を受けており、墳丘自体も北東・東側に段々畑が形成される際に、その大半が削られており古墳の存在はまったく考えられないような状態であった。開墾によりほとんど消滅していたわけであるが、わずかに北西辺基底部の一部と、南東辺で外部施設として溝を確認した。北西辺基底部は、自然地形と地山削り出し面の傾斜変換点により認められた。溝は、隣接するTD18号墳側に傾かず本古墳側に傾くため、TD18号墳の溝ではないと考えられる。溝内北端底面近くより土師器甕(図版第47.80)・盃(図版第47.82)が出土し、中央部底面からは鉄製鎌(図版第52.29)が出土した。この鉄製鎌には、柄取付部分に滑石製管玉1個(第13図)が錆とともに付着していた。溝中より鉄製品が出土する例は、本古墳群これ1例のみである。このことから、溝中には埋葬施設が存在が考えられたため精査を行ったが、埋葬施設は存在しなかった。この溝底面から墳頂部開墾面までの高さは2mを測るが、実際は更に高かったと思われる。

規模は、溝の大きさおよび周辺の地形からすると本古墳群最大の長辺19m×短辺13m以上の古墳が復元されるが、実際の所は不明である。築造当初は平野側からはよく見える位置にあるため、かなり量感をもっていたものと考えられる。

② 埋葬施設

開墾による削平が著しいため、主体部は消滅し存在していなかった。

(23) TD18号墳(第2図)

TD11号墳とTD17号墳に挟まれ、墳丘北側は急崖な自然地形を呈し、南側は3段からなる段々畑があり、墳頂部には尾根に平行する畝跡がみられた。TD11号墳との比高差0.8m、TD17号墳との比高差1.4mを測る。

① 墳丘(第12図)

東をTD11号墳、西をTD17号墳の溝により区画され、南・北の基底部は自然地形と削り出し地山面の傾斜変換点により求められる。墳頂部は現状ほど平坦ではないにしろ、本来は若干の高まりをもっていたと考えられ、それに小規模な削平を行い方形台に成形したものと思われる。盛土は残存しておらず、開墾土の下が地山削平面となっている。墳形はTD11・17号



第13図
出土遺物

墳の溝により区画された中間に位置するため、その溝により東・西辺が反るややいびつな長方形を呈する。平野側からはよくみえるが、TD11・17号墳に挟まれ一段下がった所にあるため、古墳の存在は認められない状態である。

② 埋葬施設

墳頂部中央で墓坑1か所、北西側墳丘肩部において甕を埋納した土坑1か所を確認した。
第1主体部(図版第12.2)

主軸は尾根に平行し、地山削平面より墓坑を穿つ。墓坑平面は隅丸長方形、断面は舟底形を呈する木棺墓である。木棺は、墓坑埋土中央部で圧痕として確認した。棺底面はほぼ水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

棺内からは副葬品等は有していなかったが、棺上西端墓坑埋土中より、器台4(図版第47.87~90)、高杯1(図版第47.81)、盃1(図版第47.81)の土師器の一括資料が出土した。盃は器台に乗せられていたものが倒れた状態で出土している。

頭位方向については、それを決定づける資料に欠けるため不明である。

第2主体部(図版第12.3)

墳丘西側肩部において検出したもので、土坑平面形はタマゴ形を呈し、内部に大型の土師器甕(図版第47.79)を埋納している。甕は口縁を北側に向け横位で納めているが、上半分は開墾により削平されて欠いている。甕内部からは、人骨片・副葬品等は検出されなかった。

このように、小土坑中に甕・壺を埋納した例は本古墳群中5例あるが、すべて墳頂部か主体部近くに限られており、本古墳のように肩部に設けられたものはない。また、TT1号墳、TD3号墳例をのぞくものについては、土坑内底面に土器が置かれており前記の2例とは性格を異にするものと考えられる。人骨・副葬品等は出土しないが、形態・埋納状況からして土器棺墓として扱えられよう。

(24) TD17号墳(第2図)

TD18号墳の南西隣に位置し、墳丘北側は急崖な自然地形を呈し、南側は開墾時に盛土が施されているため緩やかな地形を呈している。また、墳丘東側1/3は開墾時に削平されたようで畝跡がよく残っている。

① 墳丘(第12図)

自然地形の高まり部分を利用し、墳頂部を削平、基底部を削り出し方形台に成形する。盛土はほとんどなく、開墾土も含めて約30cmが残っていた。基底部は、南・北辺とも削り出した際に幅狭な平坦部が設けられており、それにより区画する。東・西辺はともに外部施設として溝をもつためそれにより区画される。東溝は墳丘側に若干傾き、内部より土

師器細片が少量出土した。西溝は、西側掘形ラインは尾根に直交し真っすぐにのびるが、東側掘形はやや凹凸があり、溝幅が墳丘北端に行くに従って幅広くなるという特異な形を呈する。そのため、墳丘長辺が尾根にほぼ平行しているにもかかわらず、北辺と南辺を比すと北辺が約2m長いややいびつな形となっている。平野側からは、TD11・18号墳同様よくみえる位置にあるが、開墾により西側が平坦化しているため、古墳の存在は認められない。もっとも、開墾時に丘陵南側斜面に盛土されている土砂が本古墳の盛土であったとするならば、築造当所は現高よりも更に1m程高くなると思われる。

② 埋葬施設

墳頂部中央で3か所の墓塚を確認した。うち2か所は、ほぼ同位置で切り合い関係をもつ。

第1主体部(図版第13. 2)

墳頂部中央よりやや北側に位置し、その主軸を尾根に平行する木棺墓である。地山削平面より墓塚を穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓塚埋土中央部で圧痕として確認した。棺底面は、長軸方向は水平であるが、短軸方向は墓塚自体がやや南東傾斜となっているため、棺底も南東傾斜となっている。側壁は「∟」字型をなし、形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物は一切有しておらず、頭位方向も決定づけられないが、棺両小口付近の幅を比した場合、南西側が広がっており、南西枕であった可能性もある。

第2主体部(図版第13. 3)

第1主体部と同位置にあり、主体部の2/3が切り合い関係をもつ。主軸を尾根に平行する墓塚で、掘形は地山削平面より穿つ。掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面は水平な南西下がりの面をもち、掘り込み側壁は「∟」字形をなす。主体部掘り込み上端長3.8m・同幅1m・底面長3.35m・同幅0.65m・深さ0.5mを測る。木棺痕跡は認められなかったが、整然とした掘形・形状などからすると木棺の使用されていた可能性がある。

南西寄りの北西壁底面近くより舶載の四乳四獣鏡片1(図版第53. 80)と、土師器台付壺脚片1(図版第46. 76)が出土した。

鏡片の位置からすれば、頭位は南西枕であったと推察される。

第3主体部(図版第13. 4)

墳頂部中央よりやや南寄りで検出したもので、主軸は尾根に平行する木棺墓である。墓塚掘形は地山削平面より穿つ。検出面での規模は、長さ4.7m・幅1.9mを測り、墓塚平面は隅丸長方形を呈し、断面は舟底形をなす。木棺は腐朽消滅していたが、墓塚埋土中央部で圧痕として遺存していた。棺は、墓塚中央に厚さ5cm・幅85cmで墓塚底面両端(長軸方向)

まで褐色粘土を貼り付けた上に置き、棺周囲はさらに淡褐色粘土で覆い、墓壇までの間は褐色砂礫土により埋めている。棺蓋となる部分は粘土で覆っていないようで、棺内に粘土の堆積は認められなかった。また、棺両端部分は粘土で覆われてはおらず、墓壇掘形との間がほとんどなく両者が接近している。棺長4.55m・幅1.0m・検出面から底面までの深さ0.85mを測る。棺底面は水平面を保ち、側壁は「U」字型をなす。形状から割竹形木棺の使用が窺われる。

副葬品は、棺内中央部より0.8m北東寄りの北西壁底面近くで、表を上にした舶載素縁文帯四乳鏡1面(図版第53. 81)が出土したのみで、他に遺物は有していなかった。

頭位方向は、鏡の出土位置からすれば、北東枕が推察される。

(25) RD 9号墳(第2図)

当古墳から尾根先端方向である北西側は緩やかに下がり傾斜をもちかける。尾根幅は12m前後であり、尾根の鞍部に墳丘が設けられている。尾根の東・西両側は急崖状に下降していく。

① 墳丘

尾根頂部の自然地形を最大限に利用して墳丘を築く。墳丘南西側の尾根頂部は幅約1.7m・深さ約50cmの溝で直線的に切られ、墳丘の西南側を画する。対する墳丘の西北に溝等の外部施設は認められない。墳丘は一辺約12m・高さ約1.4mを測る。

② 埋葬施設(図版第14. 2)

墳丘中央付近で埋葬主体部1か所を確認。墓壇の主軸は尾根に直交する。墓壇は2段墓壇であり、掘形の長さ約4.1m・幅約1.9mを測る。墓壇掘形上部では内側へ斜めに掘り下げ、木棺を納めた部分は中間付近より真下へ掘り下げを行う。棺相当部分は長さ約2.9m・幅約0.8mを測り、深さは墓壇検出面から約80cmである。

副葬品は、棺上に土師器器台1点(図版第48. 104)が横位置で認められた。さらに棺内の棺底中央部東南隅から鉄剣(図版第54. 75)・鉄鏃(図版第51. 3)各1点が出土した。

被葬者の頭位は鉄剣、鉄鏃の切先等から東北部に位置していたと推定される。

墳丘の東南側に尾根切断溝があり、溝底より土師器の台付甕(図版第47. 96~100)・甕(図版第41. 91. 92. 98)・高杯の他、磨製石斧の刃部1点の出土をみた。

(26) RD 2号墳(第2図)

RD 9号墳のすぐ東南側に隣接して存在する古墳である。尾根幅はRD 9号墳よりやや広くなる鞍部に築かれている。

① 墳丘

墳丘の尾根筋両端を溝で切り、方形墳を形成する。墳丘西北側はRD 9号墳と溝を共有

していたことが溝内堆積層からみてとれた。墳丘の東南部は隣接するRD10号墳に伴う溝により一部削平を受けている。墳丘は自然地形を生かし、若干の盛土が認められるが顕著な地山の削り出しは認められない。墳丘規模は長さ約12m・幅約10.5m・高さ約1mを測る。

② 埋葬施設

墳丘中央部に1か所、墳丘上東南部に2か所、合計3か所の埋葬主体部を確認した。さらに墳丘北側斜面に1か所の埋葬主体部を確認した。

第1主体部(図版第15.2)

墳頂部の東隅付近に位置し、主軸は尾根筋に直交する。長さ約2.1m・幅約0.8m・深さ約20cmを測る木棺直葬の素掘りの墓壇である。掘形平面形は長方形を呈し、壇底は水平を保つ。副葬品は認めない。

第2主体部(図版第15.3)

墳頂中央部の東南よりに位置し、第1主体部に掘形の東隅を切られる。主軸は尾根筋に直交する。長さ約3.4m・幅約0.9m・深さ約15cmを測る木棺直葬の素掘りの墓壇である。墓壇掘形の平面形は長方形を呈し、壇底は水平を保つ。副葬品は認められない。

第3主体部(図版第15.4)

墳頂中央部に位置し、第2主体部と並行する木棺直葬の素掘りの墓壇である。主軸は尾根筋に直交する。長さ約2.2m・幅約1.5m・深さ約70cmを測る。墓壇掘形は内のをつける「∟」字型に掘り下げる。壇底は水平を保つ。

副葬品は、棺内西北部から鉄製鈍1点が出土したほか、墓壇埋土中に土師器甕が割られた状態で小破片となって出土した。

第4主体部(図版第14.4)

墳丘の東北裾部に位置する。主軸は尾根筋に並行する木棺直葬の素掘りの墓壇である。長さ約2.9m・幅約1.1m・深さ約40cmを測る。墓壇掘形は内のをつける「∟」字型に掘り下げる。

副葬品として土師器高杯片が墓壇内から出土した。

(27) RD10号墳(第2図)

RD2号墳のすぐ東南側に隣接して存在する古墳である。

① 墳丘

尾根頂部の自然地形を利用し、墳丘周囲部分の地山を削って墳丘を整えている。墳丘は地山の削り出しによるものが大部分を占めるが、墳頂部には20～30cm前後の盛土が認められる。墳丘の西側には円弧を描く幅約1.8m・深さ約50cmの尾根切断溝を設けており、

この溝はRD2号墳の墳丘の一部を削る。中央部分の溝底から磨製石斧の刃部1点が出土した。墳丘は一辺9～10m・高さ約1mの規模をもつ隅丸長方形の平面プランを呈する。

② 埋葬施設(図版第15.5)

墳丘中央部の西南よりに埋葬主体部1か所を認めた。木棺直葬の素掘りの墓壇であり、壇底部のみを検出した。主軸は尾根筋に直交する。長さ約2.4m・幅約0.8m・深さ約10cmを測る。副葬品の出土は認められない。

(27) RD3号墳(第2図)

RD10号墳の南東側に位置するもので、本古墳とRD4号墳は、RD2・9・10号墳と連続して並ぶ尾根上に存在するのに対して、他の古墳に比して尾根稜部が凹んだ鞍部に築造されている。

① 墳丘

自然地形の高まりを利用して基底部を削り出し方形台に成形し、盛土を施すが墳丘の大半は盛土により築造される。被葬者埋葬後もかなり盛土が施されていたようであるが、盛土の流出が著しく墳頂部各所にその痕跡が認められた。現状では地山削平面より1mの盛土を確認した。基底部は、RD4・10号墳間には本古墳と隣接しているにもかかわらず、溝による区画はなされず墳丘を削り出した際にその周囲を平坦にして区画する。その他の面も同様で、基底部周辺は比較的平坦な面を造り出し区画する。これは尾根稜部面積が広く、緩やかな地形を呈するため、墳丘基底部が尾根急斜面に入り込まないことから考えられる。盛土が施されているため南東側からの高さは1.6mを測り、他の古墳に比してかなり腰高の大型古墳となる。平野側からは死角になるが、TDⅢ地点側から見た場合かなり量感がある。

② 埋葬施設

墳丘頂部中央においてほぼ同レベルで、3か所の墓壇を検出した。

第1主体部(図版第16.2)

中央部に位置する本古墳の中心主体である。その主軸は尾根に直交し、墓壇掘形は表土下0.7mの盛土中より穿つ。掘形検出面上端には、台形状に封土が認められる特異な形態を示す。墓壇底面は水平であり、掘り込み側壁は「∟」字型を呈し、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形をなす。木棺痕跡は認められなかった。

遺物は有しておらず、頭位方向についても決定づけられるものがなく不明である。

第2主体部(図版第16.3)

第1主体部の南東側、東端に近接平行し、第3主体部と直列する位置にある。主軸は尾

根に直交し、墓坑掘形上端は盛土中より穿つ。墓坑底面は水平であり、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、掘り込み側壁は「U」字型をなす。木棺痕跡は認められなかった。形状からもともと木棺はなかったと考えられる。

墓坑南西端、南壁底面近くより鉄剣1(図版第54.70)・刀子1(図版第51.21)がともに切先を南西に向け、平行した形で出土した。

墓坑の規模は小さいが、副葬品が南西端に集中している点などからすると被葬者はあったものと思われ、頭位方向も北東枕と考えられる。

第3主体部(図版第16.4)

第2主体部の南西側にあり、第1主体部と近接する。主軸は尾根に直交し、墓坑掘形は盛土中より穿つ。墓坑掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面は長軸方向が南西下がり傾斜をもち、掘り込み側壁は「U」字型をなす。木棺痕跡は認められない。

墓坑北東端中央底面近くより、切先を北東に向ける鉄鏃約15本分が束になり出土した。

第2主体部と異なり、形状・遺物の出土状況からして被葬者があるとは考えられず、副葬品のみを埋納した土坑とも考えられる。

(28) RD4号墳(第2図)

RD3号墳の南東側に位置するもので、RD3号墳と直列して並ぶ。

① 墳丘

尾根脊梁部を削り、基底部分のみ削り出し方形台に成形する。墳丘の大半は盛土により形成されており、地山面上に約0.4mの盛土が認められた。墳丘南東側に自然地形と区画するため溝を設けている。溝は尾根に直交するが、墳丘南東辺を包み込むような形で南西辺、北東辺の一部にまでおよぶ「コ」字型を呈している。各辺の基底部分は、RD3号墳同様、地山を削り出し緩やかな平坦部を設けて区画する。

② 埋葬施設

墳頂部中央よりやや北東寄り、同レベルで不整方向に並ぶ3か所の墓坑を検出した。

第1主体部(図版第17.2)

本古墳の中心主体部ともいえるもので、墳頂部東端中央に位置するもので、主軸をほぼ南北方向に置く。墓坑は、表土下0.4mの盛土中より穿ち、掘形・底面ともややいびつな隅丸長方形の平面形を呈する。墓坑底面はほぼ水平で、掘り込み側壁は「U」字型をなす。木棺痕跡は認められず、遺物は有していなかった。

第2主体部(図版第17.3)

第1主体部の南側に位置し、主軸は尾根に直交する。3主体部中もっとも規模が小さい

ものである。墓壇は、表土下0.4mの盛土中より穿ち、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈する。墓壇底面はやや南西下がりの傾斜をもち、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。木棺痕跡は認められず、遺物は有していなかった。

第3主体部(図版第17.4)

墳頂部北西端に位置するもので、主軸は尾根に直交する。表土下0.4mの盛土中より墓壇を穿ち、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈する。墓壇底面はほぼ水平で、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。木棺痕跡は認められず、遺物は有していなかった。

第2主体部の南側に空間が存在するため精査を行ったが、墓壇は検出されなかった。頭位方向は3主体部とも不明である。

(29) RD5号墳(第2図)

南西から北東へのびる主尾根から、北西へ派生した支尾根先端、尾根が急崖に自然傾斜しはじめる肩部に位置し、RD3号墳とは谷一つ隔てた南西側にある。北東・北西・南西側は急崖な自然地形を呈する。

① 墳 丘

自然地形の高まり部分を利用し、墳頂部・基底部を削り出し方形台に成形する。支尾根先端に位置しているが、尾根頂部面積がかなり広いため、他の古墳に比して削り出しの規模は大きい。尾根と古墳を区画するため、南東側に外部施設として尾根に直交する溝をもつ。他の3辺の基底部は、尾根頂部面積が広いため、自然地形と削り出した部分との間に比較的傾斜の緩いテラス状部分が周囲に設けられており、それにより区画される。北東側のテラス状部分や、溝底面からは土師器器台・高杯・小型壺(図版第48.106~108・110~114・116~118)の出土が見られた。平野側からは、尾根斜面が急崖な自然地形を呈するため、独立したかのような丘陵にみえ、削り出し規模も大きいためかなり量感がある。

② 埋 葬 施 設

墳頂部中央で墓壇1か所、これよりやや南側で甕を埋納した土壇1か所を確認した。

第1主体部(図版第17.6)

墳頂部中央に位置し、主軸を尾根に直交する木棺墓である。墓壇は、地山削平面より穿ち、ややいびつな隅丸長方形を呈する。木棺は、墓壇検出面において埋土中に圧痕として確認した。木棺部分は直線的のびる隅丸長方形を呈し、中央部より北東側のみが二段掘形となっており、木棺部より墓壇掘形が外側に大きくなっている。この大きくなった掘形と木棺との間は、暗褐色礫混り土により埋めている。棺底面は隅丸長方形を呈し、側壁は「∟」字型を呈する。木棺底面南西端及び北東端近くで木口穴を検出した。木口穴は約5cmの深さを有し、両木口間の距離は2.3mを測る。木口穴の検出により組合式木棺が安置さ

れていたと考えられる。木棺底面は、木口間のみが水平面であり、北東側木口からは、北東上りの傾斜をもつ。副葬品は有していなかったが、北東側墓壇検出面において土師器器台1(図版第48. 115)が出土した。

頭位方向は、遺物を有していなかったため断定はできないが、掘形の形状、木口穴等からして北東枕の可能性はある。

第2主体部(図版第17. 7)

第1主体部の南側2.5mの所で検出したもので、表土直下地山削平面より掘形を穿つ。掘形は楕円形を呈し、掘り込み側壁は「U」字型をなす。内部に土師器甕(図版第48. 109)を立位で埋納するが、掘形内にきれいに納まっている。甕底部は焼成後穿孔されている。内部からは、人骨・副葬品等は検出されなかった。TD18号墳同様、土器棺墓と考えられる。

(30) RD6号墳(第2図)

東西にのびる主尾根が、RD5号墳の立地する支尾根へと分岐する分岐点に立地し、北側を急崖な、東・西・南側は緩やかな自然地形から形成された尾根頂部に位置する。

① 墳丘(第14図)

尾根稜線上の自然地形の高まり部分を利用して、墳頂部・基底部を削り出し方形台を成形するが、墳丘の大半は盛土からなる。基底部は、削り出した際に自然地形との間に、比較的傾斜の緩い平坦部が設けられており、それにより区画される。被葬者埋葬後も墳丘に盛土が施されているようであるが、大半が流失しており、墳丘南西・東側にその堆積が著しい。

② 埋葬施設(図版第18. 5)

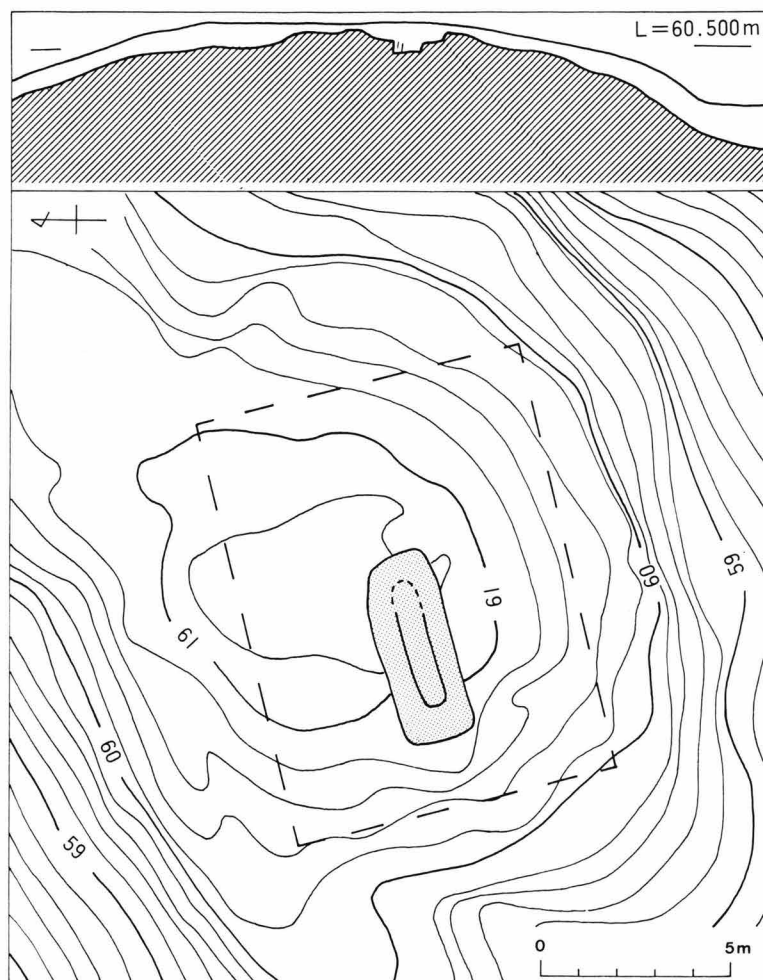
墳頂部中央よりやや西側で墓壇1か所を検出した。主軸は尾根に平行し、墓壇掘形は地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は墓壇埋土中央部に圧痕として確認した。木棺底面は水平面を保ち、側壁「V」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

副葬品は、棺内西端の北壁底面近くより鋤先1(図版第51. 12)が出土した。

頭位方向は、鋤先方向、出土位置からして東枕が推定される。

(31) RD7号墳(第2図)

南西から北東にのびる尾根稜頂部にあり、北東側はRD6号墳に至るまで急激に尾根幅が狭くなる。北西側は急崖な、南東・南西側は緩やかな自然地形を呈する。また、本古墳北西辺より尾根が約30m程張り出している部分があり古墳が存在する可能性を秘めていたが、試掘調査の結果、古墳は存在しなかった。



第14図 RD6号墳地形図

① 墳丘(第18図)

墳頂部はもともと平坦な自然地形を呈していたようで、平坦部の削り出しは行われていない。基底部は削り出しにより方形台に成形するが、その規模は小さなもので、平坦な地形上、削り出し不可能な場所には、盛土により方形台に形成した部分もある。自然地形との区別は、平坦部が周囲と取り巻くため明確に区別できる部分とできない部分が存在する。

② 埋葬施設

墳頂部中央よりやや南東寄りで1か所、南西寄りで1か所の計2か所を確認した。墳頂部に盛土がないため、いずれも表土直下の地山面においてその掘形上端が検出された。

第1主体部(図版第18.2)

本古墳の中心主体で、主軸は尾根に平行し、表土直下の地山面より墓坑を穿つが、墓坑

南東側は、方形台に形成した時の盛土面から穿たれている。墓壇平面はややいびつな隅丸長方形を呈する。木棺は墓壇埋土中央部に圧痕として確認した。棺は墓壇中央に置かれていたが、墓壇掘形同様、ややいびつな平面形を呈する。棺底面はほぼ水平であり、側壁は「∟」字型を呈する。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

副葬品は、棺内中央底面近くにおいて切先を南に向けた鉄剣1(図版第54. 71)、鉄鏃約10(図版第51. 22~28)が出土した。鉄剣は棺に平行せず、やや斜めになっている。被葬者の腰部部分に置かれていたものと考えられる。

頭位方向は、鉄剣の切先方向から考えて北東枕であったと推定される。

第2主体部(図版第18. 3)

第1主体部のすぐ南西側に位置し、主軸を尾根に直交する墓壇である。墓壇掘形は、表土直下地山削平面より穿つが、検出面付近には多量の炭が散乱していた。墓壇内両端は、2段掘形となっており、幅25cm程の段を有する。墓壇平面形は隅丸長方形、掘り込み側壁は「U」字型を呈し、底面は中央が凹む。木棺痕跡は認められない。

遺物は有しておらず、頭位方向も不明である。また、第1主体部の北西側には、空間が認められ精査を行ったが、墓壇等は検出されなかった。

(32) RD13号墳(第2図)

RD7号墳の南西隣に位置し、約3mの隔りがあるが墳丘自体は直列して並ばない。北西側は急崖な、南東側は緩やかな自然地形を呈する。南西側にはRD11号墳が立地する。

① 墳丘(図版第19. 1)

RD7号墳同様、墳頂部はほとんど平坦化しており、墳丘自体の築造方法も変わらないが、盛土による方形台の形成は行われていない。墳頂部はほとんど削平せず、墓壇埋葬部を中心に削平したようである。各辺は削り出しにより方形台を成形するが、北西・南東辺基部は、自然地形と削り出し面の傾斜変換点により、北東側は削り出した際にできた平坦面により区画される。南西側は、外部施設として尾根に直交する直線的な溝をもつが、尾根稜部の高い部分だけ溝底面が水平になるような形で造られているため、西辺の端から端まで溝はのびていない。

② 埋葬施設(図版第19. 2)

墳頂部中央において、主軸を尾根に直交する木棺墓1か所を検出した。墓壇は、盛土がほとんどないため表土下0.1mの地山削平面で隅丸長方形を呈する掘形上端を検出した。木棺は、墓壇埋土中央部に圧痕として確認した。棺は墓壇中央に置かれ、棺と墓壇の間は、淡黄褐色土で埋めているが、この埋土は棺底面までまわっているため、墓壇掘形底面に棺底がつかず、一度墓壇底面を整地してから棺を安置したようである。棺底面は水平面を保

ち、側壁は「U」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が窺われる。

副葬品は、棺内西端底面より鉄鏃16(図版第52. 30~45)、中央北東壁寄り鉄刀1(図版第53. 69)、南西壁寄り鉄斧3(図版第52. 58~60)、鉄刀よりやや南東寄りの中央部で刀子1(図版第52. 46)、鉋6(図版第52. 47~52)の鉄製品の一括資料が出土した。いずれも棺底より出土し、刀子を除き切先は北西を向いていた。また棺南東端付近からは、小片であるが堅櫛片4点が検出された。土器類の出土はみられなかった。

頭位方向は、棺幅が北西側に比して南東側が広いことや、鉄鏃の位置、切先方向、堅櫛の位置からして南東枕であったと思われる。

(33) RD11号墳(第2図)

RD13号墳の南西隣に位置し、約3m離れているが墳丘自体は直列して並ばない。尾根頂部面積がかなり広いので古墳周囲は平坦化している。また、北西側には、RD12号墳の存在する支尾根がのびており、その尾根が下降傾斜しはじめる肩部でもある。

① 墳丘(図版第19. 3)

尾根頂部の自然地形のかなり起伏の高い部分を利用して、墳頂部・基底部を削り出し方形台に成形する。起伏部分全体を削り出していないため、見た目では起伏が大きいためかなり大きな古墳の存在が窺われるが、実際は削り出し規模も小さく、古墳自体もさほど大きくならない。また、墳丘南西側は大きく削られている。各辺基底部は、削り出した際に幅狭な平坦部が造られており、それにより区画される。墳頂部は平坦化していたが、盛土は約30cm施されていた。

平野側からはよく見える位置にあり、自然地形の起伏が大きいため、実際の規模よりも大きく見えかなり量感がある。

② 埋葬施設

墳頂部中央で1か所、南西側の削平された部分で、削平された主体部1か所を確認した。第1主体部(図版第19. 4)

墳頂部南西側で検出した木棺墓である。墳丘が削平された際に主体部も削平を受けており全体の1/6程度残存していたものである。主軸をほぼ東西方向に置き、表土下30cmの地山削平面より墓壇を穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。木棺底面は水平面を保ち、側壁は「U」字型をなす。全体が残っていないため使用された木棺については断定はできないが、形状から箱形木棺の可能性はある。

副葬品は、棺東端底面より堅櫛と針状鉄器(図版第20. 2)が出土した。針状鉄器はヘアーピンのものと思われる。

頭位方向は、堅櫛から考えて東枕であったと思われる。

第2主体部(図版第20.1)

本古墳の中心主体部になると思われるもので、第1主体部の北隣に位置する木棺墓である。主軸は尾根に直交し、表土下30cmの地山削平面より墓壇を穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。木棺底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

副葬品は、棺中央部底面より切先を北西に向けた刀2(図版第53. 67. 68)が検出された。刀は、両側壁に1本ずつ置かれ、刃部は側壁側を向いていた。被葬者の腰部横に置かれたものと思われる。また、棺南東端では第1主体部同様、堅櫛・針状鉄器・刀子状鉄器が一括して(図版第20. 3)出土した。堅櫛は炭化が著しく黒漆で塗り固めているが、正確な個体数は不明である。針状鉄器・刀子状鉄器も銹化が著しく、遺物取り上げ後は、ほとんど原形をとどめていない。

頭位方向は、刀の切先方向・堅櫛の位置からして南東枕と考えられる。

(34) RD12号墳(第2図)

RD11号墳の立地する尾根より、西方にのびる支尾根上に位置し、その稜部と斜面にわたって築造されたもので、他の墳墓に比して立地、築造方法が異なる。

① 墳丘(図版第20. 4)

墳丘は、削り出しと盛土により方形台を成形する。墳丘南西側 $\frac{1}{2}$ は墳頂部・基底部とも削り出しにより、北東側 $\frac{1}{2}$ は盛土により墳頂部・基底部が形成される。外部施設として、尾根高位側に溝をもつが、やや不整形な溝で逆「く」字状を呈する。中央部分のみが墳丘基底線に平行し、先に行くほど内傾する。溝断面は「V」字型をなしており、本古墳のみが、当古墳群中で特異な形態を示す。本来は方形を意識して造られたと思われるが、排水の関係により直線的な溝にすれば、等高線に平行するため、溝端を内傾させたものと考えられる。この溝内中央からは、須恵器甕1(図版第48. 123)が出土している。

平野側からは、よく見える位置にあるにもかかわらず、墳丘自体が尾根斜面にまでわたって築造されているため、自然地形様にみえ量感に欠ける。

② 埋葬施設(図版第20. 5)

墳頂部中央付近において、主軸を尾根に直交する木棺墓1か所を検出した。墓壇は、表土下約40cmの地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。検出面での墓壇掘り込み上端長2.9m・同幅1.45mを測る。木棺は、墓壇埋土中に圧痕として確認した。棺は、墓壇北西・北東壁に接しており、底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。棺長2.5m・同幅0.85m、検出面からの深さ0.45mを測る。形状から組合式木棺の使用がうかがわれる。

遺物は、北東側木口部分から須恵器杯身・杯蓋が2セット(図版第48.119~122)が出土した。

頭位方向は、遺物の出土位置・棺の形状からして北東枕であったと考えられる。

(35) DD1号墳(第2図)

RD11・12号墳が立地する尾根から、西方にのびた支尾根の稜部に築かれたもので、この尾根は本古墳よりその方向を北に転じ、さらに下方に存在するDD13号墳へと伸びる支尾根支脈があり、尾根が分かれる分岐点に位置する。

① 墳丘(図版第21.1)

分岐点にあるため、比較的尾根稜部面積が広がっているが、西側は山道を作る際に削っているため、墳丘北西角が存在しない。

墳丘は、尾根稜部の自然地形の高まりを利用して頂部を削り出し方形台に成形するが、基底部については、明確な削り出し痕跡や、自然地形と区画する造作をみい出すことができなかった。一部については、自然地形と削り出し面傾斜角の違いから基底部であろうと思われる部分も存在した。南西側には、外部施設として尾根に直交する直線的な溝を有する。この溝の両端や、一部認められた自然地形との傾斜変換点などからすると、標高55.6m等高線付近に基底部が求められる。これらのことから古墳の規模を求めると、一辺8m・高さ1mの古墳が推定される。墳丘南斜面より土師器壺(図版第48.125)が出土した。

平野側からはよく見える位置にあるが、自然地形にしかみえず量感に欠ける。

② 埋葬施設

墳頂部中央において、不規則に並ぶ墓壇4か所と土壇一か所を検出した。いずれも墳丘盛土の流失が著しいため、底面近くしか残存しておらず、表土直下の地山削平面において検出したものである。

第1主体部(図版第21.2)

本古墳の中心主体部となるもので、主軸を墳丘基底部対角線上に置く木棺墓である。墓壇平面は隅丸長方形を呈し、二段掘形を有する。南東側掘形は、盛土流出に伴い消滅したものか存在しない。木棺は、二段掘形のため地山を掘り下げ墓壇中央に安置され、底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「└┘」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。遺物はまったく有していなかった。

頭位方向は、遺物の出土がみられなかったことから断定できないが、棺幅から見た場合、北東側が広いことから北西枕であった可能性がある。

第2主体部(図版第21.3)

第1主体部のすぐ西側に位置し、主軸を第1主体部とほぼ逆に置く。墓壇掘形・底面と

も隅丸長方形を呈し、底面は長軸方向が南西下がり、短軸方向が北西下がりの面をもち、掘り込み側壁は「□」字型をなす。木棺痕跡は認められなかった。

第3 主体部(図版第21.4)

第1主体部の南側に位置し、主軸を墳丘長辺と平行する。墓坑掘形・底面とも隅丸長方形を呈し、底面は長軸方向が東下がりの傾斜をもち、掘り込み側壁は「□」字型をなす。木棺痕跡は認められなかった。

第4 主体部(図版第21.5)

第1主体部の東方約1mの所に位置し、主軸をほぼ墳丘長辺と平行する。墓坑掘形・底面とも長楕円形を呈し、底面は長軸、短軸方向とも中央部がやや膨み、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。木棺痕跡は認められなかった。

以上、第2, 3, 4主体部は遺物は有しておらず、木棺痕跡は認められない。頭位方向は不明である。

第5 主体部(土坑)(図版第21.6)

第4主体部の南側に位置するもので、土坑平面は楕円形を呈する。遺物は有していない。本古墳の各主体部は、遺物を有していなかったが、墳丘南側基底部付近より、転落したと思われる土師器壺1(図版第21.7・48.125)が出土している。

(36) DD13号墳(第2図)

DD1号墳からのびた小支尾根が、急傾斜で下降しはじめる肩部に位置し、尾根両側面は急崖な自然地形を呈する。

① 墳丘(第15図)

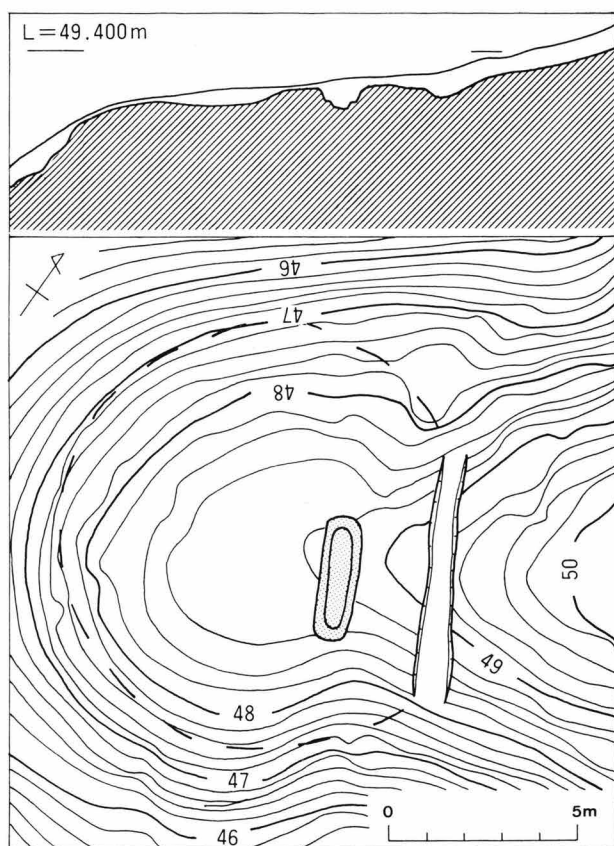
尾根筋全体を削り出し円形台に成形する。基底部は、削り出した際に幅狭な平坦部が設けられ自然地形と区画する直径11mの円墳である。尾根高位側には外部施設として、尾根に直交する直線的な溝を持つが、溝により北東側円形部分が削られてしまい、やや不整形となっている。墳丘高は、南側基底部から2mを測るが、盛土はほとんどなく墳丘上に堆積する土砂はすべて高位側からの流土である。

平野側からは、DD14号墳から西にのびる小支尾根により遮ぎられた死角に位置するためみることはできないが、この支尾根上からみても、溝が存在するにもかかわらず、流土により若干の平坦面が認められる程度で、古墳の判別はつかない状態である。

② 埋葬施設(図版第22.2)

墳頂部中央よりかなり溝寄りでも木棺墓1か所を確認した。また、この墓坑より南西側頂部には、かなり空白部分が存在するため、精査を行ったが墓坑は検出されなかった。

墓坑は、主軸を尾根に直交し、地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木



第15図 DD13号墳地形図

棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。棺底面は水平面を保ち、側壁は「L」字型をなす。形状から箱形木棺が使用されていたと考えられる。

副葬品は、棺内中央底面近くにおいて切先を北西に向ける刀子1(図版第52.53)を検出した。被葬者の腰部に置かれていたものと考えられる。このことから頭位方向を考えれば、南東枕であった可能性がある。

主体部内からは、土器類の出土は認められなかったが、墳丘斜面上より須恵器器台片1(図版第48.124)が出土した。

(37) DD14号墳(第2図)

DD1号墳から北方にのびる尾根が、さらに西・北東方へと分岐して下降していく尾根の分岐点の肩部に位置しており、北側は急崖な自然地形を呈する。

① 墳丘(第16図)

尾根稜部を利用し、墳頂部・基底部を削り出し方形台を成形する。基底部は、北・西辺は、自然地形と削り出し面の傾斜変換点により求めることができるが、東側は墳丘東辺に平行して山道が造られているため、これにより削られ確認することはできなかった。南辺基底部も、溝等外部施設が設けられておらず、南上がりの緩い地形のため明確な区画が認められない。南辺側基底部と思われる部分については、西辺の削り出し面の南端として墳丘規模を復元してみると、長辺10m・短辺7.5m、盛土がほとんどないため西側からの高さ0.6mとなる。各辺がほぼ方位を差し、長辺側が南北方向を示す。

平野側からは正面になるが、背稜があることや盛土をほとんど有さないため、自然地形様にみえ量感に欠ける。

② 埋葬施設
墳頂部中央で、
墳丘対角線方向に
主軸をもつ、一部
が重なり合った墓
塚2か所を検出し
た。盛土がほとん
どないため、いず
れも地山削平面よ
り墓塚を穿つ。

第1主体部(図
版第22.4)

墳頂部中央より
やや南東寄りに位
置する墓塚である。

墓塚掘形・底面と

も隅丸長方形の平面形を呈し、底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「∪」字型をなす。木棺痕跡は認められず、遺物は有していなかった。頭位方向は不明である。

第2主体部(図版第22.4)

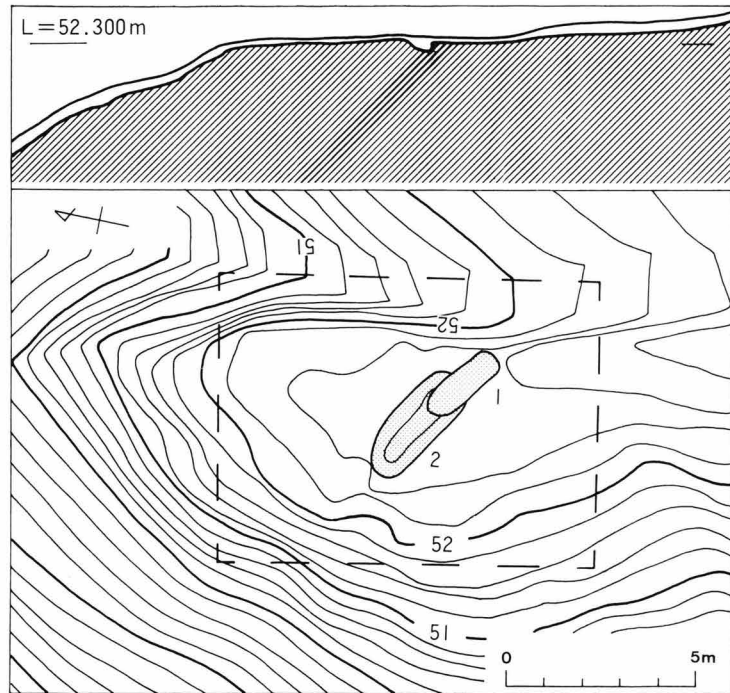
本古墳の中心主体部であり、墳頂部中央に位置する木棺墓である。第1主体部に先行する墓塚で、南東側棺上部分まで切り合い関係を有し、北西側は第1主体部埋葬時に削平を受けたためか墓塚掘形の一部が削平されている。墓塚は、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓塚埋土中央部で圧痕として確認した。棺底面は水平面を保ち、側壁は「∪」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物は有していなかったが、棺上の南東端近くの墓塚埋土中より、28cm×12cm程度の河原石1個が出土したが性格等は不明である。

頭位方向は、遺物等を有していないため明らかでないが、棺幅の違いからみれば南東枕であった可能性がある。

(38) DD15・16号墳(第2図)

DD14号墳より西方にのびる支尾根の稜部に位置する。伐採後比較的緩やかな傾斜面に8m×5m程度の平坦部が2か所みられ、古墳の可能性が生じたため調査を行った。その結果、この平坦部は自然地形であり、尾根高位側からの流土の堆積であることが明らかとなり、



第16図 DD14号墳地形図

古墳は存在しなかった。

(39) DD17号墳(第2図)

大道寺跡北端より約6m下がった、北東方向にのびる狭小な馬の背状の小支尾根に位置する。この小支尾根には、DD17号墳に隣接してDD18号墳が築造されており、南西側に位置するものをDD17号墳、北東側をDD18号墳と称し、2基直列して並ぶ。背稜側を除く3方向を急崖な自然地形により形成されており、稜部面積が狭いため、墳丘自体が細長い長方形を呈する。

① 墳丘(第17図)

馬の背状の狭小な尾根の背稜側・側面を削り出し方形台に成形する。基底部は、南西・南東・北東辺とも、削り出し面と自然地形との傾斜変換点によりみることができる。北東側は、DD18号墳の溝により区画される。調査結果による規模は、長辺10m・短辺7.5m、DD18号墳溝底面からの高さ1.6mを測る。平野側からは、大道寺跡の平坦面より突き出た尾根に位置し、尾根北東端が急崖となっているため、規模のわりには量感がある。

② 埋葬施設(図版第23.2)

調査の結果、墳頂部はかなり削平を受けており、主体部等は確認されなかったが、上方の大道寺跡と関連する遺構が1か所確認された。これは、墳頂部中央よりやや南西側において瓦質土器を埋納した土塚であり、墳頂部を一旦削平したのち土塚を穿っている。大道寺跡古墓群にみられるようなマウンドは認められなかったが、土塚は長径0.75m・短径0.6m・深さ0.16mを測り楕円形を呈する。内部に瓦質土器甕(図版第56.14)を立位で埋納していたが、かなり破砕している。甕底部は、土塚底面に達しておらず、一度埋めてから埋納されたようである。甕内からは、副葬品は検出されなかったが、底面近くより少量の火葬骨片が認められた。蓋となるような土器類が出土しなかったため、木板蓋の使用が考えられる。

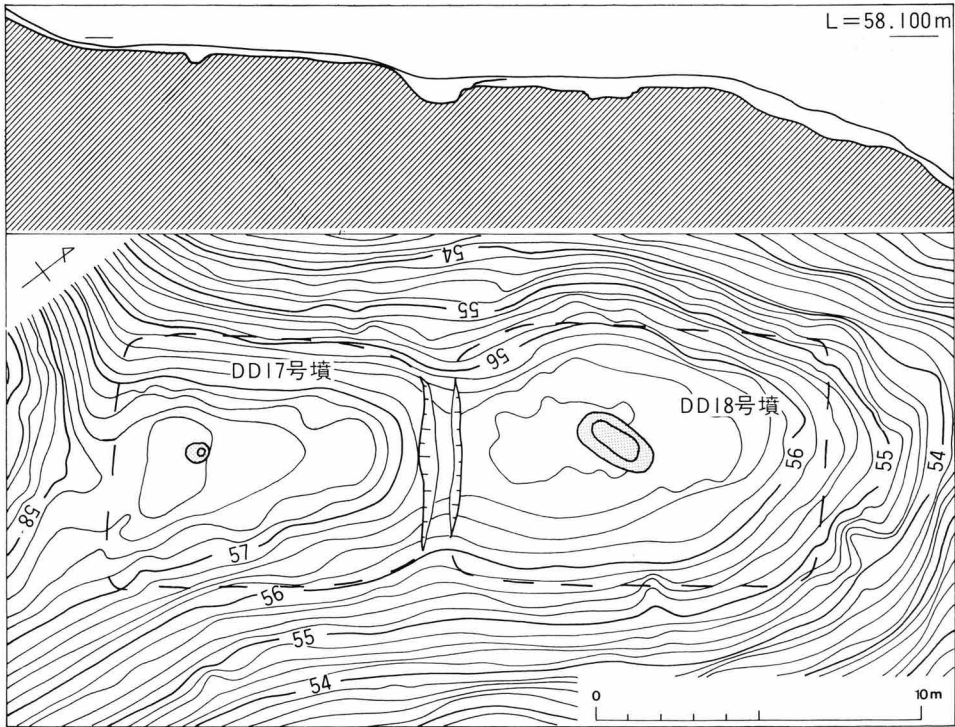
このようなことから考えると、甕埋納時に墳頂部をかなり削平しているにもかかわらず、土塚が盛土中から穿たれていることから、墳丘築造時にはかなりの盛土があったと考えられる。また、上方の大道寺の墓域が周辺にも拡張されてきた痕跡を示すものともいえよう。

(40) DD18号墳(第2図)

DD17号墳の北東隣、尾根が急傾斜で下降しはじめる尾根先端肩部に位置する。

① 墳丘(第17図)

DD17号墳同様、尾根稜部・側面を削り出し方形台に成形する。DD17号墳より後に築造されたようで、DD17号墳の墳丘の一部を削り溝を設け区画している。北東側基底部は削り出した際に傾斜の緩やかな平坦な段が設けられておりそれにより区画する。北西・南



第17図 DD17・18号墳地形図

東側は、削り出し面と自然地形の傾斜変換点が基底部となる。盛土は約40cm確認した。

溝は、尾根に直交する直線的なもので、幅1.3m・深さ0.5mを測り、内部埋土中より5世紀末頃に比定される須恵器杯身1・杯蓋1(図版第48.127.128)が出土した。

平野側からみると、DD17号墳同様、規模のわりには量感がある。

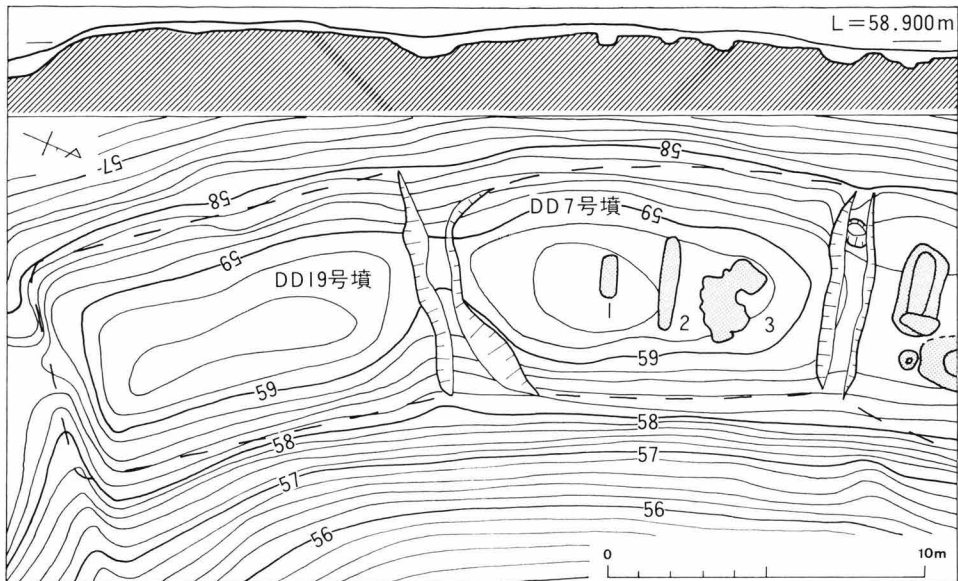
② 埋葬施設(図版第23.3)

墳頂部中央より主軸をほぼ墳丘対角線上にもつ木棺墓1か所を確認した。墓壇は、表土下40cmの地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。棺は墓壇中央に置かれ、棺底面は東西方向が中央部分がやや凹み、南北方向は南下がりの傾斜をもつ。側壁は「∟」字型をなす。底面がややいびつなため、木棺を特定できないが、箱形木棺が使用されていたと考えられよう。

遺物は有しておらず、頭位方向についても決定づけられる要素に欠けるため不明である。

(41) DD19号墳(第2図)

大道寺跡B地点の北西側に位置し、古墳の立地する丘陵支尾根は、電車基地造成予定地の最西端であり、尾根は本古墳より北西へのびさらには、北東へと方向を転じてのびている。この尾根上には、造成予定地最東端のTT1～5号墳でみられたように、墳丘裾を接し



第18図 DD7・19号墳地形図

て累々と階段状に古墳が並んでおり、約100m程の尾根上に9基も築造するという福天地方では例のない密集ぶりを示しており、本古墳は階段状に古墳が並んでいく起点となる部分でもある。これらの一連の古墳が立地する支尾根は、狭小な馬の背状尾根であり、尾根両側面は急崖な自然地形を呈する。また、狭小な尾根であることや墓坑の埋葬スペースの関係から墳形は、尾根高位側の比較的傾斜の緩い部分に立地するものは長方形、傾斜面の階段状部分に立地するものは舌状の墳形を呈する。

① 墳丘(第18図)

墳頂部・基底部は、尾根稜部全体を削り出し方形台に成形するが、隣接するDD7号墳側は稜部面積が小さいため、墳丘斜面に盛土を施し平坦部を造っている。基底部は、東・西辺が盛土と築造前の自然堆積層との差がそれに相当するものと思われる。一部分ではあるが両辺とも南端付近は削り出しが行われており、削り出し面と自然地形との傾斜変換点により基底部を確認することができた。北辺は、DD7号墳の溝により区画される。南辺は、大道寺跡と本古墳との接点で掘切り様の施設が認められた。この掘切り様の施設は調査の結果、後世に造られたものであることが判明したが、本来は墳丘を区画するために溝が設けられていたようで、掘切り様の溝下部に古墳築造時の溝堀形が部分的に検出されたが、ほとんど残っておらず、規模等は不明である。以上のことから本古墳の規模を求めると、長辺12.5m・短辺7m、南側溝底面からの高さ1.7mとなる。

② 埋葬施設

前述したように、古墳築造時の溝上面に、後世の掘切り様の施設が存在していることから、この時墳頂部も削平されたのか検出されなかった。DD17号墳同様、大道寺の墓域が拡張されたことに起因するのかもしれないが、いずれとも断定するには至らなかった。

なお、本古墳からは東辺基底部付近より削平された際に転落したと思われる土師器細片が少量出土したのみである。

(42) DD7号墳(第2図)

DD19号墳の北隣に位置し、丘陵両側面を急崖な自然地形により形成されている。

① 墳丘(第18図)

墳頂部・基底部を、尾根稜部全体を削り出し方形台に成形する。DD19号墳のように尾根両側面に盛土を施し平坦部の築造は行わない。尾根側面は急崖な自然地形のため、東・西辺基底部は、削り出し面と自然地形の傾斜変換点それぞれにあたるようである。南辺は、DD19号墳との間に尾根に直交する幅1.5m・深さ0.5mの溝を設けている。溝は、DD19号墳側掘形は直線的であるが、本古墳側は東・西辺の一部をも包み込むような「コ」字型の掘形を呈する。内部埋土中からは遺物は出土しなかった。北辺は、DD6号墳の溝により区画されるが、本古墳とDD6号墳の墳丘方向が異なるため、東・西辺の長さが異なる。

以上のことから墳丘規模を求めると、東辺10m・西辺12.5m・短辺7m、南側溝底面からの高さ1.2mとなる。盛土は、墳丘頂部に平均して約0.3mが認められた。

② 埋葬施設

墳丘頂部中央において2か所と、3基以上の切り合い関係を有する墓塚の重なりを1か所検出した。これらはいずれも表土下30cmの地山削平面において検出した。

第1主体部(図版第24.2)

墳頂部中央よりやや南側に位置する小墓塚で、主軸は尾根に直交する。墓塚掘形は、地山削平面より穿ち、底面は水平面を保つ。掘形・底面とも隅丸長方形を呈し、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。木棺痕跡は認められない。墓塚中央底面近くより土圧により壊れたと思われる土師器小型壺1(図版第48.126)が出土した。

墓塚自体が小さいことから小児用の墓塚とも考えられるが、詳細は不明である。

第2主体部(図版第24.3)

本古墳の中心主体部となるもので、墳頂部中央に位置し、主軸を尾根に直交する墓塚である。墓塚掘形は、地山削平面より穿ち、底面は中央部がやや膨み北東側が高く、南西側が低い斜底となっており両者の高低差は16cmを測る。掘形・底面ともややいびつな隅丸長方形を呈し、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。木棺痕跡は認められない。

遺物は有しておらず、頭位方向も不明である。

第3 主体部(図版第24. 4)

墳頂部北端に位置し、地山削平面において3か所以上の切り合い関係を有する墓塚群であり、多数の切り合い関係を持つため平面形もいびつであり、断面もかなり凹凸をなしている。

多数の切り合い関係を有するが、明確にできた墓塚は2か所だけである。北東端の墓塚はもっとも新しいと思われるもので、掘形・底面とも楕円形を呈し、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。長径1.15m・短径0.75m・深さ0.3mを測る。

南側墓塚は、掘形北東端と南西端の一部だけ検出したもので、中央部分は他の墓塚に切られており、その全体をとどめていない。主軸を尾根に直交する木棺墓で、墓塚は地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓塚埋土中央部に圧痕として確認した。棺両端は、墓塚掘り込み側壁につながっており、底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。どのような木棺が使用されていたかは、墓塚がほとんど削平されているため推定できない。また、頭位方向についても不明である。

この切り合い関係を有する墓塚群は、遺物を有していなかった。次々と埋葬がくり返されそのつど削平がくり返されたため、掘形自体も浅く、遺物もそれに伴い散逸したのかも知れない。

一方、第1主体部と南側溝との間にはかなり空間があくため、精査を行ったが主体部等は存在しなかった。次の被葬者のためにあけられた空間であろうか。

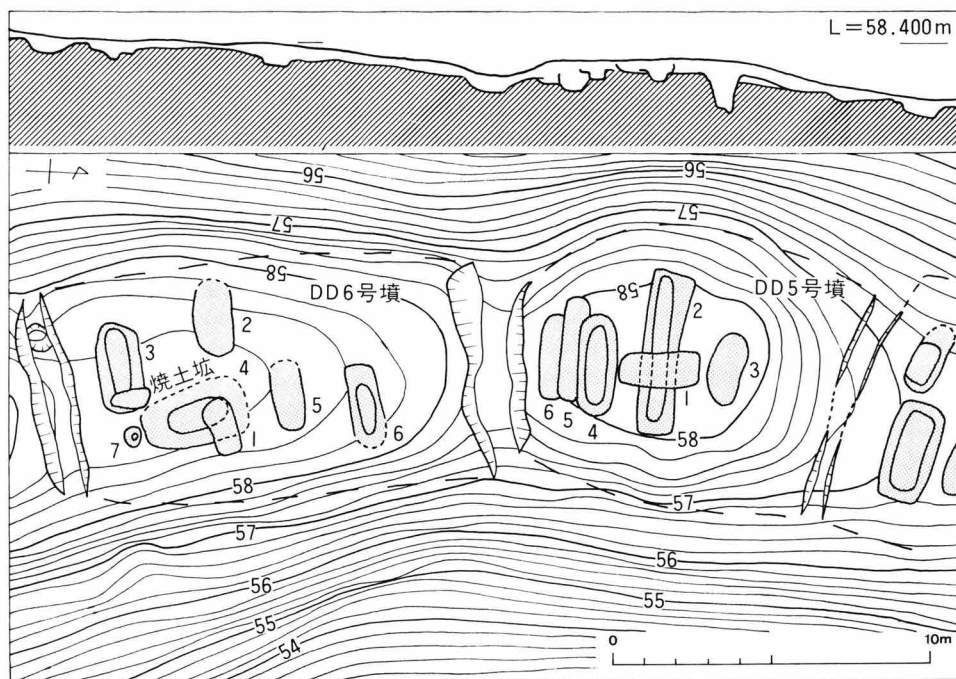
本古墳からの出土遺物は、小型壺1点のみであり、隣接するDD6号墳からは、盛土中からでもかなり遺物が出土しており、本古墳からはまったくみられない点を考えると、本来遺物は有していなかったものと考えられる。

(43) DD6号墳(第2図)

DD7号墳の北隣に位置し、DD7・19号墳同様、尾根両側面を急崖な自然地形により形成されている。

① 墳丘(第19図)

墳頂部・基底部は、尾根稜部全体を削り出し方形台に成形する。東・西辺基底部は、削り出した際に幅狭な緩やかな傾斜をもつ平坦部が設けられており、それにより自然地形と区画する。南辺は、尾根に直交する直線的な幅1.5m・深さ0.5mの溝を設けている。溝内部からは、後述する土器棺墓の壺頸部片や、土師器甕・器台が出土した。このうち、甕は器台に乗せられていたものが倒れたような状態(図版第26. 4)で出土したが、風化が著しく図化できなかった。北辺は、DD5号墳の溝により区画される。以上のことから墳丘規模を求めると、長辺13m・短辺7.5m、北側溝底面からの高さ1.6mとなる。盛土は、墳頂部



第19図 DD5・6号墳地形図

全体に平均して約0.3mを確認したが、尾根下方になる北側は0.5mの盛土を施す。

② 埋葬施設

墳頂部全域において6か所の墓壇と、土器棺墓1か所、焼土・炭を埋土とする土壇1か所を検出した。

第1主体部(図版第25.2)

墳丘頂部中央のやや東寄りに位置し、主軸を尾根に直交する墓壇である。墓壇は、表土下20cmの盛土より穿ち、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈する。底面は西側が深くなる斜底で比高差は18cmを測り、掘り込み側壁は「L」字型をなす。木棺痕跡は認められない。内部埋土中より土師器細片が少量出土した。頭位方向は不明である。

第2主体部(図版第25.3)

墳頂部中央のやや西寄り、第1主体部の西方1.4mに位置し、主軸を尾根に直交する墓壇である。墓壇は、表土下20cmの地山削平面より穿つ。墳丘斜面側にあるためか、後世の削平を受けたためか、墓壇西側掘形を欠く。掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面はほぼ水平で、掘り込み側壁は「L」字型をなす。木棺痕跡は認められなかった。内部埋土中より土師器細片が少量出土した。頭位方向は不明である。

第3主体部(図版第25.4)

墳頂部南側、溝寄りに位置し、主軸を尾根に直交する木棺墓である。墓坑掘形北西側は焼土・炭を埋土とする土坑と切り合い関係を有し、土坑に先行する。墓坑掘形は、地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓坑埋土中央部に圧痕として確認したが、北東端は土坑掘形により切られる。棺底面は南西下がりの面をもち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物は有しておらず、頭位方向も決定づけられないが、棺幅の違いからすれば南西枕であったと考えられる。

第4 主体部(図版第26. 2)

墳頂部中央よりやや北側に位置し、主軸を尾根に直交する。墳丘断ち割り中に検出したため、墓坑掘形西辺の一部を欠く。墓坑は、表土下40cmの地山削平面より穿ち、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。木棺痕跡は認められなかった。

遺物は、土師器甕2個体分(図版第49. 146-147)の埋納が認められたが、出土状況が南壁東端・中央・西端と3か所に分散しており、破碎されてから入れられたようで個体としてのまとまりは認められなかった。

第5 主体部(図版第26. 3)

墳頂部中央よりやや南側の東辺寄りに位置し、第1主体部と切り合い関係を有するため、墓坑の一部を欠くが、第1主体部に先行し、その主軸を尾根に平行する木棺墓である。墓坑掘形は、表土下30cmの盛土面より穿つが、検出面において土色の変化が明確に認められない部分が存在したため、断ち割りを行った。それにより墓坑の西・北側の一部を欠く。墓坑平面は隅丸長方形を呈す。木棺は、墓坑埋土中央部で圧痕として検出した。棺底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。棺長2.3m・幅1.04m、検出面からの深さ0.25mを測る。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

棺内北側西壁より土師器甕1(図版第49. 148)と、同位置の棺上より土師器器台1(図版第49. 149)が出土した。おそらくセットになって棺上に置かれていたものが、木棺の腐朽に伴い棺内に落ち込んだものと思われる。頭位方向については不明である。

第6 主体部(図版第26. 5)

墳頂部最北端に位置する木棺墓である。主軸は尾根に直交し、地山削平面より墓坑を穿つ。墓坑掘形は、墳丘斜面にかかるためか、削平を受けたためか定かでないが、東側掘形の一部を欠いているが、平面形は隅丸長方形を呈する。木棺は、墓坑埋土中央部に圧痕として確認した。棺は墓坑中央部に置かれ、棺底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字形をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

棺内中央部より土師器高杯2(図版第49. 150~153)、器台2(図版第49. 154.155)が出土した。

両者とも棺上に置かれていたものが、木棺の腐朽に伴い棺内に落ち込んだものと考えられる。頭位方向は、棺幅の違いからみた場合、西側が広くっており西枕の可能性もある。

第7主体部(土器棺墓)(図版第26.1)

第5主体部の南側に近接して造られており、表土下20cmの盛土面において土坑掘形上端を検出した。土坑は隅丸方形に近い平面形を呈し、1辺65cm・深さ25cmの規模を有し底面はほぼ水平で、掘り込み側壁は「┘」字型をなす。内部に土師器壺(図版第49.143)を立位で埋納していた。この壺は、頸部より上方をすべて取り払い蓋として土師器高杯部(図版第49.144)を乗せていた。壺内部からは、副葬品・人骨等は検出されなかった。また、底部付近には径8cm程の穿孔がある。この壺の頸部・底部の加工は埋納直前に墳丘上で行われたようで、南側溝内よりその破片が出土している。

壺・甕を埋納する土坑で蓋が検出されたのは本例のみであるが、壺棺としてとらえれば、規模から乳児・胎児用棺と考えられる。

焼土坑(図版第25.4)

第3主体部と切り合い関係を有するもので、DD4号墳にある土坑と同じ形態をなす。土坑は、長軸方向を尾根に平行し、第3主体部検出面と同レベルで確認した。内部埋土は3層からなり、最下層は炭層で、上方2層は焼土・炭混りの層からなり、土坑掘形壁面はほとんど焼けていない。埋土中からは遺物は出土せず、土坑の性格・時期は不明である。

以上が検出遺構の概略であるが、埋葬が行われるたびに削平がくり返されたようで、墳丘全体にわたり土師器の散乱がみられた。また、第4・6主体部の西側は遺構が存在せず空白となっている。次の被葬者のためにあけられたものであろうか。

次に層位、遺物、埋葬状況から埋葬順を考えてみる。遺物の出土がみられなかった主体部については、墓坑上端が削平されているため、新しい部類に入ると判断した。埋葬順は①第5・6・7主体部と土器棺墓。ほぼ中央部付近に位置する一群。②第3主体部。③墳頂部中央に位置する第1・2主体部。④焼土・炭を埋土とする土坑、の順が考えられよう。

(44) DD5号墳(第2図)

DD6号墳の北隣に位置し、東・西側を急崖な自然地形により形成されるが、北西側はDD4号墳西側に小支尾根が張り出しているため、徐々に尾根幅が広がっていく地点でもあり、比較的緩やかな自然地形をなしている。

① 墳丘(第19図)

尾根稜部を削り出し方形台を成形するが、削り出した墳頂部幅がかなり狭いため、東・西辺側にはかなり盛土が施されている。この盛土は、築造時の盛土と、墳頂部中央に位置する大型墓坑を造る際に墳頂部をかなり削平し斜面側に盛土しているので、2度にわたっ

ている。従って墳形も築造当初は長方形を呈しているが、後に削平により円形に近い楕円形を呈する。調査では、築造当初の基底部は確認できたが、削平後の基底部は部分的にしか確認することができなかった。考えられることは、墓壇のスペース分だけ削平し、墳頂部中央の平坦部面積を確保するために両側面に盛土したものと思われる。そのため長方形であったものが、中央部に盛土が施されたためふくらみ、楕円形状になったと考えられる。ここでは、築造当初の明らかになったことだけについてふれる。築造時の各辺基底部は、東・西辺は盛土と自然地形の接点それぞれにあたると思われる。南辺は、外部施設としてDD6号墳との間に、幅4m・深さ1mの尾根に直交する直線的な溝をもつ。北辺は、DD4号墳の溝により区画されるが、尾根を削り出し方形台に成形した時の墳丘の方向が本古墳と異なるため、本古墳の墳形はいびつである。つまり、2本の溝により区画されるが、墳丘を挟んで溝が「ハ」字型になっており、東辺よりも西辺が長くなっている。

② 埋葬施設

墳頂部中央付近から、南側溝肩付近にかけ6か所の墓壇を検出した。

第1主体部(図版第27. 2)

墳頂部中央に位置し、第2主体部と切り合い関係を有する。主軸は尾根に平行し、表土下20cmの盛土面より墓壇を穿つ。墓壇は、掘形・底面とも隅丸長方形を呈し、底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。木棺痕跡は認められず、遺物は有していなかった。

第2主体部(図版第27. 3)

墳頂部中央に位置し、削平後の中心主体部であり、第1主体部と切り合い関係を有するため、墓壇中央部分の一部を欠く。第1主体部に先行し、その主軸は尾根に直交する木棺墓である。墓壇掘形は、表土下30cmの盛土面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。棺は墓壇中央部におかれ、西端は掘形壁面に近接している。棺底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

棺内西端近くより棺上に置かれていたものが、木棺の腐朽に伴い落ち込んだと思われる6世紀初頭に比定される須恵器杯身・杯蓋(図版第48. 129.130)が1セット出土した。また、中央部底面からは切先を東に向ける鉄鏃2個体分が出土したが、1点は錆化が著しくほとんど原形を留めておらず1点しか図化(図版第52. 56)できなかった。

頭位方向は、鉄鏃の切先方向からすれば、西枕が考えられるが断定するには至らない。

第3主体部(図版第28. 1)

第1主体部の北側0.3mに位置し、その主軸を尾根に直交する墓壇である。墓壇掘形は、

表土下60cmの地山削平面より穿ち、掘形、底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。墓壇底面は南側½が平坦面を呈し、北側½は平坦面に対し45°の下方傾斜をもつ。この平坦面と下方傾斜した底面との比高差は15cmを測る。また、東側底面は二段に掘り込まれており、段差は10cmを測る。木棺痕跡が認められないため断定できないが、組合式木棺が使用されていた可能性も考えられる。遺物は有していなかった。頭位方向も決定づけられないため不明である。

第4主体部(図版第28. 2)

第1主体部の南側10cmの所に位置し、その主軸は尾根に直交し、第5主体部と切り合い関係をもつ木棺墓である。墓壇掘形は、表土下20cmの盛土面より穿ち、隅丸長方形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部に圧痕として確認した。棺は墓壇中央に置かれ、底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

副葬品として、棺内中央北壁寄り、切先を西に向けた鉄剣1(図版第54. 73)が出土した。土器類は有していなかった。頭位方向は、鉄剣の切先より考えて東枕と思われる。

第5主体部(図版第28. 3)

第4主体部の南側に位置し、北側は第4主体部と、南側は第6主体部と切り合い関係を有し、第4主体部に先行する墓壇である。墓壇は表土下45cmの地山削平面より穿つ。墓壇西端では、別の墓壇西端部分と思われる掘形も検出した。削平・埋葬がくり返し行われた際に本主体部と重なり合ったと思われる。墓壇は、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面はほぼ水平で、掘り込み側壁は「U」字型をなす。木棺の使用はなかったと考える。

内部埋土中より少量の土師器細片が出土した。頭位方向は不明である。

第6主体部(図版第28. 4)

墳丘頂部南端溝近くに位置し、第5主体部と墓壇北側が切り合い関係を有し、第5主体部に先行し、主軸を尾根に直交する墓壇である。墓壇掘形は、表土下50cmの地山削平面より穿ち、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。木棺痕跡は認められない。少量の土師器片が出土。頭位方向は不明である。

以上が各主体部の概要であるが、各主体部とも切り合い関係を有しており、埋葬・削平がそのつどくり返されたようで、墓壇掘形も浅いものや、深いものが存在している。また削平に伴い土器類も移動したようで、墳丘盛土中からはかなりの土師器片(図版第49. 131~141)が認められた。第2主体部の存在する墳頂部中央には、築造時の中心主体部が存在していたようで、地山削平面上から高杯1(図版第49. 142,143)が立位で出土した。墓前祭に係わる

ものであろうか。第3主体部北方には、遺構空白部分が存在するが、削平に伴い消滅しているのかも知れない。この削平は、第2主体部埋葬時に行われたものと思われる。

簡単に築造順をみると、①遺構は確認できなかったが第2主体部と同位置にあったと思われる墓壇と第6主体部。②第3・5主体部。③第4主体部。以上が初期築造時に埋葬された墓壇である。第2段階の埋葬が④第1・2主体部と考えられる。

(45) DD4号墳(第2図)

DD5号墳の北側に位置し、北西側は尾根が張り出すため比較的緩い傾斜となっているが、南東側は急崖な自然地形を呈する。

① 墳丘(第20図)

尾根根部全体を削り出し方形台に成形する。北辺基底は、DD19号墳築造時に一部削られているが、その時の削り出し面と本古墳の斜面との接点がそれにあたる。西辺は、尾根に張り出し部分があるため、削り出した際に比較的傾斜の緩やかな幅狭な平坦部が設けられている。東辺は、急崖な自然地形のため、削り出し面と自然地形の傾斜変換点が基底にあたる。南辺はDD5号墳との間に、尾根に直交する直線的な溝を設けているが、埋葬が行われるたびに墳丘が削平されたためか、溝中央部はほとんど残存しておらず両端のみ検出した。盛土は、尾根高位側で約20cm、北・西側斜面の一部では盛土により平坦部を造っている部分があり約70cmを確認した。

② 埋葬施設

墳頂部より6か所の墓壇と、墓壇と切り合い関係を有する土壇2か所を検出した。

第1主体部(図版第29.1)

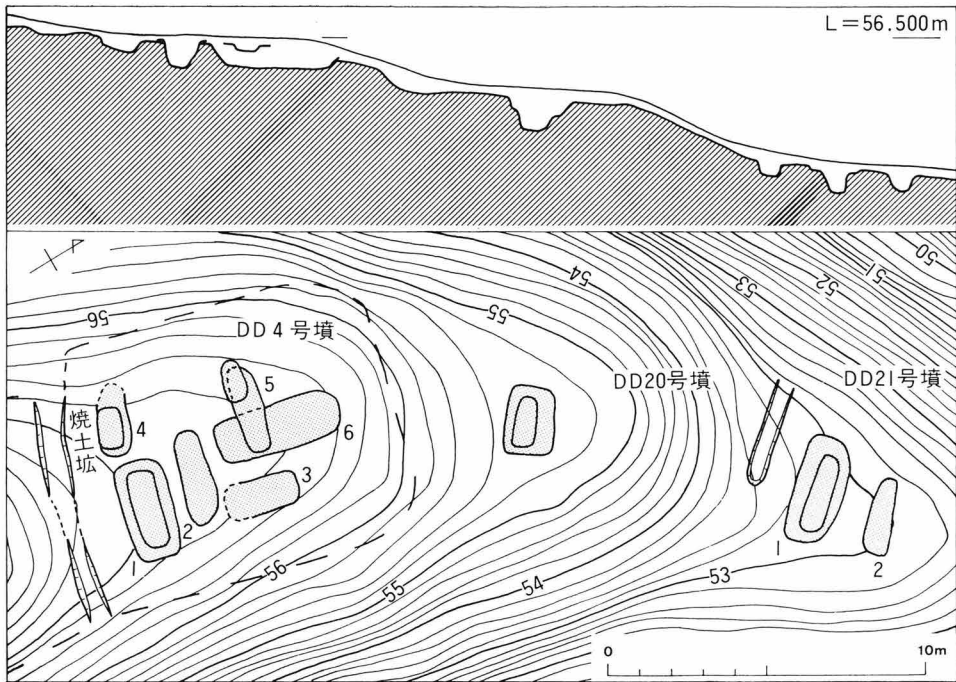
墳頂部中央よりもやや南寄りに位置し、主軸を尾根に直交する墓壇である。墓壇は、表土下20cmの盛土面より穿ち、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈する。底面は、西側が東側に比して10cm低くなっている。掘り込み側壁は「\」字形をなし、検出面での長さ2.86m・西幅0.84m・東幅1m・深さ0.75mを測る。木棺痕跡は認められなかったが、規模・形状からして箱形木棺が安置されていた可能性がある。

遺物は、墓壇中央より西寄りの底面から鈍1(図版第52.54)、土師器甕1個体分(図版第50.157-158)が散乱した状態で出土した。埋葬時に棺上に投棄されたものが、棺の腐朽に伴い底面近くまで達したものとも考えられる。

頭位方向は、墓壇幅の違い、底面の状態、遺物出土状況からして東枕が推察される。

第2主体部(図版第29.3)

第1主体部の南隣に位置し、その主軸を尾根に直交する木棺墓である。墓壇掘形は、地山削平面より穿つが、検出面から底面までの深さが20cmしかなく浅いものとなっている。



第20図 DD 4・20・21号墳地形図

埋葬がくり返し行われるたびに削平されたのか、当初からそのままなのか不明である。墓壇は、隅丸長方形の平面形を呈し、木棺は墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。棺は墓壇中央に置かれ、底面は東下がりの傾斜面をもち、側壁は「∟」字型をなす。木棺圧痕部が長方形を呈することや、木口穴がないことから箱形木棺の使用が考えられるが、掘形自体がかなり浅いため断定できない。遺物は有しておらず、頭位方向も不明である。

第3主体部(図版第29.4)

墳頂部中央よりもやや東辺寄りに位置する。墳丘断ち割り中に検出したため、掘形南側の一部を欠くが、第1主体部と切り合わないため、第1主体部北東角付近に掘形南端がくると思われる。主軸は尾根に直交する。墓壇は、表土下25cmの盛土面と地山削平面より穿ち、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈する。底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。遺物は有しておらず、頭位方向は墓壇底面の両端幅を比した場合、北枕の可能性はある。

第4主体部(図版第30.1)

第2主体部の西隣に位置し、主体部南側を土壇1と切り合い関係を有し、土壇1に先行する。土壇1に削平されたのか、墳丘斜面側に位置するため盛土とともに流失したのか墓壇西側を欠く。また、掘形自体も第2主体部同様浅くなっている。墓壇は、表土下15cm

の盛土面より穿ち、主軸は尾根に直交する。残存する部分から見れば、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「∟」字型をなすようである。規模は、掘形のほぼ $\frac{1}{2}$ が存在しないため正確に求めることはできないが、おおよそ長さ2.3m・幅1m程度の規模を有すると思われる。

残存する土坑内には遺物は有していなかったが、切り合い関係を有する土坑1の埋土中より、5世紀後半頃に比定される須恵器甕2(図版第50.166.167)、土師器高杯脚部片(図版第50.164)が出土した。この甕は、南隣の溝内からもその破片が出土しており、本来この第4主体部に埋納されていたものが、土坑掘削に伴い周辺に散乱したものと思われる。

頭位方向については不明である。

第5主体部(図版第30.2)

墳頂部中央よりやや北寄り、第1主体部の北方1.5mの所に位置し、主体部西側を土坑2と、中央より東側を第6主体部と切り合い関係をもち、その主軸は尾根に直交する。墓坑は、表土下25cmの盛土面より穿ち、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面は水平面を保ち、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。第2・4主体部同様、掘形は浅くなっている。

内部埋土中よりごく少量の土師器細片が出土した。頭位方向は不明である。

第6主体部(図版第30.3)

第1主体部の北隣りに位置し、第5主体部と切り合い関係を有するため、西側掘形の一部を削られている。第5主体部に先行し、その主軸は尾根に平行する。墓坑は、表土下0.3mの盛土面より穿ち、掘形・底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面はほぼ水平面を保ち、掘り込み側壁は「∟」字型をなす。検出面から底面まで0.8mを測ることや、墓坑自体も大きなものとなっているが木棺痕跡は認められなかった。木棺が使用されていた可能性は高いと考えられる。

遺物は、墓坑中央のやや南寄りで切先を南西に向けた鉄剣1(図版第54.74)と、北東壁付近より土師器甕片(図版第50.159.160)・器台(図版第50.163)を検出した。

頭位方向は、遺物の出土状況から判断すると、北枕の可能性はある。

土坑1・2(図版第30.1.2)

DD6号墳の第3主体部と切り合い関係を有する土坑と同じ形態を示すもので、土坑1・2ともその長軸方向を主体部長軸方向に平行する。ともに主体部と同レベルで検出したもので、内部埋土の様子もよく似ている。土坑1が隅丸長方形、土坑2がナスビ形の平面形を呈し、ほぼ同規模のものである。

内部埋土は3層からなり、最下層は炭層、上方2層は焼土、炭混りの層となるが、土坑

掘り込み側壁は焼けていない。

土塚1・2とも、土塚に伴う遺物の出土はみられなかったが、土塚1からは、土師器高杯脚部片・須恵器甕2が出土した。この遺物は、本来第4主体部に埋納されていたものが土塚掘削時に壊され周辺に散乱し、土塚を埋め戻す時に埋土中に混ざったものと思われる。

この土塚の性格・時期等については、まったく不明である。

検出された遺構の築造順を簡単にみると、①中央に位置する第1・3・6主体部、②第2主体部、③土塚と切り合い関係を有する第4・5主体部、④焼土・炭を埋土とする土塚1・2、と4段階にわたって利用されたと思われる。埋葬が行われるたびに、墳丘の部分的な削平が行われたようで、墳頂全体にわたって土師器の散乱が認められた。

(46) DD20号墳(第2図)

DD19号墳から緩やかな傾斜でのびてきた尾根が、本古墳を境に比較的急傾斜で下方へのびていく地点、また、北方へと伸びてきた尾根が北西へとその方向を転じる位置でもある。尾根稜部面積も本古墳を境としてしだいに狭くなっていく。北東・北西側の尾根両側面は急崖な自然地形により形成される。

① 墳丘(第20図)

丘陵背稜部を削り出し平坦部に成形するが、DD4号墳と墳丘裾を接して築造されているため、その墳丘裾を一部削っている。

緩傾斜でのびてきた尾根の先端、側面の急崖な自然地形が稜部にまで迫ってきており、DD4号墳よりも後に築造された関係上、稜部面積が少なく、古墳築造には地形的にかなり制約を受けている。そのため、墳形は自然地形を最大限に利用し築造を行ったようで、方形、長方形の区画がとれず、尾根低位側の墳丘北・東角がなく自然地形状をなしており、舌状または砲弾形状の平面形を呈する。隣接するDD4号墳との比高差は1.4mを測るが、両古墳を区画するような溝は設けられておらず、本古墳削り出し平坦部と、DD4号墳の墳丘傾斜とがその接点にあたる。南東・北西側基底部のDD4号墳側のみは、削り出し面と自然地形の傾斜変換点により一部それをうかがうことができたが、墳丘中央より北西側、尾根先端側に向かっては、まったくの自然地形状を呈していた。なお、北東側下方に位置するDD21号墳が、本古墳と区画するため溝が設けられていることからすれば、この溝付近が本古墳の北東側基底部に相当するとも考えられる。

このようなことから、本古墳の規模をみると、尾根高位側のDD4号墳近くでの幅9m、舌状・砲弾形状を呈する尾根長軸方向のDD21号墳の溝まで10.5m、DD21号墳溝検出面からの高さ2.2mを測る。盛土は約35cmを確認した。

② 埋葬施設

削り出した平坦部では中央、墳丘全体では中央よりやや南西側にあたる部分より、木棺墓1か所を検出した。

墓壇は、その主軸を尾根に直交し、表土下35cmの地山削平面より穿つが、一部南東側は自然地形の凹凸を盛土した面より穿たれ、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。木棺は墓壇中央よりやや南西側に置かれ、底面は南西下がりな面をもち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物は有しておらず、頭位方向も不明である。なお、本古墳からの出土は、墳丘南東側盛土中より土師器甕底部1(図版第50. 161)が出土したのみである。

(47) DD21号墳(第2図)

DD20号墳の下方に位置し、DD20号墳に比して尾根稜部面積が広がる。尾根両側面は急崖な自然地形を呈する。

① 墳丘(第20図)

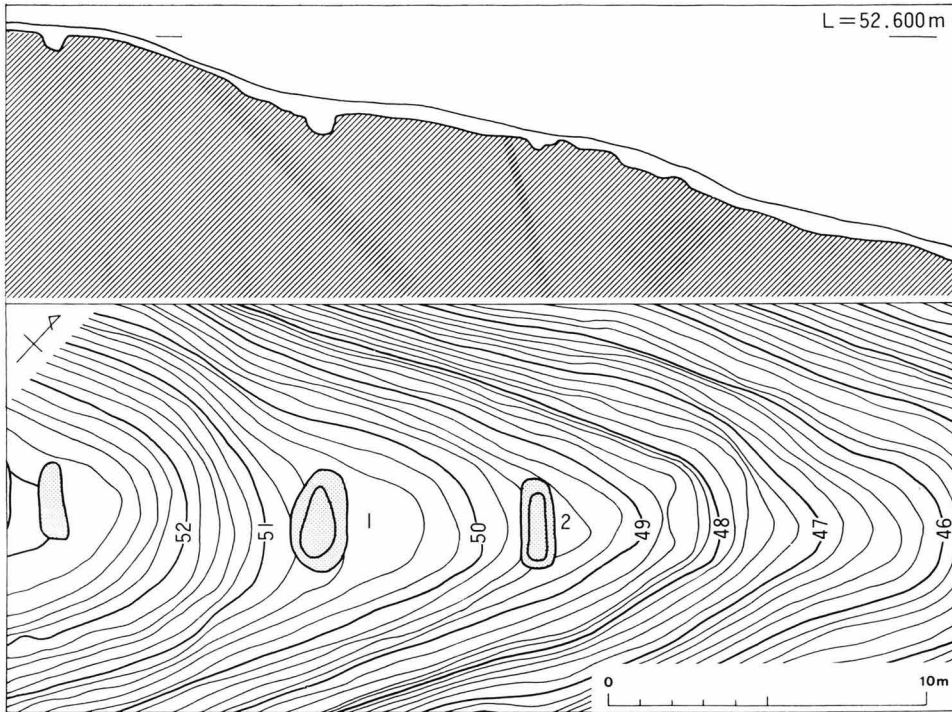
尾根脊梁部を削り出し平坦部に成形するが、DD20号墳同様、地形的な制約の中で築造を行っているため、墳丘北、東角が自然地形形状をなしており、舌状・砲弾形状の平面形を呈する。下方のDD22号墳との比高差2mをもち、DD20～22号墳までは同様の形態をしており、階段状地形をなすため各古墳の区画は判然としている。尾根高位側の削り出し平坦部端には直線的な溝をもつが、この溝は尾根に直交はするが、尾根を縦断せず墳丘中央で終る特異な形を呈する。検出面での溝は幅70cm・深さ50cmを測り、長さ3.5mを確認した。北西・南東側基底部は、墳丘中央付近よりDD20号墳側のみ、削り出し面と自然地形の傾斜変換点によりその差が認められたが、尾根先端側ではその差がみられずほとんど自然地形化していた。北東側基底部は、尾根中央部付近のみ傾斜の比較的緩やかな平坦部が設けられており、それにより区画するものと思われる。

以上のことから規模を求めると、尾根高位側の削り出し幅7m、溝より舌状・砲弾形状を呈する尾根長軸方向の傾斜の緩やかな平坦部まで10.5m、この平坦部からの高さ2.2mを測る。

② 埋葬施設

削り出し平坦部では中央、墳丘全体では南西寄りで平行する2か所の墓壇を検出した。第1主体部(図版第31. a)

本古墳の中心主体部で溝寄りに位置し、その主軸を尾根に直交する木棺墓である。墓壇は、表土下25mの地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部で圧痕として確認した。棺は、墓壇中央よりやや北東寄りに置かれ、棺底面は水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。



第21図 DD22号墳地形図

遺物は有していなかった。頭位方向は、棺幅の違いからみれば南東枕と考えられよう。

第2主体部(図版第31.4)

墳頂部中央、第1主体部の北東1mの所に位置し、第1主体部と平行して並び、その主軸を尾根に直交する墓壇である。墓壇は、地山削平面より穿ち、掘形底面とも隅丸長方形の平面形を呈し、底面はほぼ水平、掘り込み側壁は「\」字型をなす。木棺痕跡を認めない。

遺物は、墓壇内埋土中より少量の土師器片を出土した。頭位方向は、墓壇幅からみた場合北西枕となり、第1主体部の頭位と相反する。

主体部内からは、ほとんど遺物は出土しなかったが、墳丘中央部の溝掘形始まり部分より土師器高杯脚部1(図版第50.162)が出土している。

(48) DD22号墳(第2図)

DD21号墳の下方にあり、本古墳よりDD23号墳までは稜部面積が狭くなり、尾根両側面の急崖な自然地形が稜部まで迫ってきている。

① 墳丘(第21図)

尾根脊梁部を削り出し平坦部に成形する。自然地形の制約の中で築造されているため、

DD20・21号墳同様、墳形は舌状・砲弾形状をなしている。本古墳では2か所の主体部が認められ、その主体部間が5.5mも離れており、その中間が空白となっており、2基の古墳が近接して築かれている可能性も考えられた。2基として考えるには明確な区画を有していなかったため1基としてとらえているが、両主体部の中央がわずかに傾斜しており、DD20・21号墳でみる限り削り出し平坦面に主体部が設けられているため、これが両主体部の区画としてとらえられるものかも知れないが、断定するには至らなかった。1基としてとらえた場合、南西側削り出し幅8m、長軸方向12m、尾根中央付近のみを削り出し平坦部を設けていた北東辺基底部からの高さ2.6mの規模を測り、盛土は0.5m確認した。

② 埋葬施設

南西辺・北東辺で1か所ずつの計2か所の木棺墓を確認した。

第1主体部(図版第32.2)

墳頂部南西端に位置し、その主軸は尾根に直交する。墓壇は、地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部に圧痕として確認した。棺は、墓壇中央部に置かれ、底面は水平面を保ち、側壁は「∪」字型をなすが、墓壇掘形に対し木棺痕跡はかなりいびつな平面形をなしている。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物は、棺内北西側の南西壁底面より鉄剣片(図版第54.76)と思われるものと、墓壇埋土中より少量の土師器片が出土した。

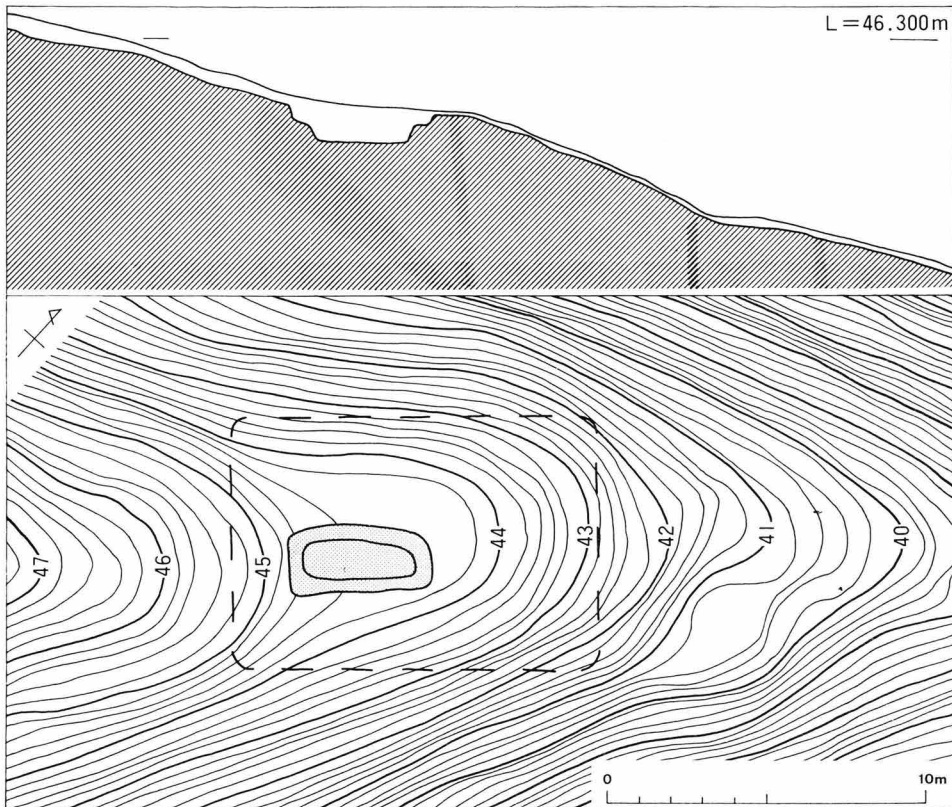
頭位方向は、棺幅の違いからみれば南東枕が考えられる。

また、墓壇・棺内ともほとんど遺物が検出されなかったのに対し、墓壇検出面上の盛土中からは、多量の土師器高杯・器台・甕片(図版第50.168~194)が出土した。その多くは表土直下で認められたもので、墓前祭祀で使用されたものであろうか。

第2主体部(図版第32.3)

墳頂部北東側肩部付近に位置し、その主軸は尾根に直交する。墓壇掘形は、地山削平面において検出したが、築造当初は盛土中より穿っていたと思われるが、盛土が流失しており、北東側掘形は南西側に比してかなり浅くなっている。墓壇平面は隅丸長方形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部に圧痕として確認した。棺は墓壇中央に置かれ、棺底面近くのみ墓壇掘形より一段掘り込まれており、この掘り込み部分は全体にわたっており、TK Iの第2主体部とその状態がよく似ている。この一段掘り下げを行った部分と棺幅とは一致し、TK Iの第2主体部のように、木棺幅より大きく掘り広げていない。棺長2.2m・北西幅0.56m・南東幅0.68m、検出面からの深さ0.32mを測り、棺底面はほぼ水平で、側壁は「∪」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

遺物は、墓壇埋土中より少量の土師器片が出土した。頭位方向は、棺幅の違いからみた



第22図 DD23号墳地形図

場合、南東枕の可能性はある。

(49) DD23号墳(第2図)

DD22号墳より下方14.5mの位置にあり、階段状地形の終りの部分にあたる。DD22号墳と本古墳間は、尾根稜部面積もほとんどなく比較的急傾斜の地形を呈するため、DD19号墳から順に墳丘裾を接するように畚々と構築されてきた古墳も、この部分だけ空白となっている。同様に、本古墳より先端にかけては、稜部面積はさらに狭くなるため、これより下方では古墳の存在は認められなかった。尾根両側面は、急崖な自然地形を呈する。

① 墳丘(第22図)

尾根脊梁部を削り出し方形台に成形する。尾根稜部面積が狭いことから、墳形は細長い長方形を呈する。基底部は各辺とも削り出し面と、自然地形の傾斜変換点により認められるが、北・東角は地形的な関係上丸くなるようである。溝等の外部施設は有していない。規模は、長辺11.5m・短辺8m、北東辺からの高さ1.7mを測る。盛土は約35cm確認した。

② 埋葬施設(図版第33.2)

墳頂部中央よりやや南西寄り、主軸を尾根に直交する木棺墓1か所を確認した。墓坑

付表2 調査成果一覧表

名称	外形・規模	外部施設	埋葬主体	遺物の出土状況	備考
T T 1号墳	<ul style="list-style-type: none"> 丘陵頂部 円形 直径14.5m 高さ1.3m 	<ul style="list-style-type: none"> 墳頂部中央に中世墓と考えられる径0.35mの土坑あり。 墳頂部中央よりやや北側に土器墓あり。 	<ul style="list-style-type: none"> 並行して並ぶ3か所の主体部を確認。 第1主体部 長さ6.4m×幅2.8m・深さ0.1m。 第2主体部 長さ1.56m×幅0.7m・深さ0.17m。 第3主体部 長さ1.9m×幅0.6m・深さ0.06m。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1主体部棺内中央部より仿製小形内行花文鏡1・鉄剣1。 第2主体部内より鈍5・平根式鉄鏃2。 第3主体部内より鉄刀1。 土器棺墓は丸底壺。蓋になる土器なし。 中世墓竈内に土師製筒形容器が安置され内部より銅製鈴様のものと銅板が副葬される。 	<ul style="list-style-type: none"> 中世墓等後世の削平を部分的に受けており主体部は基底部のみ確認した。
T T 3号墳	<ul style="list-style-type: none"> 丘陵稜 方形 長辺11.5m×短辺9.5m・高さ1.0m 		<ul style="list-style-type: none"> 墳頂部中央で主体部1基確認。 木棺直葬。長さ3.2m×幅1.55m・深さ0.5m。 	<ul style="list-style-type: none"> 棺内北西端付近より鈍1? 	
T T 4号墳	<ul style="list-style-type: none"> 丘陵稜 方形 長辺14m×短辺13.5m・高さ1.8m 	<ul style="list-style-type: none"> 墳丘北西側に溝をもつ。幅0.8m・深さ0.4m 	<ul style="list-style-type: none"> 墳頂部において2主体部確認。 第1主体部(木棺直葬) 長さ3.75m×幅1.65m・深さ0.45m。墓竈は北東側が南西側に比べ狭くタマゴ形を呈する。 第2主体部 長さ1.55m×幅0.6m・深さ0.1m。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1主体部墓竈土中より若干の土師器細片。 第2主体部内より土師器壺1。 第1・2主体部付近の表土直下に土師器壺・甕・高杯・器台片が散乱。 第1主体部の北東側において須恵器蓋・高台付杯・杯身・長頸壺・平瓶片が散乱。 溝内北東端より土師器大型甕口縁1。 	<ul style="list-style-type: none"> 須恵器は8世紀頃に比定されるもので奈良時代において火葬または墓前祭が行われたものか。そのため墳丘北東側はかなりの削平を受けている。
T T 5号墳	<ul style="list-style-type: none"> 丘陵稜 方形 長辺11m×短辺10m・高さ0.8m 	<ul style="list-style-type: none"> 墳丘北西側に溝をもつ。幅0.9m・深さ0.2m。 北西端において火葬墓検出。長さ1.6m×幅0.7m・深さ0.2m。 	<ul style="list-style-type: none"> 墳頂部中央で主体部1基確認。 木棺直葬。長さ3.35m×幅1.55m・深さ0.5m。 	<ul style="list-style-type: none"> 主体部内より土師器高杯脚・器台脚・壺片・台付壺脚片。 火葬墓中央より長さ0.23m×0.18mの河原石1。人骨片。 主体部掘形上面の表土直下より多量の土師器片(器台・高杯・壺)。 墳丘北東辺基底部より土師器壺片。 	<ul style="list-style-type: none"> 火葬墓を造るとき墳丘北西側を削平したため溝が浅くなっている。
S G 1号墳	<ul style="list-style-type: none"> 丘陵頂部 方形 長辺12.5m×短辺9.5m 		<ul style="list-style-type: none"> 墳丘中央で主体部2基確認。 第1主体部 長さ3m×幅1.4m・深さ0.3m。 第2主体部 長さ2.2m×0.9m・深さ0.3m。 	<ul style="list-style-type: none"> 木棺痕跡は認められず。 	
S G 8号墳	<ul style="list-style-type: none"> 丘陵頂 方形 長辺10.5m×短辺7.5m・高さ3m 		<ul style="list-style-type: none"> 墳頂部中央で主体部1基確認。 木棺直葬。 2段墓竈主体部。長さ2.6m×幅0.9m・深さ0.1m。 		

名称	外形・規模	外部施設	埋葬主体	遺物の出土状況	備考
S G 10号墳	◦丘陵稜 ◦方形 ◦1辺11～12m ◦高さ4m		◦墳頂部中央で主体部1 基確認。 ◦木棺直葬。 ◦長さ4.1m×幅南側木 口部1.7m・北側木口部 1.1m・深さ40cm。	◦墓底より鉄製鋤先1。	◦墓底の南端 部は後世の 攪乱墳によ り削られて いる。
S G 18号墳	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦長辺12m×短 辺9m・高さ 0.7m		◦墳頂部中央で主体部1 基確認。 ◦長さ2.8m×幅0.8m・ 深さ0.1m。	◦墳丘南西辺基部より 須恵器壺片を確認した。	◦上部削平が 著しいため 主体部基底 のみ確認。
S G 22号墳	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦長辺14m×短 辺11m・高さ 2.7m		◦墳頂部中央で主体部1 基確認。 ◦木棺直葬。長さ5.1m ×幅1.4m・深さ0.6m。	◦墳頂部中央付近盛土中 より縄文時代後期頃に 比定される石鏃1。8 世紀頃の高台付杯が出 土した。	
MY 7号墳	◦丘陵稜 ◦方形 ◦基底部が明確 でない。 ◦推定長辺14m ×短辺12m・ 高さ1m		◦墳頂部中央で主体部1 基確認。 ◦木棺直葬。一部2段墓 底。 ◦長さ5.72m×幅1.66m ・深さ52cm。		
TD 1号墳	◦丘陵稜 ◦隅丸方形 ◦基底部が明確 でない。 ◦推定1辺14m ・高さ1m		◦墳頂部中央で主体部1 基確認。 ◦木棺直葬（2段墓底か ？） ◦長さ5.7m×幅1.82m・ 深さ29cm。		
TD 2号墳	◦丘陵稜 ◦隅丸方形 ◦長辺20m×短 辺10m・高さ 3m		◦墳頂部中央で主体部3 基確認。 ◦第1主体部(木棺直葬) 長さ2m×幅0.75m・ 深さ25cm。 ◦第2主体部(木棺直葬) 長さ4m×幅1.2m・深 さ50cm。 ◦第3主体部(木棺直葬) 長さ3m×幅1m・深さ 60cm。	◦墓底東端埋土中より土 師器高杯頸部片1	
TD 3号墳	◦丘陵稜 ◦方形 ◦長辺12m×短 辺8.5m・高さ 0.7m	◦第1主体部南 西側において 土器棺墓確認	◦墳頂部中央で主体部3 基確認。 ◦第1主体部（木棺直葬 ？）長さ4.4m×幅1.8 m・深さ0.4m。 ◦第2主体部 長さ3.3m×幅1m・深 さ0.22m。第1主体部 と切り合い関係をもつ。 ◦第3主体部 長さ1.9m×幅0.7m・ 深さ0.15m。	◦第1主体部掘形上面よ り土師器甕片・高杯片。 ◦第2主体部内より土師 器長頸壺1 ◦第3主体部内より土師 器甕片。 ◦土器棺は土師器甕で、 底部穿孔する。蓋とな る土器はなし。	◦埋葬が行わ れるたびに 墳頂部が削 平されたよ うで土師器 片が墳頂部 全体に散乱 する。
TD 4号墳	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦長辺11.5m× 短辺10.5m・ 高さ1.1m		◦削平を受けたため主体 部等は存在しない。	◦墳丘北西辺基部付近 より須恵器蓋片出土。	
TD 7号墳	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦長辺20m×短 辺15m・高さ 1m		◦墳丘全体が開墾を受け、 また墳丘南側1/2は開 墾時に削りとられている ため主体部等は検出 されなかった。		

名称	外形・規模	外部施設	埋葬主体	遺物の出土状況	備考
TD 1地点	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦一辺10m・高さ1.2m		◦同位置にほぼ同規模の重なり合った2つの墓塚を確認。 ◦第1主体部(木棺直葬)長さ6.2m×幅3.0m・深さ0.5m。 ◦第2主体部(木棺直葬)長さ6.0m×幅2.6m・深さ0.5m。	◦第1主体部内西南側墓塚埋土中より土師器器台1。	◦城跡に關係するような遺構・遺物は認められなかった。
TD 11号墳	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦長辺19m×短辺13m・高さ2.0m	◦墳丘南西側に溝をもつ。幅さ1.5m・深さ0.45m	◦墳丘全体が開墾を受け、畝跡をよく残し、また墳丘北東側は開墾時に段々畑とされたため、主体部等は検出されなかった。	◦溝中央底面より鎌1・鎌に付着した管玉1・盃1・壺1。盃はTD-18号墳主体部内出土のものと同酷似。墓前祭で使用されたものが落ち込んだものか？	
TD 16号墳	◦丘陵先端 ◦方形 ◦重機により墳丘1/2を削平される。復元一辺8.5m×高さ1.3m		◦墳頂部中央で主体部1基確認。重機により墓塚北東側の一部が削平されている。復元長さ2.5m×幅1m・深さ0.1m。	◦主体部中央より鉄剣1。◦墳丘南西辺基底部付近より土師器細片。	◦墳丘全体が開墾を受けており、墓塚基底部のみ確認した。
TD 17号墳	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦北辺14.5m・南辺12.7m×短辺9m・高さ1.7m	◦墳丘北東側・南西側に溝をもつ。北東側溝幅1.2m・深さ0.5m、南西側溝幅1.3m・深さ0.6m。	◦墳頂部中央で主体部3基確認。 ◦第1主体部(木棺直葬)長さ3.2m×幅0.1m・深さ0.25m。 ◦第2主体部長さ3.8m×幅1.0m・深さ0.5m。 ◦第1主体部と切り合い関係をもつ。 ◦第3主体部(木棺直葬)長さ4.7m×幅1.9m・深さ0.5m。	◦第2主体部内底面付近より土師器器台付壺脚片1?・獸帯鏡片1。 ◦第3主体部棺内底面より素文縁帯四乳鏡1。 ◦墳丘盛土中より開墾時に破壊された土師器細片。 ◦北東側溝中より少量の土師器甕片。	◦墳丘及び斜面とも開墾を受けており、畝跡をよく残している。
TD 18号墳	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦長辺9.5m×短辺8.5m・高さ0.9m。	◦墳丘北東辺はTD-11・南西辺は、TD-17の溝により区画される。 ◦西側斜面上に土器棺墓あり。	◦墳頂部中央で主体部1基確認。木棺直葬。長さ3.7m×幅1.9m・深さ0.5m。	◦主体部内棺上より土師器器台4・高杯1・盃1。	◦開墾による畝跡をよく残し、マウンドをほとんどたない。
RD 2号墳	◦丘陵頂 ◦方形 ◦長辺12m×短辺10.5m・高さ1m		◦墳頂部で主体部3基確認。 ◦第1主体部(木棺直葬) ◦第2主体部(木棺直葬) ◦第3主体部(木棺直葬)	◦第3主体部棺底から鉄製鍬1・墓塚掘形内に土師器甕1。	
RD 9号墳	◦丘陵頂 ◦方形 ◦1辺12m・高さ3m	◦墳丘東南に溝	◦墳頂部で主体部1基確認。 ◦木棺直葬。 ◦2段墓塚主体部、長さ2.9m×幅0.8m・深さ0.8m。	◦棺上に土師器器台1。◦棺底に鉄剣1・鉄鎌2。◦溝中に磨製石斧1・土師器器台付甕・甕・高杯。	
RD 10号墳	◦丘陵頂 ◦隅丸方形 ◦1辺9~10m・高さ1m	◦墳丘の西に溝	◦墳頂部に主体部1基確認。	◦溝中から磨製石斧1。	

名称	外形・規模	外部施設	埋葬主体	遺物の出土状況	備考
R D 3号墳	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦長辺10.5m× 短辺10m・高 さ1.6m		◦墳頂部中央で並行して 並ぶ主体部3基を確認。 ◦第1主体部(木棺直葬) 長さ3.9m×幅1.6m・ 深さ0.2m。 ◦第2主体部 長さ1.7m×幅0.6m・ 深さ0.26m。 ◦第3主体部 長さ1.2m×幅0.5m・ 深さ0.2m。	◦第2主体部内より鉄剣 1・刀子1。 ◦第3主体部内より鉄鍬 13。	
R D 4号墳	◦丘陵頂部 ◦方形 ◦一辺12m・高 さ1m	◦墳丘南東側に 溝をもつ。幅 2m・深さ0.5 m	◦墳頂部で不規則に並ぶ 主体部3基を確認。 ◦第1主体部 長さ1.5m×幅0.85m・ 深さ0.12m。 ◦第2主体部 長さ1.7m・幅0.85m・ 深さ0.08m。 ◦第3主体部 長さ1.0m×幅0.5m・ 深さ0.1m。		◦墳頂部は削 平を受けて おり、墓坑 基底部のみ 確認した。
R D 5号墳	◦丘陵稜 ◦方形 ◦長辺14m×短 辺13m・高さ 1.6m		◦墳頂部に主体部1基・ 土坑1基確認。 ◦第1主体部(木棺直葬) 組合式木棺。	◦土坑(第2主体部)内に 土師器壺1。 ◦溝中より高杯2・壺4 ・器台4。	
R D 6号墳	◦丘陵頂 ◦方形 ◦長辺11.5m× 短辺8.5m・ 高さ1m		◦墳頂中央部西側に主体 部1基確認(木棺直葬) 長さ5m×幅2.1m・深 さ0.6m。	◦墳丘西斜面で高台付杯。 ◦主体部内より鋤先1。	
R D 7号墳	◦丘陵頂 ◦方形 ◦長辺9m×短 辺7.5m・高 さ1m		◦墳丘上に主体部2基確 認。 ◦第1主体部(木棺直葬) 長さ1.7m×幅0.6m・ 深さ0.3m。 ◦第2主体部 長さ2.7m×幅0.9m・ 深さ0.25m。	◦第1主体部に鉄剣1。	
R D 11号墳	◦丘陵上 ◦方形 ◦復元1辺12m		◦墳頂部で主体部1基・ 墳丘南西側に主体部1 基確認。 ◦第1主体部(木棺直葬) 規模不明。 ◦第2主体部(木棺直葬) 長さ5.7m×幅1.8m・ 深さ0.57m。	◦第1主体部に堅櫛・針 状鉄製品。 ◦第2主体部に鉄刀2・ 刀子・針状鉄製品・堅 櫛。	
R D 12号墳	◦丘陵稜と斜面 ◦方形 ◦長辺10m×幅 9m・高さ1.4 m	◦丘陵高位側に 溝	◦墳頂部中央に主体部1 基確認。(木棺直葬) 長さ2.9m×幅1.45m・ 深さ0.46m。	◦棺から須恵器杯蓋2・ 溝中から須恵器1。	
R D 13号墳	◦丘陵頂 ◦方形 ◦長辺14.5m× 短辺11.5m・ 高さ1m	◦墳丘南西に溝	◦墳頂部中央に主体部1 基確認。 長さ4.7m×幅2.2m・ 高さ0.57m。	◦棺内より鉄刀1・鉄斧 3・刀子1・鉄鍬16・ 鉋2・堅櫛4。	
D D 1号墳	◦丘陵稜 ◦方形 ◦1辺8m・高 さ1m	◦墳丘西側に溝	◦墳頂部中央に主体部4 基確認。 ◦第1主体部(木棺直葬) 長さ2.1m×幅0.7m・ 深さ0.1m。 ◦第2主体部 長さ1.3m×幅0.4m・ 深さ0.15m。 ◦第3主体部 長さ1.2m×幅0.3m・ 深さ0.1m。 ◦第4主体部 長さ1.6m×幅0.7m・ 深さ0.15m。	◦墳丘南斜面から土師器 壺1。	

名称	外形・規模	外部施設	埋葬主体	遺物の出土状況	備考
DD 13号墳	○丘陵端 ○円形 ○直径11m・高さ2m	○墳丘北東側に溝をもつ。幅さ0.8m・深さ0.3m	○墳頂部中央よりやや北東側で主体部1基確認。 ○木棺直葬。長さ3.3m×幅1.0m・深さ0.4m	○主体部内中央底面より刀子1。 ○墳丘西斜面より須恵器器台脚部片1。	
DD 14号墳	○丘陵稜 ○方形 ○長辺10m×短辺7.5m・高さ0.6m		○墳頂部中央において一部重なり合う主体部2基を確認。 ○第1主体部 長さ3.4m×幅1.3m・深さ0.34m ○第2主体部(木棺直葬) 長さ2.2m×幅0.76m・深さ0.22m	○第2主体部東側棺上部分に人頭大の河原石1あり。	○墳丘1/2は道により削平を受けている。
DD 17号墳	○丘陵端 ○方形 ○長辺10m×短辺7.5m・高さ1.6m	○墳頂部に土器を埋納した中世墓あり。長径0.75m・短径0.6m・深さ0.16m		○埋納されている蔵骨器は瓦質陶器甕・蓋となる土器類はなし。内部より少量の火葬骨片。	○中世墓を造る時墳丘を削平したため墓壇は存在せず。
DD 18号墳	○丘陵端 ○方形 ○長辺11.5m×短辺8m・高さ1.4m	○丘陵南西側に溝をもつ。幅さ1.3m・深さ0.5m	○墳頂部中央で主体部1基確認。 ○木棺直葬。長さ2.6m×幅1.3m・深さ0.35m	○溝内より須恵器杯身・杯蓋1。	
DD 19号墳	○丘陵稜 ○方形 ○長辺12.5m×短辺7m・高さ1.7m				○削平により主体部存在せず。
DD 7号墳	○丘陵稜 ○方形 ○長辺12m×短辺7m・高さ1.0m	○墳丘南東側に溝をもつ。幅さ1.5m・深さ0.5m	○墳頂部で2基の主体部と2基以上の墓壇が切り合った土壇の一群を確認したが明確にわかるのは2か所のみである。 ○第1主体部 長さ1.2m×幅0.65m・深さ0.3m。 ○第2主体部 長さ3.0m×幅0.6m・深さ0.2m。 ○第3主体部 長さ1.15m×幅0.75m・深さ0.3m。 ○第4主体部 長さ2.1m×幅0.6m・深さ0.2m。	○第2主体部内より土師器小形壺1。	○第3・4主体部が属する墓壇一群は、墓壇が造られるたびに削平がくり返されたようで掘形がかかなくなり浅くなっている。
DD 6号墳	○丘陵稜 ○方形 ○長辺13m×短辺7.5m・高さ1.6m	○墳丘南東側に溝をもつ。幅さ1.4m・深さ0.3m。 ○墳頂部南東側に土器棺墓あり(底部穿孔あり土師器脚部を蓋として利用)	○墳頂部全域で6基の主体部と1か所の土壇を確認した。 ○第1主体部(木棺直葬) 長さ1.7m×幅1.0m・深さ0.22m ○第2主体部(木棺直葬) 復元長さ2.3m×幅1.3m・深さ0.25m ○第3主体部(木棺直葬) 長さ2.8m×幅1.4m・深さ0.32m。 墓壇北東端部分で土壇と切り合い関係をもつ。	○第5主体部南壁底面より土師器甕片。 ○第6主体部棺上北端より土師器器台1・甕1。 ○第7主体部棺内中央より土師器器台片3。 ○溝内中央よりやや西寄り甕1。底面より土師器器台1。 ○表土直下で、墳頂部中央を中心にかなりの土師器片の散乱が認められた。	

名称	外形・規模	外部施設	埋葬主体	遺物の出土状況	備考
			<ul style="list-style-type: none"> ○第5主体部 長さ2.3m×幅1.04m・ 深さ0.25m。 ○第6主体部(木棺直葬) 長さ3.4m×幅1.7m・ 深さ0.8m。第1主体部 と切り合い関係をもつ。 ○第7主体部(木棺直葬) 長さ2.3m×幅1.1m・ 深さ0.3m。 ○土壇長さ1.3m×幅0.7 m・深さ0.36m。 		
DD 5号墳	<ul style="list-style-type: none"> ○丘陵稜 方形 ○長辺10.5m× 短辺9m・高 さ2.0m 	<ul style="list-style-type: none"> ○墳丘南側に溝 をもつ。幅2 m・深さ0.5m 	<ul style="list-style-type: none"> ○墳頂部全域で主体部6 基を確認。 ○第1主体部 長さ2.5m×幅1.0m・ 深さ0.25m。 ○第2主体部(木棺直葬) 長さ5m×幅1.15m・深 さ0.5m。第1主体部 と切り合い関係をもつ。 ○第3主体部 長さ2.2m×幅1.1m・ 深さ1.0m。 ○第4主体部(木棺直葬) 長さ3.1m×幅1.2m・ 深さ0.35m。 ○第5主体部 長さ3.2m×幅(復元) 0.9m・深さ0.5m。第 4主体部と切り合い関 係をもつ。 ○第6主体部 長さ2.8m×幅(復元) 0.9m・深さ0.14m。 	<ul style="list-style-type: none"> ○第2主体部棺内中央よ り平根式鉄鏃約2個体 分・棺西端より須恵器 杯身1・杯蓋1。 ○第4主体部棺内中央北 壁側より鉄剣1。 ○墳頂部盛土中より、土 師器高杯・器台・甕・ 小型丸底壺等の散乱が 認められた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○埋葬が行わ れるたびに 削平・盛土 とくり返した ようである が、副主体 部の部分的 には墳丘上 の残ったも ののほとんど は散逸した ものと思わ れる。
DD 4号墳	<ul style="list-style-type: none"> ○丘陵稜 方形 ○長辺10.5m× 短辺9m・高 さ1.8m 	<ul style="list-style-type: none"> ○墳丘南側に溝 をもつが中央 部分は削平に よりほとんど 存在せず。幅 0.5m 	<ul style="list-style-type: none"> ○墳頂部で主体部7基と 土壇1か所を確認。 ○第1主体部(木棺直葬) 長さ2.86m×幅1.0m・ 深さ0.75m。 ○第2主体部(木棺直葬) 長さ3.2m×幅1.6m・ 深さ0.2m。 ○第3主体部 長さ(復元)2.5m×幅 1.1m・深さ0.56m。 ○第4主体部 長さ1.35m×幅0.8m・ 深さ0.4m。 ○第5主体部 長さ?m×幅1.0m・深 さ0.1m。第4主体部 と切り合い関係をもつ。 ○第6主体部 長さ2.8m×幅0.9m・ 深さ0.15m。 土壇と切り合い関係 をもつ。 ○第7主体部(木棺直葬) 長さ4.0m×幅1.4m・ 深さ0.8m。第6主体部 と切り合い関係をもつ。 ○土壇長さ1.34m×幅 0.8m・深さ0.26m。 内部に焼土。炭がつま る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○第1主体部内より土師 器甕片・鉈1。 ○第2主体部内より土師 器細片。 ○第4主体部内より土師 器片・高杯頸部1。 ○第5主体部内より甕片。 ○第6主体部内より土師 器細片。 ○第7主体部内より鉄剣 1・不明鉄器1・土師 器。 ○溝内より甕片。この甕 片は第5主体部出土の 甕片と同一。第4主体 部埋葬時に第5主体部 を削平しているため、 その時遺物がいっしょ に溝中にはまったも と考えられる。 ○墳頂部全域の盛土中よ り土師器片。 	<ul style="list-style-type: none"> ○埋葬が行わ れるたびに 墳頂部の削 平がくり返 されたよう で、第2・ 5・6主体 部は墓壇掘 形が浅くな っている。

名称	外形・規模	外部施設	埋葬主体	遺物の出土状況	備考
DD 20号墳	○丘陵稜 ○砲弾形 ○長軸方向10.5 m・削り出し 幅9m・高さ 2.2m		○墳頂部中央で主体部1 基確認。木棺直葬。長 さ2.15m×幅1.55m・ 深さ0.7m。	○墳丘頂部南東側より土 師器甕底部1。	○墳丘の高さ はDD-21号 墳溝上面か らの高さで ある。
DD 21号墳	○丘陵稜 ○砲弾形 ○長軸方向10.5 m・削り出し 幅7m・高さ 2m	○墳丘南西側に 北西から墳丘 中央までだけ 延びた溝をも つ。幅0.6m・ 深さ0.5m	○墳頂部中央で並行する 主体部2基確認。 ○第1主体部(木棺直葬) 長さ3.4m×幅1.64m・ 深さ0.75m ○第2主体部 長さ2.4m×幅0.8m・ 深さ0.45m。	○第2主体部内より土師 器甕片。 ○墳頂部中央で切れた溝 掘形南東側より土師器 高杯脚部1。	
DD 22号墳	○丘陵稜 ○砲弾形 ○長軸方向12m ・削り出し幅 8m・高さ2.6 m		○墳頂部中央で1基・北 東辺基底部付近で1基 主体部確認。 ○第1主体部(木棺直葬) 長さ3.3m×幅1.8m・ 深さ0.7m ○第2主体部(木棺直葬) 長さ2.2m×幅1.1m・ 深さ0.32m。	○第1主体部上面盛土中 より多量の土師器器台 片・主体部棺内底面よ り土師器片・鉄剣1。	
DD 23号墳	○丘陵稜 ○方形 ○長辺11.5m× 短辺8m・高 さ1.7m		○墳頂部中央で主体部1 基確認。 ○木棺直葬。長さ4.5m ×幅2.1m・深さ0.7m。	○主体部上面表土直下よ り須恵器甕1・土師器 高杯1。 ○主体部棺内底面北東端 より鉄剣1・南西端よ り鉄鏃15。	

は地山削平面より穿ち、隅丸長方形の平面形を呈する。木棺は、墓壇埋土中央部に圧痕として検出した。棺は、墓壇中央に置かれ、底面はほぼ水平面を保ち、側壁は「∟」字型をなす。形状から箱形木棺の使用が考えられる。

副葬品は、棺内南西端底面より切先を南西に向けた鉄鏃約15(図版第53. 61~65)・北東寄りの北西壁底面より、切先を南西に向けた鉄剣1(図版第54. 78)が出土した。

頭位方向については、棺幅から見た場合、南西側に比して北東側が狭くなるが、鉄鏃・鉄剣の切先方向を重視すると北東枕が考えられよう。

墓壇内・棺内とも土器類の出土はみられなかったが、墓壇北東端にあたる墳頂部の表土直下の盛土中からは、土師器高杯片・須恵器甕・杯蓋片(図版第50. 195-196)が出土したが、遺構等は検出されなかった。

第2節 墳丘について

福知山市街地西方2.5kmに位置する豊富谷丘陵は、標高30~60m、西側水田面との比高差20~30mの五台山から派生した一丘陵である。この丘陵は、北東から南西へのびる主尾根と、さらにそれより樹枝状にのびていく支脈から形成されている。これらの尾根の大半

は、頂部面積の少ない狭小な馬の背状を呈するやせ尾根で、墳墓はこのような尾根の頂部稜部・斜面を利用して築造されている。また、比較的広い平坦部を有していたTD7号墳～TDⅡ地点までと大道寺跡は、遺構築造に伴うものや、戦前から戦後にかけての開墾による平坦部であることが調査の結果明らかとなり、墳墓空白地帯となっている。この平坦部には、立地的にも本来古墳が築造されていたと思われるが、基底部すら確認できなかった。大道寺跡北端からは、主体部が検出されており、寺院造成に伴い平坦化され墳丘が消滅したことが明らかとなっており、同様にTD7号墳からTDⅡ地点までも開墾等により消滅したと考えられる。

豊富谷丘陵古墳群の大半は、盛土がほとんどなく墳丘高もないため、自然地形に等しい形態をなしているが、SG・MY・TD地区に存在するものについては、尾根頂部の自然地形の起伏を利用して築造しているものが多く、腰高となっているため古墳を明瞭に判別することができる。また、同じように尾根の起伏を利用して築造されている古墳でも、RD地区に存在するものは、一部を除く大半が自然地形との差はほとんど認められない。TD・RD地区に存在する尾根の小起伏を利用した古墳は、古墳が近時して築造されており、尾根に直交する溝を設けて区画していることが明らかとなった。これらとは形態が異なるが、RDⅠ地点のように独立したかみえる丘陵頂部に位置するものや、RD12号墳のように一部尾根斜面に盛土したものや、小支尾根張り出し部分突端に築造したものもある。その他、DD5号墳のように、先に築造された墳墓に削平・盛土を施し、新たに埋葬施設を設け墳形が変化したものもある。

古墳群中、特筆されるのはTT地区の北端とDD地区の南端でみられた、尾根稜部に背梁部を削り出し、古墳が連珠状に墳丘裾を接して築造されていることである。TT地区北端で4基・DD地区南端で8基の古墳が展開しており、これらの古墳の立地する尾根縦断面は階段状を呈している。このような地形は通常「階段状地形」と呼称されており、上記した2例のほか、TD3号墳の立地する北東下方にのびる尾根支脈にもみられる。TD3号墳から北東側は調査対象外であるが、TD3号墳も同支脈上にあるため、この古墳もこの種の地形の始まりとすれば、60mの支脈上に4基の古墳が築造されていることになる。これらの古墳は、TD2・3号墳間のみが地形的制約を受けるため接していないが、あとは墳丘裾を接して並んでいる。以上の3例にみられるような「階段状地形」は、本地域および丹後地方・福井県・石川県・兵庫県但馬地方などの方形台状墓群にみられる墳墓立地の形態である。

調査を行った古墳群は、出土した遺物から大きく3期にわたり形成されていったようである。3期に分けるに当たっては、主体部内出土遺物を中心とし、主体部内に遺物を有さな

いものについては、墳丘上から出土した遺物から、また墳丘・主体部内とも遺物をまったく有していなかったものについては、墳墓立地・墓壇の形状等の特徴を遺物を有していたものと対比させその時期を推定した。遺物がまったく出土せず、墳墓・墓壇にもその特徴が見られないものについては、その築造時期を推定することができないため不明とした。以下表に示すとおりである。

付表3 墳墓群時期区分表

古墳名 時期	古 墳 名
I 期	TT 3～5号墳, TD 2・3・11・17・18号墳, RD 2・5・9・10号墳, DD 4～7・19～23号墳
II 期	TT 1号墳, TD I地点, RD 5号墳, DD 1号墳, TD16号墳
III 期	SG10・18・22号墳, RD 3・6・7・11・12・24号墳, DD 4・5・13・17・18・23号墳, 大道寺跡北端主体部
不 明	SG 1・7・8号墳, MY 7号墳, TD 1・7号墳, RD 4号墳, DD14号墳

第I期 畿内庄内式期(古・新)に比定されるもので、調査を実施した古墳の1/3強にあたる20基がこれに相当する。本古墳群中より出土した土器のほとんどがこの時期のものである。鉄製品では剣・鏃・鎌・鉈・刀子等があり、鏡・鏡片・管玉等も出土している。

第II期 畿内布留式期に比定されるもので、この時期の古墳はもっとも数が少なく、5基がこれに相当する。出土遺物も土器中心であり、TT 1号墳のみが、鏡・剣・刀・鏃・鉈等が出土したが、TD16号墳では鉄剣のみである。土器の量でみた場合、RD 5号墳がもっとも多く、他の古墳と比して極端な差がみられる。

第III期 須恵器導入の段階と思われるもので、当丘陵に、須恵器が持ち込まれる5世紀後半以降の段階である。出土遺物も須恵器杯身・杯蓋・甕・甗・器台があり、鉄製品に至っては、剣・刀・刀子・鎌・鋤先・鏃・鉈・斧・針状鉄器と多彩である。他に堅櫛も出土している。この段階でも、土器と鉄器を共伴するものは少なく、わずかにDD 5・13号墳にみられたにすぎない。鉄器の一括資料を出土したのはRD24号墳である。

以上が各時期であるが、次にこれらの古墳の基本的な築造方法について述べ、さらに各尾根での様相をみてみたい。

調査の結果、これらの古墳の墳頂部は部分的な削平を受けているものの、大半の古墳は築造当時の姿をよく留めていたといえる。また、築造時期・場所の違いによる構築方法の差は認められず、一貫して削り成形と若干の盛土により造られているが、一部削り出しと盛土が併用され墳丘形成が行われたものが数例あるが、大規模なものではない。

各古墳の立地は、

1. 尾根頂部・比較的緩やかな尾根稜部に位置し、自然地形の起伏を利用したもの。
2. 主尾根より派生した支脈の比較的緩やかな傾斜をもつ稜部に位置するもの。
3. 馬の背状尾根の比較的急峻な尾根稜部に位置するもの。
4. 尾根が小さく張り出した突端に位置するもの。
5. 独立したかのような丘陵上に位置するものに分けられる。

築造方法については、

- ㊶ 自然地形の起伏を利用し、墳頂部・基底部とも削り出しにより成形するもの（この中には一部盛土を施すものもある）。
- ㊷ 基底部付近のみ削り出し、墳頂部は一部削り出すが盛土により形成されるもの。
- ㊸ 尾根と分断する溝を設け、平坦部・基底部とも削り出しにより成形するもの。

とに分けられる。

削り出しによる各辺基底部の区画は、

- ① 削り出した際に、幅狭な平坦部ないしは周囲を平坦化させるもの。
- ② 平坦部はみられないが、削り出し面と自然地形の傾斜変換点により認められるもの。
- ③ ②と形態は同じであるが、盛土と自然地形により区別されるもの。

とに分けられるが、一部その区画が明確でなかったものもある。

墳丘立地と、築造方法・基底部の区画の組合わせについては、1が㊶・㊷・㊸・①・②、2が㊶・㊷・㊸・②・③、3が㊶・㊸・②、4が㊶・㊸・①・②、5が㊶・①となる。

1の組合わせについては、丘陵主尾根上に多くみられる傾向で、SG・MY・TD・RD地区の腰高の古墳がこれに相当する。

2については、丘陵各所にみられるが、特にRD地区に多い。

3は、「階段状地形」をなすもので、TT地区北端・DD地区南端にみられるものである。

5は、TK I地点である。

上記の組合せにより築造されているが、墳形は方形・長方形・円形・舌状(砲弾形)を呈するが、その大半が長方形となっている。これは、古墳の立地する尾根の大半が頂部面積の少ない馬の背状尾根のため、地形的制約を受けたためと、墓壇の埋葬スペースを考えた場合、必然的に長方形にならざるを得なかったと考えられる。墳形は、長方形をなすと述べたが、尾根頂部や稜部の比較的緩い傾斜部分に築造されている古墳を除いては、隅丸長方形となっている。これは、地形的なことに起因し、やせ尾根で稜部に位置するため、長方形を意識し削り出しを行っても、尾根下方側の墳丘角部分が自然地形の中に入り込み削り出せないことから生じたことと考えられる。DD20～23号墳はその典型であり、尾根が

急峻なため背梁側を削り出し平坦部を成形するが、墳丘両側面の削り出しは平坦部を削り出した部分しか行われていない。そのため尾根下方側は、自然地形そのものが残り、尾根高位側のみ方形が意識され、下方側は丸くなる舌状・砲弾形状の墳形をなしており、不整形である。また、極端な地形的制約を受けたものは、TD 4号墳のように墳丘北東角を欠くものもある。

墳丘の区画のために外部施設として溝をもつ古墳が、19基確認されている。溝は、尾根頂部に位置し、自然地形の起伏が小さく古墳の区別がつかないものや、隣接する場合、緩傾斜の稜部に位置するものには必ず設けられている。小支尾根の突端や、古墳が隣接しないような場所に展開するものでも、自然地形と区画するため尾根高位側に溝をもつものもある。階段状地形をなすDD地区南端の高位側に立地する5基については、溝が設けられているが、下方のものは不整形な溝が1条認められただけで溝を有さず、階段状地形のみで区画されている。一方、同じ階段状地形をなすTT地区北端のTT 4・5号墳は、溝により区画されるが、TT 1・3号墳間は距離があるため溝は設けられていない。TT 1号墳北側に隣接する古墳との間には溝が設けられているようである。TD地区の階段状地形を呈する部分については、TD 3号墳より下方が調査対象外であるため詳細は不明であるが、外表観察では溝が存在するようである。

これらの溝は、尾根と古墳、古墳と古墳を区画する直線的な区画溝である。中には、RD 4号墳やDD 7号墳でみられた、尾根高位側の墳丘基底部全体を包み込むような「コ」字型の溝や、RD 8号墳のように墳形が方形を意識して造られているのに溝が「ㄣ」字型になったものもある。特異な例として、DD 21号墳のように尾根を分断せず、尾根の途中で終る不整形な溝もある。

溝の大半は、その平面形を直線的としたが、尾根の高位側に必ず設けられているという特徴をもつため、墳丘が隣接する場合でも、溝は築造した古墳側に向いている。このことは古墳の切り合い関係を知る上でひとつの目安となる。溝の長さは、ほぼ古墳の基底部までのびるが、RD 12・24号墳・DD 21号墳のように、基底部までのびないものもある。

溝の断面は、そのほとんどが「U」字型あるいは「∪」字型をなすが、「U」字型をなすものが多く、また深くなる傾向がある。1例だけであるが、RD 12号墳の溝は断面が、「V」字型をなしていた。

次に調査区割(第2図)に従い、各尾根での古墳の様相をみとめることとする。

第1区古墳築造段階をみると、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期の全期と不明のもの3基を含む古墳が存在する。不明のものと第Ⅲ期のTD 10号墳についてみれば、すべて削り出しにより墳頂部・基底部を成形し、周囲にほとんど隣接する古墳がなく独立性をもつ。不明のもの3

基を第Ⅲ期に考えるにあたっては、遺物がなく時期決定ができないものの、TD10号墳同様、その立地・独立性を帯びるところから第Ⅲ期の古墳としてとらえた。一方北尾根に存在するものについては、階段状地形をなすが、TT1号墳は第Ⅱ期、他は第Ⅰ期に築造されている。TT1号墳は、古墳をかなり意識したようで、削り出しにより成形されるが盛土を持ち円形を呈し腰高となっている。下方側のTT3～5号墳は、墳頂部・基底部とも削り出し成形によるが、これらの古墳の間には溝が設けられており、溝の方向・長さ等から判断すれば、各々の古墳の溝と考えられ、共有するものではなく独立した性格をもつ。このように第Ⅰ区では、第Ⅱ・Ⅲ期では独立性を強く示し、第Ⅰ期についても台状墓的な様相を示しながら、各々が独立性を帯びている。

第Ⅱ区は、第Ⅰ～Ⅲ期までの全期と、時期不明の古墳4基が存在するが、不明のものについては第Ⅰ区同様、独立性が強く腰高となっているため第Ⅲ期としてとらえたい。第Ⅲ期のものは、腰高の古墳が多く墳頂部・基底部とも削り出しにより墳丘を成形する。ただTD23号墳のように、基底部のみ削り出し、盛土により墳丘を形成したかなり古墳を意識したものもある。第Ⅱ期の古墳も削り出しにより成形するが、TDⅠ地点のように独立したかのような丘陵上に位置するため、独立性の強く表われたものもある。第Ⅰ期は、第Ⅰ区同様、古墳が隣接して築造されその間には溝が設けられているが、共有するものではなく独立した性格をもつ。このように、第Ⅱ区も第Ⅰ区同様、第Ⅱ・Ⅲ期に属するものは独立性を強く示し、第Ⅰ期についても台状墓的な様相を示しながら、各々が独立性を帯びる。

第Ⅲ区も第Ⅰ～Ⅲ期の全期と、時期不明古墳とがある。第Ⅲ期のものは、腰高のものと同様に墳丘高をほとんど有さないものと2種ある。いずれも墳丘・基底部とも削り出しにより成形するが、RD3号墳のように基底部のみ削り出し、盛土により墳丘を形成するように古墳をかなり意識したものや、斜面に盛土し墳丘を形成したRD12号墳のようなものもある。またRD24号墳のように墳丘高はほとんどないが、溝により区画されたものもある。墳丘高もほとんどなく、遺物も有していない時期不明の古墳については、その立地・形態から第Ⅲ期に相当すると考えられる。第Ⅱ期のものは、墳丘・基底部とも削り出し成形を行い、溝により区画される。第Ⅱ・Ⅲ期の古墳各々の独立性が認められる。第Ⅰ期は、第Ⅱ区のTD11・17・18号墳で見られたものと同様な形態を示すが、溝による区画がなされていても、溝が共有関係を有しているようなものもあり半独立的である。これに対し完全に独立の立場を取るのが、RD5号墳である。

第Ⅳ区は、第Ⅱ期を除く第Ⅰ・Ⅲ期の古墳が存在する。いずれも墳丘・基底部とも削り出しにより成形するが、DD5号墳のように第Ⅰ期築造後、第Ⅲ期の古墳がその上に築造

され、2次期の古墳が重複するものは、墳丘両側面に盛土を施し、埋葬スペースを確保している。第Ⅲ期の古墳は、DD17・18号墳があり両者の間には直線的な溝があるが、共有関係を有さずDD18号墳築造に伴い設けられたもので各々独立関係にある。大道寺跡北端の古墳は、大道寺造営の際尾根を削平しているため平坦化しているが、旧地形から推定すれば、時期は不明であるが、墳丘裾を接して階段状に数基並んでいた可能性がある。

第Ⅰ期の古墳は、尾根高所より低位に向かって墳丘裾を接し、接続して築かれており階段状地形をなしている。高位側の傾斜の緩い所に位置するDD4～7・19号墳は、いずれも各々溝を設け区画し、独立性を帯びる。下位側のDD20～23号墳は、尾根背梁側を削り出し墳頂部平坦面を造るが、この削り出した平坦面そのものが階段状地形をなし、その段差が各古墳の区画となっている。尾根最下位のDD23号墳は、第Ⅲ期の古墳である。

第Ⅳ区北尾根は、高位側から低位に向かって尾根稜部に階段状に古墳が築かれた台状墓群であり、その後、第Ⅲ期に至って再び台状墓上に古墳が築かれ、また築造スペースの残された尾根最下位にまでも古墳が築造されている。また、大道寺北端の東尾根についても、第Ⅲ期の古墳であるにもかかわらず、その形態は台状墓的な様相を残している。

以上が各調査区での様相であるが、これらの古墳はその大半が、尾根頂部面積の少ないやせ尾根上に立地するため、古墳築造に際し地形的な制約をかなり受けている。第Ⅰ～Ⅲ期を通じて古墳築造が大規模に行われたものはなく、限られた場所に自然地形の起伏を最大限に利用し、小規模な削り出しと盛土により墳丘を成形している。そのため、古墳の規模は小さく、飛び抜けたものはみられない。古墳群中最大規模を誇るものは、TT1号墳の直径14.5mの円墳を最大に、古墳の平均的規模は長辺11.1m・短辺8.3mとなる。

高さについても、SG22号墳の2.35mを最高に、最低はDD14号墳の0.3m、その平均的高さは1.4mである。

盛土は、RD3号墳の1.0mを最高に、ほとんどの古墳が15～30cm程度しか有さない。この盛土中には、第Ⅰ期の古墳のみであるが、墓壇検出面上・墳丘上・墳丘斜面・溝中・基底部付近からは、多くの土師器が散乱し、小片化したものが出土した。これらの遺物は複数埋葬が行われているものに対しては、埋葬が行われるたびに削平がくり返され、墓壇上に置かれていたものが散乱したとも考えられる。TT4号墳・TD17・18号墳・RD5・9号墳の溝内・基底部からは完形または破砕され塊りとなった土師器の出土が見られた。また、DD21号墳の溝横で出土した高杯、DD5号墳西側盛土中より立位で出土した高杯や、RD11・18号墳の間の溝中から出土した管玉の付着した鎌などは、墓前祭祀の痕跡を示すものではないかと考えられる。墳丘上に遺物が散乱するのは、第Ⅰ期の古墳に共通す

る特色であって、第Ⅱ期においてはまったく認められない。第Ⅲ期ではRD12号墳溝中より礎、DD18号墳溝中より杯身・杯蓋、DD13号墳墳丘上より須恵器器台の出土が見られたのみで、第Ⅲ期の古墳すべてには共通しない。

第3節 埋葬施設について

埋葬施設は、45基の古墳を調査し、主体部の認められなかった5基を除いて、40古墳・90主体部を検出した。この埋葬施設総数の中には、土器埋納土壇や土器棺墓、中世墓等は数に入れていない。墓壇は、RD61号墳の墳丘裾で検出した1例を除き、すべて墳丘上から検出したものである。大半は、地山削平面より墓壇を穿つが、築造状況によっては盛土中から穿つものもある。

各古墳から検出した墓壇は、木棺痕跡の残るものと残っていないものがある。木棺痕跡の残るものについては、底面が水平で、側壁が「∟」字型・素掘りで掘形の深い「□」字型をなすものや木口部分を固定する施設のないものについては、箱形木棺が使用されていたと考えられる。木口穴がみられたRD5号墳の木棺については組合式木棺としたがこの種の木棺は本古墳群中ではこれ1例のみで、大半の木棺は箱形木棺に相当すると思われる。一方、大型の墓壇で側壁が「U」字型をなし、側壁・底面を粘土等によりくるまれていたものについては、割竹形木棺としたが、TT1・SG21・TD17・DD5号墳の4古墳にみられただけで、いずれも本古墳群中1～4位までの墓壇規模をもつ。

木棺痕跡の認められなかった墓壇については、木棺が使用されなかったものと、使用されたと思われるがその痕跡が明確に認められなかったものと2種あると考えられる。木棺が使用されていた可能性があるものとして、DD4号墳第1主体部、TD17号墳第2主体部にみられるように、側壁が「□」字型に近く掘り込まれているものや、DD4号墳第3・6主体部、TD3号墳第2主体部、RD3号墳第1主体部のように、掘形が深く、比較的大きい墓壇についてはその可能性がある。墓壇規模も小さく、深さもほとんどないものについては、本来木棺が使用されていなかった可能性が高いと思われる。

これらの主体部は、大・中・小と多様である。規模のみで考えた場合、優劣は一目でわかるが、墳丘や出土遺物を総合して考えると、いくつかの種類に限られてくる。すなわち、鉄製品・土器をともに有するものは少なく、鏡を持つものでも鏡だけの単一埋葬となっている。遺物の量・埋葬施設の規模からみて、優位に立てるものとしては、TT1号墳・RD98号墳等があげられるが、単一主体内で考えるとRD98号墳が群を抜いている。

多数検出した主体部数を時期別にみても、第1期は、土器を細分すれば、畿内庄内式(新)・(古)の二時期に分けることができよう。庄内式期(古)段階に属すると思われるも

のとして、TD 2・3号墳・DD4～6・20～22号墳があげられる。比較的傾斜の緩い位置にあるTD 2・3号墳・DD 4～6号墳については複数以上の主体部が認められる。この部分での主体部数の最小値は、TD 2・3号墳の各3であり、DD地区のものについては、すべて6主体部という埋葬数である。また、DD20～22号墳についても、DD20号墳の1主体埋葬に対し、あとの2基は2主体埋葬である。

庄内式(新)段階に至っては、TT 3～5号墳、TD17・18号墳、RD 2・81・82号墳・DD 7号墳があげられる。TT地区のものについては、TT 4号墳の2主体に対し、他の2古墳は単数埋葬である。TD地区のものは、TD17号墳が3主体、TT18号墳が単数埋葬である。RD地区は、RD81・82号墳が単数埋葬で、RD 2号墳は3主体で墳丘裾部分にも1か所埋葬施設が認められる。

このように、第I期の庄内式(古)段階では、尾根高位側に位置するものについては、多葬であるが、傾斜部に位置するものは、埋葬数が少ない。とはいっても、DD20号墳を除いては複数埋葬であるから多葬と変わりはない。このDD20号墳が単葬であることについては、埋葬スペースの関係か、被葬者の違いによるものなのか詳細は不明である。庄内式(新)段階になると、単葬墓の古墳数が5基と総数の約半分を占めるが、複数墓も存在する。

豊富谷丘陵が立地する由良川中流域における弥生時代後期の墓制は、方形台状墓を中心としているようで、丘陵稜線上に墳丘裾を接し連立して築かれるという特徴を有している。このような形態は、丹後・但馬地方の墳墓立地と類似している。本丘陵古墳群と同様な形態をなすものとして、綾部市成山古墳群・高谷古墳群、福知山市宝蔵山古墳群の3例が調査報告されているだけであるが、今後この種の古墳の調査は増加するものと思われる。

成山古墳群は、個々が独立した墳丘をもち、方形台状墓の伝統を受けつぐ形態をなし、鉄製品は有さず、鏡・玉のみ副葬する特色をもっている。

高谷古墳群は、尾根先端部の自然地形を利用し、削り出し成形による方墳が階段状に築造されたもので、これらの古墳は近接して築造されているのか溝を有さず、本丘陵古墳群とはやや異なる部分もある。築造時期は内部構造等が明確でないため不明であるが、墳丘の特徴が台状墓的な様相を示すことから、本古墳群の第II期に相当するものと思われる。

宝蔵山古墳群は、弥生時代後期の墳墓と古墳時代前期の古墳が同一丘陵上に営まれた古墳群である。これらは、集団内の特定家族墓として考えられており、個人墓として発展的な様相がみられるものもあるが、集団墓であるところに、特定個人への権力の集中が未発達なところがあるとされている。このことは、弥生時代末期～古墳時代中期にかけて、傑

出した古墳のない集団墓を造り続けた本古墳群と共通する。

豊富谷丘陵に分布する古墳は、その大半が台状墓あるいは台状墓と等しい形態の古墳であることは肯定されよう。後者の中には、割竹形木棺や鏡の副葬等、古墳的要素を持つものもある。また、地形的な制約に起因するかも知れないが、円墳で独立した墳丘をもつものは少ない。これらは、古式須恵器が埋納されるまで存続するものであるが、古墳規模・主体部・副葬品等で傑出したものは認められず、台状墓と大差がない。このことからすると、集団内での首長権が未発達であったと考えられる。弥生墳墓から古墳への移行に地域社会内において、何らかの変革があったことを示唆するものであろう。また、当丘陵の古墳が5世紀後半で造墓を停止し、それ以降は、対岸の和久川北岸に大型方墳妙見1号墳や下山・額塚古墳群等の群集墳が成立しており、造墓集団の移行がみられる。当丘陵の造墓母体となった集団は、TD・SG地区の一部を除く北縁部の和久川に向くものについては、眼下に位置する（当丘陵古墳群同様、その中心が弥生後期～古墳前期にある）半田遺跡が考えられる。

第4節 墳墓出土遺物（図版第45～54）

今回の調査で出土した墳墓関係の遺物は、古式土師器・須恵器・鉄製品・鏡・管玉・竪櫛等がある。これらの遺物は埋葬主体部や丘陵を切断する溝などの遺構から出土したものが過半数を占める。

古式土師器

出土した土師器は、古式土師器とよばれるものであり、器種は高杯・壺・甕・器台・盃等がある。これら古式土師器の特徴として、二重口縁の器台や口縁部に擬凹線や波状文・円形浮文等を施した土器の出土をみている。土器の外表面はハケメ調整後にヘラミガキを施している。内表面はハケメやヘラケズリ・ヘラミガキを行っている。土器の形態や製作技法からみると、出土した土器の大部分は、丹後を含む山陰・北陸地方に広く分布が認められる土器相をもっている。特にRD4号墳にみる器台(106)・甕(109)は山陰地方の影響を強く受けたものである。一方、少量ではあるがTD17号墳出土の脚(76)、TD18号墳出土の高杯・器台(85～89)に代表される畿内の要素を多く含む土器も出土した。また、胎土的にも畿内河内地方のそれに酷似した丸底壺(1)もTT1号墳から出土している。

いわゆる古式土師器に相当する土器に関しては、近年、丹後地域において資料の著しい増加をみている。しかしそれらの時代的位置づけは今だ流動的である。今回出土の古式土師器では個々の詳述はできないが、甕(109)を例にとるとある程度の見通しが可能である

う。最近の山陰「鍵尾式」の編年にあてはめれば、山陰Ⅳ期の段階に比定され、畿内布留式土器より先行する器台(106)は、甕(109)より確実に古い段階を示している。

須恵器

須恵器は、杯身・杯蓋・甕・器台が出土している。福知山周辺地域でみれば、今回出土例は古式のものと考えられる。形式からみれば、DD4号墳出土の大型甕(116)が最も古く、大阪の「陶邑」編年にみるⅠ型式の前半段階に比定される。RD12号墳出土の杯身・杯蓋・甕(119～123)は、大型甕(166)より1段階後出のものと考えられる。今回出土例中、最も新しい段階に属するものは、DD5号墳第2主体部より出土の杯身・杯蓋(129・130)が相当し、ほぼⅠ型式後半段階に比定されよう。

豊富谷丘陵における古墳群に副葬された須恵器の時期は、ほぼ5世紀後半から6世紀前半に比定されるものであった。唯一6世紀以降に比定されるものに、大道庵寺跡C地区の古墓群周辺で表採した杯身(図版第57-58.59)がある。表採遺物であることから、墳墓との関係は不明である。

鉄製品

ほとんどが埋葬主体部内の出土である。刀・剣・刀子・鏃・斧・鉈・鋤先が出土している。特に今回の調査では、鉄製品を副葬する古墳については土器を共伴する例が少ないという傾向をもつ。

副葬された鉄製品のうち刀・剣・刀子・鏃は多種多量の出土をみている。なかでもRD13号墳は出土量が多く、鉈(30～45)・刀子(46)・鉈(47～52)・斧(58～60)・剣(78)が一括して出土している。鉈は柳葉式であり、茎部のなかほどに逆刺が付いている。

鏡

鏡は完形品が2面、破片が1面出土した。

舶載四乳四獸鏡片(79)はTD17号墳第2主体部から出土したものである。全体の約6分の1弱の残存状況であった。現存部分には1乳と獸形の一部を残し、外区は複波鋸歯文帯からなっているようである。獸形は半肉式である。また、銘帯が認められるが、破断部分にかかっているため判読不明に終わった。鏡片断面の長辺の2辺には研磨が認められ、獸形と乳の間に円孔を穿った痕跡がある。鑄上がりは良好で、現在も光沢を放っている。復元径は約11cmを測った。

舶載素縁文帯四乳鏡(80)はTD17号墳第3主体部から出土した。鏡背には鑄上がりが悪かったものか、小形の鋸歯文帯が一周するだけで、内区部分には文様がみられなかった。ただ、若干の盛り上がりをもった乳4か所が確認できた。面径は9.4cmを測る。

仿製小型内行花文鏡(81)はTT1号墳第1主体部から出土した。内行花文のカーブは強く、内行花文の間に珠文をもつ。その外に楯目文帯があり、さらに外側の外区には鋸歯文帯がある。

その他

その他の遺物として、RD11号墳第1・2主体部内から、黒漆塗りの堅櫛が20数個体分出土した。また、TD11号墳に伴う溝中から出土した鉄製鎌に錆着して、細身の管玉1点が出土している。

付表4 墳墓出土土器観察表

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
TT1	土師器	1	20.5 23.7 — (34.0)	球形に近い体部に「く」字状に開く口縁がつく。口縁端部は丸く終る。丸底とみられる。	口縁部内外両面はヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部内面上部に指頭圧痕残す。	軟質焼成 砂粒含む 暗褐色
		2	16.6 — (3.3)	二重口縁。口縁端部は外反して丸く終る。	内外両面はヨコナデ。	軟質焼成 砂粒混る 淡赤褐色
	高杯	3	— 3.3 — (3.5)	短い頸部。杯部・脚部は強く開くものとみられる。	内外両面ナデ。	軟質焼成 砂粒含む 淡茶褐色
		4	— — 12.2 (2.0)	脚部は強く外方へ開く。	内外両面ナデ。	軟質焼成 胎土精良 灰黄色
	円筒形土器	5	— (19.8) 16.2 (14.5)	円筒形の胴部。底部から口縁方向にかけて、やや開きみとなる。	輪積み。外面はナデの後ヘラ削り。内面は指頭圧痕を残し、粗いタテナデ。	胎土精良 灰白色 断面は淡黒色
TT3	壺	9	19.4 — — (3.0)	口縁部は外反する2重口縁。屈曲部の稜は丸みをもつ。	口縁部内外面はヨコナデ。	軟質焼成 赤茶褐色
	器台	16・17	— 3.8~5.6 — (5.5~6.0)	筒形の頸部をもつ。	内面はナデ。外面は磨滅。16の頸部外面は縦方向のヘラミガキ?	軟質焼成 胎土精良 褐色
	脚	23	— — 9.2 (4.4)	筒形の脚部は下端付近で強く「ハ」字状に開く。	内外両面は磨滅のため調整不明。	台付壺の脚部 並焼成 褐色
TT4	壺	6~8	20~34 — — —	二重口縁。6・8は口縁部が強く外反し、屈曲部の稜は垂下させて端部は鋭い。器壁は厚い。	7の口縁部外面に2条の波状文。7・8の口縁部外面に2個1対の円形浮文。6は口縁部内外両面ともヘラミガキ。胴部は内外両面ともハケ目調整。	やや軟質焼成 胎土良好 褐色系

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
T T 4	土師器	壺	9~11	19~20 — (3.0)	二重口縁。口縁部は強く外反し、端部は丸く終る。器壁は薄く仕上げける。	内外両面とも磨滅のため調整不明。9の口縁部内面の一部に指頭圧痕残る。	やや軟質焼成 胎土良好 褐色系
			12・18	12.5~16 — (3.0)	ゆるやかに外反する口縁をもつ。27の口縁端部は肥厚する。	28は口縁部内外両面ともヘラミガキ。	焼成良好 胎土精良 黄褐色
		器台	13	— 4.7 — (10.0)	筒形の頸部は長く、台・脚部とも外方へ強く開く。	筒部内面を除きナデ仕上げ。外面は磨滅により調整不明。	軟質焼成 淡赤褐色
		高杯	14・15 ・18	— 4.0 — —	脚部は強く外方へ開く。18の脚部は一旦下方に下がった後に外方へ開く。	内外両面とも磨滅により調整不明。	褐色系
		脚	19	— 3.4 7.9 (4.0)	頸部の器壁は厚く、脚端部は強く外方へ開く。	外面ヘラミガキ。	軟質焼成 淡褐色
		壺	20・21	— — 4.0 —	底部は高台様の突起をもつ。体部は底部からなだらかに外上方へたちあがる。	内面ハケ目調整。外面は丁寧なヘラミガキ。	やや軟質焼成 胎土精良 茶褐色
		高杯	22	12.0 — — (2.6)	杯部は底部から丸みをもって上方へたちあがる。口縁端部は小さく外反して丸く終る。	内外両面磨滅のため調整不明。	軟質焼成 淡赤褐色
		脚	24~27	— — 11~16 —	ゆるやかに「ハ」字状に開く脚部。端部は丸く終る。	〃	軟質焼成 褐色系
T T 4 表土下	須恵器	長頸壺	29	10.6 25.6 10.2 21.6	口頸部は内湾ぎみにのび、端部口径は頸基部径より大きくなる。体部は肩が張る。底部は「ハ」字状の高い高台を貼り付け、内端面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。外面は回転ナデ調整。内面はロクロナデ。頸部中央やや上部に一条の沈線。	焼成良好 胎土良好 淡灰色
		平瓶	30	9.6 (17.0) — (17.2)	口頸部は基部から外上方へのび、肩部の一隅に貼り付ける。体部は肩部で大きく稜をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部下半はカキメ調整。内面ロクロナデ。	焼成良好 淡灰褐色 外面に自然釉
	土師器	椀	31	9.4 — (3.1)	体部は丸底に近い底部から丸みをもって外上方へたちあがる。口縁端は小さく外反して丸く終る。	内外両面は磨滅のため調整不明。	やや軟質焼成 淡赤褐色
	須恵器	杯身	32	11.7 — — 2.3	体部は底部から丸みをもって外上方へたちあがる。口縁端部は丸く終る。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部下半ヘラケズリ。	焼成良好 胎土精良 灰色

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考		
T T 4 表土下	須恵器	杯蓋	33	18.8 — 2.3	天井部はやや丸味を残し、中央に擬宝珠様つまみを付す。端部は内側へ屈曲させる。	マキアゲ・ミズビキ成形。	焼成良好 淡青灰色	
		杯身	34	15.4 — 10.5	ゆるやかに外反する口縁部を有し、直立ぎみの「ハ」字状高台を貼り付け、内端面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。	焼成良好 暗青灰色	
T T 5 主体部	土師器	壺	35~42	11.5~22 — —	二重口縁。35・37にみる口縁部の稜は鋭い。36の稜は丸みをもつ。口縁部は35にみる上方にたちあがるものと、41にみる強く開くものの2様が認められる。	器壁は磨滅し、調整不明の例が多いが、口縁部内外面ともヘラミガキを施すとみられる。	褐色系 一部の土器に黒斑が認められる。	
				47	14.5 — (5.0)	口縁部は基端から垂直にたちあがった後、大きく湾曲して水平に開く。端部はやや垂下して終る。	口縁部内外面ヘラミガキ。	やや軟質焼成 淡褐色
		器台	43・44	— 4.0 —	筒形の頸部	内面ナデ調整。外面ヘラミガキ。	やや軟質焼成 褐色系	
		壺	45・46	— 4.0 —	底部は高台様の突起をもつ。体部はなだらかにたちあがる。	内面ハケメ調整。外面は丁寧なヘラミガキ。	並焼成 褐色系	
		脚	48・52	— — 8.0 —	脚は強く「ハ」字状に開く。端部は丸く終る。	内面ナデ調整。外面ヘラミガキ。	台付甕の脚 黄褐色系	
				49	— — 8.4 (5.8)	高めの脚は開きも弱く、基部から端部にかけて器壁厚を減じる。端部は丸く終る。	内外両面は磨滅により調整不明。内面ナデ調整。	やや軟質焼成 砂粒を含む 茶褐色
			52・53 ・54	— — 10.6~12.4 —	「ハ」字状に開く脚部。50は端部が外傾する面をもつ。53・54の端部は丸く終る。	器壁はヒビ割れにより調整不明。	軟質焼成 赤褐色系	
		T D 2	高杯	55	— 3.7 — (7.2)	脚下半において外方へ開く形態をとるとみられる。	外面はヘラミガキ。内面にはしほり痕を残す。	やや軟質焼成 胎土精良 淡褐色
		T D 3	長頸壺	56・57	— 2.2~3.4 — —	杯と脚部の接合部は厚く、脚は「ハ」字状に外方へ開く。56は杯底部に粘土を充填したとみられ、一部に粘土が残る。	56は外面ヘラミガキ、脚内面ナデ調整。 57は内外両面とも磨滅により調整不明。	軟質焼成 胎土精良 淡茶褐色
					58	11.6 13.4 3.4 21.6	口縁部はやや外上方へたちあがる。体部最大幅は底部から2/3にもとめられる。底部は小さな平底。	口縁部外面上半はヘラミガキ。胴部外面と口縁部内面はハケメ調整。胴部内面はヘラケズリ。胴部内面の上部は指頭圧痕を残す。

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考		
TD3	土師器	甕	59	27.4 — (5.3)	「く」字状に外反した口縁の端部は内傾し、2cm近い幅の面を作り、3条の擬凹線を施す。	体部外面は細いハケメ調整。内面は頸部やや下方からヘラケズリ。	軟質焼成 砂粒を含む 暗褐色	
			60	23.3 (26.8) 6.0 (30.1)	「く」字状に外反した口縁の端部は直立して面をつくり、4条の擬凹線を施す。体部中央上半に最大幅をもつ。	体部外面は細かいハケ目調整。ハケ目は底面にまで施す。体部内面ヘラケズリ。	やや軟質焼成 砂粒を含む 暗褐色	
			61	12.5 — (1.6)	「く」字状に外反した口縁は途中で屈曲し、外上方へ延びる。口縁部外面には3条の擬凹線を施す。	口縁部内外面はナデ仕上げ。体部内面ヘラケズリ。	並焼成 胎土精良 褐色	
		高杯	62・64 ・67	11.6～24.8 — —	丸みをもってたちあがってきた杯部は、一旦上方へ屈曲した後、大きく外反する。屈曲する口縁部は肥厚し、端部は丸く終る。62の口縁部の屈曲は緩やかである。	内外両面とも磨滅が著しいが、一部にヘラミガキが認められる。	やや軟質焼成 胎土精良 淡褐色系	
			63・65	18～22.8 — —	口縁部と杯部の境は稜をもって屈曲し、口縁部は外反して丸く終る。口縁部の厚みは杯部と変わらない。	内外両面ともヘラミガキとみられるが、器壁の磨滅が進行する。	やや軟質焼成 微砂粒含む 淡褐色系	
			66・68	20～27.8 — —	杯部は深く丸みをもつ。口縁部はほぼ水平に近い状態で延びる。口縁部の上面は緩やかなカーブを描く。	〃	軟質焼成 胎土精良 赤褐色	
			70		脚部。円筒形の脚部は中央付近から端部にかけて大きく開く形態をもつとみられる。	内外両面とも器壁のヒビ割れが著しく、調整不明。	やや軟質焼成 細砂含む 淡褐色	
		台付壺脚	69	— 3.4 (3.0)	丸みをもつ体部に強く「ハ」字状に開く脚を貼り付ける。	内面ナデ。外面は磨滅により調整不明。	やや軟質焼成 砂粒含む 淡褐色	
	SG18	須恵器	杯身	71	11.6 — — 4.7	ほぼ直線的に外上方にたちあがる身部は深い器形を呈する。底部には直立きみな「ハ」字形の高台を貼り付ける。	身部の内外両面とも回転ナデ調整、底部高台の内側にはヘラ切り痕を未調整のまま残す。	焼成良好 少量の砂粒を含む 暗青灰色
			壺	72	13.6 — — 4.2	なだらかに外反する口縁の端部は上下方向にやや肥厚させ、丸みをもつ。端面の下部は段を有する。	口縁部内外両面とも回転ナデ調整。	焼成良好 少量の砂粒を含む 淡青灰色
TDI	土師器	高杯	73・74	19.4～22.4 — — —	直線的に外上方へたちあがる杯部に大きく屈曲して外反する口縁部をもつ。杯部と口縁部の境には鋭い稜をもつ。	内外両面ともヘラミガキを施したとみられるが、全体に磨滅が進む。口縁部内面の一部にヘラミガキが残る。	やや軟質焼成 砂粒を含む 赤褐色 一部に黒斑	

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
TD17	土師器	脚	75	— — 11.5 (1.1)	脚端部は水平に近い状態で強く「ハ」字状に開く。端部は丸く終る。高杯の脚とみられる。	外面ヘラミガキ。内面ナデ調整。	並焼成 胎土精良 黒色
			76	— — 10.1 (3.2)	短い脚部は「ハ」字状に開く。台付壺に伴うとみられる。	内面はヨコナデ。外面はヘラミガキ。	やや軟質焼成 褐色
TD18	甕	77	15.3 — — (3.0)	「く」字状に外反した口縁は、中央付近で屈曲して外上方へ延びる。	口縁部外面ヨコナデ。内面は磨滅が著しく調整不明。	軟質焼成 砂粒を含む 淡黄褐色	
	脚	78	— — 13.8 (2.0)	「ハ」字状に開く脚の端部はやや内湾きみとなる。端部は面をもつ。	内外両面とも磨滅により調整不明。	軟質焼成 砂粒を含む 淡茶褐色	
TD18 南東肩部掘形	壺	79	— 53.2 — (26.5)	体部はやや扁平な球形を呈する。	体部の上端部内面に指頭圧痕を残す。内外両面とも磨滅が著しく調整不明。	軟質焼成 砂粒を多量に含む 淡褐色	
TD18 北溝	甕	80	18.6 23.6 — (20.3)	体部は球形に近い。口縁は「く」字状に外反して、端部はやや肥厚させ丸く終る。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面ハケメ調整。	やや軟質焼成 砂粒を含む 淡褐色	
	台付鉢	81~83	11.0 12.0 4.8 7.3	球形に近い体部に低い高台を貼り付ける。口縁端部は内湾する。	内外両面ともハケメ調整。高台部分はヨコナデ。	焼成良好 砂粒を含む 褐色	
	高杯	84・85	20.3 — 12.8 —	杯部は深く、緩やかな円弧を描いてたちあがる。口縁部は「く」字状に外反した後、再度屈曲して外上方へ外湾する。脚端接地面は面をもつ。	脚部内面を除きヘラミガキを行う。脚部内面はナデ。	並焼成 砂粒を含む 淡褐色 一部に黒斑	
	脚 (高杯)	86	— — 16.0 (2.0)	「ハ」字状に開く脚端部は面をもち、内端部で接地する。	内外両面ともヒビ割れによる剥落が著しく調整不明。	やや軟質焼成 微砂粒を含む 褐色	
	器台	87・88	21前後 — 14前後 18前後	脚部の大きく広がる器台である。口縁部は屈曲した後上方へ外湾してたちあがる二重口縁をもつ。	87は器壁が磨滅し、調整不明。88の外面はヘラミガキ。88の脚部2か所に円形スキャン孔。	やや軟質焼成 砂粒を含む 淡黄褐色	
		90	10.4 — 8.4 10.3	脚部はあまり広がらず、口縁は屈曲した後、上方へ外湾してたちあがる二重口縁の小形器台である。	台部内面と外面は横方向の丁寧なヘラミガキ。脚部外面下半はハケメ調整。脚部内面ヨコナデ。	焼成良好 砂粒を含む 淡褐色	
	高杯	89	12.8 — — 7.1	杯部は脚に比べて小形で、口縁部は屈曲してたちあがる。脚は大きく広がる形態をもつ。	内外両面とも磨滅により調整不明。	軟質焼成 砂粒を含む 淡褐色	

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考			
RD 2	土師器	甕 91・92	12.8	口縁は二重口縁であり、端部は外反する。体部はやや長胴形を呈し、小さな平底状をなす。口縁部外面には6条の擬凹線を施す。	全体に磨滅が進行するが、体部下半は細いハケメ調整。体部内面はヘラケズリ。	軟質焼成 細砂を含む 淡褐色 口縁と体部に黒斑。			
			14.0						
	1.9	98	12.8				口縁部は「く」字状に外反し、端部は内側にやや肥厚させ丸く終る。体部は砲弾形を呈する。	口縁部ヨコナデ。体部の外面はハケメ調整。内面は上半が横方向のヘラケズリ、下半は縦方向のヘラケズリ。	並焼成 砂粒を含む 淡褐色
	15.6								
	甕 93・94	— — — 2.8~6	底部は平底。	内面はナデ調整、外面は磨滅するが、94にはハケメ調整痕が認められる。	やや軟質焼成 砂粒を含む 淡赤褐色				
台付甕 96~100	11~13 10~12 7~9 11~14	二重口縁の端部は外反きみに終る。底部には強く「ハ」字状に開く高台を貼り付ける。高台部を除き器壁は薄く仕上げる。99の脚部は基部が直立し高い脚をもつ。	体部内面はヘラケズリ。脚部は内面にハケメ調整痕を残すが、97・99はナデ調整を行う。外面はナデ調整。	〃					
脚 101~103	— — 12前後 —	脚部は「ハ」字状に広がる。103は底径が9.6cmと小型であり、端部は内湾して丸く終る。	表裏両面とも磨滅により調整不明。103には輪積み痕跡を残す。	やや軟質焼成 砂粒を含む 褐色系					
RD 5	器台	104・115	15.2 4.4 15.0 16前後	鼓形の器形を呈する。口径と底径はほぼ同一である。104の脚屈曲部4か所に円孔有り。	台部内面はハケメ調整の後ナデ消し。脚部外面はヘラミガキ。内面はナデ。115の脚内外面はハケメ調整。	並焼成 砂粒を含む 淡茶褐色			
	台付甕	105	(11.4) 10.6 7.4 (10.9)	体部は97と比べ浅く、「く」字状に外反する。口縁部は直立する面をもつ。脚部は「ハ」字状に広がる。	内外両面とも磨滅により調整不明。	軟質焼成 細砂を含む 淡褐色			
RD 5 墳丘西裾	壺	106	18.2 — — 5.8	二重口縁部は屈曲して大きく外反するが、内面部分はなだらかな屈曲面をもつ。口縁部外面には波状文+円形浮文を施文する。円形浮文は2個1対で5か所にみられる。口縁の内側端部にも波状文を施文する。	内外面ともヨコナデ。	焼成良好 砂粒を含む 淡黄褐色 黒斑有り			
RD 5 第1主体部		107	14.7 — (3.7)	二重口縁部は大きく屈曲して端部は外反して丸く終る。口縁部に細い11条の擬凹線を施す。	内外両面ともヨコナデ。	焼成良好 胎土精良 淡褐色			
RD 5 ピット内		108	19.0 — — 11.0	二重口縁。口縁端部は屈曲して外反する。体部上半は球形に近い。器壁の厚みは6mmと薄く仕上げる。	口縁部ヨコナデ。体部の外面はハケメ調整。内面は輪積み痕が残り、粗いナデ調整。	硬質焼成 砂粒を含む 淡褐色			

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
	土師器	壺	110・111	7.6 12.2 — (8.9)	緩やかに外反する口縁部は中位に稜をもち、外上方へたちあがる二重口縁をもつ。	口縁部ヨコナデ。体部の外面は調整不明。内面はハケメ調整後に粗いナデ仕上げ。	軟質焼成 砂粒を含む 淡黄褐色
		甕	109	20.1 21.6 — (24.6)	「く」字状に外反する口縁部は、外面中央に鋭い稜をもち、外上方へたちあがる。	口縁部はヨコナデ。体部は外面中央部がヨコハケ。下半はタテハケ。体部内面はヘラケズリ。	焼成良好 砂粒を含む
		底部	112	— — 8.6 (4.1)	底部は平底。	器壁表面は剝離にて調整不明。	軟質焼成 細砂を含む 赤茶褐色
		器台	113～115	22前後 — 10.6 11.7	脚に比べ台部が大形の器形を呈す。口縁部は屈曲した後外湾し、端部は丸く終る。	114の口縁内面はヘラミガキ。台と脚の境部内面はヘラケズリ。	軟質焼成 砂粒を含む 淡黄褐色
			116	8.4 — 10.1 7.0	脚に比べ小型の台部をもつ。口縁部は水平に近い状態で広がる。	器壁は磨滅により調整は不明な点が多いが、脚部外面はヘラミガキを行う。	並焼成 砂粒を含む 淡褐色
		脚	117	— — 12.5 (2.2)	高杯の脚とみられる。脚は大きく「ハ」字状に広がる。端部は肥厚して終る。	外面はハケメ調整。内面はナデ調整。	やや軟質焼成 砂粒を含む 褐色
			118	— — 9.5 (4.5)	脚基部は柱状を呈し、脚端部はなだらかに広がる。3か所に円孔。	内外両面ともヒビ割れ著しく調整不明。	やや軟質焼成 細砂を含む 褐色
RD12 主体部	須恵器	杯蓋	119・121	13.0 — — 4.1	天井部は丸みをもつ。口縁部は直立する(121)とわずかに内湾する(119)がある。口縁端部は凹面をもち、119では内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部はヘラケズリ。	焼成良好 胎土精良 外面黒灰色 内面青灰色
		杯身	120・122	11前後 — — 5前後	内傾してたちあがる口縁の端部は内傾する段を有す。底部は半球形に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部約1/2までヘラケズリ。	焼成良好 胎土精良 淡青灰色
RD12 側溝	甕	123	— 9.6 — (8.1)	口頸基部は大きく外反し、体部は球形に近い。頸部には波状文・体部中央には上下2本の沈線に画された刺突文を施文。体部文様帯上に円形孔を斜めに穿孔。	体部文様帯の下部は回転ヘラケズリ。体部下半は手持ちによるヘラケズリ。	焼成良好 胎土精良 灰黒色	
DD13	器台	124	— — 18.8 (13.1)	脚部のみ。脚の広がり弱く、端面は内傾する。沈線によって画された3段の文様帯には波状文とともに長方形・三角形のスカシ窓をもつ。脚端部に文様帯はもたない。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。	焼成良好 若干の砂粒を含む 内面黒灰色 外面淡灰色	

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
DD1	土師器	壺	125	16.5 (20.6) — (13.1)	二重口縁。口縁部は途中稜をもって大きく外湾する。体部は球形に近い。	口縁部と体部外面はナデ。体部内面の一部にハケメ。体部に輪積み痕を残す。	やや軟質焼成砂粒を含む
DD7 第3主体部			126	6.2 7.8 2.0 9.2	口縁部は緩やかに外上方へたちあがる。体部は球形に近く、小さな平底をもつ。	内外両面ともヨコナデ。粘土紐の痕跡を内面に残す。	硬質焼成胎土精良赤褐色
DD5	須恵器	杯蓋	127	11.8 — 4.1	口縁部は直下に下がり、端部は内傾する。天井部は丸みをもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部2/3まで回転ヘラケズリ。	硬質焼成胎土精良外面暗緑色内面青灰色
			杯身	128	8.2 — 4.4	内傾してたちあがる口縁の端部は明瞭な内傾する段を有す。底部は丸みをもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部下半1/2まで回転ヘラケズリ。
DD5 第2主体部		杯蓋	129	11.9 — 4.4	口縁部は直下に下がり、端部はやや内傾する平面を有す。天井部は丸みをもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部2/3まで回転ヘラケズリ。	〃
			杯身	130	10.0 — 5.3	内傾してたちあがる口縁の端部は内傾する平面をもつ。底部は半球形に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部下半2/3まで回転ヘラケズリ。
DD5	土師器	口縁	131	14.1 — 1.3	外上方に広がる口縁部。端部は丸く終る。	内外両面とも磨滅により調整不明。	軟質焼成若干の砂粒を含む淡灰褐色
			132	— — —	なだらかに外反する口縁。端部は面をもつ。	〃	軟質焼成砂粒を含む淡褐色
		壺	133	6.4 7.6 — 5.0	直立ぎみの口縁は、端部でゆるやかに外反して丸く終る。体部は丸み強い。	〃	軟質焼成砂粒を含む淡赤褐色
		鉢	134	12.8 11.0 — 3.5	外反する口縁は屈曲して直立する。口縁端部外面に3条の擬凹線。	〃	並焼成砂粒を含む暗褐色
DD5 盛土内			136・137	16.1 14.0 (2.3) —	外反する口縁部は内湾ぎみにたちあがる。体部は砲弾形を呈し小さな平底がつく。口縁端部外面に4条の擬凹線。	体部外面はハケメ調整。内面はヘラケズリ。	焼成良好砂粒を多く含む黄褐色
		器台	138・139	16~17 — — —	口縁端部は屈曲して外上方へたちあがる。口縁端部外面には6~8条の擬凹線。	外面ヘラミガキ。内面ナデ。	並焼成細砂を含む淡褐色
		脚	140・141	— — 14~15 —	脚は「ハ」字状に開く。端部は140では面をもつが、141は丸みをもつて終る。	外面はヘラミガキ。140の内面はハケメ調整後に粗いミガキを部分的に施す。	軟質焼成砂粒を含む淡赤褐色

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
DD5 盛土内	土師器 高杯	142	16.1 — (3.1)	口縁部は直立し、外面には2条の擬凹線を施す。	内外両面とも磨滅により調整不明。	軟質焼成少量の砂粒を含む褐色
		143	— — 12.4 (10.8)	脚は下半部から大きく「ハ」字状に広がる。端部は丸みのある面をもつ。	内外両面とも磨滅するが、内面の一部にハケメが認められる。	〃
DD6	高杯	144	— — 16.3 (9.8)	脚部は「ハ」字状に広がる。基部から端部にかけて器壁は次第に薄くする。	外面はヘラミガキ。端部近くのヘラミガキは斜方向に細く施す。内面はハケメ調整。端部付近のハケメは横方向に施す。	焼成良好胎土精良淡赤褐色145(壺棺)の蓋に転用の蓋に転用
	壺	145	— 40.2 6.0 (33.1)	体部は胴が張り、玉子形を呈す。体部に比べ小さな口頸部が付く。底部には小さな平底が付く。底部近くに長径8cmの楕円形孔を焼成後に穿つ。	粒土紐の輪積み。体部外面はハケメ調整の後、ヘラミガキ。ヘラミガキは頸部と体部下半分に集中し、体部中央付近にも一部みられる。内面は斜方向のハケメ調整。	焼成良好胎土精良内面灰黒色外面赤褐色壺棺に使用
	甕	146	14.4 13.1 — (7.2)	二重口縁。「く」字状に外反する口縁は、屈曲して外上方へ延び、端部は外反きみに終る。口縁部に3条の擬凹線。	体部内面はヘラケズリ。体部上端に指頭圧痕。体部外面は磨滅により調整不明。	並焼成砂粒を含む褐色
		147	14.2 13.0 — (9.9)	二重口縁。「く」字状に外反する口縁部は、屈曲した後直立きみにたちあがる。口縁部に4条の擬凹線。	体部外面は細いハケメ調整。内面は体部上端までヘラケズリ。	やや軟質焼成砂粒を含む淡黄褐色
	DD6 第5主体部	高杯	148	15.0 12.8 3.2 12.7	二重口縁。「く」字状に外反する口縁部は、屈曲した後やや外上方へ延びる。口縁部に3条の擬凹線。	体部外面はタタキを行ったとみられるが、ナデ消しのため細部不明。ナデ消しの後、体部中央を除きさらにヘラミガキを行う。口縁部内面はヘラミガキ。体部内面は上端部までヘラケズリの後、ナデ仕上げ。
149			13.4 — 8.3 8.8	外上方にやや丸みをもってたちあがる杯部の口縁は、やや屈曲して内傾する。脚は下半部が大きく「ハ」字状に広がる。	外面はハケメ調整の後ヘラミガキ。杯部内面はヘラミガキ。脚内面はハケメ調整。	並焼成胎土精良
	高杯	150・151	19.2~25.8 — — (18.3)	杯部は深く、口縁部は一旦「く」字状に外反した後、外上方へさらに屈曲する二重口縁をもつ。脚は中央付近から下半部が大きく広がる形態をとる。口縁部外面に4~5条の擬凹線。	脚部内面を除き、すべてヘラミガキ。	並焼成砂粒を含む淡赤褐色

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
DD6 第5主体部	土師器 高杯	152	— — 16.9 (6.8)	脚部は「ハ」字状に広がり端部は丸く終る。	外面は丁寧なヘラミガキ。内面はやや粗いヘラミガキ。	並焼成 胎土精良 淡赤褐色
		153	— — — (6.3)	脚は中央付近から下半部が「ハ」字状に広がる形態をとる。杯と脚の接合部は薄く仕上げる。	外面は丁寧なヘラミガキ。内面はシボリ痕を残す。	〃
	器台	154	21.2 — — (8.3)	大きく外湾する台部をもち口縁は屈曲して外上方へ延びる。口縁部外面に5条の擬凹線。	内外両面とも丁寧なヘラミガキ。	焼成良好 胎土精良 赤茶褐色
		155	21.1 — 15.7 19.4	鼓状の器形を呈し、口縁部は屈曲した後、外湾きみにたちあがる。口縁部外面に4条の擬凹線。脚部に円孔2か所。	内外両面とも磨滅がみられるが、外面にはヘラミガキが認められる。	軟質焼成 砂粒を含む
	脚	156	— — 16.1 (4.1)	脚部は強く「ハ」字状に広がる形態をもつ。	内外両面とも磨滅により調整不明。	〃
DD21 第2主体部	甕	157	12.5 (10.9) — (4.3)	二重口縁。口縁部は「く」字状に外反した後、外上方へ屈曲する。	〃	並焼成 微砂粒含む 淡赤褐色
		158	— — 3.4 (4.8)	底部は小さな平底。	体部外面はハケメ調整。内面はヘラケズリ。	やや軟質焼成 砂粒を含む 褐色
DD4	器台	159	16.7 — — (1.8)	二重口縁。口縁端部は外上方へたちあがり、外面に4条の擬凹線を施す。	内外両面とも磨滅により調整不明。	〃
		160	12.9 — — (1.9)	二重口縁。口縁端部は屈曲し、直立きみにたちあがり外面に2条の擬凹線を施す。	〃	〃
	壺	161	— — 6.9 (3.4)	底部は平底。	内面は丁寧なハケメ調整。外面は調整不明。	軟質焼成 砂粒を含む
	器台	163	15.4 — 12.6 11.6	口縁部は一旦水平面をつくり、大きく屈曲した後さらに外湾する。脚部はなだらかに広がるが、下端付近ではさらに強く開き、端部は丸みをもった面をもつ。	脚部内面を除き、すべてヘラミガキ。脚部内面はナデ調整。	並焼成 砂粒を含む 茶褐色
	高杯	164・ 165	— — — (9~10.3)	脚部は下半分が「ハ」字状に広がる。	外面はヘラミガキ。脚部内面にシボリ痕を残す。	〃

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
DD 4・5 溝中	須恵器	甗	166	15.4 18.1 (17.1)	口頸部は大きく外反させ、口縁部は内傾する。端部は内傾し、段をもつ。口頸部には2条の波状文帯をもつ。体部はやや扁平な球形を呈する。体部中央には凹線によって画された波状文帯をもち円孔1か所が存在する。	マキアゲ・ミズビキ成形。	焼成良好 砂粒を含む 青灰色
			DD 4	167	9.4 12.8 — 14.4	口頸部の外反は弱く、直立きみになる。中央付近に沈線により画された波状文帯をもつ。体部は球形に近いが底部は尖がりきみになる。中央付近に凹線により画された刺突文帯をもつ。破片の出土であるため、円孔部不明。	〃
DD21	土師器	高杯	162	— — 16.4 (16.6)	脚部は下半部分が「ハ」字状に広がる。端部はやや肥厚させ、面をもって終る。脚の裾付近に円孔4か所。	脚上半部には粘土にねじりが加えられている。脚部内面はヨコナデ。	やや軟質焼成 胎土精良 淡黄褐色
DD22			168・ 169	17~22.5 — — —	口縁部は大きく外反し、端部は丸みをもって終る。	内外両面とも磨滅により調整不明。168の口縁部外面の一部にヘラミガキの痕跡が残る。	軟質焼成 胎土精良 淡褐色
		口縁	170	14.2 — — (2.1)	やや外反する口縁部。細片での出土であり、器種不明。	内外両面とも磨滅により調整不明。	〃
		甗	171	14.3 — — (1.6)	二重口縁。口縁部は屈曲して外上方へたちあがる。	〃	並焼成 砂粒を含む
			172	15.4 12.3 — (5.3)	二重口縁。口縁は「く」字状に外反し、端部はやや内傾する。口縁部外面は大きく屈曲する。体部と頸部の幅は大差ない。	体部内面は頸部までヘラケズリ。体部外面は調整不明。	焼成良好 砂粒を含む
			173	16.9 — — (3.3)	二重口縁。口縁は「く」字状に外反し、さらに屈曲した後外上方へたちあがる。端部は内側を丸く仕上げる。口縁部外面に3条の擬凹線。	内外両面とも磨滅により調整不明。	〃
		高杯	174	11.0 — — (1.7)	丸みをもった杯部に外湾する口縁をもつ。	〃	やや軟質焼成 胎土精良

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
DD22	土師器	高杯	175~179	16.2~21.5 — —	丸みをもってたちあがってきた杯部は、一旦上方へたちあがった後、屈曲してさらに外上方へたちあがる。口縁部外面には4条の擬凹線を施文。	内外両面とも磨滅が進行し調整は不明。179の杯内面に一部ヘラミガキ痕跡が残る。	軟質焼成 胎土精良 褐色系
			181~184	— — 5.5~10.6	脚は下半部分が大きく広がる形態をとる。184の脚裾付近に2か所の円孔を穿つ。	外面はヘラミガキ。内面上半部分にはシボリ痕をとどめる。脚裾の内面はハケメ調整。184では内面中央部をハケメ調整後にヘラケズリを行う。	やや軟質焼成 胎土精良 褐色系
	脚	185~187	— — 14.6~15.8	脚部は「ハ」字状に広がる。脚端部は丸みをもつが、185・187は面をもつ。	内外両面ともハケメ調整を行う。186の外面は調整不明。	並焼成 胎土精良 褐色系	
		188~191	— — 14.5~17.3	脚部は「ハ」字状に広がる。脚端部はやや内傾し、外面に面をもつ。	内外両面ともハケメ調整を行う。189は磨滅により調整不明。	〃	
		192~194	— — 14.7~15.5	脚部は「ハ」字状に広がる。脚端部は強く内傾して終る。192は2か所・193は3か所の円孔を裾部にもつ。	内外両面ともハケメ調整を行う。193の外面は磨滅により調整不明。	やや軟質焼成 胎土精良 褐色系 175タイプの脚とみられる。	
		180	— — (5.5)	杯部はなだらかにたちあがる。脚は基部付近から直ぐに広がる形態をもつ。	内外両面とも細いヒビ割れにより調整不明。	やや軟質焼成 胎土精良 褐色	
DD23	須恵器	甕	195	20.9 — (4.8)	直立ぎみの口縁は端部が大きく外反する。端部の外面は凹面をもつ。	口縁部ナデ調整。	硬質焼成 砂粒を含む 淡青灰色
			杯蓋	196	12.5 — (3.3)	天井部は平坦。口縁部は直下にかかるが、端部はやや広がる。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面はヘラケズリ。
DD 16・17 間の溝 内							

・法量は上から口径・体部幅・底径・器高であり、単位はcmである。()内は残存数値。

・縮尺は1/4を基本としたが、79は1/8縮尺である。

付表5 墳墓出土鉄製品観察表

名称	No	出土遺構	法 量		形 態 の 特 徴	備 考
			全長	各 部		
鍬	51-1	T T 1-2	77	鍬身長54・鍬身幅29・鍬身厚5・腸扶長21・腸扶幅38・茎長23・茎幅6	平根式鉄鍬。鍬身部は鉄剣状をなし、大型である。鍬身下端に外反する方形の腸扶がある。腸扶端は外方に鋭く尖る。方柱状の茎が付き、尖らずに終る。	木質はなし。
	51-2		74	鍬身長52・鍬身幅28・鍬身厚5・腸扶長22	平根式鉄鍬。鍬身部は鉄剣状をなすが51-1ほど肩をはずし、なだらかで腸扶端は外方にやや尖りぎみに終る。	片方の腸扶と茎部欠損。
	51-3	R D 9	90	鍬身長90・鍬身幅34・鍬身厚3	柳葉形平根式鉄鍬。鍬身部は薄いレンズ状を呈し、平面形は鉄剣状をなす。切先の肩部はよく張っている。鍬身基部はなだらかに細くなり、茎部へと続く。茎部は方柱状を呈するとみられる。	茎部欠損
鉞	51-4	T T 1-2	228	刃長30・刃幅10・刃厚2・箆被長198 箆被幅10・箆被厚3	幅は狭く先端は鋭く尖る。刃部はゆるやかに外反するが、スプーン状にフックはしない。刃部と同一幅の長い板状の茎部を有する。	茎部の一部に木質、錆化し残る。
	51-5	T T 1-2	78	茎長78・茎幅4～7・茎厚4	方柱状をなす茎部。上方に近づくにつれて細くなる。	刃部欠損。
	51-6		140	茎長140・茎幅6・茎厚5	方柱状をなす茎部。下端部は細くなって終わる。	木質なし。上半部錆化著しい。刃部欠損。
	51-7		220	茎長220・茎幅5～7・茎厚5	方柱状をなす長い茎。上端近くで大きく屈曲し平たくなる。	一部に木質錆化し残る。
	51-8		125	刃長25・刃幅10・刃厚2・茎長100・茎幅10・茎厚3	刃部はやや内湾し若干そっている。刃部と箆被は同一幅で続く。刃部は剣身形をなす。茎は板状をなし長い。	刃部先端。茎端部欠損。木質が錆化し残る。
	51-9	T T 3	142	茎長142・茎幅9・茎厚3	板状をなす茎部。幅はほぼ一定。	刃部欠損。木質なし。
	51-10	T T 1-2	172	茎長172・茎幅4～9・茎厚4～7	方柱状をなす茎部。上方で大きく屈曲する。	刃部欠損。木質なし。茎部下方に突起物があるが錆とみられる。
	鋤	51-11	S G 10	98	刃幅(18)・刃厚3・風呂幅8	U字形鋤先。全体の形状は方形に近く、外縁から刃先にかけて厚みは薄くなる。刃先の両端は多少角ばって耳部に接すると思われる。内縁は深くU字形に入り込み、風呂をつくる。風呂のはめこみ溝は両端までのびる。
51-12		R D 6	87	刃長18・上端幅102・刃厚3・風呂幅8	U字形鋤先。刃先と耳部の幅がほぼ等しい。刃部は薄く曲線の刃をもつ。交状に開く風呂は刃部は狭く、耳部において広くなる。	

名称	No	出土遺構	法 量		形 態 の 特 徴	備 考
			全長	各 部		
鍬	51-13	R D 3-3	135	鍬身長24・鍬身幅13・鍬身厚3・篋被長91・篋被幅5・茎長20	柳葉式鉄鍬。鍬身は片面に稜をもつ剣身状をなし、長い方柱状の篋被がつく。篋被の上部には逆刺をもつ。茎は段をつけて細く尖る。	茎部に木質錆化し矢柄の痕跡を残す。51-13~19も同一型式である。
	51-20		123	鍬身長30~35・鍬身幅10~14・篋被長95・篋被幅5・篋被厚3	柳葉式鉄鍬。鍬身は片面に稜をもつ剣身状をなし、長い方柱状の篋被がつく。篋被の上部には逆刺をもつ。茎は段をつけて細く尖る。	7本が錆着している。茎部に木質が錆化し矢柄の痕跡を残す。
刀子	51-21	R D 3-1	116	刃長74・刃幅17・刃厚3・茎長42・茎幅10・茎厚3	刀身は茎基部より切先にかけて次第に幅を減じる。扁平で長い茎部をもつ。	刀身の一部と茎部に木質が錆化し残る。
鍬	51-22	R D 7-1	49	鍬身長26・鍬身幅14・鍬身厚4・篋被幅6	柳葉式鉄鍬。鍬身は剣身状をなしているが、下端はなだらかに篋被に続く。	表面の錆化著しい。51-25~28も同一型式である。
	51-23		75	鍬身長32・鍬身幅11・鍬身厚3・篋被幅6	柳葉式鉄鍬。51-22と同一型であるが、鍬身幅がやや狭く、鍬身長もやや長めのタイプである。	
	51-24		126	鍬身長25~30・鍬身幅8~13・鍬身厚4	柳葉式鉄鍬。51-23と同一型である。	9本分が錆着する。茎部には木質が錆化し矢柄の痕跡をよく残している。
	51-28		71		柳葉式鉄鍬。篋被と茎部のみ。	4本分が錆着。矢柄幅10mm。
鎌	52-29	T D 18	188 (推定)	先端部幅11・基部幅35・厚3・折曲げ高4	曲刃鎌。刃は内反りし、刃先が尖る。刃部に対し折り返し付90°で直交する。	中央部の一部欠損。刃部に軟玉製管玉(長さ11mm・幅3mm)錆着。
鍬	52-30	R D 13	207	鍬身長42・鍬身幅11・篋被幅6・茎幅6・茎厚3	柳葉腸扶式鉄鍬。鍬身は剣身状をなし、鍬身下端を深く切り込み、その先端を僅かに外反させ逆刺とする。篋被は方柱状で茎部は不明であるが、段をつけ細くなると推定される。	茎部に木質錆化し、矢柄の痕跡がよくのこっている。52-31も同種であり鍬身の長さとのみ異なる。
	52-32		164	鍬身長26・鍬身幅14・鍬身厚3・篋被長97・篋被幅6・茎長41・茎厚4	柳葉式鉄鍬。鍬身は扁平な剣身状をなし、方柱状の篋被が続く。鍬身の下方に鋭利な逆刺が存在する。茎は段をつけて細くなる。	茎部木質錆化し、残る。52-33~39も同一形態である。
	52-40		147	鍬身長46・鍬身幅10・鍬身厚3・篋被長83・篋被幅7	柳葉腸扶式鉄鍬。鍬身は扁平で刀子状をなし、鍬身下端を切り込み逆刺をつくる。篋被は方柱状をなす。	茎部に木質錆化し、矢柄の痕跡をよくのこす。52-43と錆着する。
	52-41		203	鍬身長49・鍬身幅10・鍬身厚3・篋被長86・篋被幅7	柳葉腸扶式鉄鍬。鍬身は刀子状をなし、先端は切先状に角度をもつ。鍬身下端を深く切り込み逆刺をつくる。篋被は方柱状をなす。茎は段をつけて細く尖る。	木質錆化し、矢柄の痕跡をよく残す。

名称	No	出土遺構	法 量		形 態 の 特 徴	備 考
			全長	各 部		
鏃	52-42	R D 13	197	鏃身長35・鏃身幅9・鏃身厚3・篋被長85・篋被幅7・茎径3	柳葉腸扶式鉄鏃。鏃身は刀子状をなし、先端は切先状に角度をもつ。鏃身下端を深く切り込み逆刺をつくるが逆刺は細い。篋被は方柱状をなす。茎は段をつけて細く尖る。	矢柄の木質錆化によりふくらむ。矢柄本来の厚みは8mm
	52-43		145	鏃身長55・鏃身幅7・鏃身厚3・篋被長53・篋被幅6・茎幅4・茎厚3	柳葉腸扶式鉄鏃。鏃身は幅狭く刀子状をなす。切先の角度は大きい。鏃身と篋被の境は明瞭でないが、境にあたる所に逆刺が認められる。篋被は方柱状であり、茎は段をつけて細く尖る。	
	52-44		156	鏃身長48・鏃身幅9・鏃身厚3・篋被長70・篋被幅6・茎幅5・茎厚5	柳葉腸扶式鉄鏃。鏃身は剣先状をなし薄い。鏃身下端の一方に深い切り込みをもち逆刺をつくる。篋被は方柱状をなし、茎は段をつけて細く尖る。	木質錆化し矢柄の痕跡をよく残す。
	52-45		124	鏃身長37・鏃身幅11・鏃身厚3・篋被長87・篋被幅8	柳葉腸扶式鉄鏃。鏃身は薄く刀子状をなす。鏃身の下端を深く切り込み逆刺をつくる。篋被は方柱状をなす。	篋被下端より欠損。
	52-46		103	刀身長75・刀身幅12・刀身厚2・茎幅7・茎厚2	刀部は鋒においてやや外反し鋭く尖る。刀身は薄く三角形をなす。茎は刀身より厚く扁平である。	把部に木質が錆化し残る。
鉞	52-47		72	刃部長45・刃部幅9・刃部厚2	刃部薄くU字形に内湾し鋭く尖る。さらに刃部は全体に湾曲する。刃部に続く茎部は板状であり幅も一定している。	茎端部欠損。茎部に木質錆化し残る。
	52-48		62	刃部長32・刃部幅8・刃部厚2	刃部薄くU字形に大きく内湾する。刃部先端欠損するが、鋭く尖るとみられる。刃部は茎部の境から大きく外反する。茎部の幅は一定している。	刃部先端・茎部端欠損。茎部木質錆化し良好に残る。52-47よりやや小型品。
	52-49		42	刃部長20・刃部幅11・刃部厚3	刃部はU字形に内湾する。刃部は鋭く尖るとみられる。	刃部先端・茎部欠損。
	52-50		34	茎長34・茎幅14・茎厚2	薄い板状をなす。幅はほぼ一定でやや湾曲する。	茎部のみ。木質一部錆化し残る。
	52-51		50	茎長50・茎幅15・茎厚4	板状をなし、茎端部は丸く終わる。	茎部のみ。木質は錆化し厚く残る。
	52-52		101	茎長75・茎幅7・茎厚3	茎部は方柱状をなす。	茎部のみ。一部に木質が錆化し残る。
刀子	52-53	DD 13	116	刃長77・刃幅13・刃厚3・茎長37・茎幅10・茎厚3	刃幅は鋒に近づくに従って狭まり、関部において最大幅をもつ。刃部断面は三角形を呈する。関部には鐮状の突起が認められる。茎部は板状を呈する。	刃部に鞘等の痕跡は認められず、把部に木質が錆化し残る。

名称	No	出土遺構	法 量		形 態 の 特 徴	備 考
			全長	各 部		
鉋	52-54	DD 4-1	87	刃長15・刃幅8・ 刃厚2・茎長63・ 茎幅9・茎厚3	刃部断面はゆるく湾曲し、刃部先端は鋭く尖り、スプーン状にフックする。茎部は方柱状を呈する。茎端部はやや細くなる。	茎部の一部に木質が錆化し残る。
	52-55	DD 4-7	61	茎長61・茎幅9・ 茎厚3	板状の茎部。幅はほぼ一定。	茎部のみ。木質が錆化し残る。
鎌	52-56	DD 5-2	54	鎌身長37・鎌身幅32・鎌身厚3	平根式鉄鎌。平面的で大型である。大きな腸袂を有し、その先端はやや内湾きみに突る。	茎と一方の腸袂を欠損する。
	52-57	DD 6-6	100	篋被長100・篋被幅17・篋被厚4	方柱状を呈する。	鎌身・茎部欠損。
斧頭	52-58	RD 13	31	袋部長径31・袋部短径28	無肩式。厚さ2mmの薄い鉄板を使用し、上方部の両側を鉋打し、U字形に折り曲げて木台部の受け口をつくる。刃部は袋部に対しやや広がるとみられる。	袋部上端より内部へ15mmまで木質が錆化し残る。刃部欠損。形状等から手斧様の用途が考えられる。
	52-59		52	刃長40・袋部径13	無肩式。薄い鉄板を使用し、上方部の両側を鉋打し、ほぼ円形の袋部をつくる。袋部下端は鉋打により平たく終わる。	袋部内に円棒状の木質錆化し残る。形状等から手斧と考えられる。
	52-60		103	刃長40・刃部厚10・袋部長径35・短径24	無肩式。刃をつけた分厚い鉄板の上半部を鍛延して筒状の袋部をつくる。刃部端が若干幅広い。袋部は楕円形を呈する。	袋内部に木質錆化し残る。全体に錆化著しい。
鎌	53-61	DD 24	142	鎌身長29・鎌身幅14・鎌身厚3・篋被長61・篋被幅8・茎長37	柳葉式鉄鎌。鎌身は剣身状をなす。鎌身部の断面はレンズ状で稜はもたない。関部は若干内に入り浅い逆刺様につくる。方柱状の篋被が続き、茎部は段をつけて細くなる。	茎部には木質が錆化し矢柄の痕跡を良く残す。矢柄には細い樹皮がまきつけられている。
	53-62		102	鎌身長35・鎌身幅13・鎌身厚2・篋被長69・篋被幅8・篋被厚3	切先はあまり鋭くなく平たい楕円形の鎌身をもつ。鎌身と篋被部の境は明瞭でなく、鎌身はなだらかに篋被につながる。篋被は平たく、方柱状をなす。茎部は段をつける。	茎部を欠損。篋被下端に若干木質残る。
	53-63		126	鎌身長25・鎌身幅14・鎌身厚3・篋被長93・篋被幅6・篋被厚4	椿葉式鉄鎌。鎌身は剣身状をなすが柳葉式鉄鎌よりやや幅広である。関部はほぼ直角である。平たい方柱状の篋被がつき、茎は段をつけ細くなる。	53-62と同一型鎌1本と錆着する。茎部に木質錆化し残る。
	53-64		105	鎌身長35・鎌身幅14・鎌身厚3・篋被長70・篋被幅7・篋被厚4	鎌身の切先は丸味を帯びる。	3本が錆着する。

名称	No	出土遺構	法 量		形態の特徴	備考
			全長	各部		
鏃	53-65	DD 24				12本が錆着する。53-61～64タイプが認められる。
刀	53-66	TT 1-3	352	刀身長(244)・刃身幅26・刃身厚6・茎長108・茎幅13・茎厚5	平造り。刀身断面は三角形で錆はもたない。関は刃側にのみ存在する。茎の中央付近に目釘孔が一孔穿たれている。	切先部欠損。刀身部に木質錆着。木目は刃に斜行する。
	53-67	RD11-2	724	刀身長598・刀身幅28・刀身厚7・茎長129・茎幅15	平造り。刀身断面は三角形で錆はもたない。関は刃側にのみ存在する。刀身は若干内返りしている。茎の端部近くに目釘孔が1孔穿たれている。	刀身部に木質が錆化し残ることから、鞘の装着があったとみられる。
	53-68	RD11-2	736	刀身長614・刀身幅28・刀身厚8・茎長152・茎幅18	平造り。刀身断面は三角形で錆はもたない。	刀身の一部に木質が錆化して残ることから、鞘の装着があったとみられる。
	53-69	RD 13	886	刀身長720・刀身幅28・刀身厚8・茎長166・茎幅22	平造り。刀身断面は三角形で錆はもたない。関は刃側にのみ存在する。刀身は若干内返りしている。茎に目釘孔は認められず。茎端は背側が幅6mmの方柱状に45mm突出する。	刀身の一部に木質が錆化して残ることから、鞘の装着があったとみられる。錆化著しい。
剣	54-70	RD 3-2	(480)	剣身長338・剣身幅28・厚6・茎長92・茎幅19	両刃。両関。断面はレンズ状を呈する。茎は扁平で目釘孔2孔有り。	剣身一部欠損。
	54-71	RD 7-1	(530)	剣身長(435)・剣身幅32・厚6・茎長95・茎幅22	両刃。断面はレンズ状を呈する。関は認められずなだらかに茎へ続く。茎は扁平で目釘孔2孔有り。	剣身一部欠損。剣身・茎共に木質錆化し残る。
	54-72	TT 1-1	233	剣身長219・剣身幅35・厚4・茎長24・茎幅14	両刃。両関。断面はレンズ状を呈する。茎は扁平である。目釘孔は不明。	剣身・茎共に木質錆化。剣身の関近くに細い布目痕有り。
	54-73	DD 5-4	356	剣身長309・剣身幅35・厚5・茎長47・茎幅20	両刃。両関。断面はレンズ状を呈する。茎は扁平で目釘孔2孔有り。	茎端部欠損。
	54-74	DD 4-7	(234)	先端剣身幅30・基部剣身幅22・先端部厚8・基部厚5・茎幅18	両刃。断面はレンズ状を呈する。先端付近は幅広で厚く、基部にかけて狭く薄くなる。	剣身の基部以下欠損。錆化著しい。
	54-75	RD 9	394	剣身長336・剣身幅20・厚6・茎長58・茎幅18	両刃。両関。断面はレンズ状を呈する。茎は扁平で目釘孔1孔有り。	木質は認められない。
	54-76	DD22-1	(74)	剣身長(74)・剣身幅18・厚5	両刃。断面はレンズ状を呈する。	剣身中央部のみ。一部に木質錆化する。

名称	No	出土遺構	法 量		形 態 の 特 徴	備 考
			全長	各 部		
剣	54-77	T D 16	287	剣身長 243・刀身幅20・厚6・茎長46・茎幅18	両刃。両関。断面はレンズ状を呈する。茎は扁平で目釘孔は不明。	剣身の一部に粗い布目痕有り。
	54-78	R D 13	(220)	剣身長(184)・剣身幅20・厚6・茎長46・茎幅18	両刃。両関。断面はレンズ状を呈する。茎は扁平で目釘孔は不明。	先端部・茎端部欠損。剣身・茎部に木質錆着有り。

- 法量の単位は、すべてmmである。()内は残存数値。
- 完形品は少なく、法量は現存長を含む。

第4章 狸谷城跡の調査

第1節 狸谷城跡第II地点(TD II)(第2図)

第II区の尾根最高所に位置しており、尾根専有面積は最大であるが、平坦面ではなく緩い傾斜で南下がりとなっている。北側は急崖の自然地形を呈し、南・東・西側は3～4段の段々畑として開墾を受けている。そのため畝跡が全面に残されていた。TD III地点を本丸跡、IV地点以西を二の丸、三の丸とするならば東丸と考えられる部分に相当する。

調査は城跡に関係する遺構検出に努力したが、全く遺構・遺物等は確認されず、平坦部分を造成したのは段々畑同様、開墾時であったことが判明した。江戸時代初期に比定される陶器・磁器の細片を若干検出したのみである。

第2節 狸谷城跡第III地点(TD III)(第2図)

(1) 立地と外形

TK17号墳から南西へのびる狭小な尾根が急に広がる尾根頂部に位置し、現水田面からの比高約25mを測る。この尾根頂部の急に広がる所に自然地形の高まりを削平し、その削平した土砂を丘陵斜面に盛土を施し、20m×30mの平坦地を成形する。北東側の尾根幅が急に広がる部分には尾根に直交する形で、掘り切りようの部分がみられ、その南西側には掘り切りを築造した際に出た土砂により、高さ1.2m程盛土を施した土塁上の高まりがみられた。また平坦部分北西辺下部には、上部平坦部分に平行する形で幅4mの馬走り様の施設がみられた。平端部南西側では一段下がった所に、径10m程の古墳状隆起部分も観察された。一方、主尾根は北東方向からのびてきたものであるが、この地TD III地点で西方にその主軸を転じるが、方向を転じた部分はTD IV地点となっており、20m×30m程度の平坦部分が2段にわたり築造されている。その2段にわたる平坦部の高位側平坦部では、天保年間の墓石がみられる。城跡として考えるならばTD III地点が本丸、IV地点が二丸、三丸と北西側へと続いていく形態の城跡が考えられる。城跡としては、東西南北方向を急崖な自然地形によって形成された丘陵頂部に立地しているため、防御施設という点では非常に有利である。また和久川によって形成された沖積平野の両端を見渡すことができることや当地のすぐ南西下に現在の向野集落を経て、福知山市街地に出られる中山道が存在する、交通の要地で中世山城として、重要な位置をしめている。

TD III地点は比較的広い平坦面積をもち、平坦部北東側には土塁状の施設をも付帯して

いたが、当地以東で大規模な畑地開墾が行われていたように、この地も平坦部全域に尾根筋に直行する畝跡が残っていた。ただ平坦部北西辺の中央よりやや南西寄り部分では5m×2.5mの長方形に約30cm土盛りを施し、上部に河原石の集石をもっている。この長方形土盛周辺は溝状の施設をもつため畑地として利用されておらず、また畝跡の存在も認められず、特別の場所とされていたようで中世墓等の存在の可能性をもっていた。

(2) 検出遺構(図版第34)

調査の結果、中世城跡に関係する遺構・遺物は全く検出されなかったが、江戸時代に比定される遺構及び若干の遺物細片が検出された。

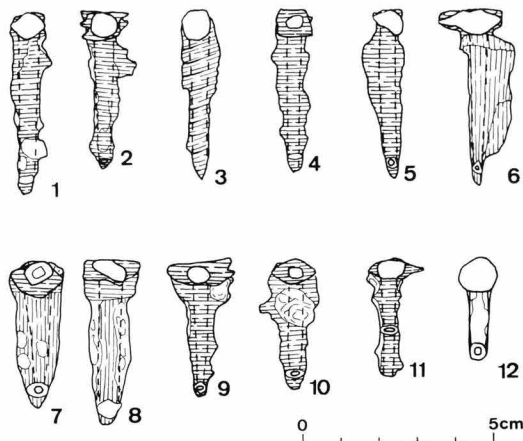
遺構は墓跡5か所、火葬場と思われる遺構1か所、意味不明土坑2か所、不規則に並ぶ柱穴17か所を検出した。

墓跡1・2・3(図版第34.1)

平坦部北西辺中央よりやや南西寄り部分で畑地として開墾を受けず、5m×2.5mの長方形を呈し、高さ30cm程の土盛りが施されている部分で検出したものである。南西側盛土上面には北西辺の1部と南西辺の1部に方形に区画していたかのような拳大の河原石の配石らしきものが存在している。また南東辺側には拳大の河原石の集石が見られたが、北東側の表面においては、何ら観察できなかった。

調査の結果、表面でみられた集積部分を無視した形で3か所の墓塚を検出した。墓塚は地山削平面から自然地形の斜面に盛土を施した後、墓塚を穿ち更に2層にわたる0.4mの盛土を施してマウンド状の墓を形成する。墓塚は、長方形に区画されたマウンドの南西辺付近のみ埋葬されており、中央部・北東辺付近には墓塚はみられなかった。

墓塚1 3基確認した中で最も北西辺寄りで検出したもので、盛土上面の区画配石の北



第23図 出土遺物実測図

西コーナー部分の下にあたる。墓塚は表土下26cmの第3層の斜面盛土中より穿ち、墓塚底面は地山面に達する。墓塚平面は円形で底面は平坦な面を保ち、側壁は垂直に掘り込まれている。規模は直径0.52m・深さ0.24mを測る。内部底面近くより若干の火葬骨片を認めたが、木櫃及び釘等は検出されなかった。また墓塚内埋土も一定であり、変化を認めることはできず、副葬品は有していな

い。

墓壇 2 墓壇 1 の東側 0.2m の所に近接して埋葬された墓壇で、墓壇 1 同様表土下 0.3m の第 3 層盛土中より墓壇を穿ち、墓壇底面は地山面に達する。墓壇平面は隅丸長方形を呈し、底面はほぼ水平である。側壁は、長軸方向南西側が掘形よりも底面が外側に開く平行四辺形ぎみの形をしており、短軸方向も両掘形に対して外側に開くやや台形状を呈している。規模は長辺 0.66m・短辺 0.35m・深さ 0.3m を測る。内部埋土は 2 層に分かれており、2 層目より底面にかけて鉄釘 9 本と火葬骨片を検出した。木櫃はすでに腐朽消滅しており、その痕跡すら確認できなかった。墓壇内埋土第 1 層は、木棺腐朽の際に入り込んだ土と思われる。副葬品等は検出されなかった。

墓壇 3 墓壇 2 の北東方向 0.3m の所にあり、マウンド短軸方向のほぼ中央に位置する。墓壇は表土下 0.4m の地山削平面より穿つもので、ほぼ隅丸長方形の平面を呈し、底面は北東側が高く、南西側は北東側に比べ 0.1m 低くなる斜底をしており、側壁はほぼ垂直である。規模は長辺 0.56m・短辺 0.33m・低位側の深さ 0.26m を測る。内部底面近くで若干の火葬骨片を認めたが、木棺、釘等は検出されなかった。また、墓壇内埋土は一定であり層位の変化は認められなかった。副葬品等は一切出土していない。

墓壇 4 (図版第 34. 2) 平坦部南端近くで検出したもので、表土下 30cm の盛土中より土壇を穿っている。墓壇平面は楕円形を呈し、断面は「U」字型をなす。規模は長径 0.8m・短径 0.65m・深さ 0.25m を測る。内部埋土は 2 層に分かれており、第 1 層中では、拳大から 0.18m×0.1m 程の河原石 9 個が埋まっていた。おそらく掘形上面に墓標的なものとして、置かれていたものが落ち込んだものと考えられる。内部第 2 層からは、木棺及び鉄釘、副葬品等は全く検出されなかったが、ごくわずかではあるが火葬骨片を認めた。

墓壇 5 (図版第 35. 1) 平坦部分のほぼ中央に位置し、表土下 20cm の地山削平面より土壇を穿っている。墓壇平面は、いびつな隅丸長方形を呈し断面は、「U」字型をなし、墓壇平面はほぼ水平である。墓壇壁面、底面は焼けており、炭・灰等の堆積が認められた。内部には径 5cm～25cm×10cm 程の山石・河原石が中層に散乱していた。いずれも焼成痕を有する。墓壇底面近くよりごく少量の火葬骨片及びすり鉢の細片が検出された。釘等は認められなかった。

墓壇としては詳しく言及できないものの、当土壇で火葬が行われた可能性も考えられる。

火葬土壇 (図版第 35. 2) 平坦部北東側の土壘状の高まりの下側に平行して並ぶもので、土壇はかなりいびつな形をなし、尾根に直交する方向は長く、並行する方向は短い。長軸方向を土壇中心を通る形で測れば 10.65m、短軸方向の幅は 4.8m、中央部は 0.3m を測る。土壇底面は水平面ではなく、かなりの凹凸がみられる。埋土中央部に厚さ 5cm の焼土、炭層

がみられ、内部より鉄釘1、ごく少量の火葬骨片がみられた。また、埋土上面からは陶器、磁器の細片が少量検出された。

土塚は、火葬骨を埋葬していた他の土塚に比べかなり大きいため墓塚とは考えがたく、焼土・炭などの広がり方も大きく火葬場として使用された可能性も考えられる。ただ焼土の具合からすると数回にわたり使用されたものではなく、1回きりの使用と思われる。いずれにしろ出土土器等の資料不足からあまり言及することはできない。

不明土塚1・2 (図版第35.3) 火葬土塚のすぐ西側において検出したもので、切り合い関係をもつ。いずれも表土下0.3mの地山削平面より土塚を穿っている。土塚1は尾根に直交する主軸をもち、墓塚平面、底面とも隅丸長方形を呈し、断面は「U」字型をなす。規模は墓塚掘り込み上端長2.8m・同幅1m・底面長2.6m・同幅0.9m・深さ0.1mを測る。またこの土塚南東端近くにおいては径0.65cm・深さ20cmの掘り込みが認められた。土塚2は不整形な形を呈するもので、全体的な形は隅丸長方形であるが、土塚東側角及び南西辺は外側に張り出している。東側角には土塚により上端を削平された柱穴状掘り込み2か所が切り合い関係をもって、存在する。土塚掘り込み上端長2.3m・幅1.8m・深さ0.15mを測る。またこの土塚中央には東西方向に長さ1.5m・幅0.75m・深さ0.5mの掘り込みが存在する。土塚により上部を削平された柱穴状掘り込みは径0.5m、土塚底面からの深さ0.5mを測り、またそれに切られるもう1か所の柱穴状掘り込みは、長楕円形を呈していたと思われるが、詳細は不明である。

土塚2は、土塚1に切られたものであるが、いずれも土塚底面で更に別の掘り込みを有するという共通点はあるものの、内部から全く遺物が検出されなかったため、この土塚の性格等を言及することはできない。

柱穴状掘り込み 柱穴状掘り込みは上記した土塚に切られた2か所を含め、全体で17か所を確認したが、いずれも規則性がなく乱雑に並んだものばかりであった。柱穴状掘り込みの中には、根石として底面近くに長さ18cm×幅12cmの河原石を置いてあるものも1か所確認された。いずれも径20～60cm・深さ20～70cm程の規模を有する。柱穴状掘り込みの中からは、全く遺物は検出されなかった。

以上がTDⅢ地点の調査結果であるが、城跡に関係する遺物・遺構等は全く検出されなかったが、火葬骨を埋納している土塚及び火葬を行ったと考えられる土塚が検出されたことや、隣接するTDⅣ地点で天保年間の銘のある墓石が存在していることから考えると、江戸時代中期頃に大規模な墓地造成がTDⅢ・TDⅣ地点において行われた痕跡を示すものではないかと考えられよう。また、本地の南西側で確認していた径10m程の古墳状隆起は自然地形であることが判明した。

第5章 大道廃寺跡(DT)の調査

第1節 立地と現状

和久川によって開析された肥沃な豊富谷を西に見降ろす、標高55～65mの低位丘陵上に大道廃寺跡は存在している。大道廃寺跡と豊富谷の平地部との比高差は約50m前後であり、大道廃寺跡からは豊富谷全域をほぼ一望できる立地条件をもっている。大道廃寺の立地する丘陵は南西方向の五台山から派生した丘陵の1つであり、丘陵上には各所に伽藍の存在を予想させる平坦部が認められる。丘陵の南西側には豊富谷丘陵を横断する狭長な谷部(嶋谷^{しげたに})が存在し、この嶋谷に接する北東側の丘陵上および裾部には「寺の口」・「寺の前」・「寺山」等の寺院に関連する地名が、地元の人々の間で通称されている。

大道廃寺跡の立地する丘陵は豊富谷に向かってのびる数本の尾根に分かれており、尾根の基部付近に小規模な平坦地が設けられている。大道廃寺に伴う堂宇がこの平坦地上に建てられていたとみられ、大小あわせて5か所程度の平坦部が現在認められている。中でも最大規模をもつ平坦地は尾根の最高所(標高約65m)に位置し、長辺約30m・短辺約26mで方形を呈している。この平坦地の西端部には土塁状の隆起が認められる。立地および形状等からみて、ここに大道廃寺の中心的伽藍が配置されていたものと考えられる。この平坦地に接する西側には南北方向にのびるなだらかな平坦地が続き、北端部付近には一辺約8m前後・高さ約0.5mの方形を呈する基壇状の高まりが存在した。この方形基壇の南部には中世段階に築かれたとみられる土饅頭群が存在し、一部の土饅頭の表面には火葬骨が散乱した状態で露出していた。大道廃寺跡に関連する伽藍が配置されたとみられる各平坦部は尾根の中でも比較的高所に位置するが、狭長な馬の背状にのびる下方の尾根上には、古墳らしき高まりが随所に認められる。

電車基地建設に伴う丘陵部の掘削はこの大道廃寺跡の一部にかかっており、廃寺跡推定地の西部域に相当している。掘削予定地内には、先記の土饅頭をもつ古墓群の存在する墓域と、堂宇が存在したとみられる小規模な平坦部2か所が含まれていたため、予定地内にかかる大道廃寺跡の調査として昭和56年5月10日～8月18日まで実施した。

第2節 検出遺構

調査予定地内には大道廃寺跡に関連する遺構が存在するとみられる平坦地が、大きく3か所に分かれて存在したことから、それぞれの平坦地を南からA地区・B地区・C地区と

地区割りを行い、各地区において全面発掘による調査を実施した。調査の結果、A地区・B地区より各々2棟の建物跡を検出した。また、古墓群が存在したC地区では一部火葬骨を伴う古墓27基・経塚1基・方形基壇1か所の他、古墳時代の埋葬主体部3基をC地区の北端部で検出した。

(1) 建物跡

A地区とB地区の平坦部から各々2棟、合計4棟の建物跡を検出した。

A地区は、古墓群の存在するC地区の西側一段下がったテラスであり、C地区との比高差は約5mであった。平坦部は東西約17m・南北約13mの規模をもち、平面形は方形を呈している。この平坦地は盛土と地山削平により平坦地を造り出している。B地区とC地区に続く南半部分は旧丘陵傾斜面を削平し、対する北部は旧丘陵傾斜面上に盛土を行っていることが判明した。

平坦地の東端および南端部には幅約20cm前後の比較的浅い溝が巡り、平坦部中央で4間×4間の建物跡2棟(SB03・04)を検出した。柱穴の配列状況から2棟の建物はいずれも総柱の建物であり、また、ほぼ同一場所で検出したことから、建物は一度建て替えが行われたことが判明した。

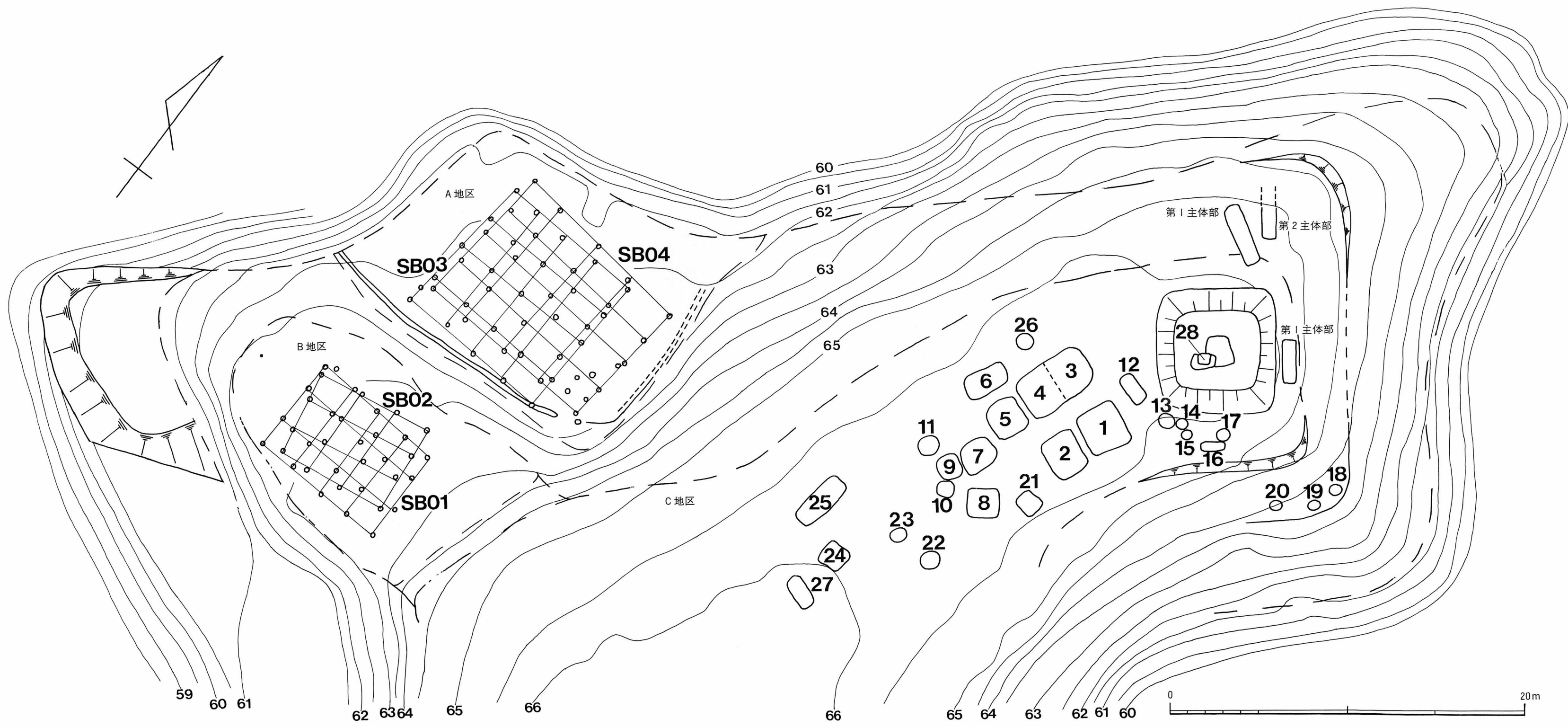
B地区はA地区の南側、C地区の西側にあり、両地区の中段に位置する。B地区は、なだらかに東方から下降するC地区の端を東西約16m・南北約10mの規模で地山を削平し、東西方向に長い平坦部を長方形に造り出している。4間×3間(SB01)・3間×3間(SB02)を検出し、A地区と同様に両建物とも総柱建物であり、建て替えのあったことが判明した。

SB01

B地区平坦部の中央で検出した東西4間・南北3間の総柱建物跡である。柱穴掘形は円形を呈し、概ね直径約30cm・深さ約10~20cm前後を測る。各柱穴間の心々距離は一定しない。東西方向の柱穴間心々距離は最も短いもので約1.7m・最長約2.1mであり、全長は8.1mの規模をもつ。対する南北方向の柱穴間心々距離は約1.9~2.2mの範囲でばらつき、全長は6.3mの規模をもつ。また、柱穴の心々間を結ぶライン上に乗ってこない柱穴も一部存在した。建物の主軸は東から南へ約3度振っている。

SB02

B地区平坦部の中央で検出した東西3間・南北3間の総柱建物跡である。この建物跡はSB01とほぼ同一場所で重複して検出したが、SB01との柱穴の重複は認められず、両建物の先後関係は不明である。柱穴の掘形はSB01と同様に直径約30cm・深さ約10cm前後で円形を呈する。各柱穴間心々距離は一定していない。東西方向の柱穴心々間距離は2.1~



第24图 大道廃寺遺構平面図

2.5mであり、全長は約7.2mの規模であった。対する南北方向の柱穴間心々距離は1.7～1.9mであり、全長は5.6mの規模であった。柱穴の心々間をむすぶラインは直線上に乗らず、ややいびつな平面形を呈する。SB02の軸線はSB01の軸線に対し、西側へ約15°振っている。

SB03

A地区テラスの中央部やや南寄りの場所より検出した、東西4間×南北4間の総柱の建物跡である。柱穴の掘形は直径約30cmの円形を呈し、深さは約30cmのものと、同じく約50cmのもの2種類の深さが認められた。一部の柱穴内には根石と考えられる扁平な河原石が認められた。柱穴の心々間距離は一定しておらず、東西方向の心々距離は2.0～2.3mであり、全長は8.5mの規模であった。対する南北方向の柱穴間心々距離も2.0～2.3mであり、全長は8.5mの規模であった。柱穴の心々間をむすぶラインは直線上に乗っておらず、ややいびつな平面形を呈している。

SB04

A地区のテラスのほぼ中央部より検出した、東西4間×南北4間の総柱の建物である。柱穴の掘形は直径約30cmの円形を呈し、SB03と同様に掘形の深さは2通りの深さが認められる。この建物跡の柱穴内には、SB03に認められた根石様の石の存在は認められなかった。柱穴の心々間距離は一定しておらず、東西方向の心々間距離は2.6～2.9mであり、全長は11.2mの規模であった。SB03に比べて東西方向の柱穴心々間距離が長く、平坦部のやや東部に若干偏る。柱穴の心々間をむすぶラインは直線上に乗っておらず、東西方向に長いややいびつな平面形を呈している。SB03の柱穴とSB04の柱穴は、建物が重複しているにもかかわらず切り合うことがなかったため、建物跡の前後関係は不明である。

(2) 古墓(第37～41図)

古墓はC地区の北東部に集中していた。C地区は今回の調査地の中で最高所に位置しており(標高63～66m)、幅約20m・長さ約50mの狭長な平坦部である。C地区の中央部は南東部が最も高まり、さらに調査地外の平坦部へと続く。C地区はこの中央部を基点として北東方向と南西方向へなだらかに下がっていく。このなだらかに北東方向へ傾斜する場所に、総数27基におよぶ古墓群が確認された。このC地区の平坦部分は、建物跡の存在したA地区、B地区のように平坦面を造っておらず、やや幅広な馬の背状を呈する旧地形のままである。そのため平坦部の両傍に近づくにつれ傾斜が強まる。古墓の多くは強い傾斜をさけて、尾根の中央部分に集中している。平坦部の北東方向突端部近くの尾根上には一辺約8m・高さ約60cmの規模をもつ方形の壇が存在している。古墓の一部はこの方形壇の周辺にまで築造されている。

27基の古墓の中でも、尾根の中央部に存在する古墓はマウンドの遺存状況も良好で、1・2号墓等は一辺約2～3mの規模で方形を呈している。調査前の現状でもこれらの古墓は、その形状をよく残していた。古墓の中には1・2号墓等にもみられるように、1つの古墓が独立して存在しているもののほかに、連続して古墓が築造された結果、3・4・5号墓等にもみられるように、長方形を呈する古墓が存在している。その他の古墓の中にはマウンドを持たないもの(19～21号墓等)や集石のみを持つもの(9・10・26号墓等)が存在する。尾根上の古墓群は概ね5群に分けられ、第Ⅰ群～第Ⅲ群は丘陵尾根と主軸方向が合致する。

第Ⅰ群——1・2・8・21・22号墓

第Ⅱ群——3～5・7・9・10・23・24号墓

第Ⅲ群——6・11・25・26号墓

第Ⅳ群——12～17・28号墓

第Ⅴ群——18～20号墓

第Ⅰ群～第Ⅲ群の古墓のうち、尾根中央部に築かれた1～8号墓はマウンドの規模も大きく、築造当時に近い現況を残しているとみられる。また、これらの古墓は各群中でも北東部に位置している。第Ⅰ群～第Ⅲ群の古墓中、21・7・11号墓を境いにして南西部に築かれた古墓群は規模も小形化傾向にあり、1～6号墓にもみられる規則制も無く、雑然と築かれている。第Ⅳ群の古墓は方形基壇の南東側周辺部に築かれている。14・15号墓を除き、顕著なマウンドは認められない。第Ⅴ群の古墓は丘陵尾根の東側下段部にて検出した古墓であり、表土除去中に火葬骨を検出したのみである。

(3) 経塚(第42・43図)

C地区の中央部東端付近で検出した(No. 27)。調査前段階では経塚の存在を示すような外部施設等はまったく認められていなかった。経塚は調査地の中でも最高所に位置していた。この経塚の南方には大道庵寺の中心的伽藍が存在するとみられるテラスがあり、C地区との境界付近には土塁状の高まりが存在する。経塚はこの土塁から北方へなだらかに下る緩傾斜地に存在した。経塚は一辺約1.3m・深さ約60cmで地山を方形に掘り下げ、東部壁面を横穴状に掘りくぼめ、経筒の外容器を納める小石室を築いていた。小石室の開口部には比較的大形の河原石を積み上げて閉そくしていた。小石室は底部に扁平な河原石を設置し、周囲に小型の石を積み上げて石室の底部を築いている。小石室は底部しか築かれず、上部に天井石等は認められない。小石室内には須恵器甕による経筒外容器が納められていたが、外容器の安定を図るため、小石室の底部3か所に側石から内部方向への石材突出が認められた。

経筒外容器である須恵器甕は口縁部を東方向に傾け、須恵器片口鉢によって蓋を覆せて

いた。経筒外容器の内部には経筒が3口納められており、2口は竹製経筒、1口は銅鑄製経筒であった。蓋として使用された鉢の一部が壊れていたため外容器内に水が溜り、竹製経筒のうち水没していた部分が完全な形で遺存していた。3口の経筒はいずれも上部を東方向に向けていた。銅鑄製経筒内には経巻が9巻納められていた。経筒のうち水没していた下部 $\frac{1}{2}$ はすでに無く、残る上部約 $\frac{1}{2}$ がローソク状に密着した状態で遺存していた。2口の竹製経筒内にも埋納段階では経巻が納められていたとみられるが、経筒中には経巻の残りともみられる泥土状物質が若干認められた。小石室部分からは経筒外容器・経巻等の他に出土遺物は認められなかった。

経塚の主体部である小石室の西側前面には比較的大型の河原石を積み上げ、小石室を封じていた。経塚の土坑底(前室)には供献遺物とみられる各種の遺物が納められていた。前室部の中央付近に土師器皿5個体と桧扇、北端隅部から菊花双鳥鏡1面と北宋銭の景祐元宝2枚、西部付近から白磁皿の破片が1点出土した。この供献遺物のうち菊花双鳥鏡と景祐元宝は錆化が進行し、取り上げの際に一部が崩壊していく状態であった。また、菊花双鳥鏡の鏡面にはごく少量の紙様物質の付着がみられたため、鏡は和紙によって包まれて納められていたものと判断する。土坑の上部には20~30cm大の河原石が2~3段に積まれ、経塚の上部を覆っていた。この集石は前室内の供献遺物上にも一部達する物もみられたが、大部分は土坑の上部に集中していた。

(4) 方形壇

C地区の北東端付近にある一辺約8m・高さ0.6mの方形を呈する壇状遺構である。この方形壇は地山上に土盛りを行って築かれていた。壇上の中央部付近で長径約1.3m・短径約0.7m・深さ約10cmの規模をもつ不定形の土坑を検出したが、土坑内からの出土遺物は認められなかった。また、この土坑を切るかたちで古墓1基(28号墓)を検出した。

調査前段階において、この方形壇上部には寺院に関連する堂宇が建っていたものと想定していたが、建物の存在を示す柱穴及び礎石等の痕跡は幾度の精査においても確認できなかった。

(5) 墳墓

C地区北東端付近の自然傾斜地で古墳時代に属する埋葬主体部3基を検出した。いずれも墳丘封土は失われ、埋葬主体部の最下部のみが遺存していた。

第1埋葬主体部

方形壇の東北裾部で検出した埋葬主体部である。全長1.75m・幅0.75m・深さ15cmの規模をもつ。埋葬主体部の主軸はC地区尾根の主軸に対して直交する。埋葬主体部の東部から須恵器の杯身2点・杯蓋1点・無蓋高杯1点・土師器椀1点出土した。杯蓋・無蓋

高杯は、それぞれ杯身を被覆した状態で出土した。この埋葬主体部は出土遺物の年代観から5世紀代後半とみられる。埋葬主体部の周辺に周溝等の古墳外部施設は認められず、古墳の規模は不明である。

第2・第3埋葬主体部

方形壇の西北部で近接して検出した2基の埋葬主体部である。第2主体部は全長3.45m・幅0.8m・深さ20cm、第3主体部は全長3.2m・幅0.9m・深さ20cmの規模をもつ。埋葬主体部内と周囲からは遺物の出土は無く、時期は不明であるが古墳時代に属するものとみられる。この2基の埋葬主体部は同一古墳上に築かれたものとみられる。周溝等の古墳外部施設が確認されないため、古墳の規模・形状は不明である。

今回の調査では、古墳時代に属する3基の埋葬主体部を検出したのにとどまった。周辺の丘陵尾根上には数多くの古墳が築かれ、位置的にみてもこの大道廃寺跡付近は古墳造営に適する所である。古墓群周辺から古墳時代後期に属する須恵器片が出土したことから、

付表6 大道廃寺跡古墓形態表

遺構番号	形態規模	外部施設	埋葬状況	遺物出土状況	備考
1号墓	方形 3.0 2.6 0.4	マウンドをもつ。	中央西部に埋葬主体部。直径20cm・深さ20cmの範囲に火葬骨が集中する。蔵骨器はみられない。	火葬骨が多量に出土。	地山面に盛土してマウンドを築く。
2号墓	方形 2.2 2.0 0.2	〃	中央部表土下に火葬骨を認めたが、埋葬主体部は検出できず。	火葬骨の出土は少量。	〃
3号墓	方形 3.7 3.2 0.4	マウンドをもつ。表面に拵大の円礫を貼り付ける。	中央北部に埋葬主体部。マウンド築造後に上部から穴を掘り、蔵骨器を納める。蔵骨器内上部に扁平な河原石。	土師製鍋(蔵骨器)。蔵骨器内に火葬骨。	地山面に盛土してマウンドを築く。4号墓が連続して築かれる。
4号墓	方形 2.8 1.7 0.3	〃	中央部に埋葬主体部。直径20cm・深さ20cmの範囲に火葬骨が集中。蔵骨器はみられない。	火葬骨の出土は少量。	3号墓の西南に連続してマウンドを築く。
5号墓	方形 3.3 2.7 0.2	〃	埋葬主体部は検出できず。	マウンド表面に土師製鍋の胴部破片。	蔵骨器が存在した可能性がある。
6号墓	楕円形 3.1 1.9 0.2	マウンドをもつ。マウンド北部に一部貼石が残る。	マウンド北部と南部の2か所に埋葬主体部。南部主体部のみ蔵骨器。北部主体部には浅い掘形のみ検出。	須恵器甕(蔵骨器)。蔵骨器内に土師皿1点と火葬骨。北部主体部より火葬骨少量出土。	当初南部にマウンドを築造後、マウンドを北部に拡張する。
7号墓	方形 3.1 2.5 0.2	マウンドをもつ。マウンド南部に貼石を多く認める。	埋葬主体部・火葬骨とも検出されず。	マウンド内の地山直上から土師皿1点が出土。	5号墓築造以前に築かれる。蔵骨器はみられない。

遺構番号	形態規模	外部施設	埋葬状況	遺物出土状況	備考
8号墓	方形 3.1 2.5 0.2	マウンドの一部に貼石が残る。	マウンド中央東北部に埋葬主体部。蔵骨器は無く直径20cm・深さ20cmの掘形を検出。	マウンドの周囲から須恵質片口鉢片が出土。火葬骨が少量出土。	地山面に盛土してマウンドを築く。
9号墓	方形 1.2 1.1 —	マウンドはもたず傘大の円礫が集中する。	不明。	火葬骨が集石の間から出土する。	地山面に掘形は認められない。
10号墓	方形? 1.0 0.9 —	マウンドはもたず傘大~人頭大の礫が集中する。	〃	無遺物。	〃
11号墓	方形 0.5 0.4 —	〃	〃	〃	〃
12号墓	長方形 1.8 0.9 —	以前はマウンドをもっていたようである。傘大の円礫が散在する。	〃	火葬骨が少量認められる。	一部に盛土層が認められた。
13号墓	方形? 0.9 0.8 —	〃	〃	集石の北部から火葬骨が出土。	蔵骨器はみられない。
14号墓	方形 1.5 1.3 0.2	マウンドをもつ。表土部分に傘大の円礫が少量認められる。	中央部に埋葬主体部。マウンド上に穴を掘り、蔵骨器を納める。蔵骨器は口縁部を下に向ける。	土師質鍋(蔵骨器)。蔵骨器内に火葬骨。	蔵骨器をもつ古墓中、口縁を下にする例は、当古墓のみである。
15号墓	長方形 2.3 1.4 0.2	マウンドをもち、頂部に人頭大の礫を認める。	不明。	配石の間から火葬骨が出土。マウンド北端部に土師質円筒土器(蔵骨器)。	
16号墓	長方形 2.2 1.2 —	マウンドはみられない。まばらな集石が認められる。	〃	中央部で火葬骨が少量出土。	
17号墓	長方形? 1.2 0.8 —	マウンドはみられない。傘大~人頭大の礫の集石が認められる。	〃	集石の間から火葬骨が少量出土。	
18号墓 20号墓	不明	不明。	表土除去中に直径20cmの範囲で火葬骨が出土。	火葬骨のみ。	
21号墓	方形 1.3 1.0 —	マウンドはみられない。	不明。	地山上に火葬骨と土師皿片。	地山面は浅く窪み、薄い灰層が認められた。
22号墓	方形 0.6 0.5 0.2	マウンドをもつ。	〃	無遺物。	地山面に盛土してマウンドを築く。

遺構番号	形態規模	外部施設	埋葬状況	遺物出土状況	備考
23号墓	方形 0.8 0.6 0.2	マウンドをもつ。	不明。	マウンド東部から須恵質片口鉢片出土。	地山面に盛土してマウンドを築く。
24号墓	方形 2.7 2.5 0.2	〃	〃	無遺物。	〃
25号墓	長方形 4.4 2.1 0.25	マウンドをもち、表面に貼石が認められる。	中央部の南北2か所に埋葬主体部。南部主体部に蔵骨器。北部主体部は火葬骨の集中のみ。	土師質鍋(蔵骨器)。マウンド周辺部から土師質鍋と須恵質片口鉢の破片出土。火葬骨出土。	蔵骨器内の上部に扁平な河原石が落ち込む。
26号墓	楕円形 1.0 0.8 —	マウンドはみられない。	不明。	無遺物。	地山を30cm程掘り下げ、20~30cm大の磔を入れる。
28号墓	楕円形 0.8 0.4 —	マウンドはみられない。	方形壇上に墓壇。	墓壇内に土師質鍋と須恵質片口鉢。火葬人骨多量に出土。	〃

● 法量は上段より長径・短径・高さであり、寸法はm単位である。

大道廃寺造営に際し寺域内に存在したとみられる古墳の大部分は壊されてしまったものとみられる。

第3節 今安廃寺跡の立会調査

本調査に先立って実施した今安廃寺跡の立会調査では、東西方向に2本・南北方向に1本、計3本のトレンチを設けて機械掘りし、土層観察や遺構・遺物の有無に関することを主目的とした。その結果、東西トレンチでは共に両端が地山まで浅く、中央部に向かうにつれ深くなることが判明した。トレンチ中央部は淡茶褐色混礫シルト層からなっており、流土の堆積層と判断された。また、南北トレンチでは表土下0.5~1.5mで地山が確認された。遺物は淡茶褐色混礫シルト層より約10点ほど出土したが全て破片であり、断面は磨滅している。種類としては甕・鉢などがあり、室町時代に属する。これらを推して、本調査地は元来谷間であったが、室町時代後半に谷間を埋めて平地化したものと考えられる。ただ、造成工事中に石組み井戸1基が確認された。この井戸は直径約1.5m・深さ約3m以上である。井戸内埋土からは全く遺物は発見できず、年代的には不明であるが、一応ここでは江戸時代以降と推定される。以上のことから、この地に残る小字名「寺ノ前」・「寺ノ口」などを考えれば、元来大道廃寺への入口部に相当していたが、谷埋没後は畑地として利用されたものと推定される。

第4節 出土遺物

大道廃寺出土の遺物には、須恵器甕・鉢・壺、土師器鍋・壺・皿等のほか、中世の瓦器椀・皿、青磁椀等の土器類も出土している。なかでも、経塚でみつかった経筒には、銅製のものと竹製のものとがあり、比較的残存度の高いものであった。

今回の調査で出土した土器類には、平安時代後期から鎌倉時代にかけてのものが多く、大道廃寺の存在した期間を示しているといえる。

個々の遺物としては、6号墓出土の須恵器甕は、蔵骨器に使用されていたもので、暗灰色を呈している。各古墓からは土師器鍋(蔵骨器)を9点図化しているが、いずれも22~29cmの法量を測るものである。中世墓から出土した土師器には、皿が圧倒的に多い。いずれも、10cm内外の大きさである。C地区から出土した青磁椀は、口縁部を玉縁状に肥厚させて、体部外面に蓮弁を陰刻している。この椀には淡い青灰色の釉薬を薄くかけており、中国の龍泉窯系のものとみられる。

その他、大道廃寺からは多くの遺物が出土しているが、詳細は付表7の出土遺物観察表に譲る。

付表7 大道廃寺跡出土遺物観察表

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6号墓	須恵器	甕 1	21.1 25.6	口縁は外反し、端部内面には幅広の浅い沈線。上端部は外方へつまみあげ、下端は鋭く内傾する。体部は球形に近いが、最大幅はやや上部に位置する。	体部外面は細いタタキを羽状に施す。口縁部は横ナデ。頸部の一部にタタキ痕を残す。体部内面は粗いカキ目調整。カキ目調整は底部付近を密に施す。一部に指頭圧痕を残す。	蔵骨器 胎土精良 焼成堅緻 外面は暗灰色
C地区		2	16.2 (4.0)	口縁端部付近で強く外反し、端部はアクセントをつけて丸く終る。口縁部内側に1条の沈線をもつ。口縁下端は内傾し鋭く尖る。	口縁部と頸部は横ナデ。	胎土精良 焼成やや不良 暗灰色
25号墓	土師器	鍋 3	26.2 16.9	口縁部は「く」の字状に外反する。端部は肥厚し、断面は三角形を呈す。頸部下端に指頭による幅広の沈線をもつ。体部は丸く器壁も4mmと薄い。	口縁部は横ナデ。体部内面はナデ調整。体部外面は幅広の平行タタキ。タタキは左から右へ順次連続して施す。	胎土精良 焼成良好 淡褐色 内底部に有機物痕 外面スス付着
3号墓		4	26.2 16.9	口縁部は「く」の字状に外反する。端部は肥厚し、断面は三角形を呈す。頸部下端に指頭による幅広の沈線をもつ。体部下方に最大幅をもつ。器壁は4mmと薄い。	〃	胎土精良 焼成良好 堅緻 黄褐色

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考		
14号墓	土師器	鍋	5	22.8 16.2	口縁部はやや外反して立ち上がる。端部断面は角の取れた三角形を呈す。口縁部下端に指頭による幅広沈線をもつ。体部は丸く器壁は5~6mmとやや厚くなる。	〃	胎土精良 焼成良好 堅緻 淡黄褐色 体部外面ス ス付着	
C地区			6	23.2 (4.0)	口縁部は体部からほぼ真直ぐ立ち上がった後、大きく外反する。口縁部下端は体部より大きく内側へ入る。口縁端部は肥厚し、やや内湾ぎみに丸く終る。	〃	胎土精良 焼成良好 堅緻 淡灰褐色	
2号墓 周辺			7	29.1 (6.0)	口縁部はやや外方へ緩く立ち上がった後、さらに外反する。端部はやや内湾し肥厚する。口縁部下端に明瞭な沈線は無い。	〃	胎土精良で 密 焼成良好 暗黄褐色	
C地区			8	22.8 (6.6)	口縁部はくの字状に緩く外反する。端部は肥厚し、上端は内傾させ、面を作り出す。口縁部下端に指頭による幅の広い沈線をもつ。	〃	胎土精良 焼成良好 淡黄褐色	
			9	23.6 (5.0)	口縁部は緩く外反する。端部は肥厚せず強く外反し丸く終る。体部は大きく張らず、なだらかに口縁部に続く。口縁部の器壁は約8mmと厚い。	〃	胎土精良 焼成良好 淡黄褐色	
28号墓			10	25.0 (5.0)	口縁部はわずかに外反する。上端部は面をもち、外方に折曲げて玉縁状の口縁を作る。体部はあまり張らず、口縁部下端に指頭による幅広の沈線をもつ。厚手の器壁をもつ。	〃	胎土精良 焼成やや不 良 淡黄褐色	
8号墓			11	22.4 (4.0)	口縁部はほぼ真直ぐ立ち上がる。上端部は面をもち、外方に折曲げて玉縁状の口縁を作る。口縁部下端に明瞭な指頭による沈線は認められない。厚手の器壁をもつ。	〃	胎土精良 焼成良好 淡黄褐色	
			蓋	12	13.6 2.4	口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く終る。器壁は約1cmと厚く仕上げる。	手づくね。内外面ナデ。口縁部には指頭圧痕を残す。	微砂粒を含 む 焼成良好 淡茶褐色
15号墓			円筒土器	13	12.8 18.4	口縁部は端部近くで内傾し、上端部は面をもつ。体部は円筒形を呈する。底部には直径約3cmの孔が存在する。器壁は1.4cmと厚く仕上げる。	型押し整形。内面の一部に布目とみられる圧痕が認められる。外面はほぼ平坦に仕上げるか縦方向に細いヒビ割れを多く残す。内面には指頭圧痕を良く残す。口縁部はつまみ上げた後内傾させる。	胎土精良で 金雲母を含 む 焼成良好 淡茶褐色 12の蓋とセ ット関係と みられる。
DD17 号墳中 世墓								

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
C地区	土師器	壺	15 14.6 (6.6)	口縁部は「く」の字状に外反し、端部内面に小さな沈線状の段をもつ。器壁は8mmとやや厚手である。	口縁部ナデ。体部外面に斜位のハケ残る。内面やや粗いハケ目が残る。	焼成良好 大粒の砂粒を含む 茶褐色
		須恵器	鉢	16 28.9 (7.0)	口縁部外面に縁帯をもつ。体部内外面とも凹凸が著しい。縁帯は幅狭く端部は丸く終る。	口縁部・体部ともに横ナデ。
	28号墓		17 31.1 (18.9)	口縁部外面に縁帯をもつ。口縁端は尖りぎみに終る。体部外面凹凸が著しい。口縁の一部に片口が付く。	〃	微砂粒を含む 暗青灰色 内面は使用による磨滅が認められる。
		23号墓	18 32.7 (18.2)	口縁部外面に縁帯をもつ。縁帯は幅広く片口が付く。体部内外面になだらかな凹凸をもつ。口縁端部は尖りぎみに終る。	〃	焼成良好 小石を含む 暗青灰色
8号墓 周辺		19 28.2 (12.7)	口縁部外面に縁帯をもつ。端部は丸く終り、縁帯の下端部はやや垂下する。体部内外面に凹凸をもつ。	〃	焼成良好 微砂粒を多く含む 暗青灰色	
C地区	土師器	皿	20 11.5 2.9	丸みを帯びた底部をもち、体部は緩やかに外上方にのびる。体部と底部の境は不明瞭。	内面および外面体部上半ナデ。外面下半は指押さえ。	焼成良好 淡橙色
			21 7.7 1.2	丸みを帯びた平底で、体部は緩やかに外上方へのびる。口縁端は丸く終る。	内外面横ナデ。	焼成良好 灰白色
			22 8.7 1.7	丸みを帯びた平底で、体部は緩やかに立ち上がる。口縁下が若干肥厚する。	内面と外面体部上半ナデ。外面下半は指押さえ。	焼成良好 淡橙色
			23 8.9 1.9	平底で外上方へ開く体部と外反する口縁をもつ。体部は肥厚するが底部は薄く仕上げる。	内面と体部横ナデ。	橙褐色
			24 7.6 2.2	丸みを帯びた平底で、体部は上方に強く立ち上がる。口縁は尖りぎみに終る。	内面と体部ナデ。体部下半は指押さえ。	微砂粒を含む 橙褐色
			25 9.8 (2.3)	平底で体部は上方へ強く立ち上がる。口縁は尖りぎみに終る。	内面と体部ナデ。	砂粒を含む 黄褐色
			26 10.9 (2.7)	体部は外上方へ立ち上がり、口縁はやや肥厚ぎみに丸く終る。	内面と体部上半横ナデ。	淡黄褐色
			27 11.7 3.1	平底で体部は外上方へ立ち上がり、口縁は丸く終る。	内面と体部上半横ナデ。体部下半は指押さえ。	砂粒を含む 橙褐色
			28 12.8 2.9	丸みを帯びた平底で、体部は上方へ立ち上がる。口縁内側に沈線をもつ。	内面と体部上半横ナデ。内面底部は直線ナデ。	淡橙色

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
1号墓	土師器	皿	29	12.2 3.2	平底で体部は外上方へ立ち上がる。口縁は丸く終る。	内面と体部上半横ナデ。内面底部は直線ナデ。体部下半は指押さえ。	淡灰黄色
C地区			30	12.4 3.0	いびつな平底で、口縁は体部外上方へ立ち上がる。体部外面下半に強い指押さえ。	内面と体部上半強い横ナデ。	淡黄褐色
			31	12.0 2.8	平底で体部は外上方へ立ち上がる。口縁は丸く終る。	内面と体部横ナデ。	小石を含む 淡橙褐色
2号墓			32	16.8 (3.2)	平底で体部は外上方へ立ち上がる。口縁は丸く終り、口縁下面に1条の沈線をもつける。	内面と体部はていねいな横ナデ。体部下半は指押さえ。	微砂粒を含む 淡黄褐色
C地区			33	8.2 1.6	平底で体部は短く外上方へ立ち上がる。口縁は丸く終る。	内面と体部横ナデ。	淡黄褐色
			34	12.1 1.4	平底で体部は短く外上方へ立ち上がる。口縁は丸く終る。	〃	淡褐色
			35	9.8 2.1	平底で体部は底部からアクセントをもって外反ぎみに立ち上がる。	〃	黄褐色
	瓦器	椀	36	16.5 (4.2)	緩やかに外上方へ立ち上がる体部をもつ。口縁はやや外反ぎみに丸く終る。	口縁部外面及び内面に暗文を施す。ロクロ整形。	淡灰色
		皿	37	7.9 1.5	丸みをもつ平底で体部は緩やかに外上方へ伸びる。底部と体部の境は不明瞭。口縁は丸く終る。	口縁部外面および内面に暗文を施す。	淡黒灰色
		38	9.3 1.7	平底で体部は外上方へ立ち上がる。口縁は尖りぎみに終る。	〃	淡黒灰色	
	青磁	椀	39	12.3 (2.6)	口縁部は玉縁状にやや肥厚させ、体部外面に蓮弁を陰刻する。	ロクロ整形。	淡い青灰色の釉薬を薄く内外面にかける。 龍泉窯系
A地区	黄瀬戸	壺	40	12.1 (3.8)	頸部から口縁にかけて大きく外反する。内面は平滑に仕上げるが、外面は指頭による稜線を残す。口縁はやや肥厚する。	ロクロ整形。	淡い黄灰色の釉薬を薄く内外面にかける。2次焼成を受ける。
C地区	土師器	皿	41	8.2 2.0	平底で体部は外上方へ短く立ち上がる。口縁は丸く終る。	内面および体部上半横ナデ。体部下半は指押さえ。	微砂粒を含む 橙褐色
			42	8.1 1.8	丸みを帯びた平底で、体部は緩やかに外上方へ立ち上がる。口縁は丸く終る。	内面および体部上半横ナデ。体部下半は指押さえ。	微砂粒を含む 橙褐色
			43	8.5 1.8	平底でやや肥厚ぎみの体部が外上方へ立ち上がる。口縁は丸く終る。	内面および体部上半横ナデ。体部下半は指押さえ。	砂粒を含む 橙褐色

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
	土師器	皿	44	9.1 1.8	丸みを帯びた平底で、体部は緩やかに外上方へ伸びる。底部と体部の境は不明瞭。口縁は丸く終る。	内面および体部上半横ナデ。体部下半指押さえ。	淡黄褐色
			45	8.1 1.7	平底で体部は外上方へ立ち上がる。口縁は丸く終る。	内面および体部上半横ナデ。体部下半指押さえ。	黄褐色
経塚	白磁	皿	46	11.6 (1.6)	体部は外上方へ真直ぐ立ち上がる。口縁は尖りぎみに削り出す。内面体部下端に浅い沈線。	ロクロ整形。口縁端部は内外両面より削る。	口縁端を除き淡い黄白色の釉薬を内外面に薄くかける。
	須恵器	鉢	47	27.4 10.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部に小さな縁帯をもち、上端は尖りぎみに終る。体部と口縁部の境はやや丸みを帯びる。口縁部に小さな片口がつく。	内外面を横ナデ調整。粘土紐の巻上げ成形か。	微砂粒を含む 白灰色 神出窯系か。 経筒外容器の蓋として使用。
		甕	48	19.3 29.7	口縁は丸みをもちながら大きく外反し、端部を上方につまみ上げる。体部は縦長で最大幅は中央やや上部に位置する。丸底の底部をもつ。	内面及び口縁部ナデ。内底面の一部にハケ目。体部外面にタタキ目。タタキは斜位の平行タタキの後、幅広い横・斜位に平行タタキ。底部外面には粗い蜘蛛の巣様のタタキ目をもつ。	焼成不良で軟質 白灰色 経筒外容器
	金属器	経筒蓋	49	8.8 2.0	正円形。経筒本体に対し直径がやや長く、被蓋となる。蓋の上面中央に小型の宝珠が付く。	鑄造による一体整形。	被蓋式蓋
		経筒	50	8.3 21.9	円柱形を呈し、銅板の厚さは1mmと薄く、底部には底板をはめ込む溝をもつ。底板は円盤形を呈し、0.5mmと薄い。	筒部は鑄造による一体整形。底板が付く。	鑄造不良で、内側3か所に補強の銅板をあてる。
	木器	経筒蓋	51	7.6~ 7.9 3.2	楕円形を呈し、上面中央に宝珠が付く。宝珠は刺込み式。蓋は笠状に上方にふくらみをもつ。下部に6mmのはめ込み部をもつ。	宝珠および蓋の上面は、丁寧な削りによる整形を行う。	木製品 入蓋式蓋
		竹製経筒	52	7.5~ 7.9 22.3	楕円形の円柱。木製の底板(5mm厚)をはめ込む。	竹の節及び表皮を取り去る。	
		経筒蓋	53	7.4~ 7.8 (1.3)	51と同一。宝珠欠失。	51と同一。	器面は風化が著しい。
		竹製経筒	54	7.7~ 7.9 (17.1)	52と同一。	52と同一。	上部は風化により一部を欠失する。
	金属器	和鏡	55	8.7	幅4mm・高さ5mmの平縁がつく。鏡背には菊花と葉の他、双鳥が認められる。直径8mmの鈕がつく。	鑄造品。	菊花双鳥鏡

出土遺構	器種	遺物番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
第1主体部	須恵器	杯蓋	56	13.3 13.5	口縁は垂直に下がり、端部は外方にやや屈曲し、わずかに段を有して大きな面をもつ。天井部は丸く、口縁部との境に短く鋭い稜をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形。稜より約1cmの所からヘラ削り。他は回転ナデ調整。	焼成良好 暗青灰色を呈す。
			57	11.2 5.4	立ち上がりは内傾し、端面は内傾する凹面を呈する。受部は水平方向に湾曲ぎみにのび、端部は比較的鋭い。底部は深く丸く、外上方へ屈曲して受部をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。立ち上がり部は貼付けによる。底部外面はヘラ削り。その他は回転ナデ調整。	焼成良好 暗青灰色を呈す。 1~2mmの小石含む。
		58	11.4 5.6	立ち上がりはやや内傾し、端面は内傾する凹面を呈する。受部はやや外上方へ湾曲ぎみに伸び、端部は比較的鋭い。底部は丸く外上方へ屈曲して受部をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。立ち上がり部は貼付けによる。底部外面は受部近くまでヘラ削り。その他はナデ調整。	焼成良好 暗青灰色を呈す。	
	土師器	碗	59	14.4 5.5	丸みをもった平底で、体部は丸みもちながらほぼ垂直に立ち上がる。口縁部はやや内湾した後、端部は外方へつまみ出す。口縁端部はやや尖らせる。	マキアゲ成形。体部下半は横位のヘラ削り。底部は直線削り。内面及び体部上半丁寧なナデ。	焼成良好 微砂粒・小石を含む。 淡赤褐色
	須恵器	無蓋高杯	60	17.5 12.5	杯部の底部は丸く、緩やかに外反しながら立ち上がる。外面には2条の断面三角形の鋭い凸線を付す。凸線下に波状文を施す。口縁内面に1条の沈線を施す。脚部は太く、外反きみになだらかに下方に開く。脚端部近くで若干肥厚させた後、やや丸みをもたせて終る。四方に長方形の透孔を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯部と脚部は貼付け。内面は回転ナデ調整。外面の杯底部はヘラ削り。脚部回転ナデ調整。	焼成良好 堅緻 胎土は密。 暗青灰色を呈す。
C地区	杯身	61	10.9 (2.3)	立ち上がりは短く内傾する。口縁部は薄く丸みをもたせる。受部は外上方へ伸びて端部は丸く終る。底部は比較的浅い。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。外面底部ヘラ削り。	焼成良好 微砂粒含む。 青灰色を呈す。	
		62	11.8 (2.4)	立ち上がりは短く内傾する。口縁端部は薄く丸みをもたせる。受部は短く水平に伸びた後上方へ向い、端部は丸く終る。底部は比較的浅い。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。外面底部回転ヘラ削り。	焼成良好 淡青灰色	

・法量の単位は、すべてcmである。()内は現存数値。

第5節 大道廃寺跡について

(1) 古墓

大道廃寺跡で検出した古墓はC地区で総数27基を検出している。C地区から北側1段下がる丘陵尾根上に存在するDD17号墳の墳丘上でも、大道廃寺に関連するとみられる古墓1基が確認されている。

められるが、寺の縁起等からみて今安寺とは異なることが判明している。今安地区には、今回調査を実施した大道廃寺跡周辺の他に寺院の存在を予想する地名・伝承等が無い。今回の大道廃寺調査で検出した建物・古墓群等の寺院関連遺構を、文献史料に残る今安寺とみることができるが、それを立証する具体的な資料は得られていない。今後、周辺の調査が実施され、大道廃寺の性格がより明らかになることを願う。

(3) 経塚

今回の調査においては、経塚施設・経筒埋納状況をよく示す良好な資料が得られた。

大道廃寺の経塚は、土坑の一方の壁面に横穴状の窟を設け、窟内下部に扁平な河原石を使用した小石室を築き、経筒外容器を納めていた。当初、土坑壁部の蓋石を取り除き経筒外容器が姿を表わした段階で、周囲の精査をくりかえしたが窟の存在を示す変化が読みとれず、窟の上部を断ち割る結果となってしまった。整理期間中、くしくも同じ京都府北部の久美浜町権現山古墳の調査で、同様な形態をとる経塚群が調査され、大道廃寺の経塚も穿窟形態をとる経塚と後に判明した次第である。

経筒外容器の甕は窟内に丁寧に納められ、窟の開口部は大型河原石を整然とした形で積み上げていた。経筒外容器内には経筒3口が納められており、うち2口は竹製の経筒が使用されていた。現在まで竹製経筒の使用は文献史料上で知られていたのにすぎず、実物が埋納状態で地中より出土するのは本例が初めてであった。他の銅鑄製経筒中には紙本経が遺存していたが、水没状態にあった竹製経筒内には泥土化した紙本経の残塊が認められただけであった。

大道廃寺の経塚は、経筒が納められていた外容器の甕と片口鉢の年代観から、平安時代末～鎌倉時代初頭(13世紀初頭)段階に築かれたとみられる。隣接する古墓群のうち初期に属する第Ⅰ群1～2・第Ⅱ群3～5は、鎌倉時代前半の年代観を得たことから、経塚の築造は古墓に先行したと考えられる。

経塚は、近隣地域の経塚と同様に展望のよい丘陵高所に営まれていたが、寺域内に存在する点で他の経塚とは性格が異なっていたとみることができよう。経塚の本来の目的は、末法思想に基づく弥勒菩薩の出世をまち、納経を役だたせるものであった。平安時代中期頃に営まれ始めた経塚は、その性格をしいに極楽往生・追善供養の性格を強めている。鎌倉時代にはいると、経塚はほぼ追善供養を目的とする傾向にある。今回、寺院に伴う古墓群に隣接して経塚が営まれていることから、この経塚は追善供養的な性格をもったものと考えられよう。また、経塚は古墓と寺院伽藍との境界に位置することから、いわゆる結界を示す施設の可能性も残る。出土した銅鑄製経筒中に紙本経9巻が納められていたが、いずれも頓写経であったため奥書き部分が腐蝕により失われ、埋経の目的・年代が不明確

C地区の古墓群は、東北端付近に存在する方形壇の南側に、おおよそ5群に分かれて築かれている。第Ⅰ群～第Ⅲ群の古墓はC地区尾根頂部に築かれ、各群は尾根の軸線にそって3列に並ぶ。第Ⅰ群・第Ⅱ群とも北側の方形壇に近い古墓ほどマウンドの遺存状態がよく、マウンドの平面プランは方形で整然と並ぶ。第Ⅰ群21号墓・第Ⅱ群7号墓以南に築かれた古墓と第Ⅲ群の古墓には整然と並ぶ規則性は認められず、平面プランも不定形化してくる。また、第Ⅳ群・第Ⅴ群の古墓は15号墓を除きマウンドをもたず、第Ⅳ群は方形壇の東南縁辺部、第Ⅴ群は東部の尾根斜面上に雑然と築かれている。

第Ⅰ群1～2号墓・第Ⅱ群3～5号墓はマウンドの裾を接して築かれているが、隣接する第Ⅰ群と第Ⅱ群は約1mの間隔をもっている。この約1mの空間帯は墓道とみることができ、第Ⅰ群～第Ⅴ群の古墓は、個々の配置が乱れながらも一定方向に直線的にのびる傾向がみてとれ、各古墓群の間にはある程度の空間帯が存在する。第Ⅰ群―第Ⅱ群、第Ⅰ群―第Ⅳ群、第Ⅱ群―第Ⅲ群、第Ⅳ群―第Ⅴ群間の空間帯はそれぞれが墓道と考えられる。墓道は調査地外の尾根分岐部テラス方向からのびてきており、そのテラス付近は大道廃寺の中心伽藍が存在していたものと推定している。

各古墓に伴う共伴遺物の出土は限られている。また、遺物が全く出土しなかった古墓も多数存在したことから、各古墓の築造年代を確定するには至っていない。古墓およびその周辺の出土遺物の年代観から、これらの古墓は鎌倉時代～室町時代前期の間に築かれたと推察する。蔵骨器として転用された須恵器甕・鉢、土師器鍋はいずれも各古墳群中の配置状況が乱れた段階の古墓に伴うものであり、それらは鎌倉後期～室町前期に属する。古墓群中でも初期の段階に属すると考える第Ⅰ群1～2号墓・第Ⅱ群3～5号墓は蔵骨器の出土がみられず、マウンド内および周囲出土の土師皿の年代観からみて、築造年代は概ね鎌倉時代前半～中葉とみることができよう。

(2) 建物

A地区検出のSB01・02、B地区検出のSB03・04は、いずれも総柱の掘立柱建物であった。A・B両地区とも丘陵を削平し、広いテラスを造り出している。両地区ともほぼ東西方向に長軸をもつ長方形のテラスであり、その中央部に総柱の掘立柱建物を配している。建物は両地区とも1度の建替えが実施されている。今回の調査では1片の瓦も出土をみないことから、大道廃寺の建物に瓦の使用はみられなかったと判断する。

「威光寺文書」によれば、この豊富谷今安の地に「今安寺」と呼ばれる寺院が存在し、今安寺は天正4(1576)年に明智光秀・細川藤孝軍により焼かれ、天正7(1579)年には寺院としての機能を失った記載が残る。現在、この今安寺がどの地に存在したか確かではない。今安地区には現存する寺院として臨濟宗「長安寺」が、豊富谷をはさんだ北の丘陵部に認

なまに終わった。

以上、大道廃寺跡調査における建物跡・古墓・経塚等の検出に関し考察を行ってみたが、個々の遺構に対して十分な考察であるとは思えない。今回の調査における遺構・遺物とも資料価値は高いものであった。本報告では、これらの資料を十分に生かすことができずに報告する次第となった。今後により大きな問題を残すことになったが、調査成果の報告をもってまとめとしたい。

ま と め

豊富谷丘陵遺跡の発掘調査は、昭和54年度の分布調査の結果を受けて、昭和55年5月から昭和56年3月までの1年10か月に及ぶ調査であった。昭和54年10月に日本国有鉄道大阪工務局と豊富谷丘陵における電車基地建設に関して協議した。翌11月から京都府教育委員会が昭和54年度の分布調査を行った当時は、豊富谷丘陵一帯はまだなだらかな丘陵であって、樹木が生い茂った状態であった。この時の分布調査では、「はじめに」で触れたように、この丘陵地全体で81か所の古墳や寺院跡の存在することがわかった。そのうち、電車基地に含まれるところには、33か所の遺跡があり、翌年から調査に入った。

昭和55年度は、主として論田墳墓群・大道墳墓群の調査を行った。論田墳墓群は、総数13基からなり、4世紀から6世紀にかけて築造されたものとみられる。墳墓の規模は、まちまちであるが、おおむね10m前後のものが多い。形態は、ほとんど方形墳ばかりである。出土遺物には、RD5号墳で古式土師器、RD11号墳では鉄刀とともに見つかった竹製の堅櫛などの特殊なものもある。全体的には、出土した土師器や須恵器から古式土師器段階・須恵器使用段階の墳墓に分けることができる。調査した墳墓には、遺物の出土が認められないものもある。

一方、大道墳墓群の方は、狭長な尾根上に連続して墳墓が築かれる。各墳墓は、尾根を切断する溝によって区画され、その規模は、10m前後のものが多い。形態は、論田墳墓群同様、方形のものが大多数を占める。DD1・7号墳からはおのおの3か所の主体部を検出し、古式土師器が出土した。DD5号墳からは、須恵器杯身・杯蓋がセットで発見され、鉄鏃も共伴していた。DD6号墳からは特殊な壺棺が出土するなど、遺物は多種多様を極めている。また、DD17号墳では古墳を削平した後、室町時代に属する火葬墓も見つまっている。

翌昭和56年度には、谷尾谷墳墓群・セイゴ墳墓群・狸谷墳墓群のほか、狸谷城跡・大道廃寺の調査を実施した。谷尾谷墳墓群は、総数11基からなり、前年度調査の論田・大道両墳墓群同様、方形墳が大多数を占めている。規模も11m前後のものが多い。TT1号墳から5号墳は、大道墳墓群と同じく階段状に構築されている。出土遺物としては、TT1号墳から見つかった内行花文鏡1面のほか、鉄剣等の鉄製品がある。TT4・5号墳からは古式土師器が出土しており、これらの墳墓が古墳時代の最初期に築かれたことがわかる。なお、TT5号墳には中世の火葬墓が1か所認められ、そのなかから火葬人骨や銅製品が出土している。

セイゴ墳墓群は、他の墳墓群と比べ、墳墓の密集度も低く、高い墳丘を持つ例が多くな

り、おのおの独立的な性格を帯びていると思われる。各墳墓の規模は、長方形墳が多く、一辺が12～18m前後を測る。SG10号墳から鉄製鋤先が出土しているが、墳墓の時期を示す土器等の出土はみられなかった。

狸谷墳墓群は、TD4号墳～狸谷城跡第Ⅲ地点及びTD16号墳にかけて、畑地として開墾を受けており、尾根頂部から裾部に至るまで段々畑として明瞭にその痕跡を残していた。そのため、旧地形はかなり削平されており、墳墓らしきものは存在したが、その原型をとどめてはいなかった。立地的には墳墓と考えても、断定するには至らなかった。従って、この付近は、尾根筋の面積が大きい割に遺跡の空白地となっている。

以上の墳墓群は、個々では形態的には差異があるが、全体的には、①狭長な尾根状に立地し、②墳墓の規模が10m内外で、③形態は方形のものが多く、④主体部も木棺直葬ばかりで、⑤墓壇は大半が複数であり、その形状も二段墓壇・U字形素掘り壇・「∟」形素掘り壇で、⑥副葬品を持たないもの・鉄製品のみを副葬するもの・土器を共伴するものの3つに大別できる、という共通した特色を持っている。これらの特徴がなにに起因するものかは定かではないが、弥生時代から古墳時代にかけての墓制の連続性という観点からみれば、方形台状墓の系譜を引くものと理解される。

狸谷城跡は、丹波・丹後地方に多く存在する中世の山城とみられたが、調査の結果、顕著な城跡に関する遺構は、土塁を確認したに過ぎない。それとは別に、墓跡5か所と焼土痕跡がみつまっている。

大道廃寺は、中世の寺院跡で、寺院に関する掘立柱建物跡2棟とその建て替えたもの2棟の計4棟を検出している。このほか、中世火葬墓27基と経塚が1か所見つかっている。特に、この経塚には、竹製の経筒2口・銅製経筒1口が収められており、銅製経筒内には「妙法蓮華経」八巻・「阿弥陀経」一卷が遺存していた。

これらの豊富谷丘陵上に所在する遺跡群は、各時代・各種にわたるもので、一つにまとめることは困難であるが、墳墓に関しては先に述べた諸特徴にまとめることができる。特に、Ⅰ・Ⅱ区の墳墓をみる限り、鏡を副葬する墳墓を中心とするグループと無遺物に近い墳墓グループに大別できる。この差が被葬者の社会的地位を示すものか、あるいは築造経緯・社会的背景によるものかは今後の課題としたい。また、大道廃寺については、寺院跡が確認されたことで、威光寺文書にみえる「今安寺」との同定が問題となるが、資料が少ない現段階では断定するには至らない。今後、これらの点を含めて、資料の増加を待って考えていきたい。

<付 載>

大道寺経塚出土埋納紙本経の保存修理とその意義

難 波 田 徹

経塚でその主体をなすのはあくまでも經典(経卷)である。

11世紀から12世紀にかけて、末法の到来を意識した平安時代の人びとは、盛んに經典を書写し、地下に埋納した。我が国では一般に永承7年(1052)を以て末法の世に入ったと信じられ、この時期を中心として埋経が盛んに行われた。経塚についての正確な数は把握されていないが、一千か所以上に及ぶものと推定される。この風習はその後もひきつづいて存続し、江戸時代にまで及んでいるが、末法到来の危機感を踏まえた平安時代が圧倒的に多いことは言うまでもない。

埋経の本義は、釈迦入滅ののち56億7千万年後に、釈迦にかわってこの世を救う弥勒の世まで、經典や法具を伝えようとするところにあったとされている。時代とともに極楽往生、現世利益、追善供養などの願意が加わって多少の変化はみられるが、埋経は紙に經典を書写したいわゆる紙本経経塚が主流であった。しかし紙は土中の湿気に弱いという欠点がある。このことは、長元4年(1031)の年紀のある上東門院彰子の『女院御願文案』に「(前略)此の世の紙墨にてかき、あだなるかまへしておさめたてまつれば、浅き人のためには、朽ちそこなわれたまふとみる時ありとも(後略)」とあるように、土中で紙が朽損するであろうことはその当時から強く意識されていたわけである。今日までの経塚の研究もこの紙本経経塚を中心にすすめられてきたわけであるが、どちらかといえば経卷を入れた経容器などがその対象だったといえよう。二、三の例外を除いて、経卷はどんなに丁寧な埋納方法をとったとしても腐蝕が甚だしく原形をとどめるものが少ないことが勢い経容器に研究がむけられたことになった面もあろう。決して経卷に関する研究が皆無であったといっているわけではなく、経卷そのものの研究の必要性を強調したのである。

その点では最近の埋納紙本経の保存修理に関する技術は長足の進歩をとげてきており、その結果これまでも多くの成果を納め、こうした面での研究をかなり可能にしてきているといえよう。こうした時期に豊富谷丘陵遺跡の大道寺経塚から出土した紙本経に保存修理が加えられた。その修理の工程中身近に調査する機会に恵まれたので、保存修理の意義と修理された紙本経の位置づけを行い、その責を果たしたい。紙本経の保存修理の施工者は京都国立博物館文化財保存修理所内の岡墨光堂であったが、墨光堂ではごく最近、京都

市左京区の花背別所経塚から出土した紙本経の保存修理を行っており、今回もこうした経験から順調に修理が行われた。この困難な作業を岡墨光堂の菊池英恭氏が携わったが、氏の労苦に対し敬意を表しておきたい。

埋まっていた土中の状況によって紙本経の在り方も千差万別である。

今回の紙本経は上半分が腐蝕している通例のものであるが、見た目には八卷分と思われた。巻かれた状態で固まっているものが六点、ぼろ状になっているものが二点で、いずれもが湿気のために巻子の姿をとどめていなかった。現状の縦法量も16cmから8.8cmと不同で腐蝕も一律でなく、巻かれた紙と紙とは固着しており、本紙は綿状になっていた。こうした状態のものに保存修理を加えていったわけであるが、その工程として、

- (1) 巻いて固まっている状態の経巻を水等によって丁寧に剥ぎ取り伸ばしていく。
- (2) 展開後、水溶性樹脂(P.V.A.)によって補強する。
- (3) 最寄の補修紙により欠失箇所にも補紙を施す。
- (4) 肌裏を打ち補強する。
- (5) 各本紙にもう一度裏打を施し、よく照合し継ぎ合わせる。

の順序で行ったわけであるが、今回は特に(1)の作業で、フラスコ内の水をバーナーで熱して蒸気をつくり、わずかにふくらんだ紙をピンセットで剥していきながら展開することに成功したのである。慎重な作業の結果、

- (1) 紙本経は九卷あったこと。
- (2) 経典の内容は妙法蓮華経と阿弥陀経であったこと。
- (3) 紙本経は頓写経であったこと。
- (4) 状態からして軸は当初よりなかったこと。
- (5) 天地の復原寸法を21.3cmとしたこと。

などが確認された。このうち(3)についての頓写経であったことは巻かれている状態からして判っていたことであった。頓写経であるから巻かれている上部がいわゆる奥書の部分にあたっているため最初の剥ぎ取りについてはより慎重を期したが、別表にみるようにその部分の腐蝕が甚だしく、経文しか確認できなかった。

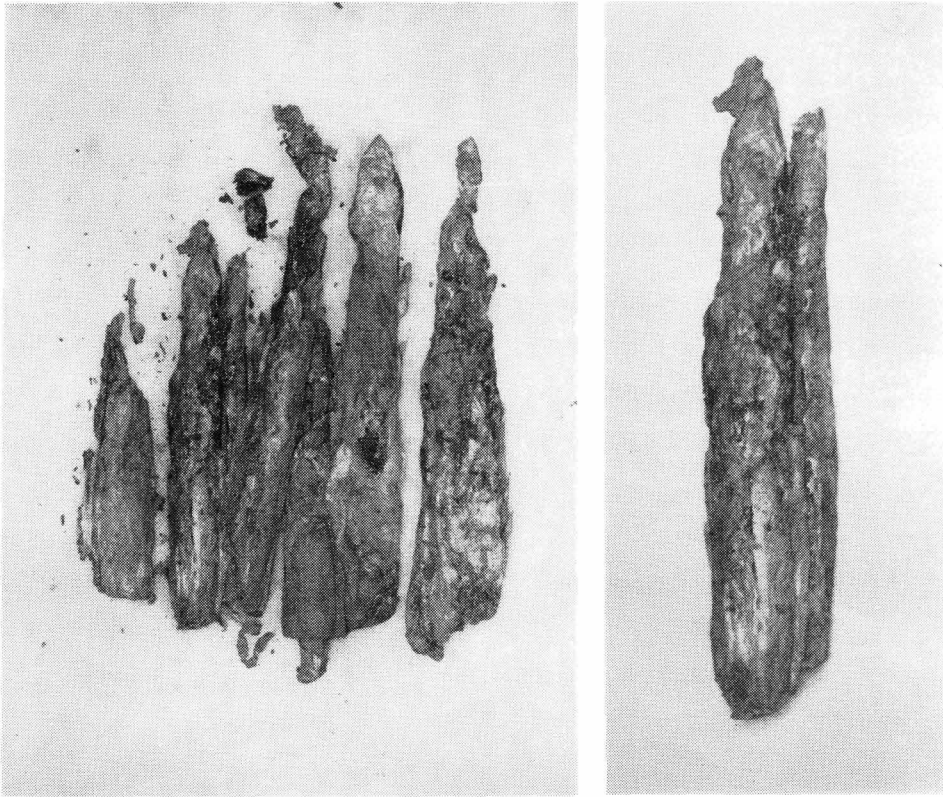
上記のような成果を修められるかどうかは工程の最初には予測されなかったが、作業がすすんでいくなかで、見た目には八卷分と思われていたのが実は九卷であったことが判明した。このことはそれだけ表面の腐蝕がはげしかったことを意味しており、阿弥陀経などはほとんど経巻の体をなしていなかった。最初八卷分ということで剥ぎ取る前には妙法蓮華経一部八卷ではないかと安易に予測していたわけであるが、展開してみると九卷ということになり、まずは経典の確認にその主力を注ぐことになった。九卷のうち八卷は妙法蓮華

別表1 修理後紙数法量表 (単位センチメートル)

種類	紙数 巻数	紙数										合計	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		11
妙法蓮華經	巻1	4寸5分 13.6	1尺1寸8分 35.8	1尺5寸3分 31.8	1尺4寸1分 42.7	1尺3寸1分 39.7	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	—	—	342.8
	巻2	4寸 12.1	1尺2寸9分 39.1	1尺5寸8分 47.9	1尺5寸8分 47.9	1尺5寸5分 47.0	1尺2寸4分 37.6	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	—	410.8
	巻3	7分 2.1	1尺5寸8分 47.9	1尺5寸8分 47.9	1尺5寸8分 47.9	1尺5寸8分 47.9	1尺5寸8分 47.9	1尺5寸9分 48.2	1尺5寸1分 45.8	1尺6寸2分 49.1	1尺4寸3分 43.3	5寸 15.2	443.2
	巻4	1尺2寸8分 38.8	1尺4寸1分 42.7	1尺4寸1分 42.7	1尺4寸2分 43.0	1尺4寸 42.4	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	—	—	388.8
	巻5	4寸3分 13.0	1尺4寸 42.4	1尺4寸1分 42.7	1尺4寸1分 42.7	1尺5寸3分 46.4	1尺5寸5分 47.0	1尺5寸5分 47.0	1尺5寸1分 45.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	—	416.6
	巻6	8寸5分 25.8	1尺8寸 32.7	3寸6分 10.9	1尺4寸2分 43.0	1尺3寸7分 41.5	1尺4寸2分 43.0	1尺4寸2分 43.0	1尺4寸1分 42.7	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	417.0
	巻7	1尺3寸6分 41.2	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺3寸4分 40.6	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	—	—	—	350.6
	巻8	1尺2寸 36.4	8寸8分 26.7	1尺5寸4分 46.7	1尺5寸5分 47.0	1尺5寸5分 47.0	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	1尺4寸8分 44.8	—	—	—	338.2
阿陀弥經		6寸3分 19.1	1尺4寸6分 44.2	1尺4寸8分 44.8	—	—	—	—	—	—	—	108.1	

別表2 花背別所経塚出土紙本経修理後法量表 (単位センチメートル)

巻数	紙数	紙数										合計	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		11
巻1	28.3	32.5	39.0	38.3	28.2	30.3	43.7	57.6	58.8	16.7	—	—	373.4
	58.5	57.3	58.4	57.5	58.4	56.5	58.7	58.8	58.8	16.7	—	—	539.6
巻2	44.3	57.9	58.5	57.9	58.3	58.5	58.0	58.2	58.6	26.3	48.7	29.1	614.3
	58.5	57.9	58.5	57.9	58.3	58.5	58.0	58.2	58.6	26.3	48.7	29.1	628.5
巻4	36.0	58.7	58.0	58.0	58.3	58.3	58.3	58.3	57.0	—	—	—	500.9
	58.5	58.7	58.0	58.0	58.3	58.3	58.3	58.3	57.0	—	—	—	523.4
巻5	36.0	52.2	58.5	欠失	8.0	59.3	58.9	58.9	58.6	—	—	—	390.4
	58.5	58.7	58.5	58.4	58.8	59.3	58.9	58.9	58.6	—	—	—	528.6
巻6	16.6	27.2	33.5	36.5	38.6	44.6	58.7	58.9	58.7	16.8	—	—	390.1
	58.5	58.5	54.3	62.4	58.4	59.0	58.7	58.9	58.7	16.8	—	—	544.2
巻7	48.3	58.0	58.0	58.3	58.3	58.5	58.0	58.3	39.8	—	—	—	495.5
	58.5	58.0	58.0	58.3	58.3	58.5	58.0	58.3	39.8	—	—	—	505.7
巻8	49.2	53.4	11.8	56.0	47.5	58.9	13.4	58.7	40.5	—	—	—	389.4
	58.5	58.7	53.1	56.0	47.5	58.9	13.4	58.7	40.5	—	—	—	445.3



保存修理前の紙本経

経の巻一から巻八までということが即座に判ったが、残りの一巻については妙法蓮華経の開結経(無量義経・観普賢経)のどちらかの可能性が強かったわけであるが、結果的には阿弥陀経ということが經典との対校で明らかとなった。經典の種類で最も多いのが妙法蓮華経一部八巻であり、般若心経・阿弥陀経・弥勒三部経・理趣経などがその主なものであったが、これまで平安時代後期の経塚で妙法蓮華経と阿弥陀経が埋納されているということは在銘経筒などでみる限り少ない事例である。經典の内容は以上のように確認できたが、土中にある間の湿気の関係と思われるが、墨書された経文が二重写し、三重写しになっているところはかなりあり、それぞれの経文が經典のどの部分にあたるのかということをかかなりの時間をかけて対校したが判明できずこれらについては未確認のまま残さざるを得なかった。

別表1は、この妙法蓮華経巻一から巻八及び阿弥陀経のそれぞれの料紙の修理後の紙数の寸法を表したものであるが、阿弥陀経が甚だしく腐蝕していたことがわかる。横はその復原寸法が可能であるが、天地の寸法は上半分が欠損しているので、経容器の内寸法を考慮しながら復原寸法をだした。当然、決定するにあたってはこれと同時期と思われる他の

埋納紙本経の法量などを参考にしたが、平均すると21.3～21.5cmという数値であり、これに内寸法を勘案して21.3cmに決めたわけである。別表2は、さきに保存修理が加えられた京都市左京区花背別所町の花背別所経塚から出土した埋納紙本経(妙法蓮華経)の7巻分の、これも紙数法量を示したものであるが、大道寺経塚同様、かなり傷んでいたことが納得されよう。この紙本経の容器はすこし大振りで、天地の復原寸法は24.1cmになった。紙数法量には、すこしくばらつきが認められるが、寸法的にみると大道寺経塚の方が10cm前後短いわけである。花背別所経塚からは仁平3年(1153)、保元2年(1157)在銘の経容器が出土しているので、この紙本経もこうした時期に書写されたものと考えられている。紙数法量の長短の差が時代の新古をあらわしているのかどうかは現時点では即断できず、資料の増加が望まれるところであるが、紙本経そのものに紀年銘等の奥書のあるものとはともかく、経容器などに紀年銘のあるものに納入されていた紙本経について細かく検討を加えていくことは、経塚研究にとって重要な課題となろう。書風についても他の紙本経の書風と比較してみると、平安時代後期と考えても差しつかえなからうが、そうすると経容器の年代とほぼ合致するのである。しかし、その書写が何人の手によって行われたかということになると、それぞれに筆癖がありにわかに決しがたく、これも今後の検討ということになろう。

最後に経軸のことに触れておきたい。結論的に言えば経軸などはなかったと言うことである。埋納紙本経の場合でも伝世写経と遜色ない軸及び軸首などが用いられているものもあるが、この大道寺経塚の場合は、ただ経文を書写したにすぎないが、一行十七字詰と言うのは経典通りに行われている。

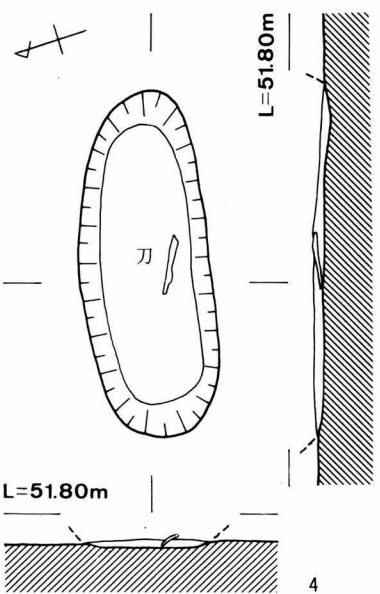
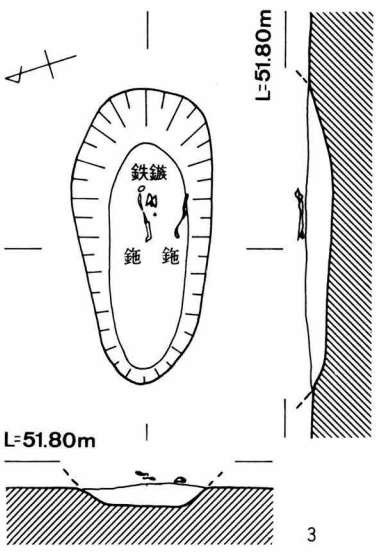
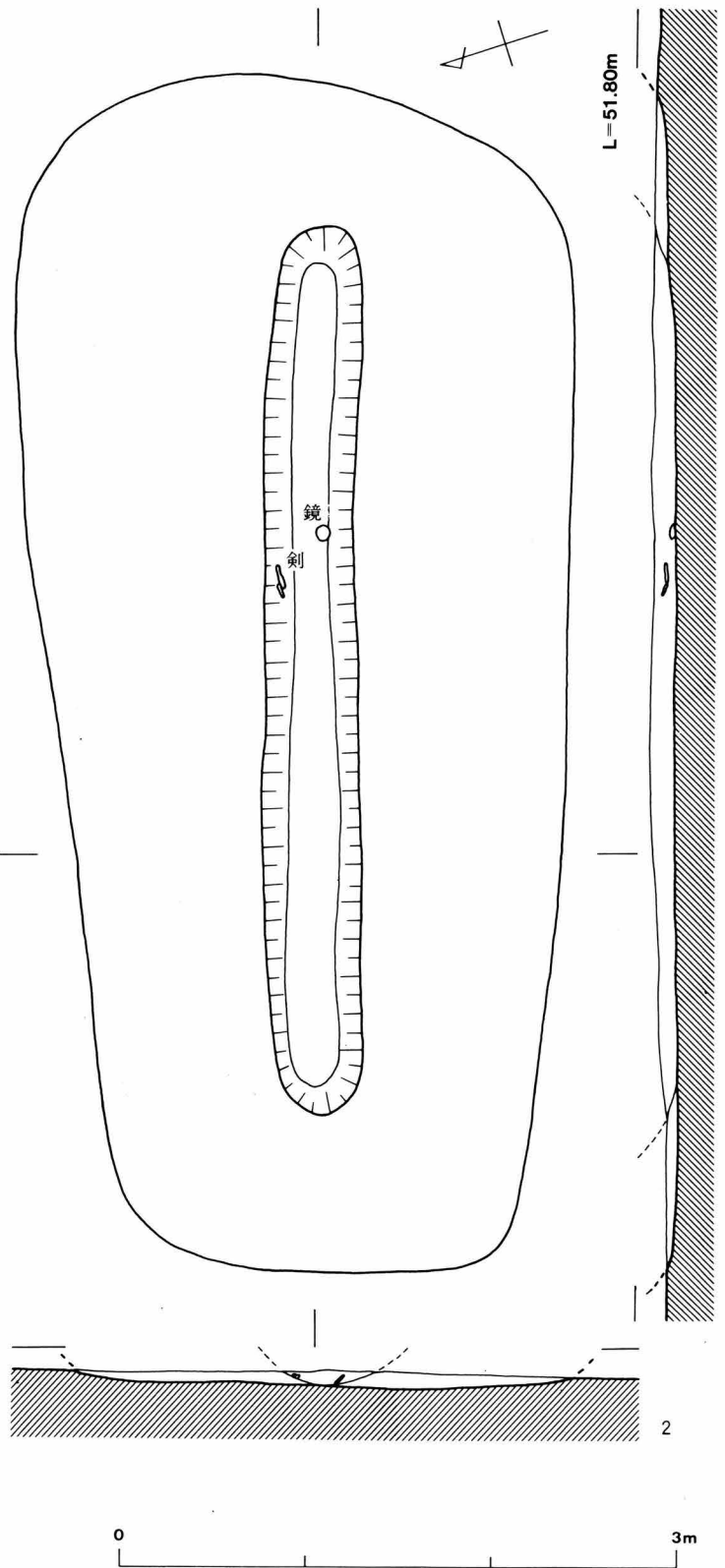
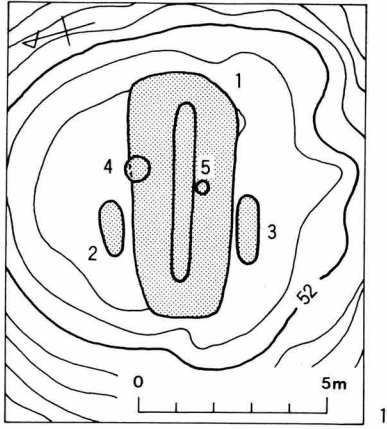
経塚の主体をなす経巻の保存修理によって以上の様な結果を得ることができた。

大道寺経塚からは竹製経筒をはじめ注目すべき多くの遺物の出土をみたわけであるが、紙本経、経容器ともに銘などが全くなく、どのような目的で埋納が行われたのか明らかにすることはむづかしい。しかし、発掘では調査地C地区で27基の古墓が確認され、その出土遺物等から鎌倉時代から室町時代前半にかけて次々に造営されたとされているが、経塚はこのC地区の南端中央部で検出されており、これが何らかの手懸かりになる可能性もあるが、今後の関連史料の発見に期待したい。

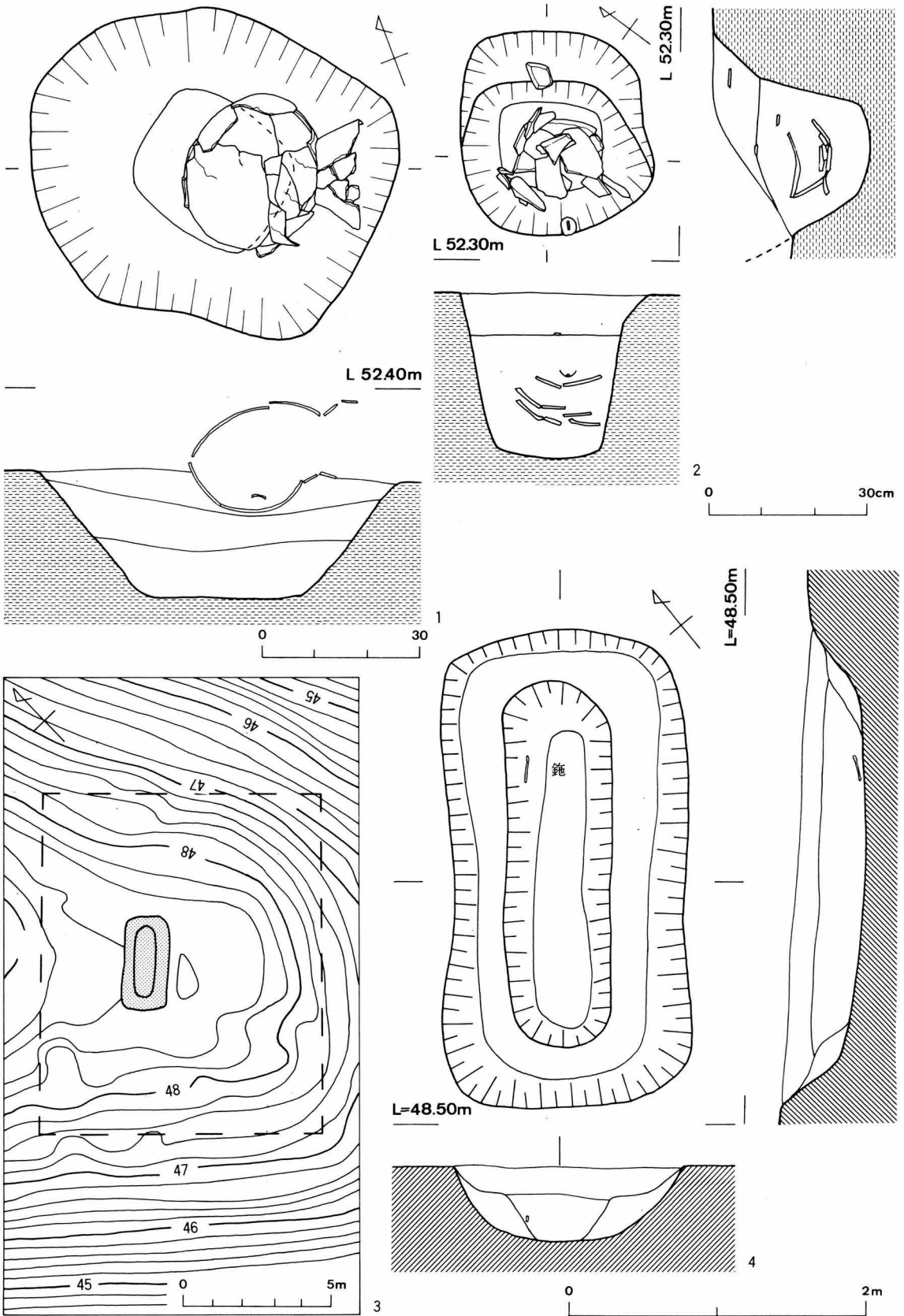
(難波田 徹=京都国立博物館資料管理研究室長)

图

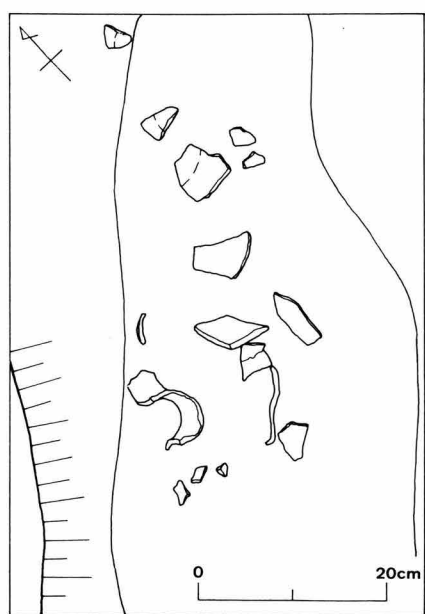
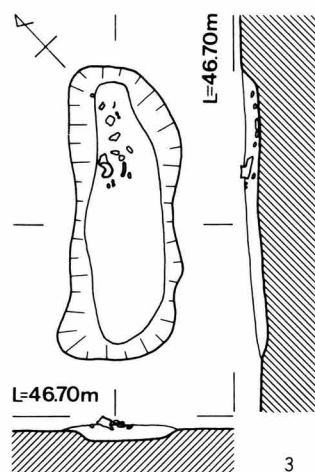
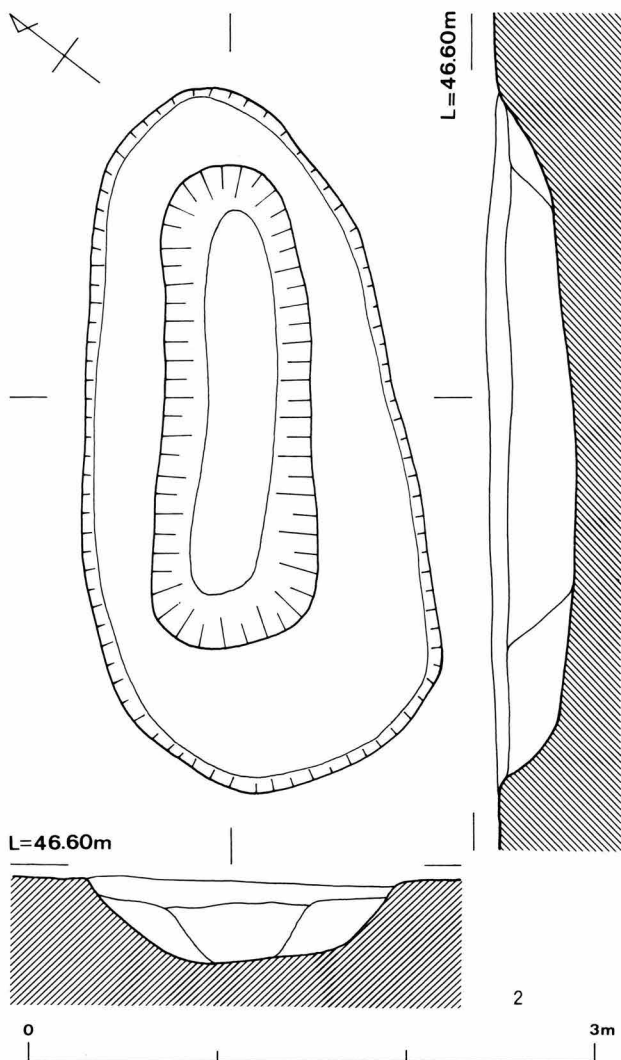
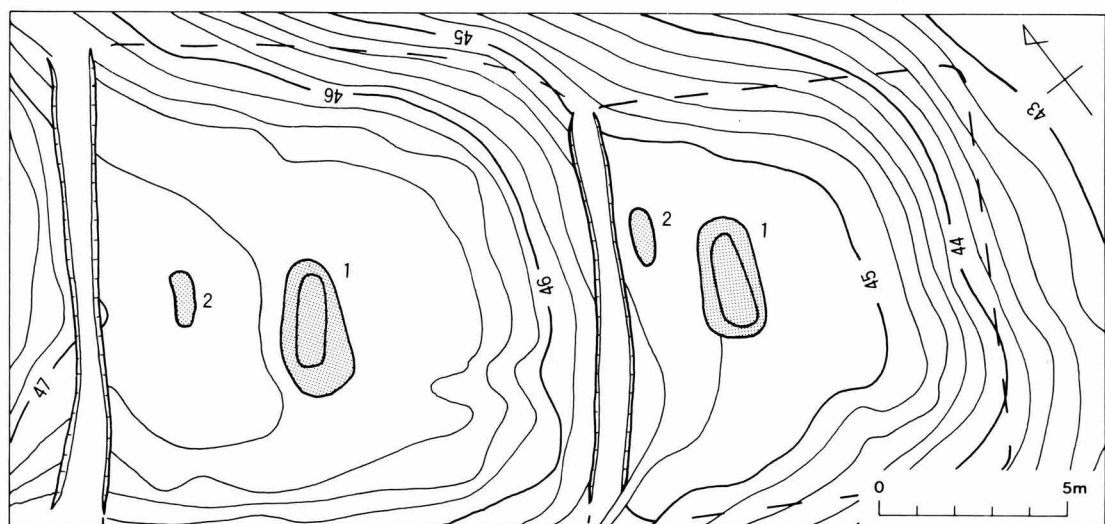
版



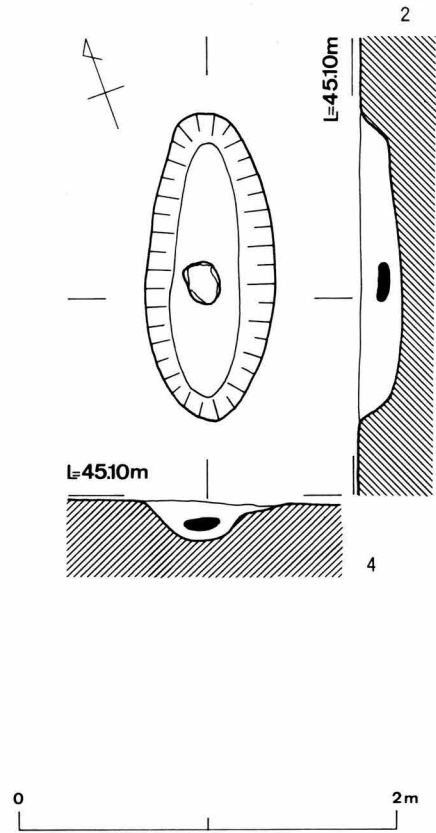
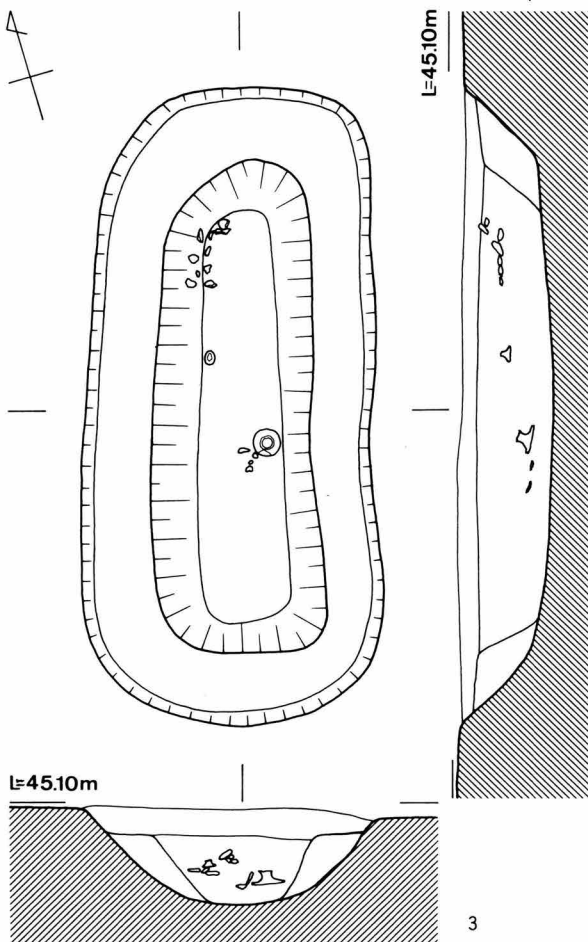
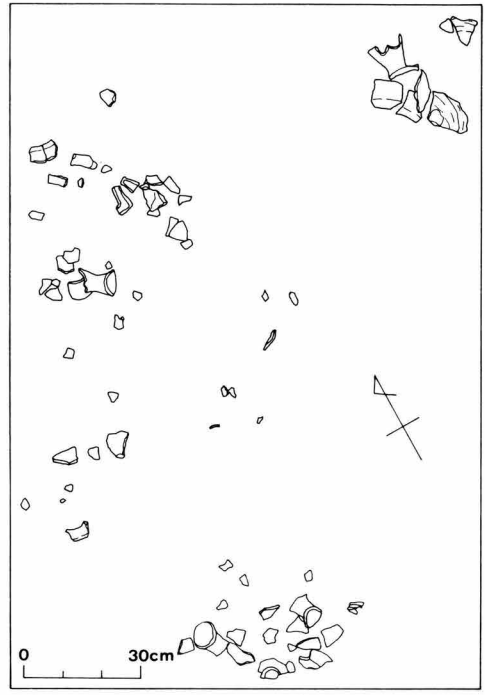
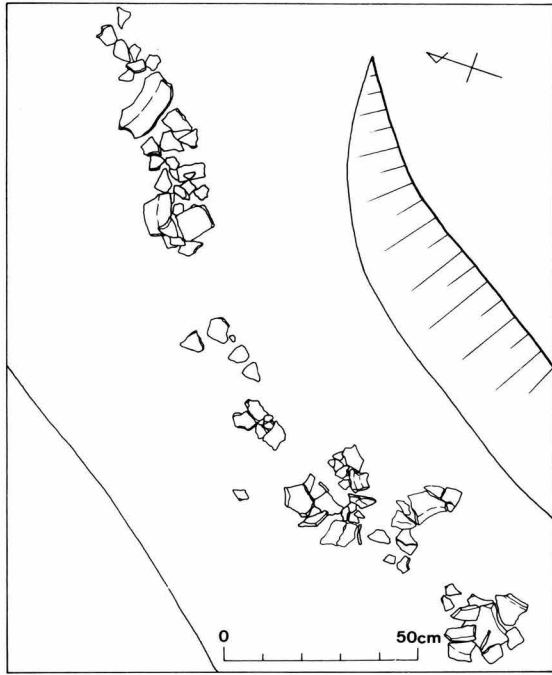
1. TT1号墳主体部配置図 2. TT1号墳第1主体部実測図
 3. TT1号墳第2主体部実測図 4. TT1号墳第3主体部実測図



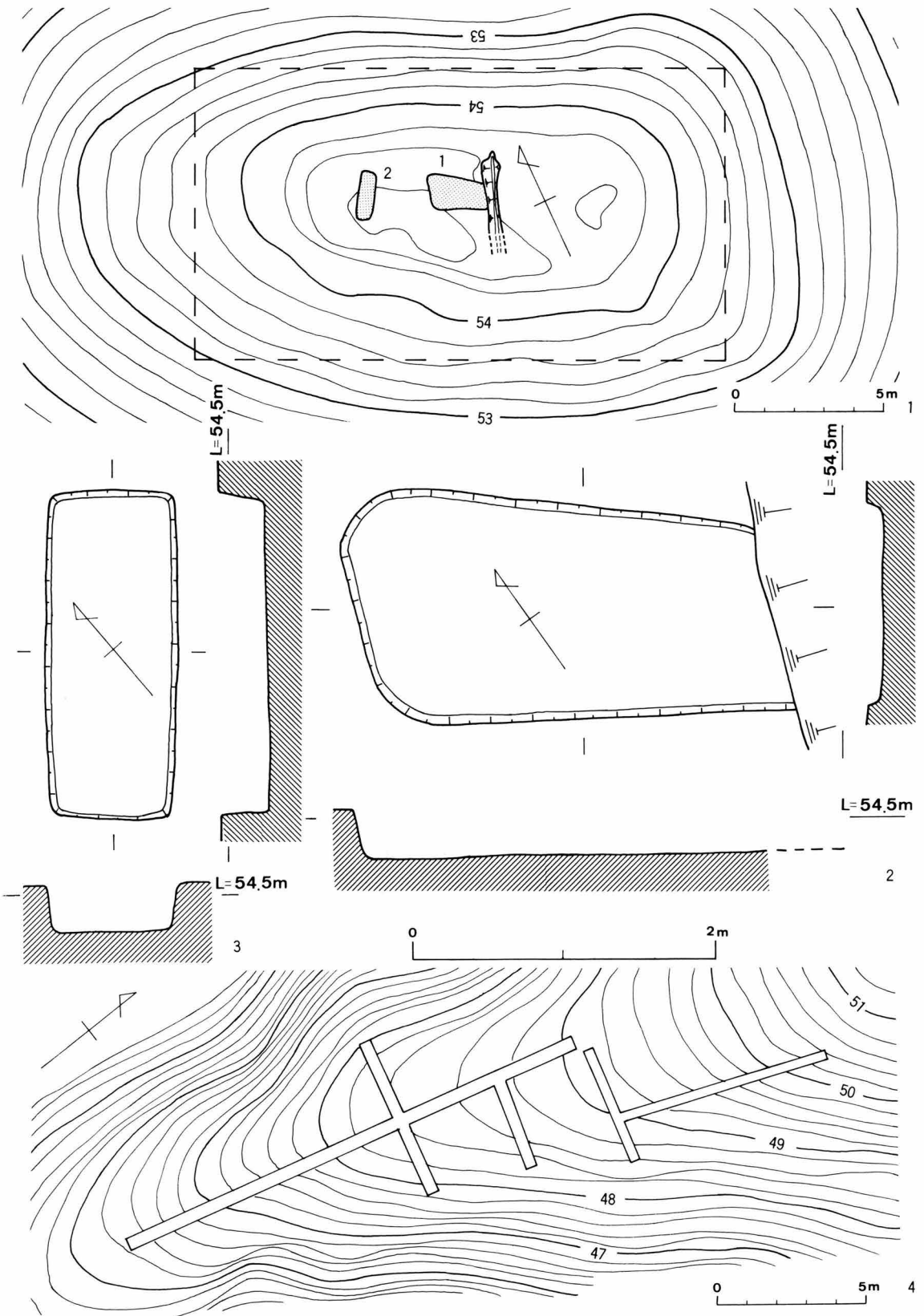
1. TT 1号墳土坑实测图 2. TT 1号墳第5主体部(中世墓)实测图
3. TT 3号墳主体部配置图 4. TT 3号墳主体部实测图



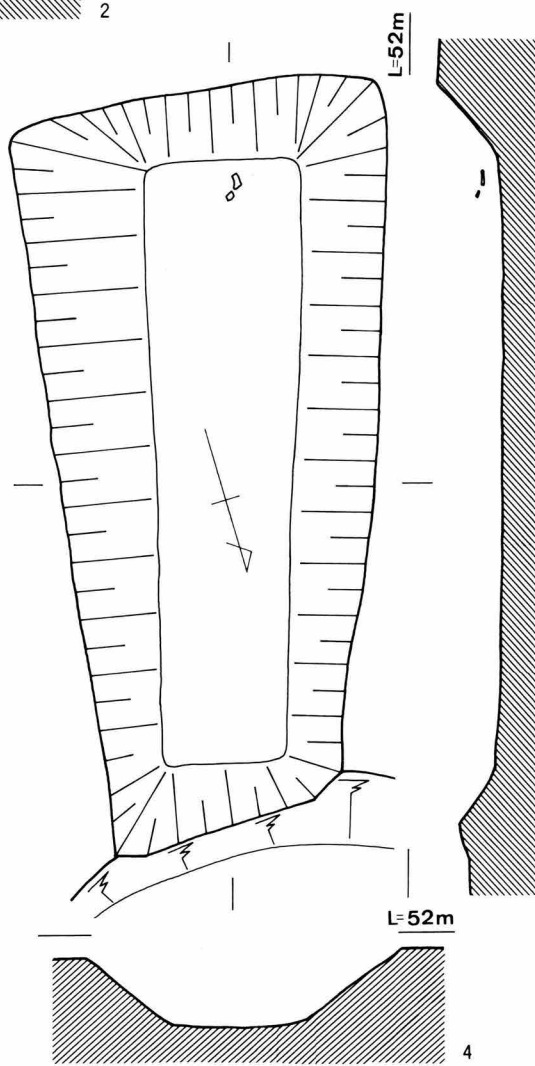
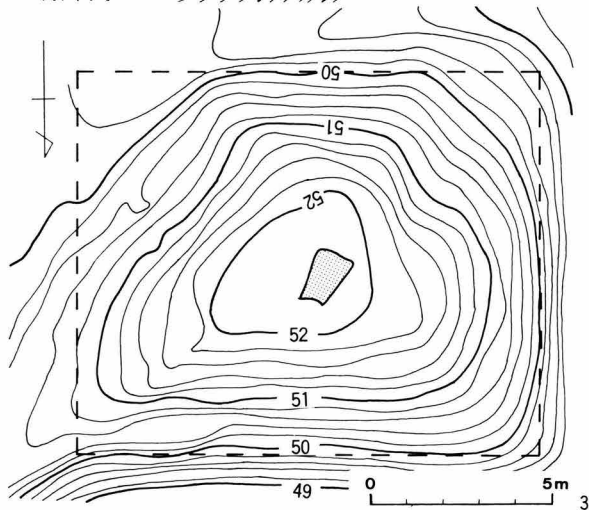
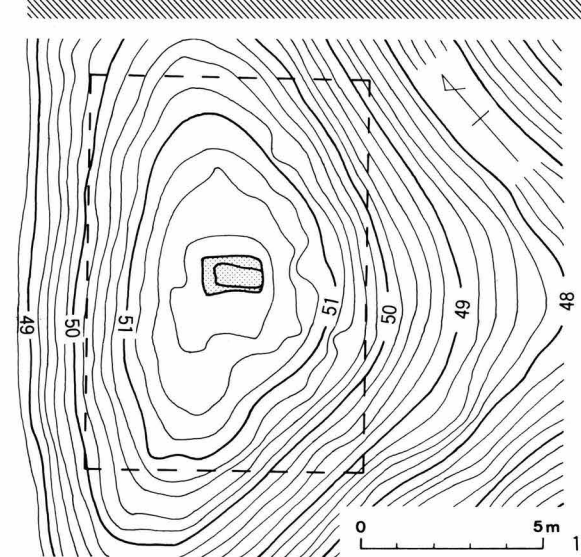
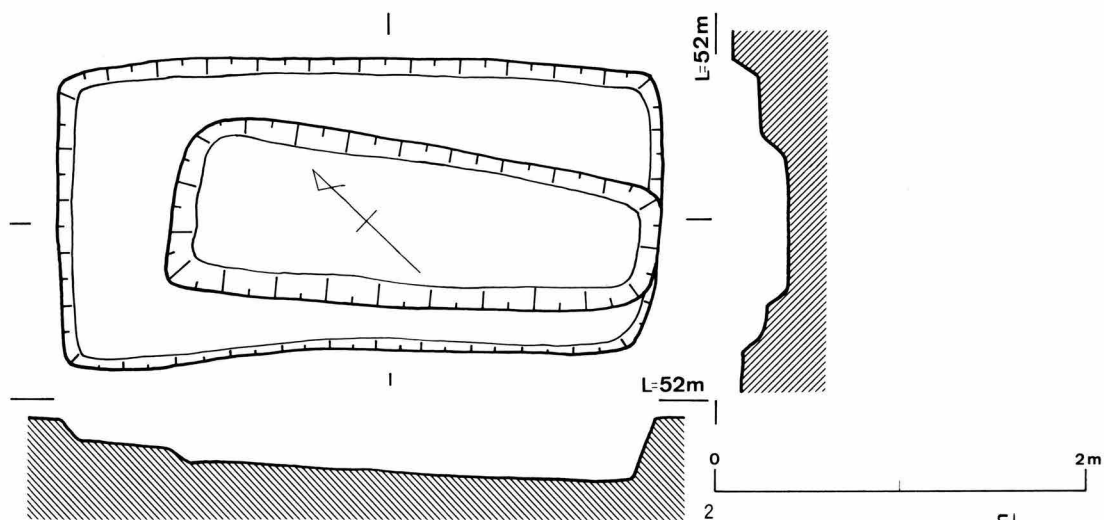
1. TT4·5号墳主体部配置図 2. TT4号墳第1主体部実測図
3. TT4号墳第2主体部実測図 4. TT4号墳第2主体部内遺物出土状況



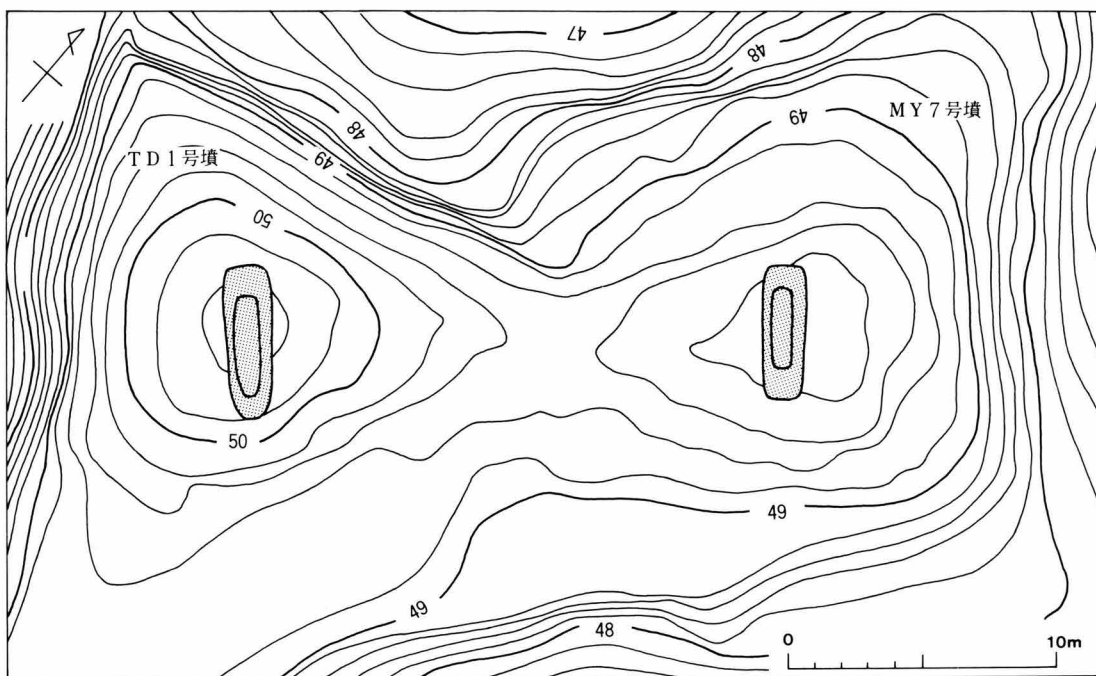
1. TT 4号墳西北側溝内遺物出土状況 2. TT 4号墳第1主体部東北側遺物(須恵器)出土状況
3. TT 5号墳第1主体部実測図 4. TT 5号墳第2主体部(中世墓)実測図



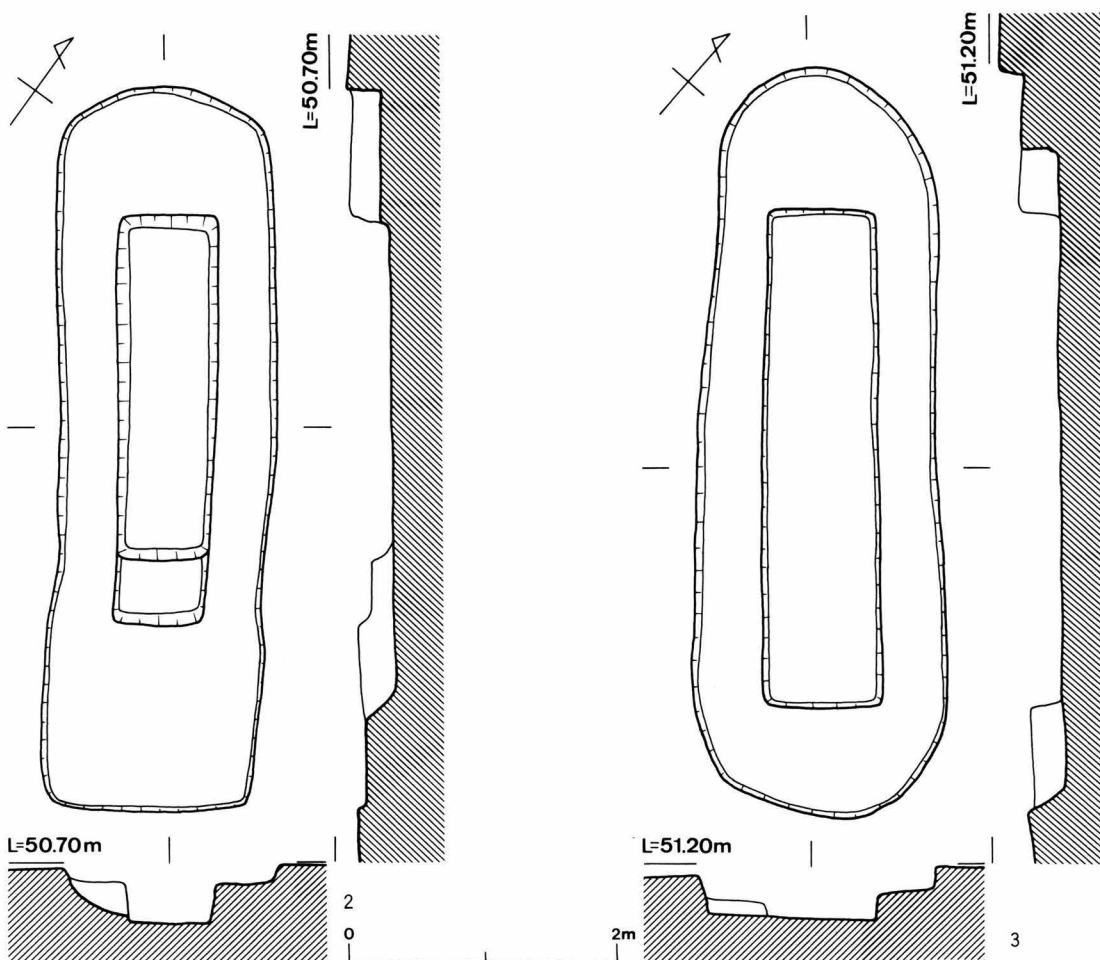
1. SG1号墳主体部配置図 2. SG1号墳第1主体部実測図
3. SG1号墳第2主体部実測図 4. SG7号墳トレンチ配置図



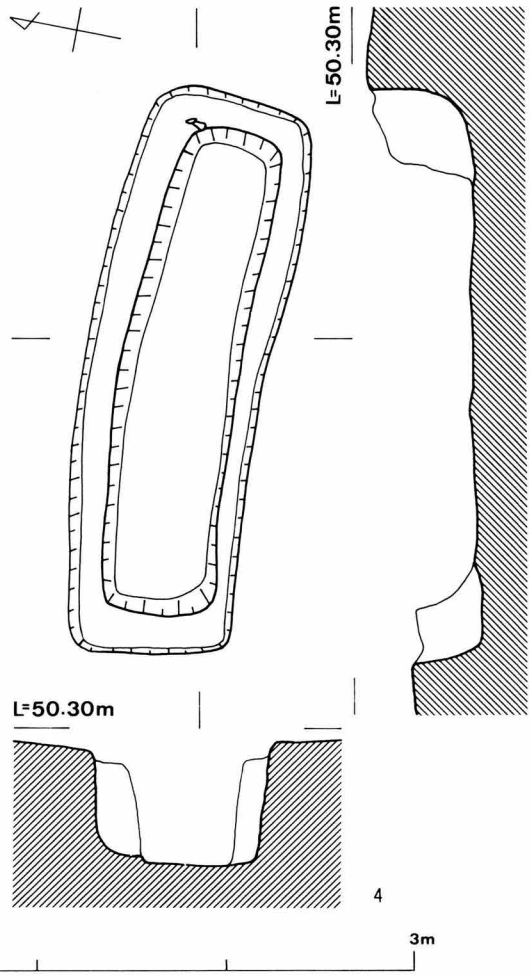
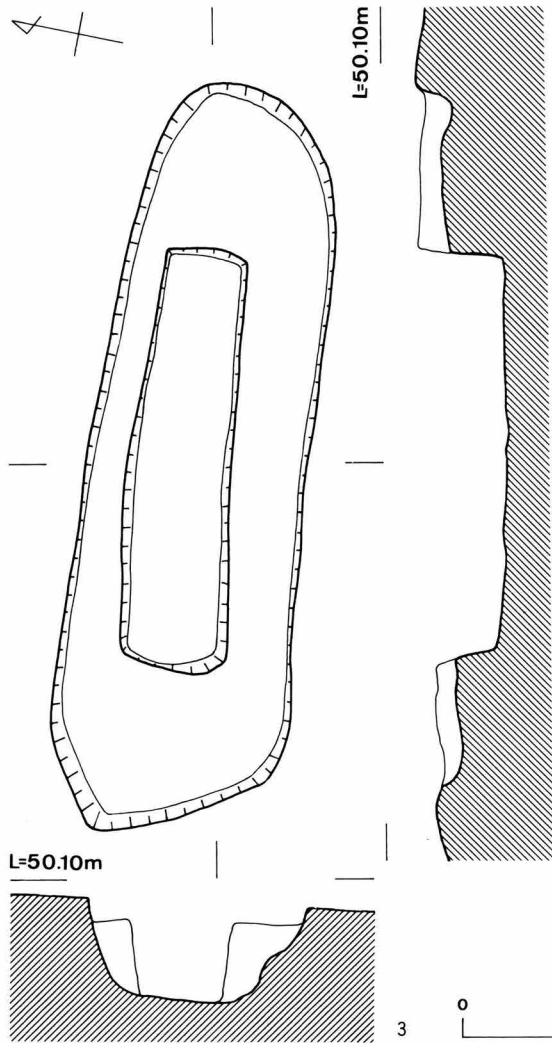
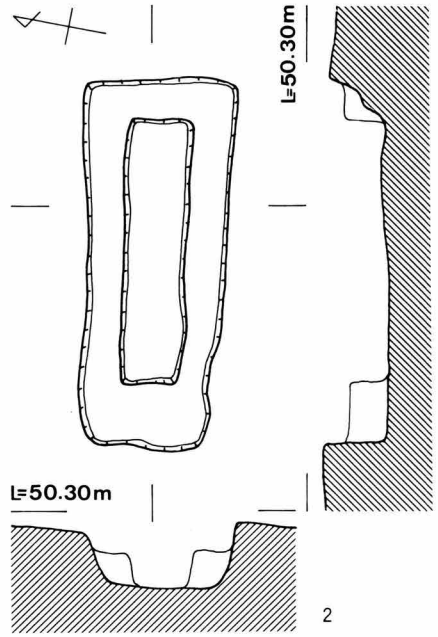
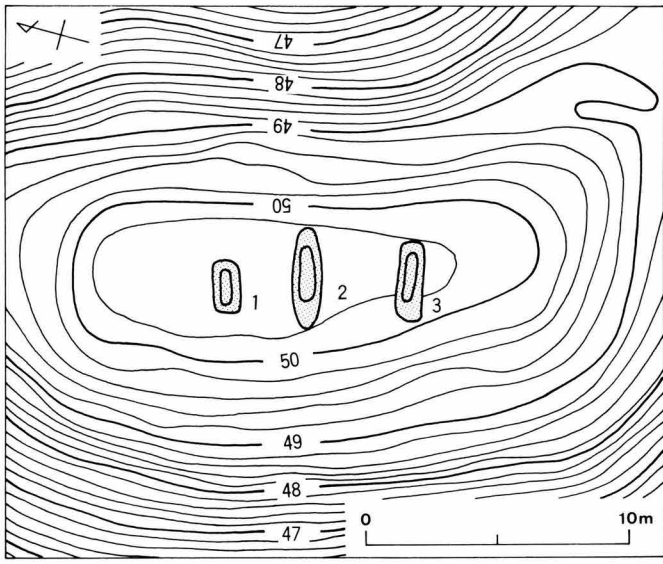
1. SG 8号墳主体部配置図 2. SG 8号墳主体部実測図
3. SG 10号墳主体部配置図 4. SG 10号墳主体部実測図



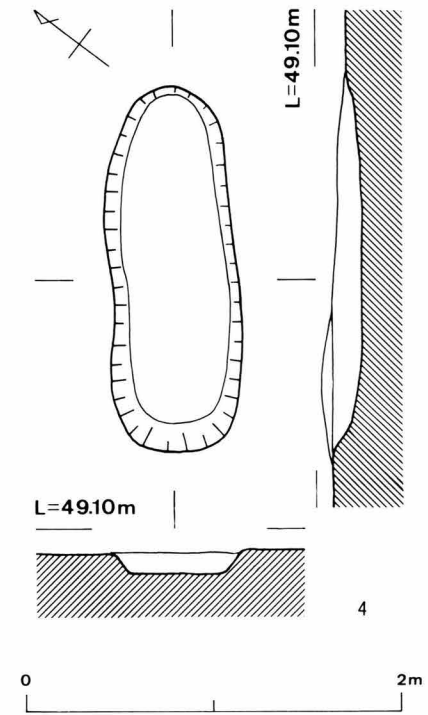
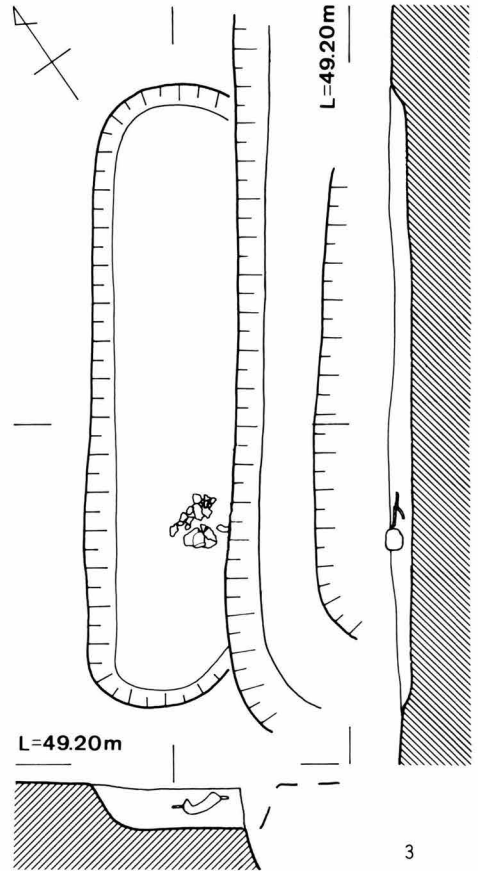
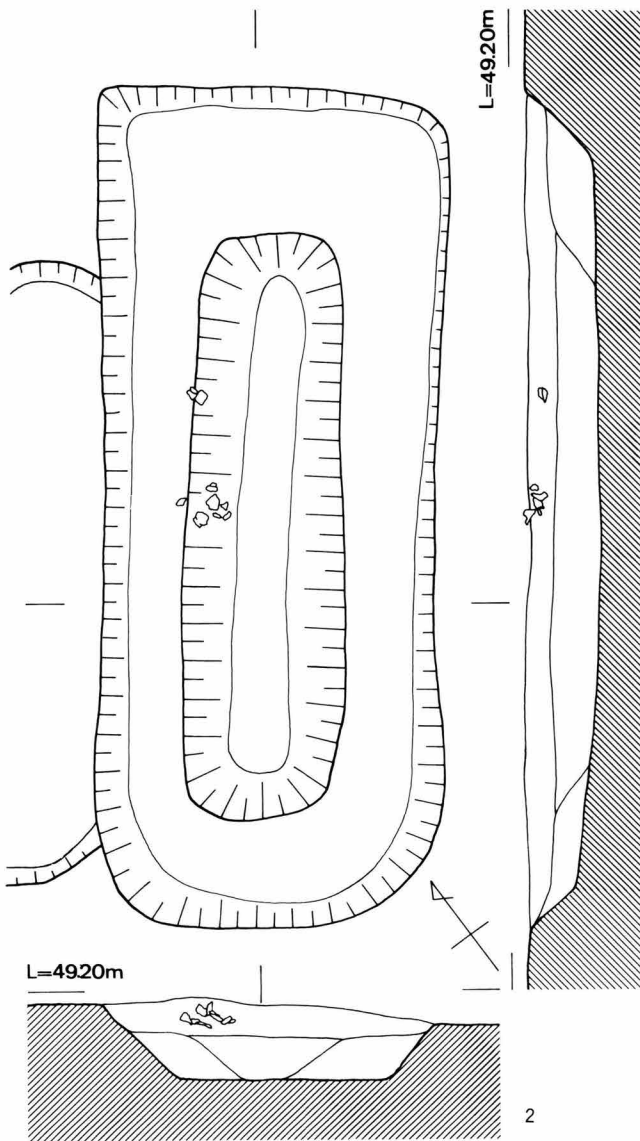
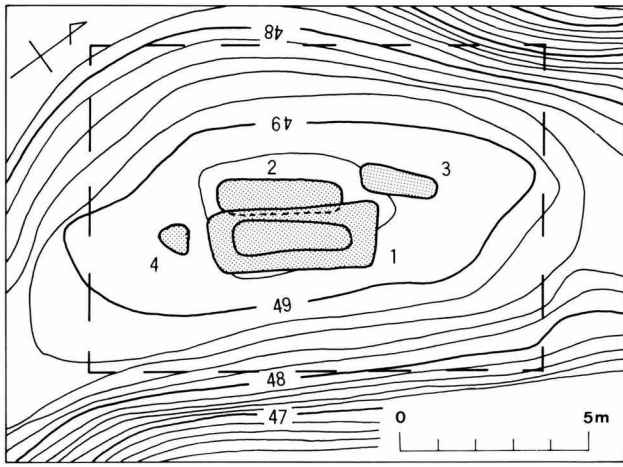
1



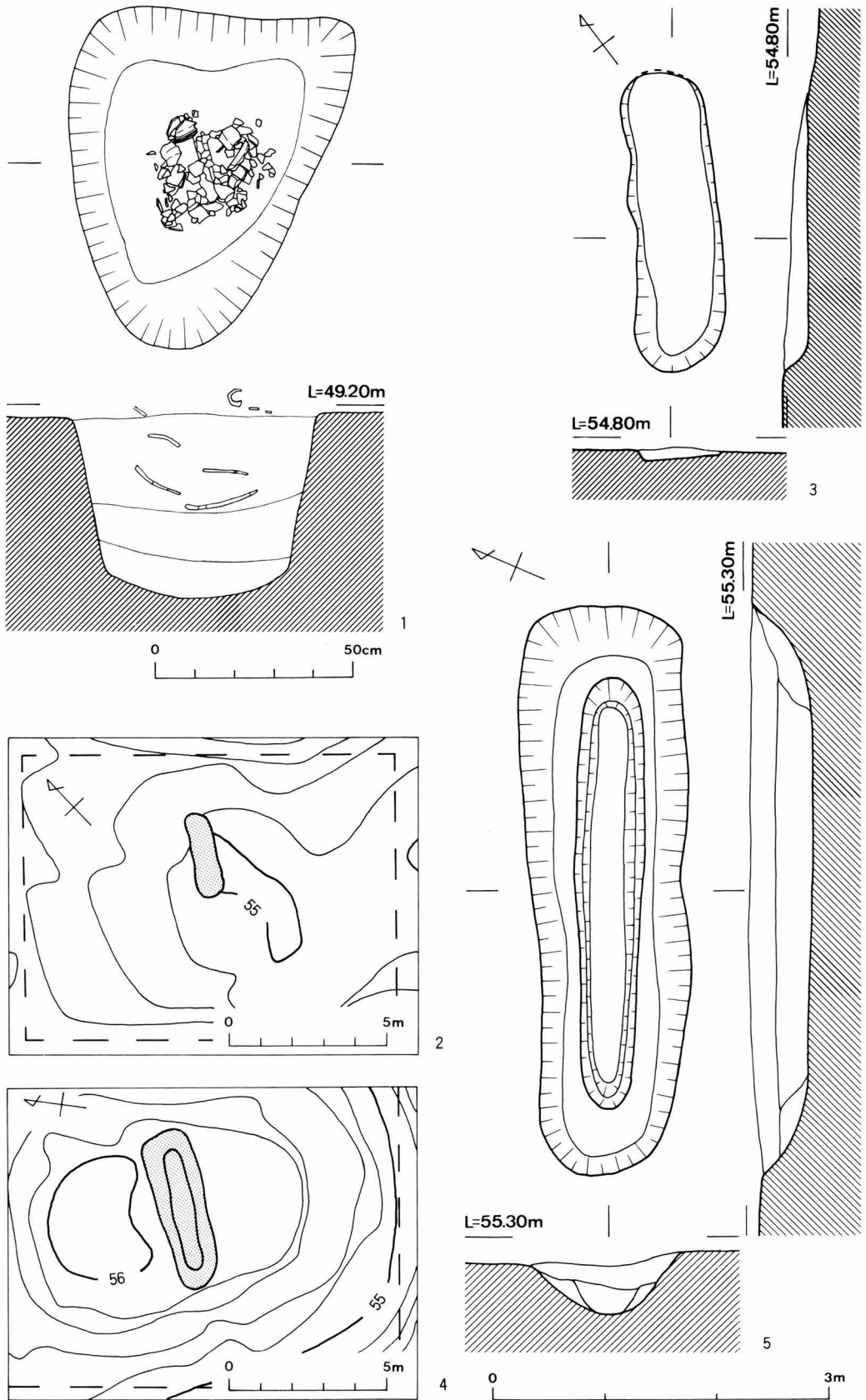
1. MY 7号墳・TD 1号墳主体部配置図 2. TD 1号墳主体部実測図
3. MY 7号墳主体部実測図



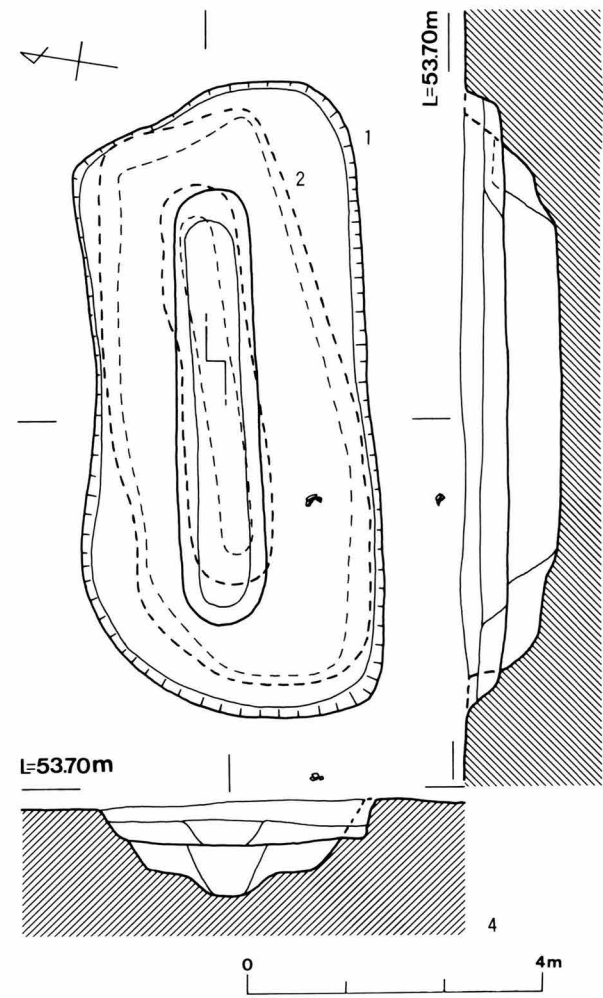
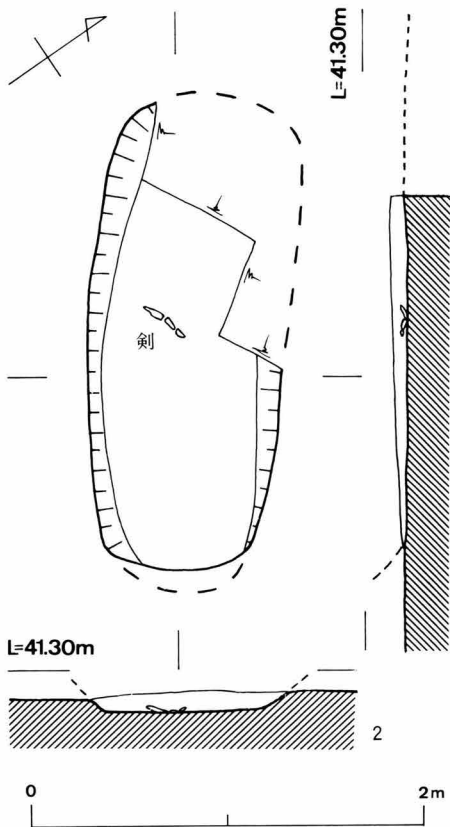
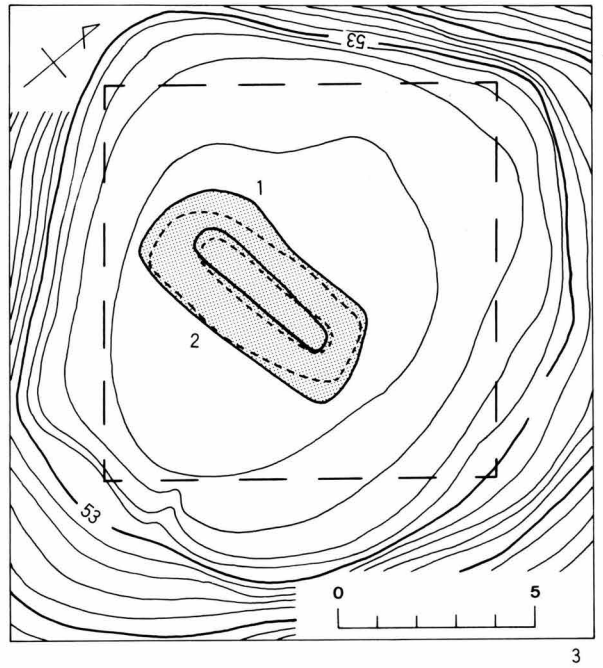
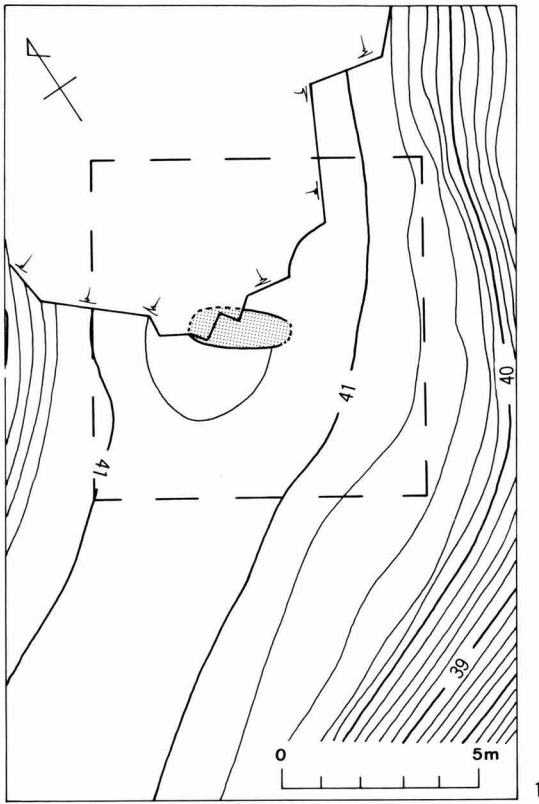
1. TD 2号墳主体部配置図 2. TD 2号墳第1主体部実測図
3. TD 2号墳第2主体部実測図 4. TD 2号墳第3主体部実測図



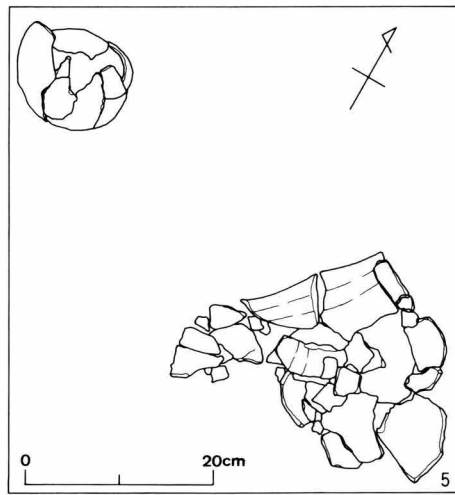
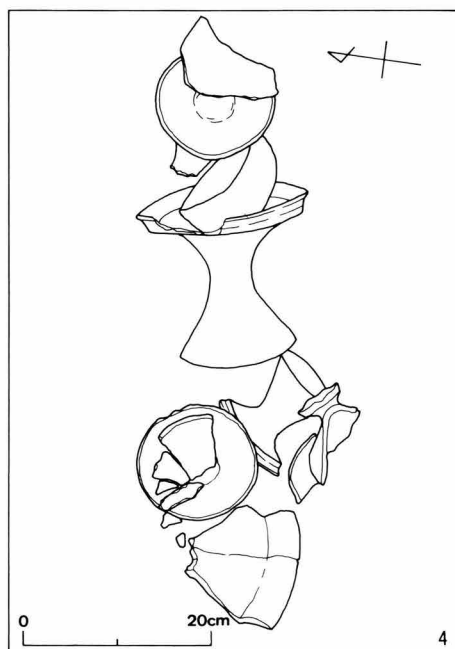
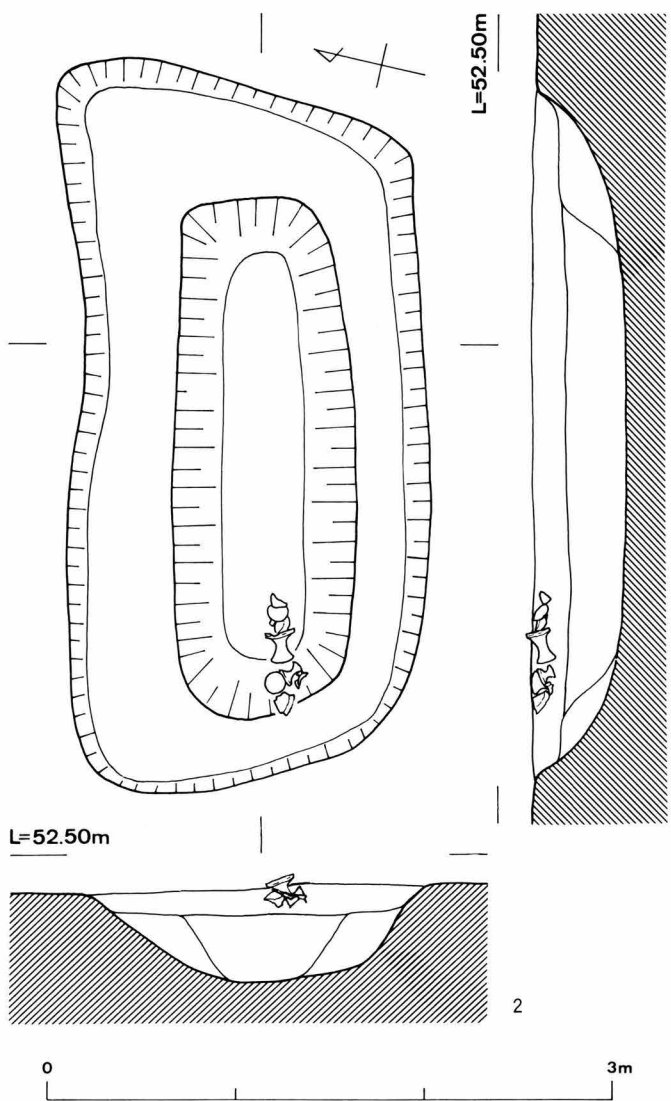
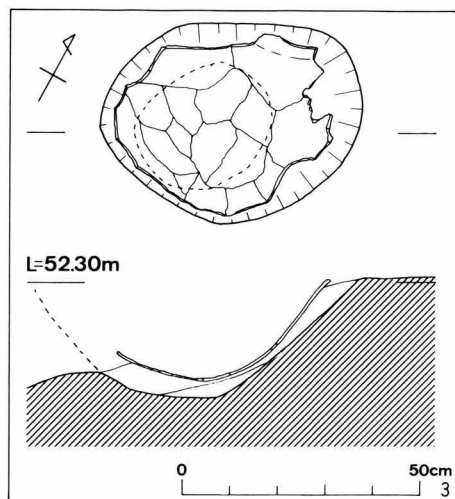
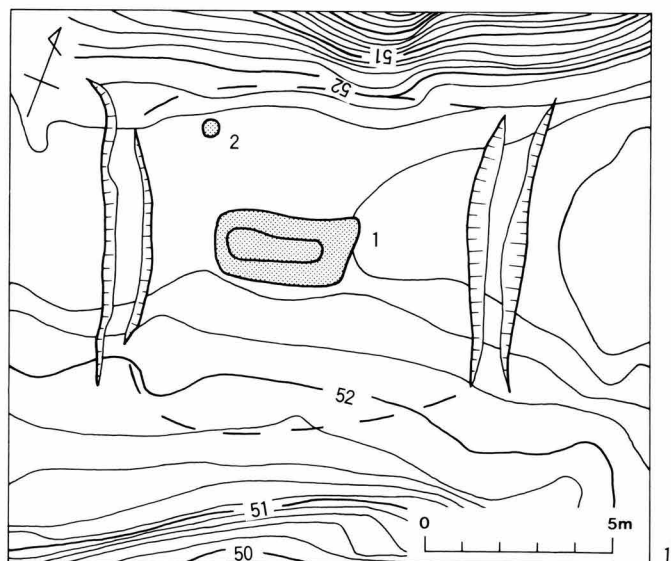
1. TD 3号墳主体部配置図 2. TD 3号墳第1主体部実測図
3. TD 3号墳第2主体部実測図 4. TD 3号墳第3主体部実測図



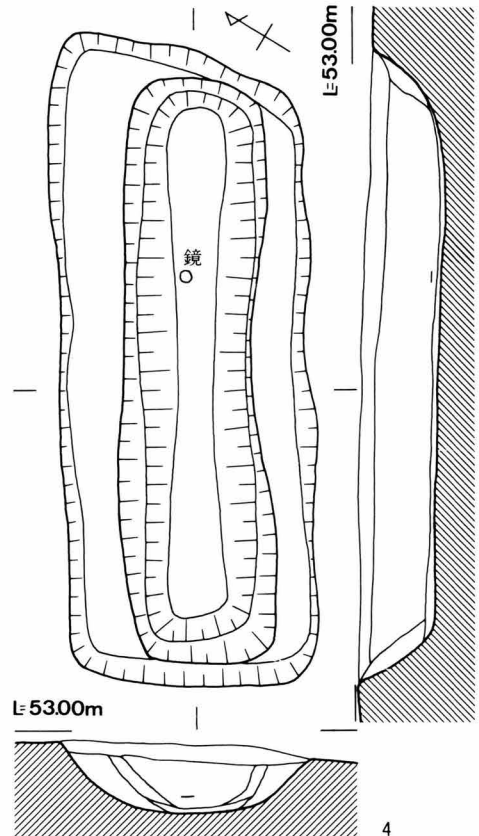
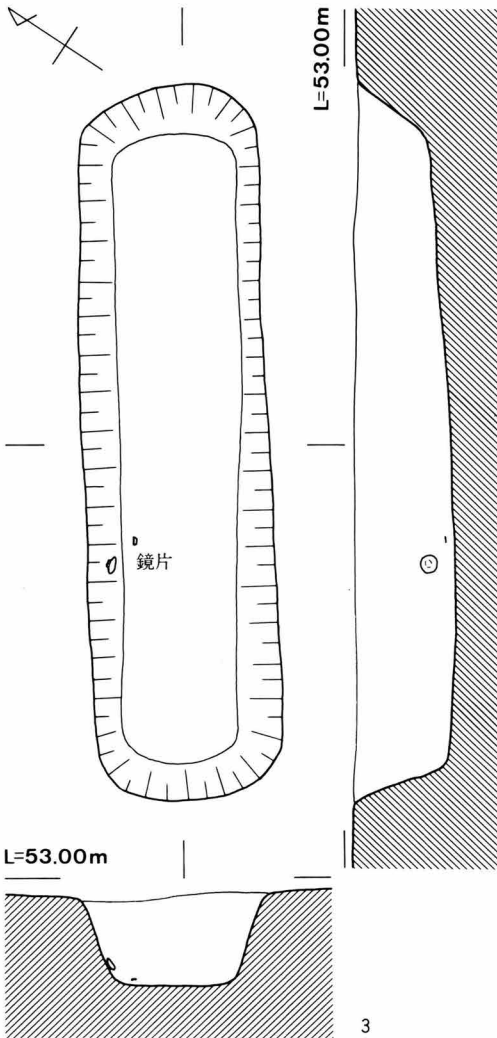
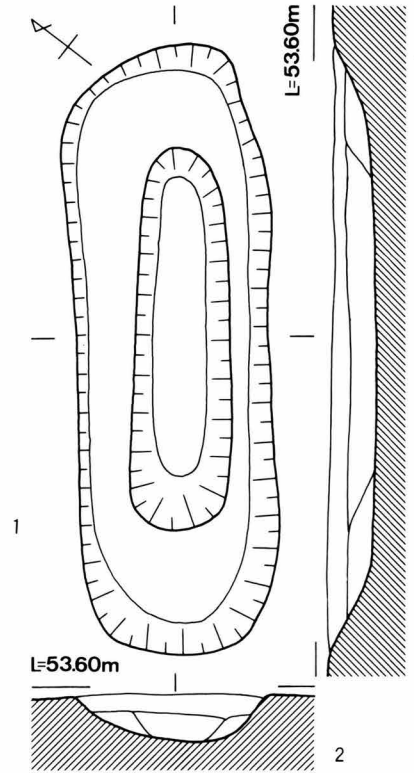
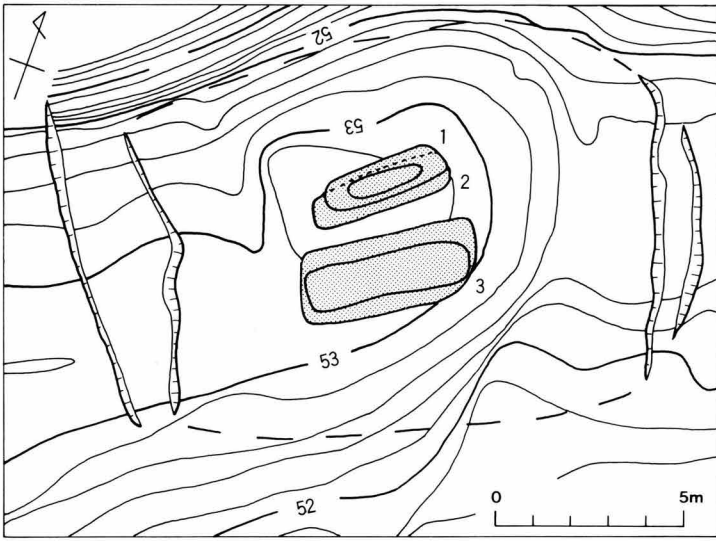
1. TD 3号墳土坑実測図 2. SG 18号墳主体部配置図
3. SG 18号墳主体部実測図 4. SG 22号墳主体部配置図 5. SG 22号墳主体部実測図



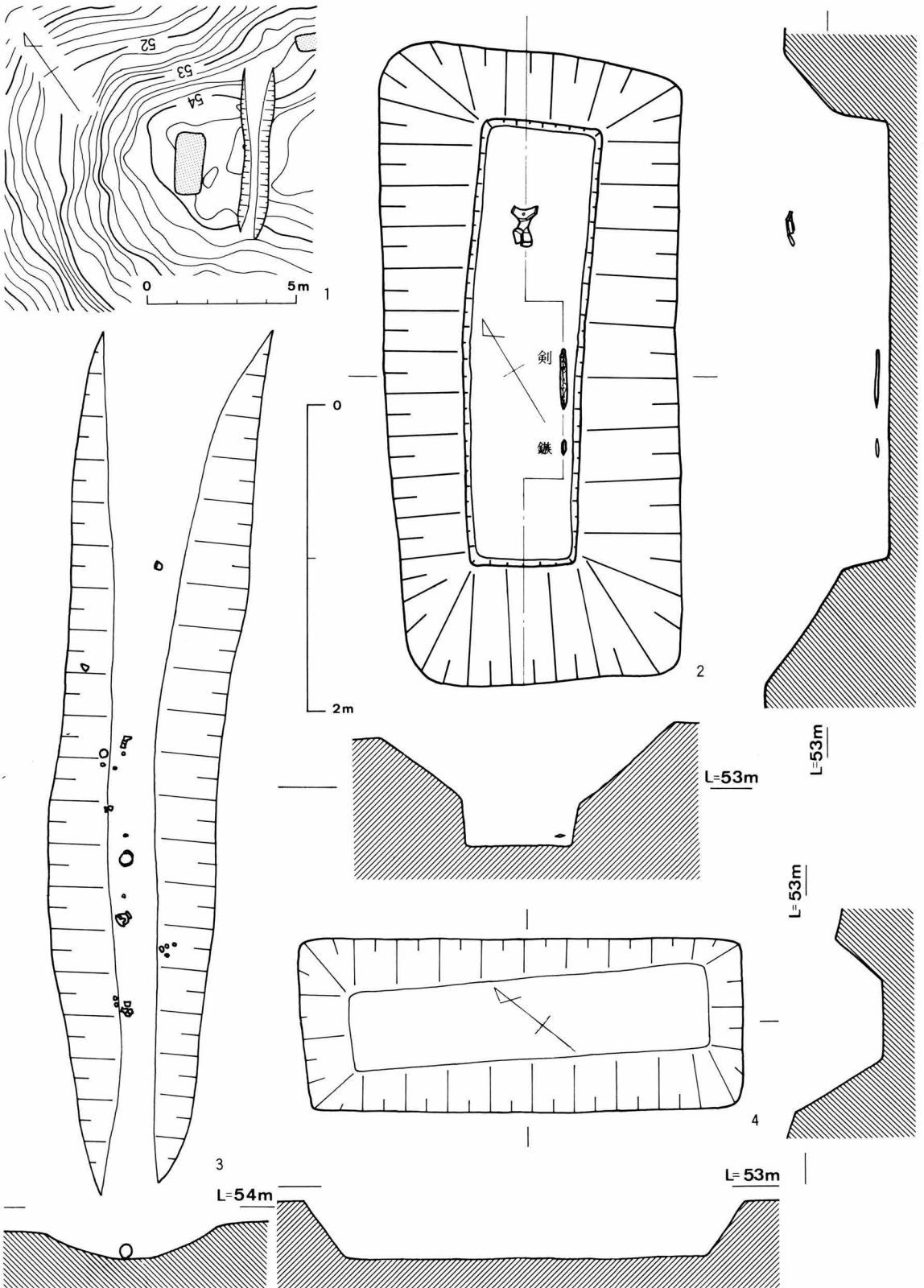
1. TD16号墳主体部配置図 2. TD16号墳主体部実測図
3. TD-I主体部配置図 4. TD-I第1・2主体部実測図



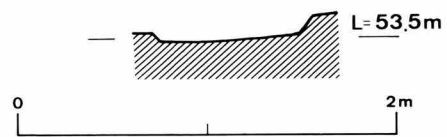
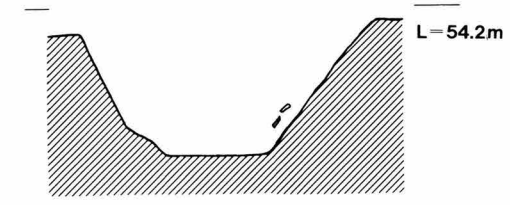
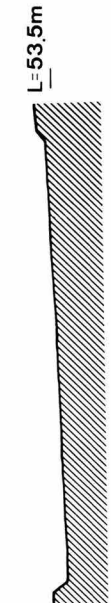
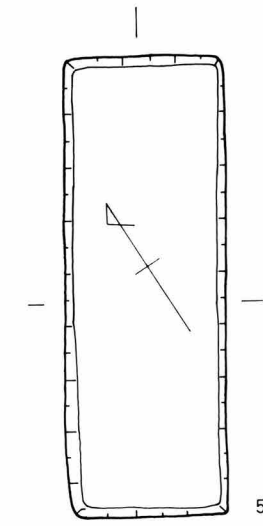
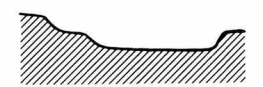
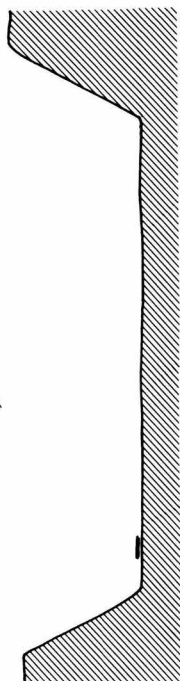
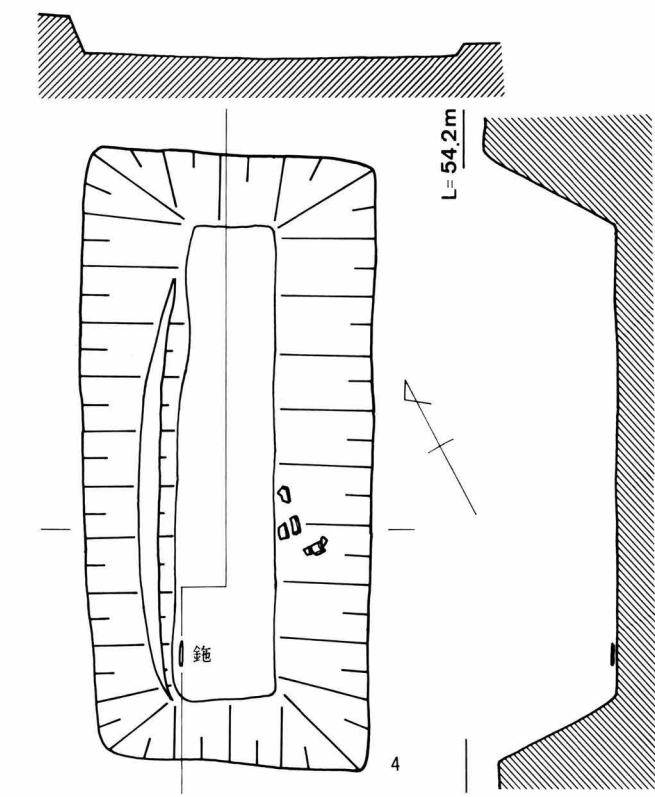
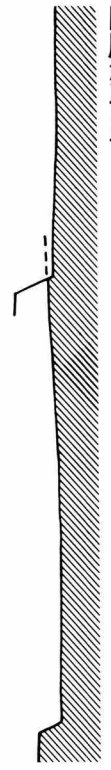
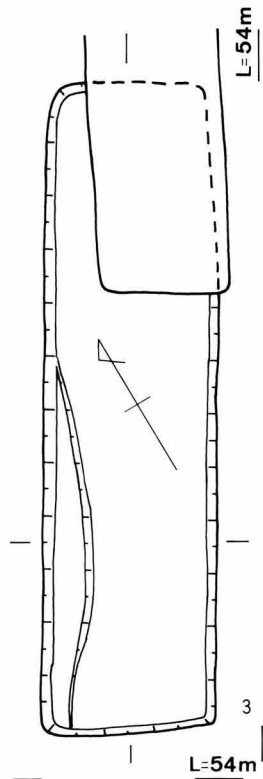
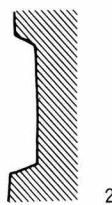
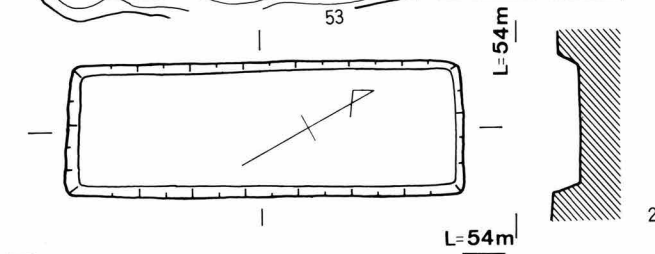
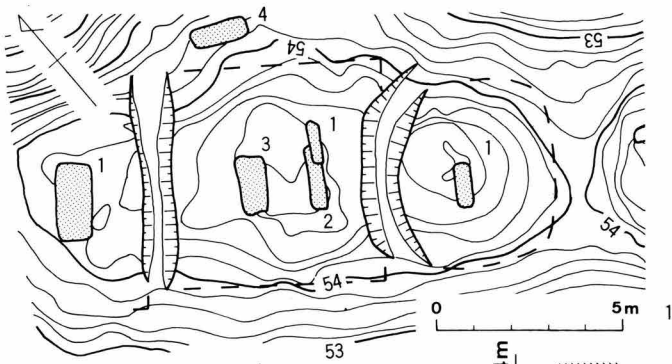
1. TD18号墳主体部配置図 2. TD18号墳主体部実測図
3. TD18号墳第2主体部実測図 4. TD18号墳主体部遺物出土状況 5. TD18号墳東側溝遺物出土状況



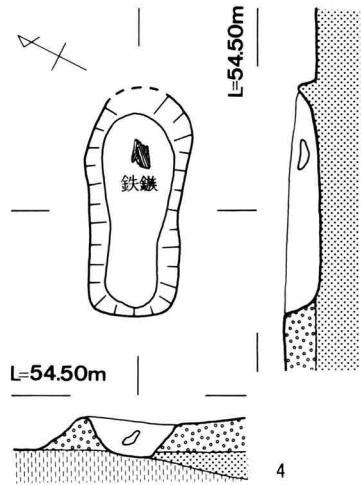
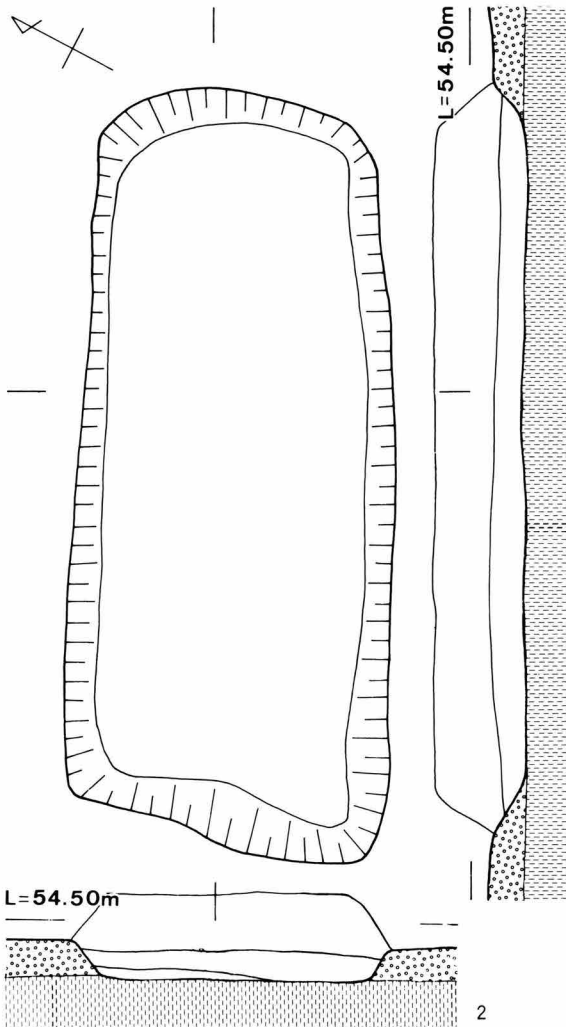
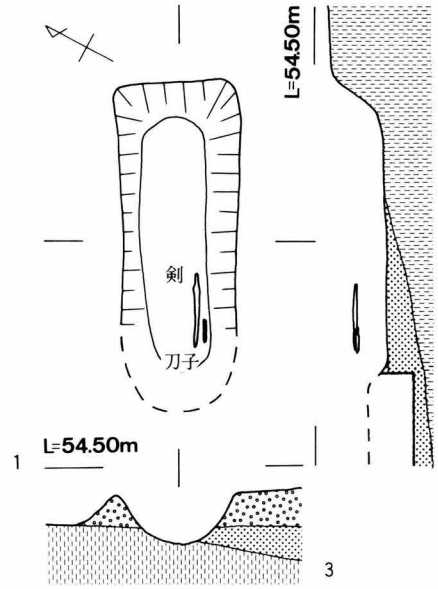
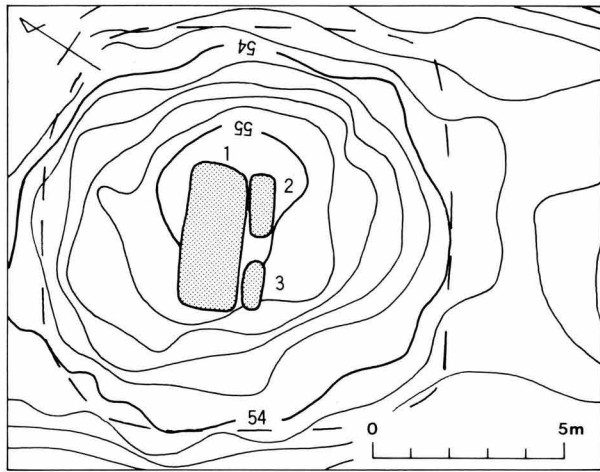
1. TD17号墳主体部配置図 2. TD17号墳第1主体部実測図
3. TD17号墳第2主体部実測図 4. TD17号墳第3主体部実測図



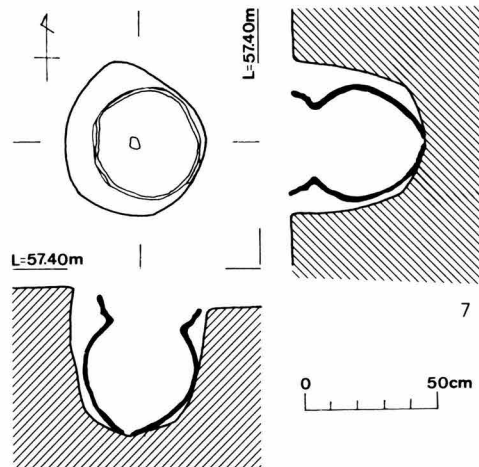
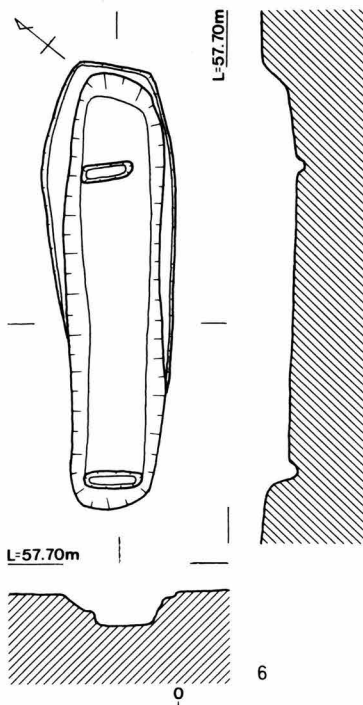
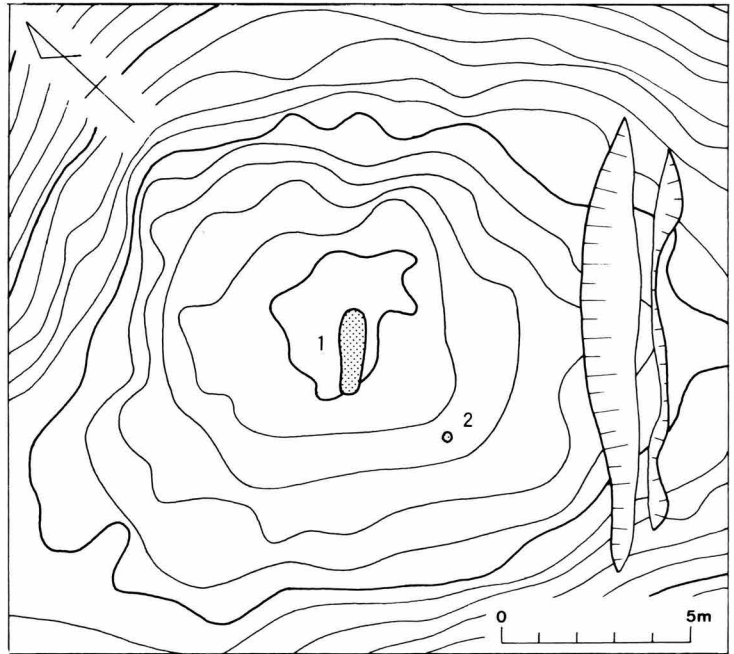
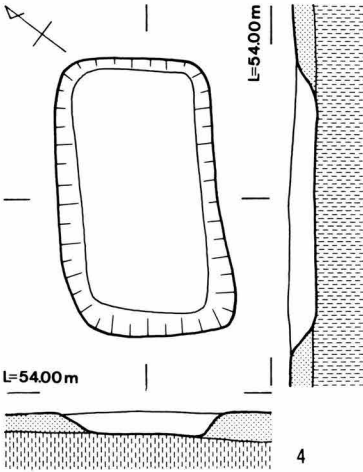
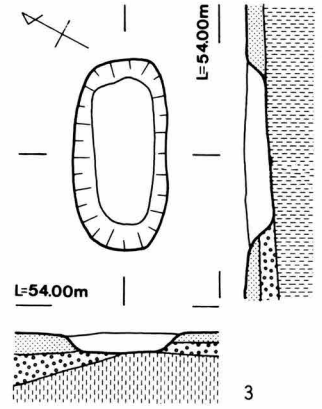
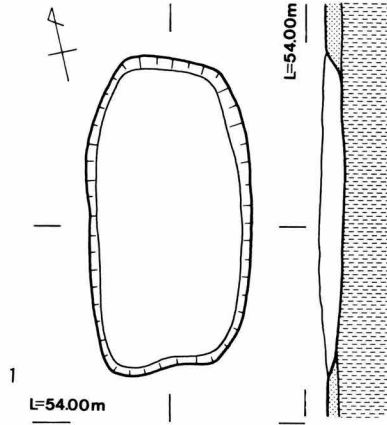
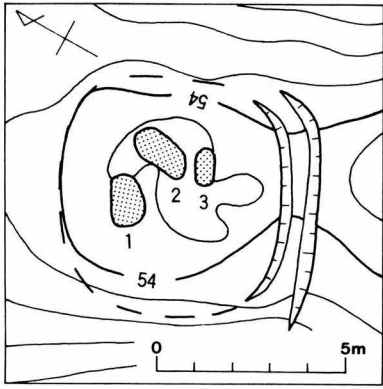
1. RD 9号墳主体部配置図 2. RD 9号墳主体部実測図
3. RD 9号墳溝遺物出土状況 4. RD 2号墳第4主体部実測図



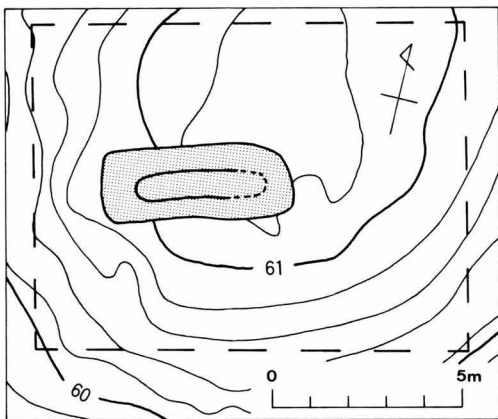
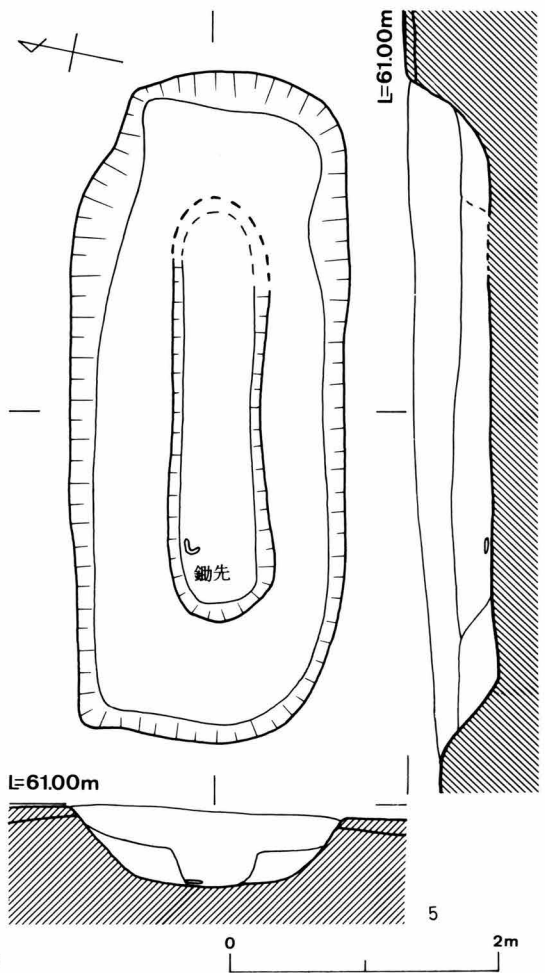
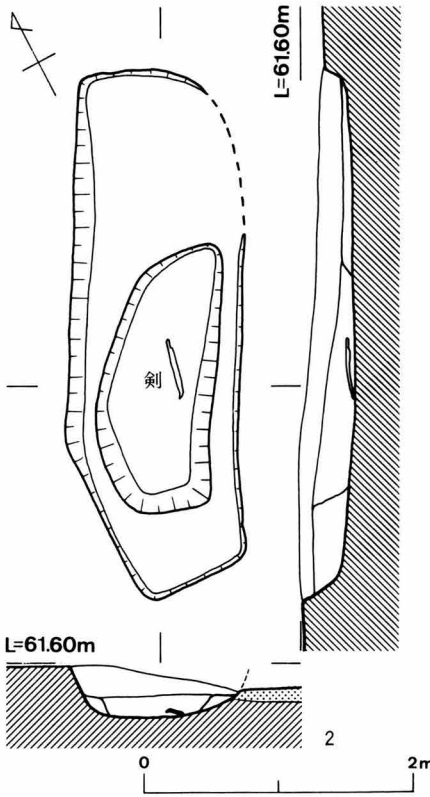
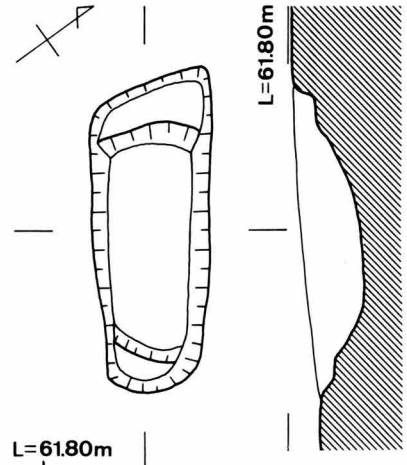
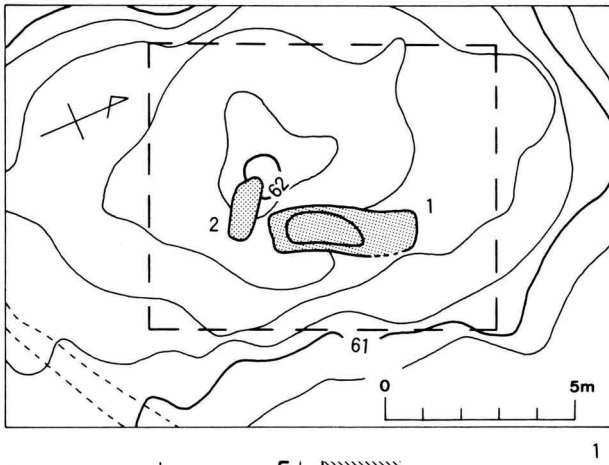
1. RD 9・2・10号墳主体部配置図 2. RD 2号墳第1主体部実測図
 3. RD 2号墳第2主体部実測図 4. RD 2号墳第3主体部実測図 5. RD 10号墳主体部実測図



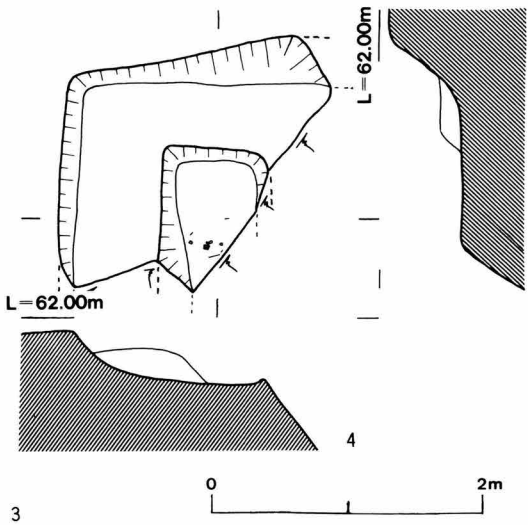
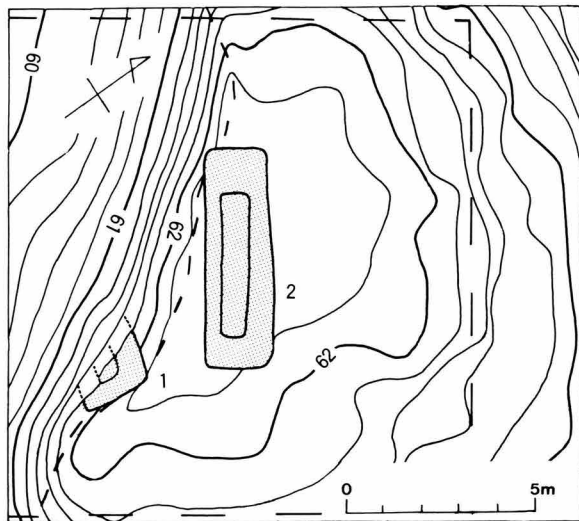
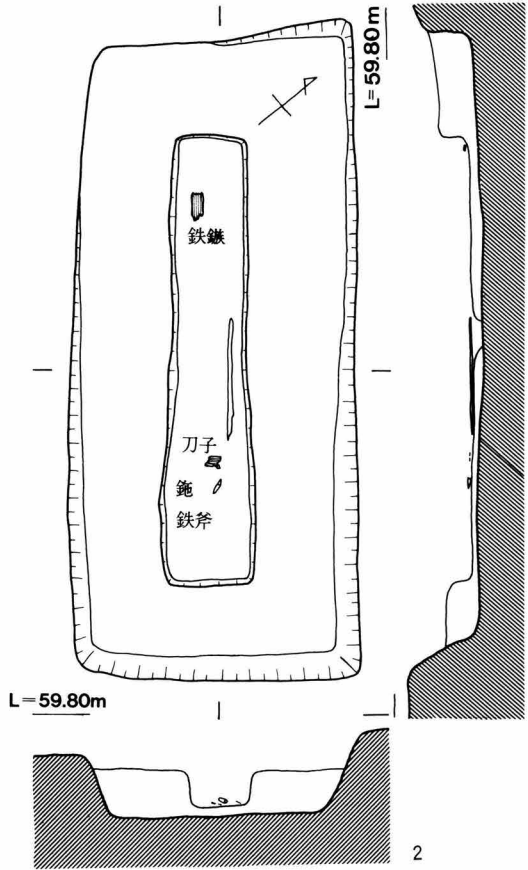
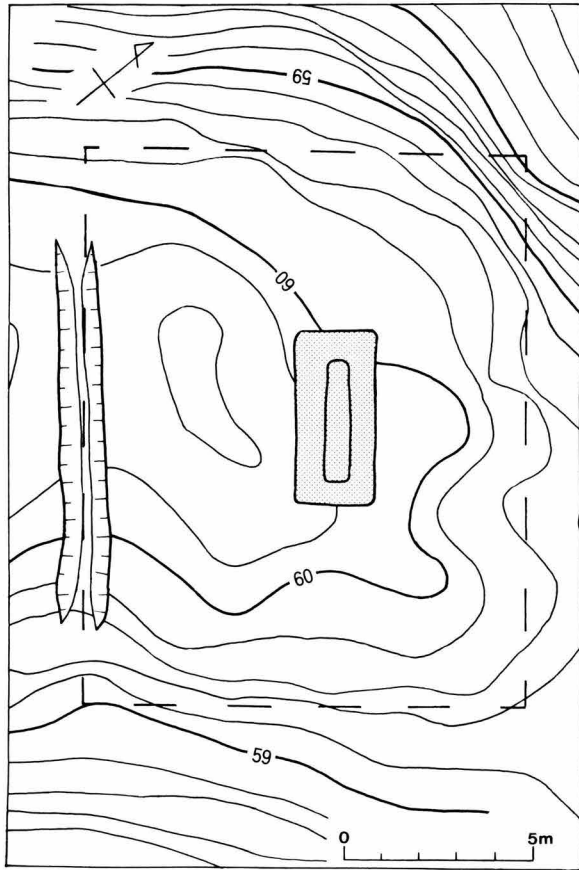
1. RD 3号墳主体部配置図 2. RD 3号墳第1主体部実測図
3. RD 3号墳第2主体部実測図 4. RD 3号墳第3主体部実測図



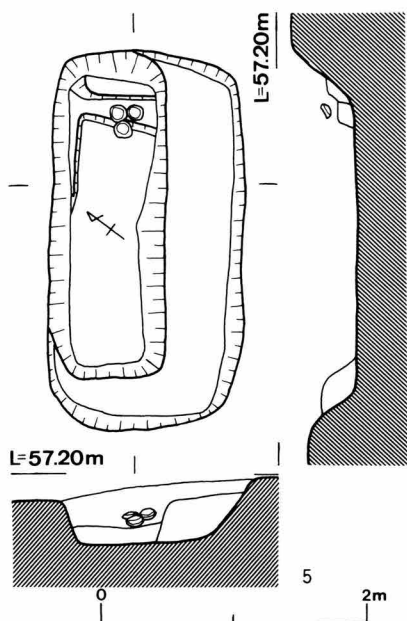
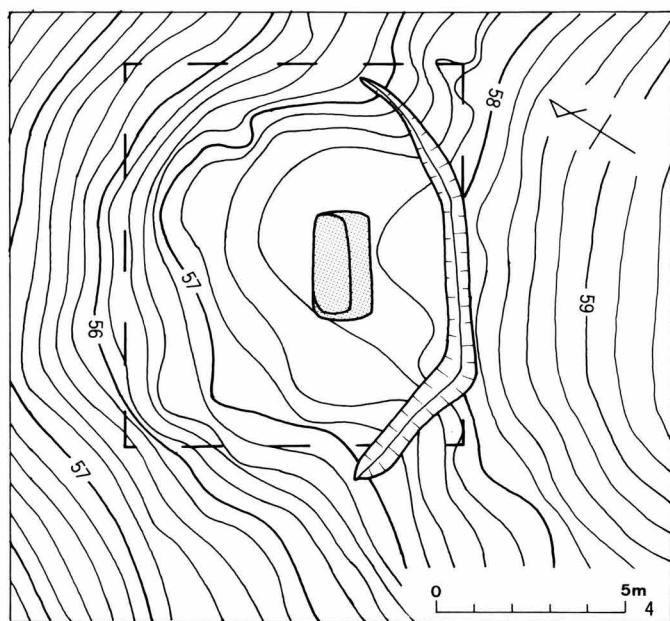
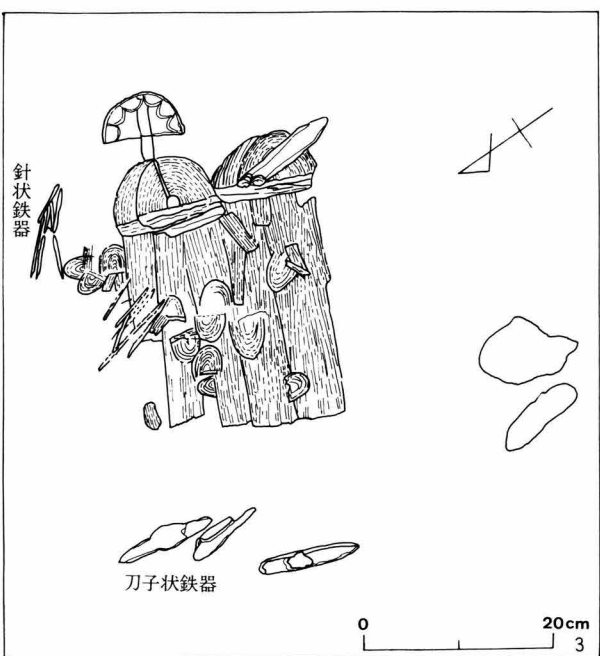
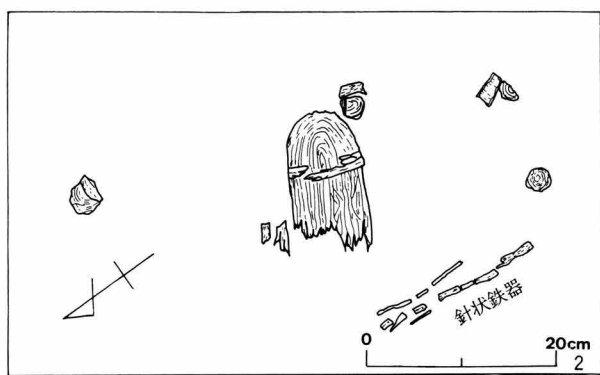
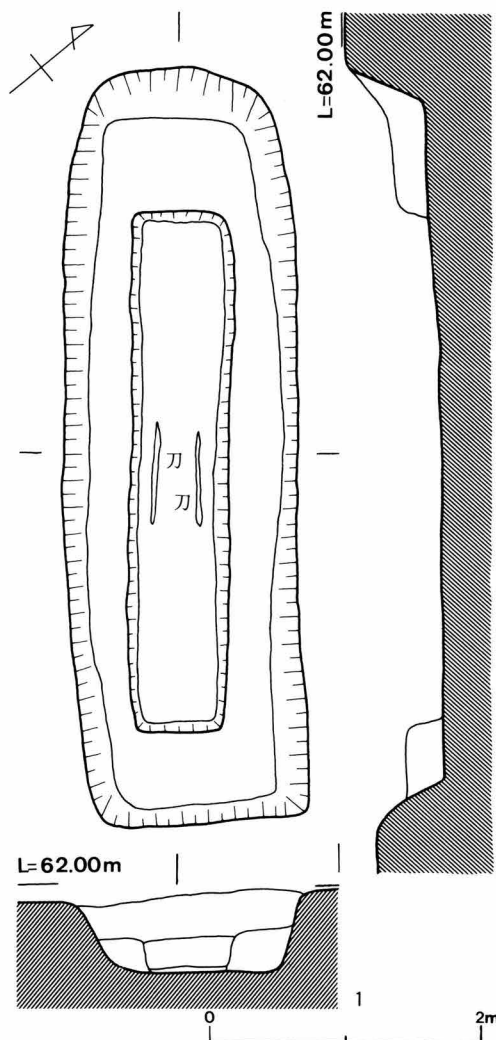
1. RD 4 号墳主体部配置図 2. RD 4 号墳第 1 主体部実測図 3. RD 4 号墳第 2 主体部実測図
 4. RD 4 号墳第 3 主体部実測図 5. RD 5 号墳主体部配置図 6. RD 5 号墳第 1 主体部実測図
 7. RD 5 号墳第 2 主体部実測図



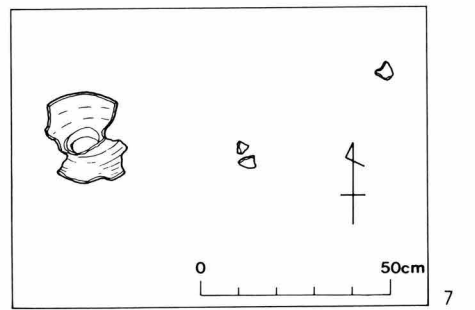
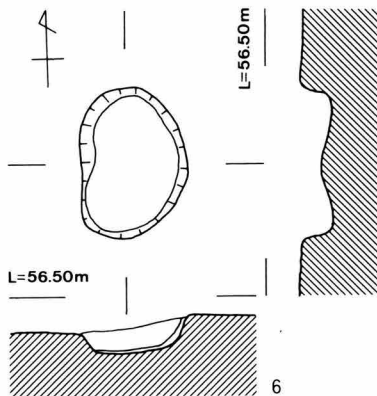
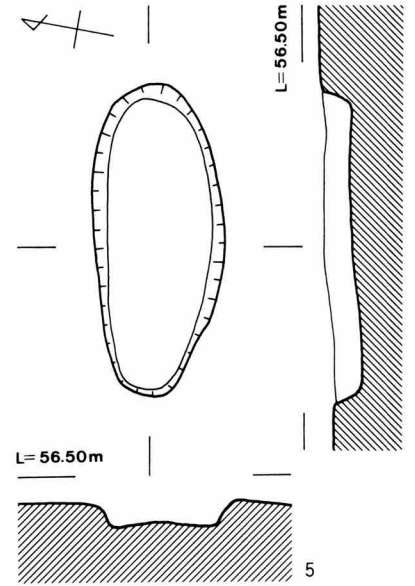
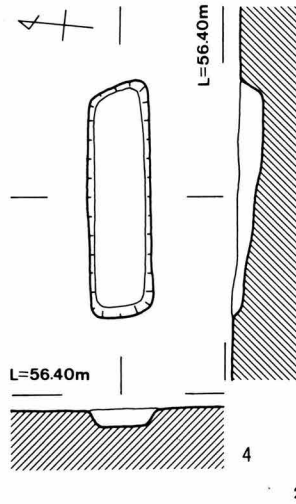
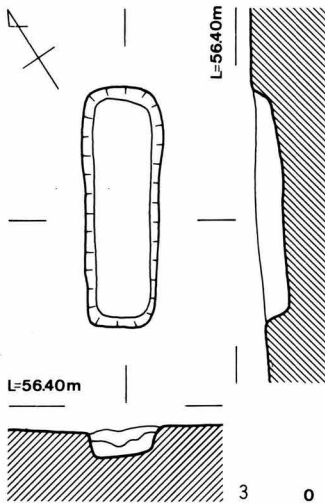
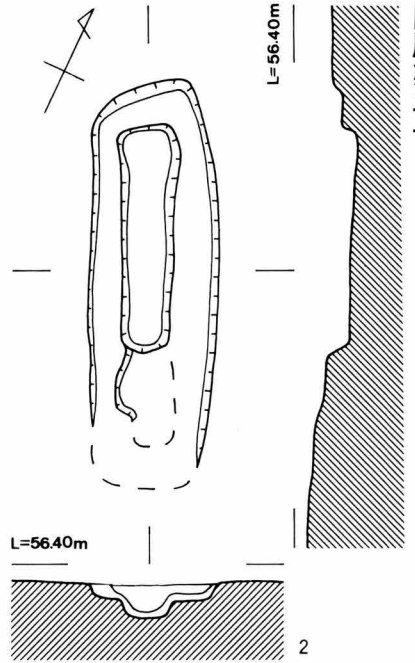
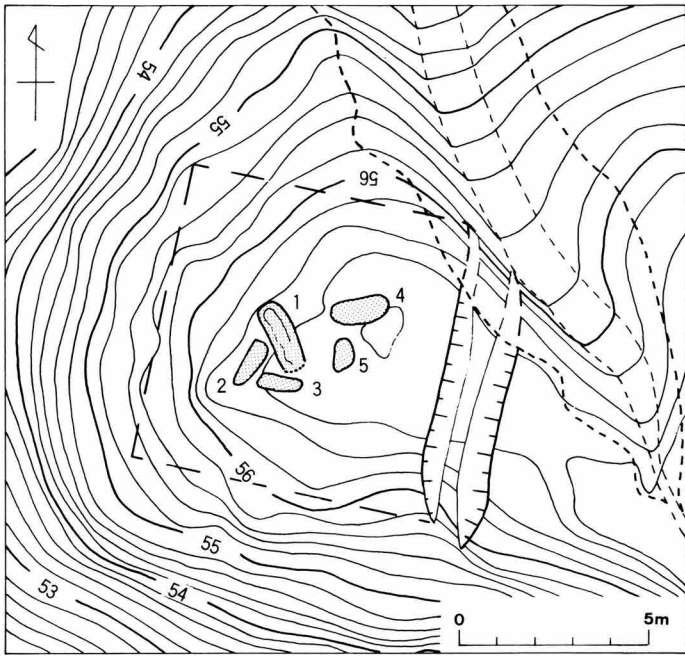
1. RD 7号墳主体部配置図 2. RD 7号墳第1主体部实测图
3. RD 7号墳第2主体部实测图 4. RD 6号墳主体部配置図 5. RD 6号墳主体部实测图



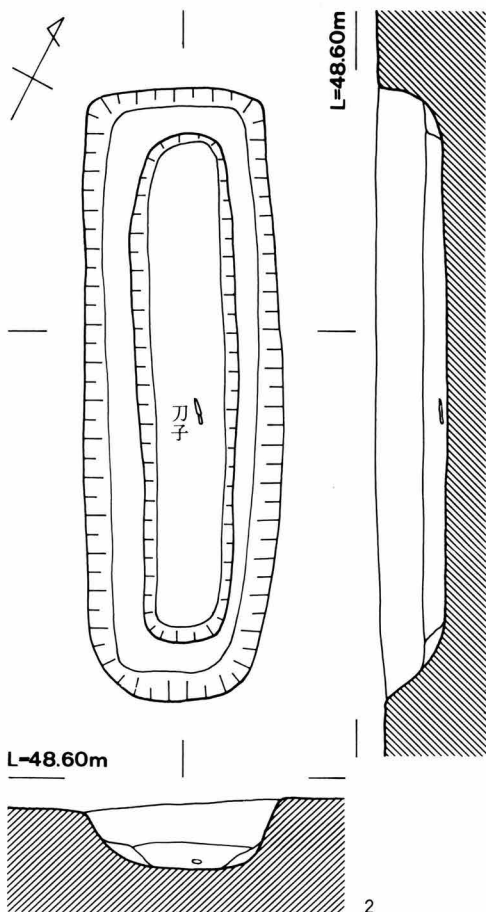
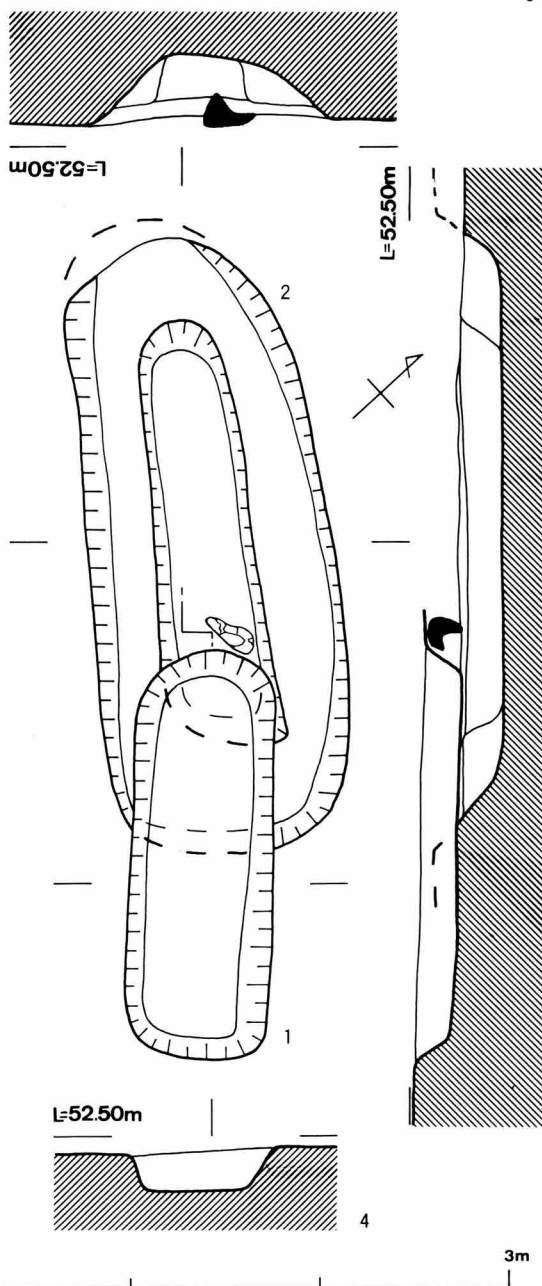
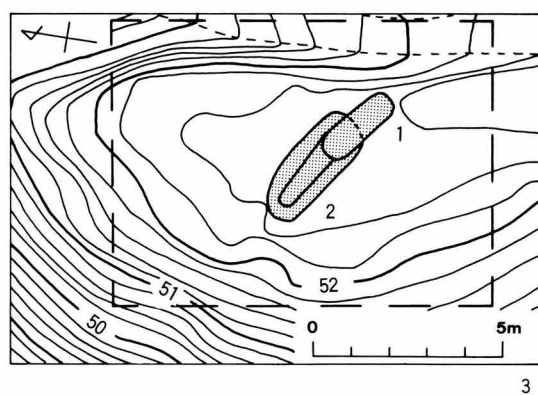
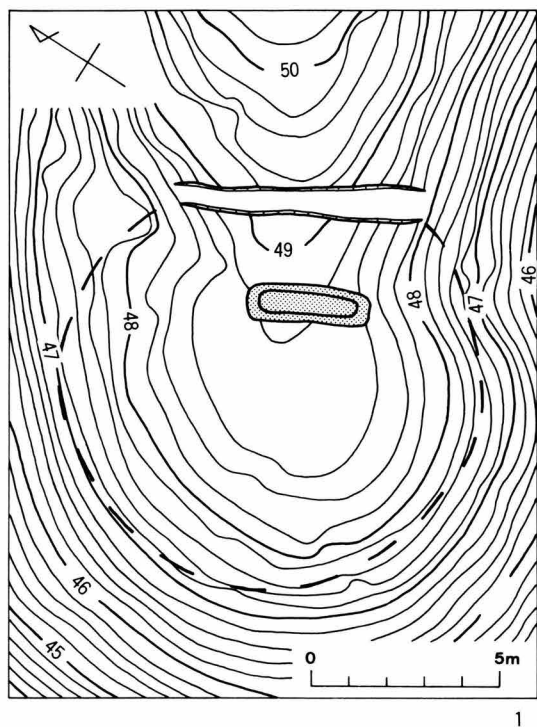
1. DD24号墳主体部配置図 2. DD24号墳主体部実測図
 3. RD11号墳主体部配置図 4. RD11号墳第1主体部実測図



1. RD11号墳第2主体部実測図 2. RD11号墳第1主体部掘出土状況実測図
 3. RD11号墳第2主体部掘出土状況実測図 4. RD12号墳主体部配置図 5. RD12号墳主体部実測図

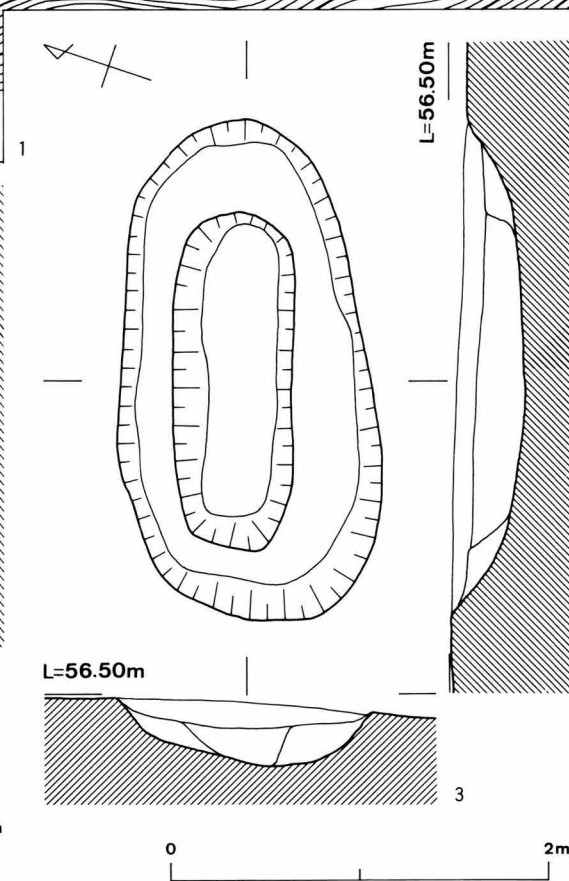
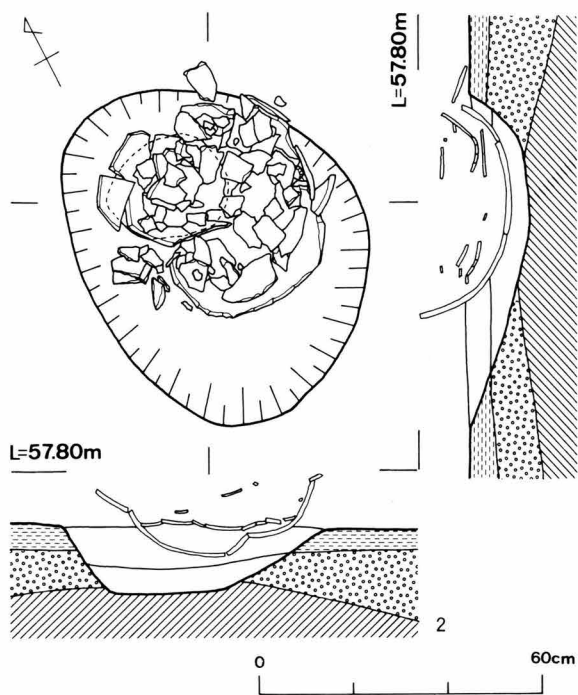
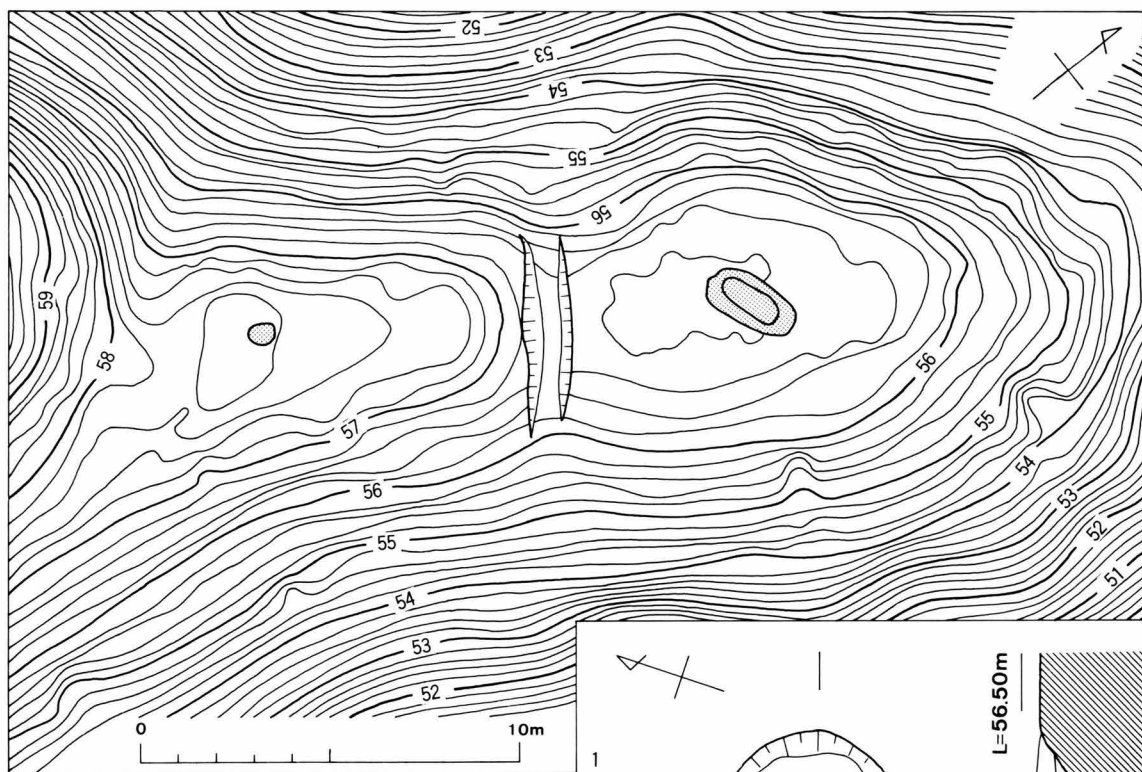


1. DD1号墳主体部配置図 2. DD1号墳第1主体部実測図 3. DD1号墳第2主体部実測図
 4. DD1号墳第3主体部実測図 5. DD1号墳第4主体部実測図 6. DD1号墳第5主体部実測図
 7. 墳丘南側斜面出土遺物実測図

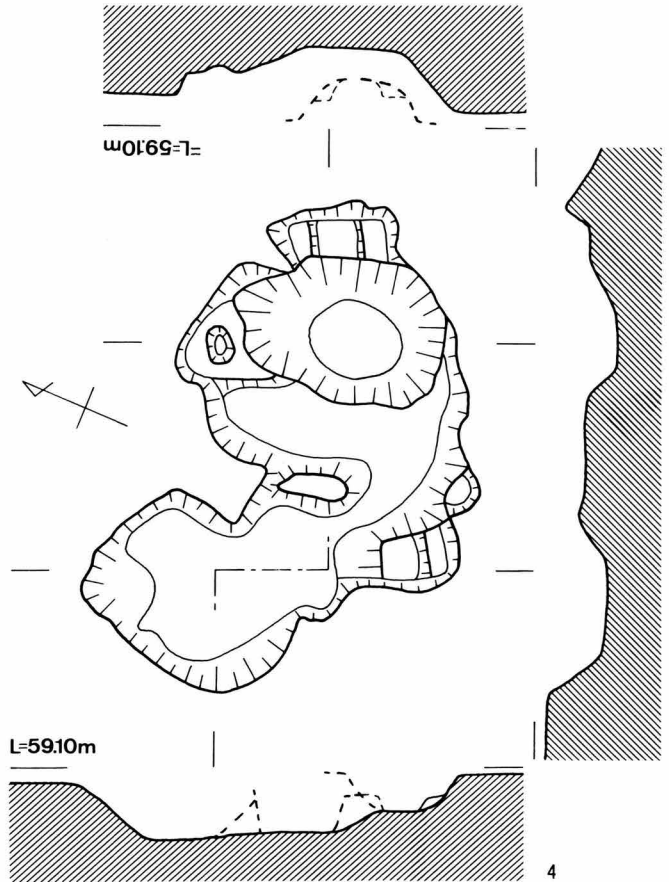
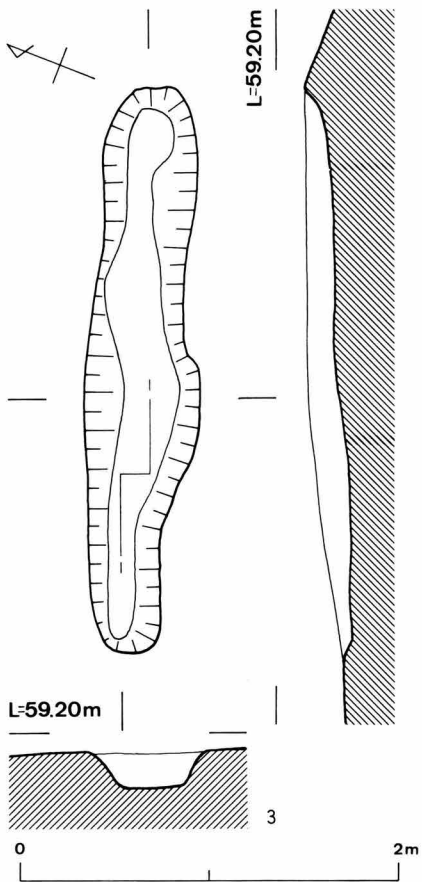
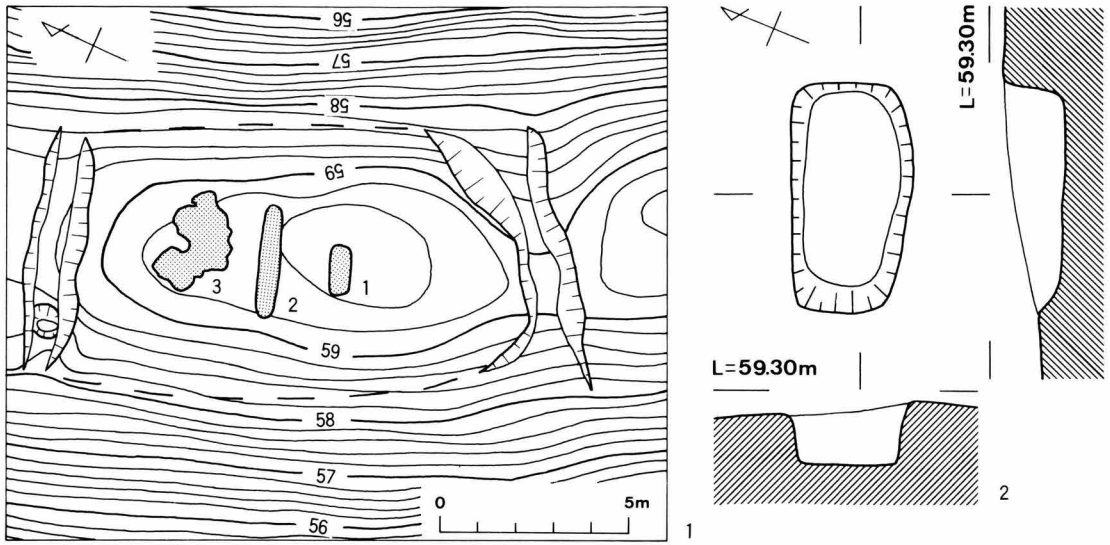


1. DD13号墳主体部配置图
3. DD14号墳主体部配置图

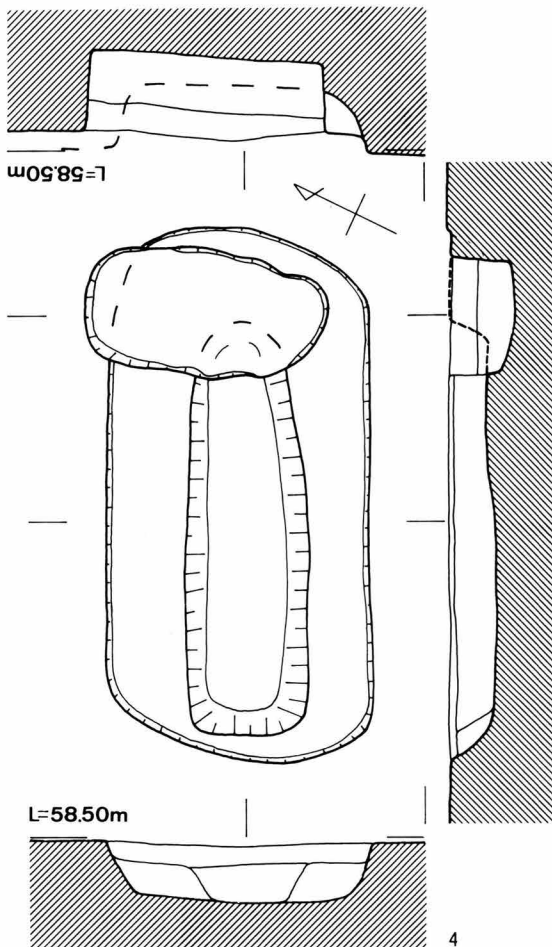
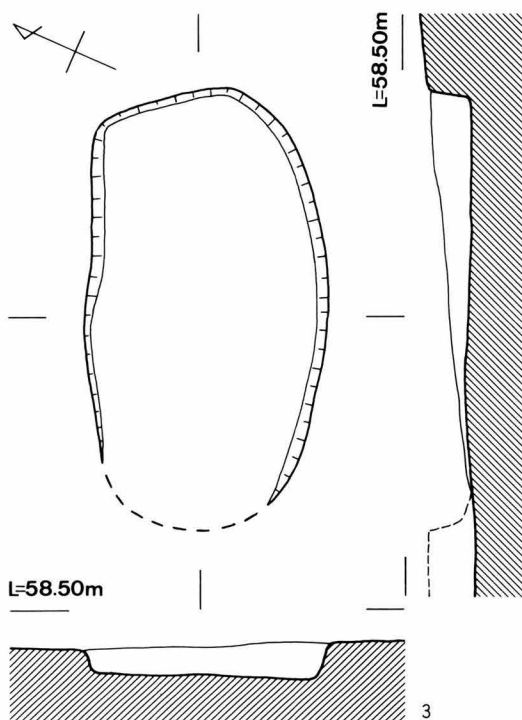
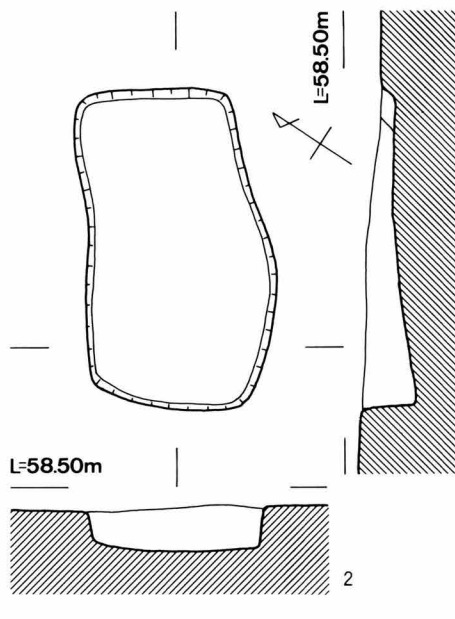
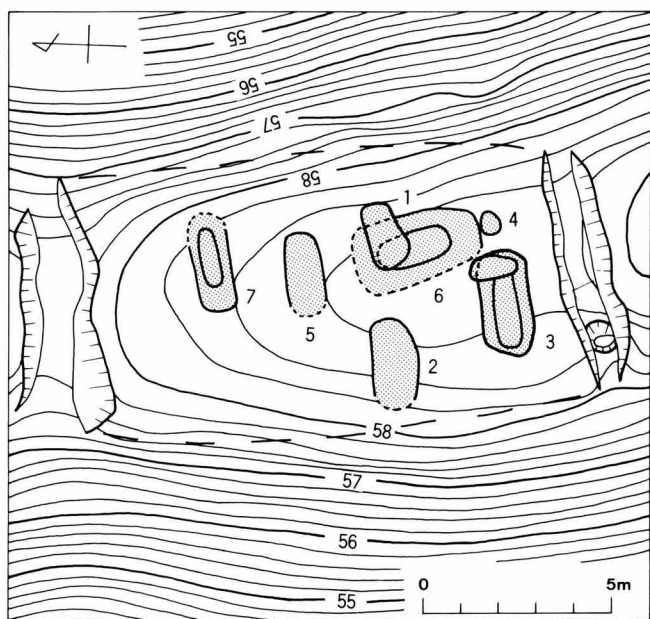
2. DD13号墳主体部实测图
4. DD14号墳第1・2主体部实测图



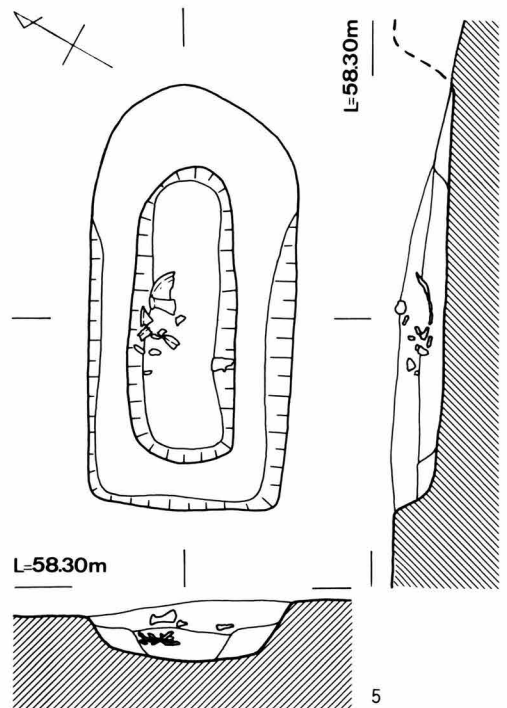
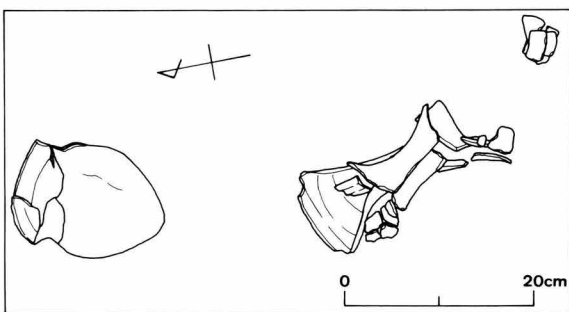
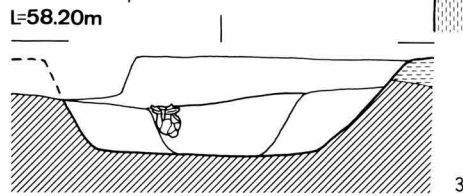
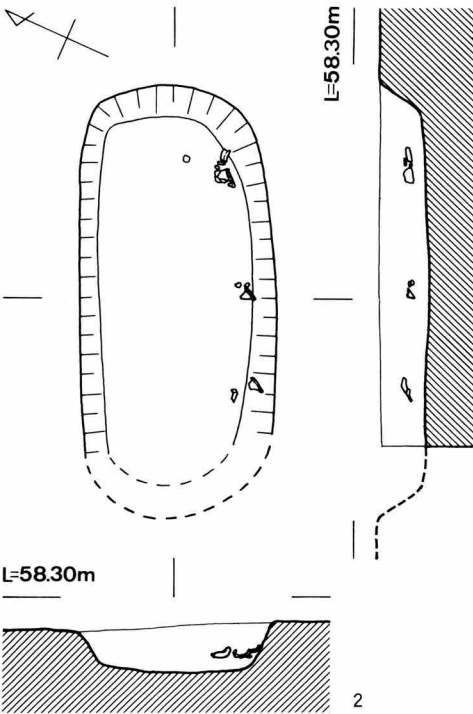
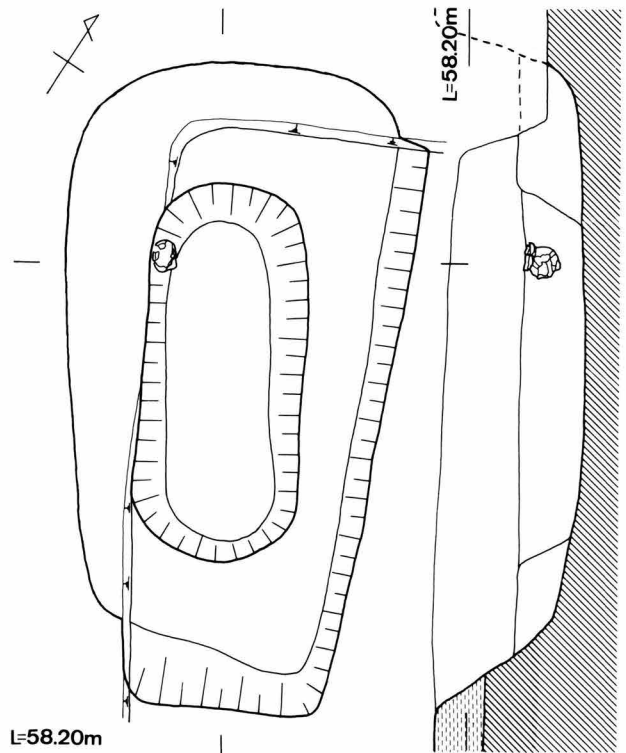
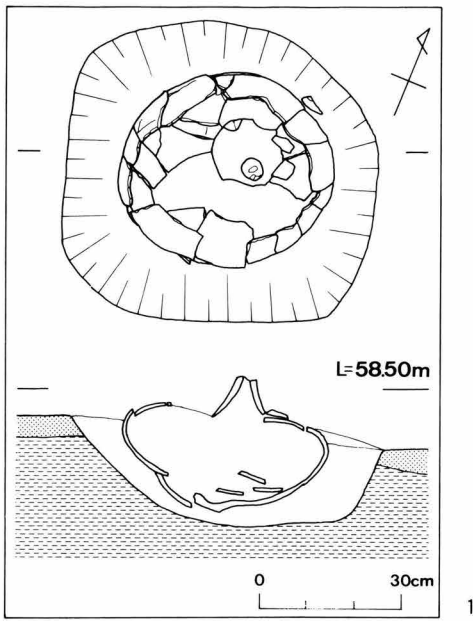
1. DD17·18号墳主体部配置図 2. DD17号墳主体部(中世墓)実測図
3. DD18号墳主体部実測図



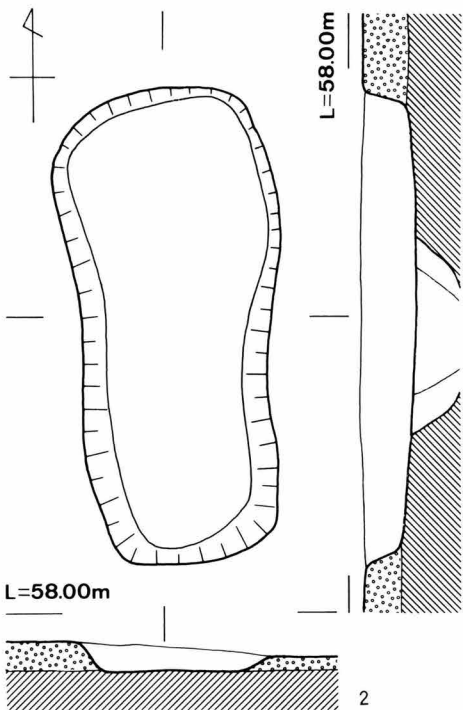
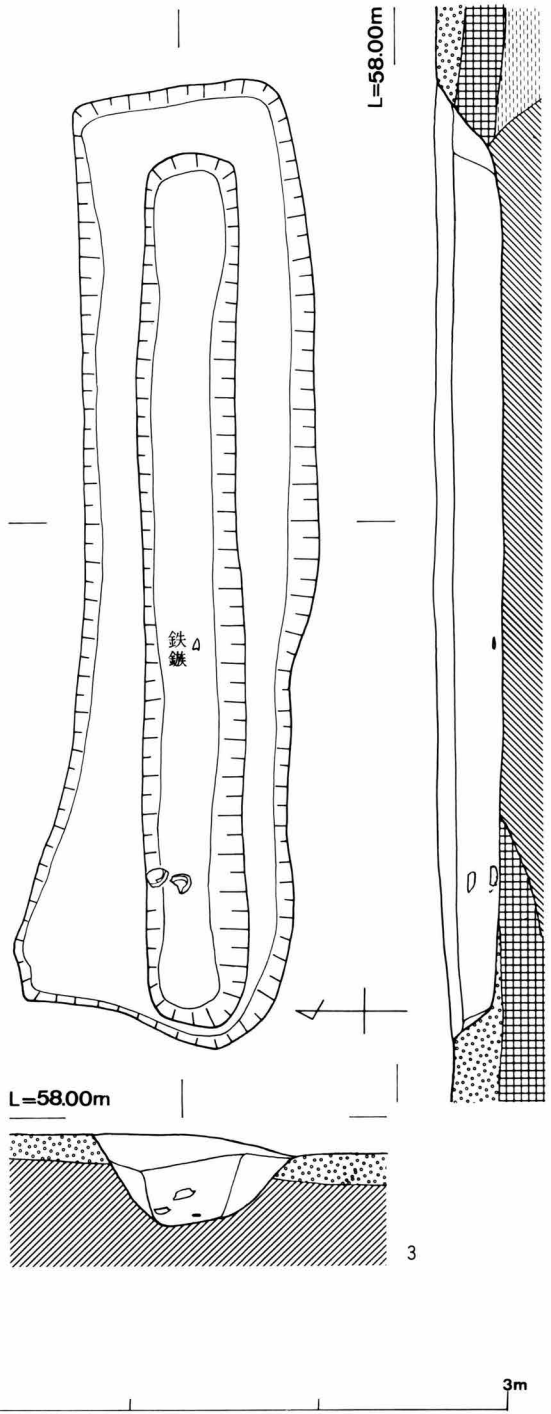
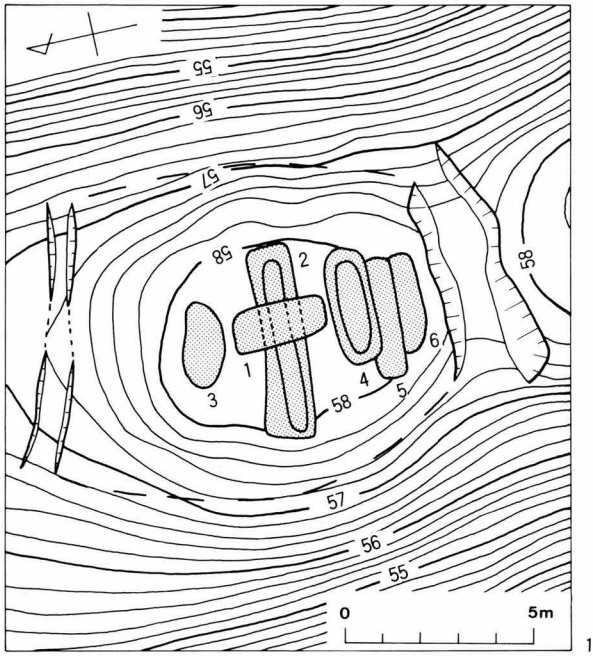
1. DD7号墳主体部配置図 2. DD7号墳第1主体部実測図
 3. DD7号墳第2主体部実測図 4. DD7号墳第3主体部実測図



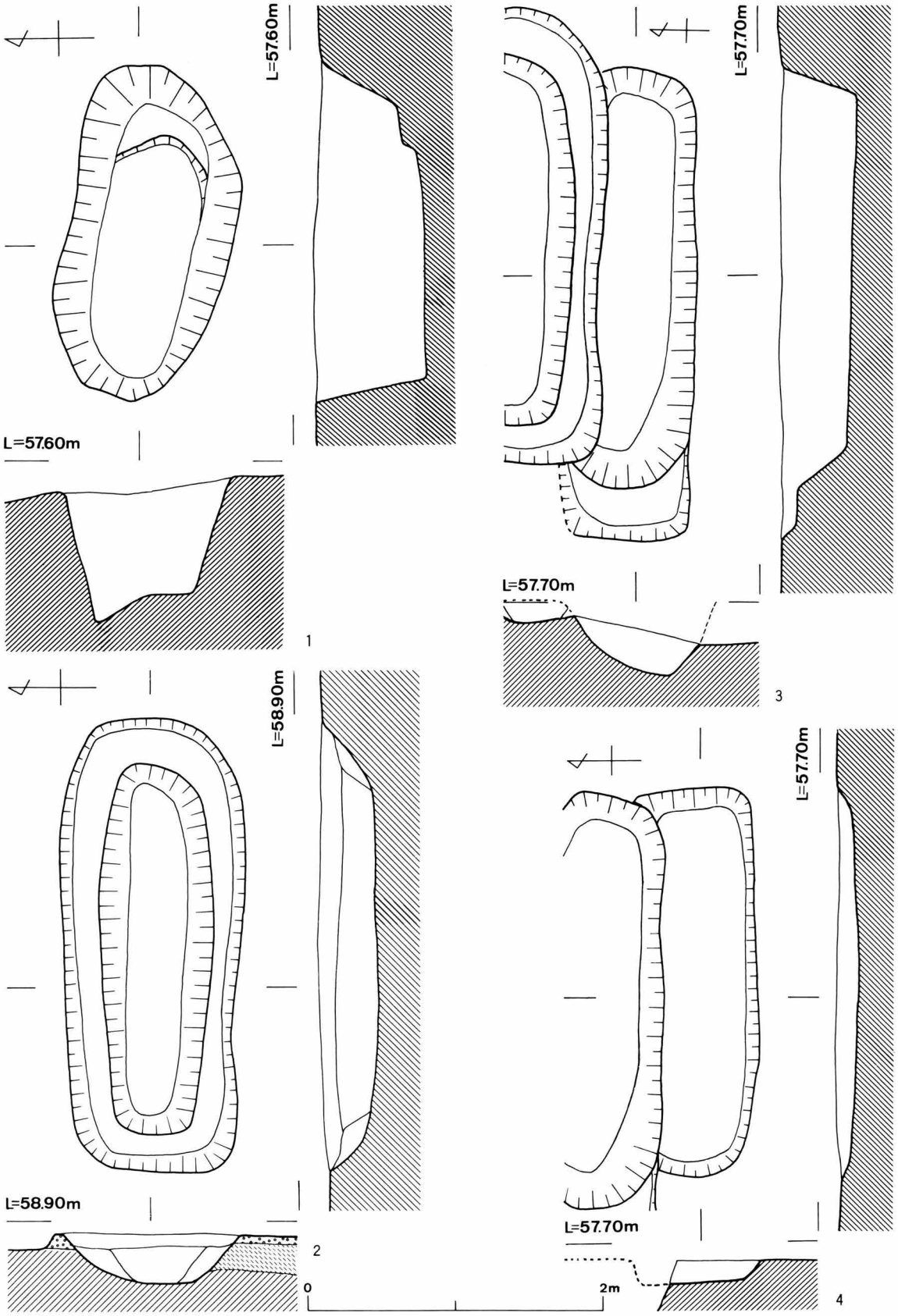
1. DD6号墳主体部配置図 2. DD6号墳第1主体部実測図
3. DD6号墳第2主体部実測図 4. DD6号墳第3主体部焼土壇実測図



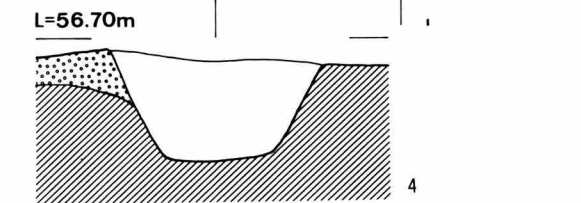
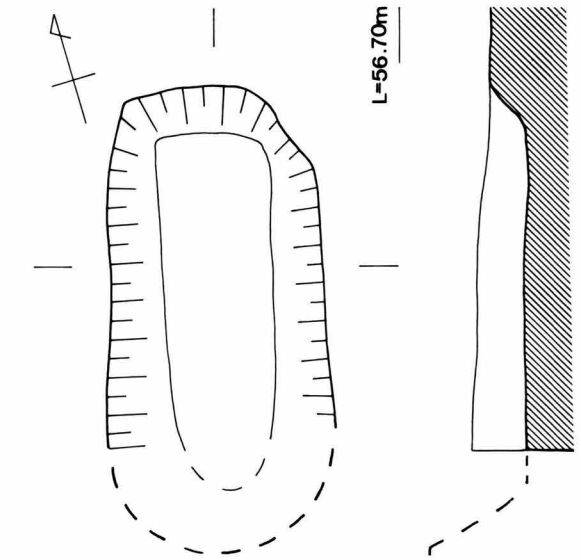
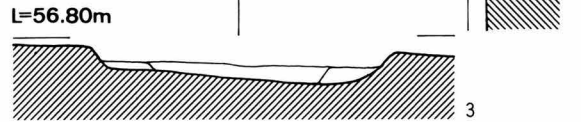
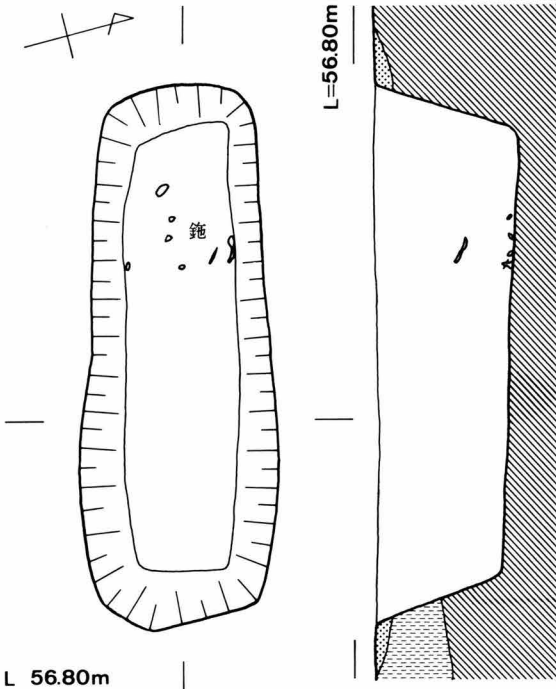
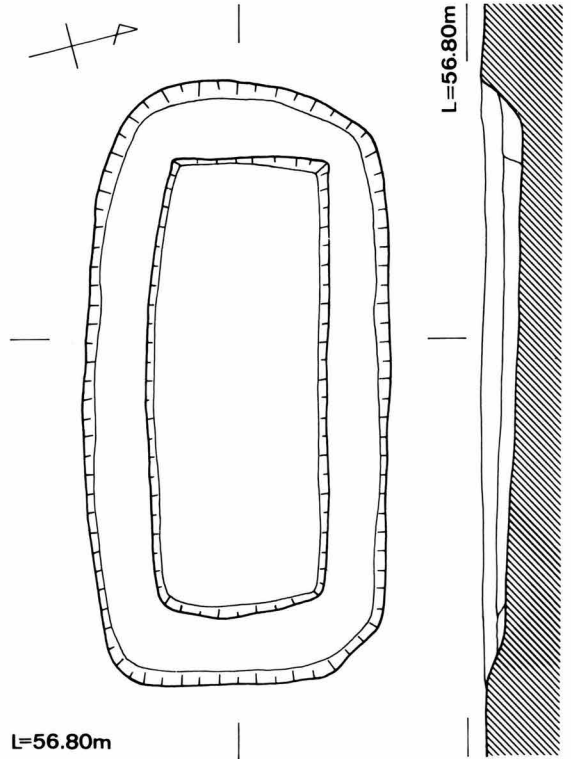
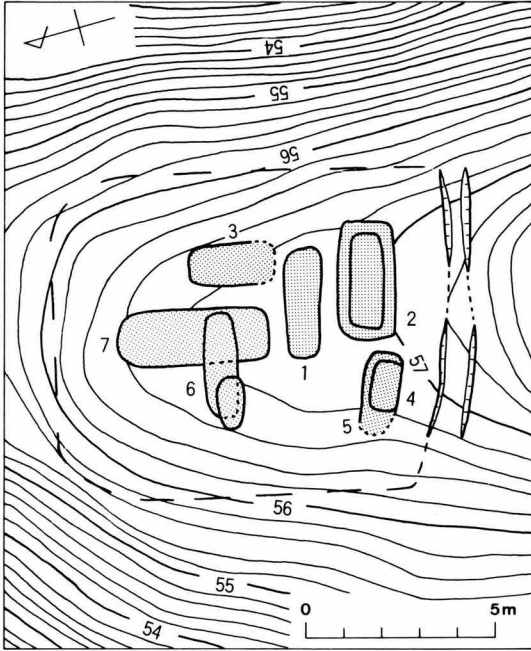
1. DD6号墳第4主体部実測図 2. DD6号墳第5主体部実測図
 3. DD6号墳第6主体部実測図 4. DD6号墳南溝遺物出土状況 5. DD6号墳第7主体部実測図



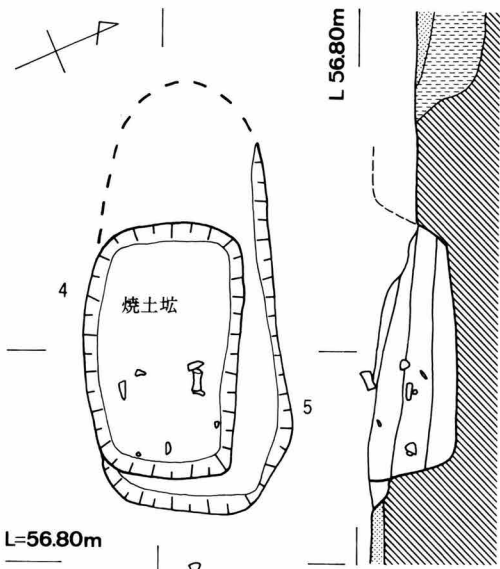
1. DD 5号墳主体部配置図 2. DD 5号墳第1主体部実測図
3. DD 5号墳第2主体部実測図



1. DD 5号墳第3主体部实测图 2. DD 5号墳第4主体部实测图
 3. DD 5号墳第5主体部实测图 4. DD 5号墳第6主体部实测图

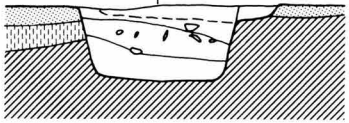


1. DD4号墳主体部配置図 2. DD4号墳第1主体部実測図
 3. DD4号墳第2主体部実測図 4. DD4号墳第3主体部実測図

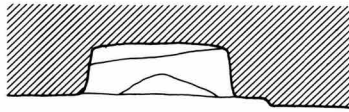


L=56.80m

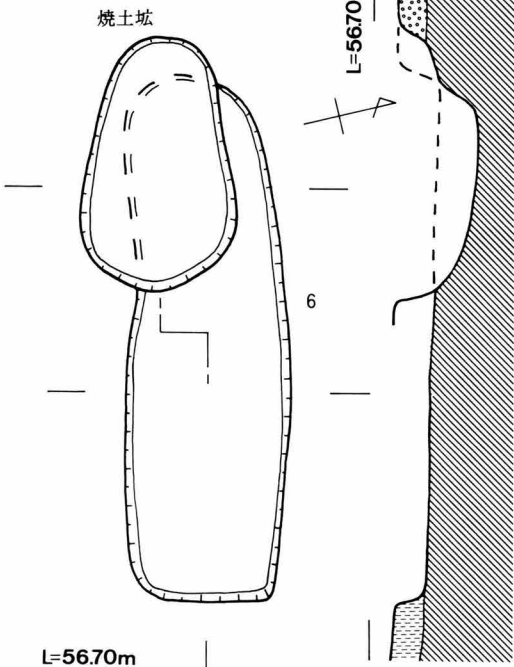
L=56.80m



1



L=56.70m

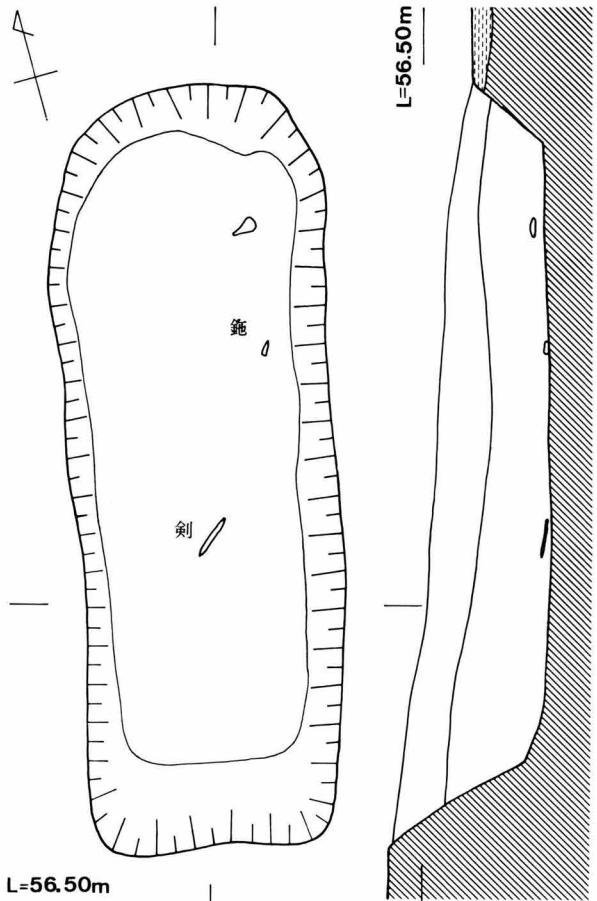


焼土壇

L=56.70m

L=56.70m

2



L=56.50m

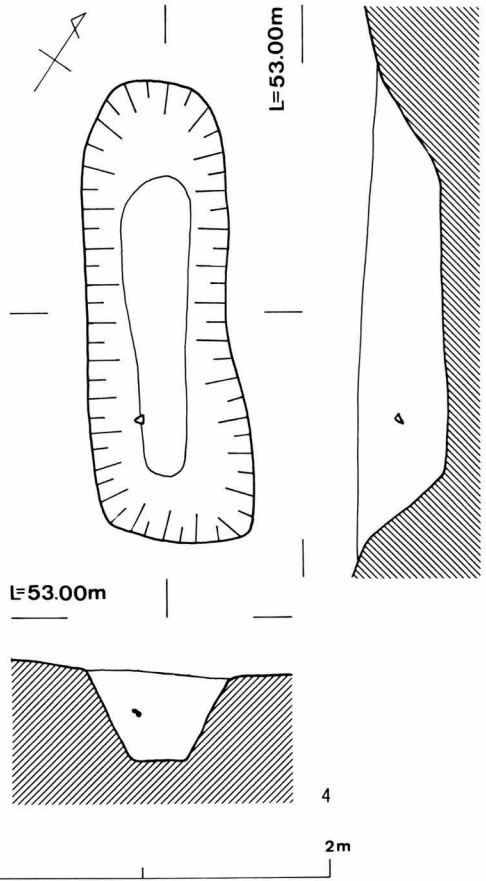
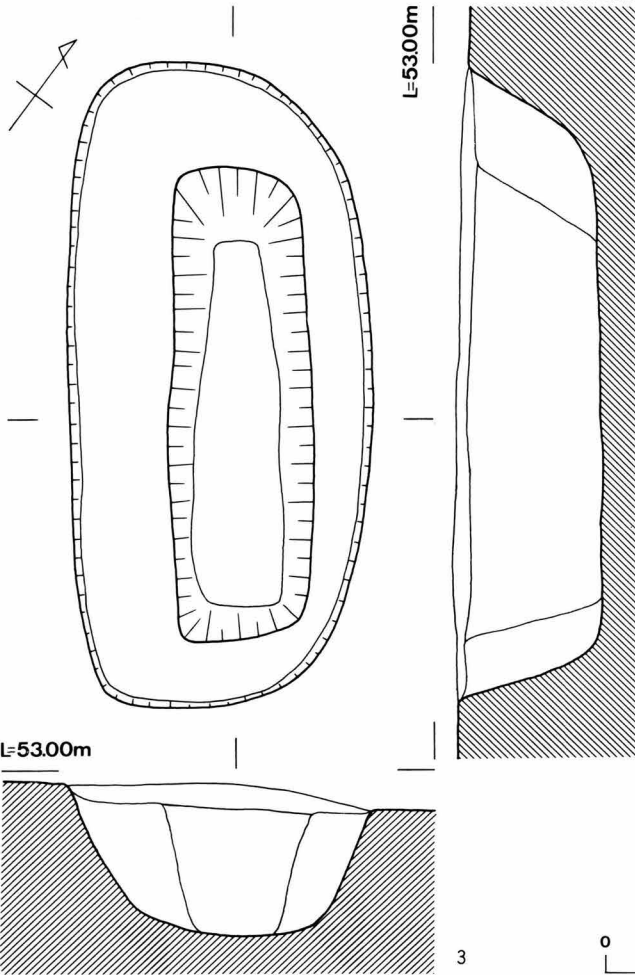
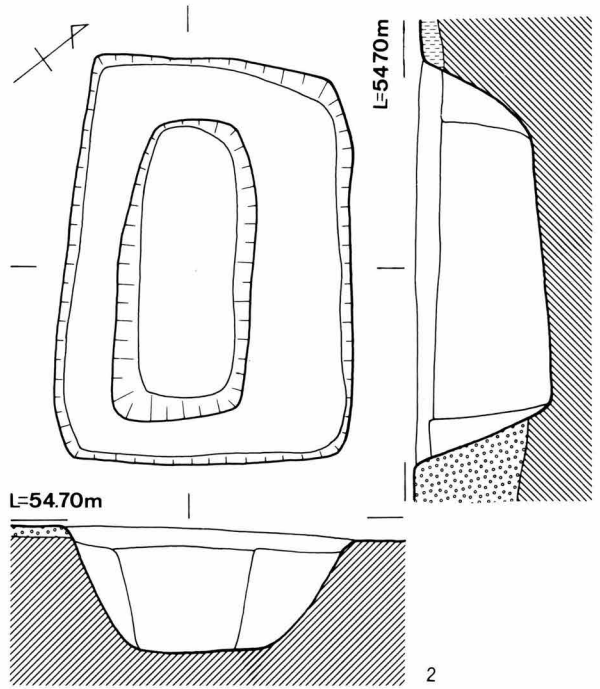
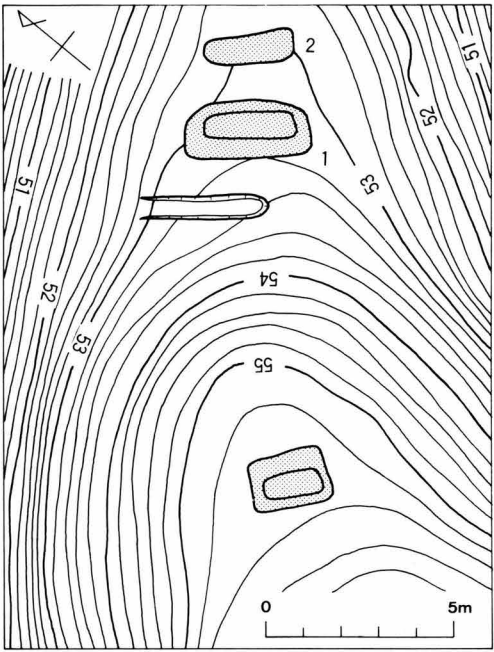
L=56.50m



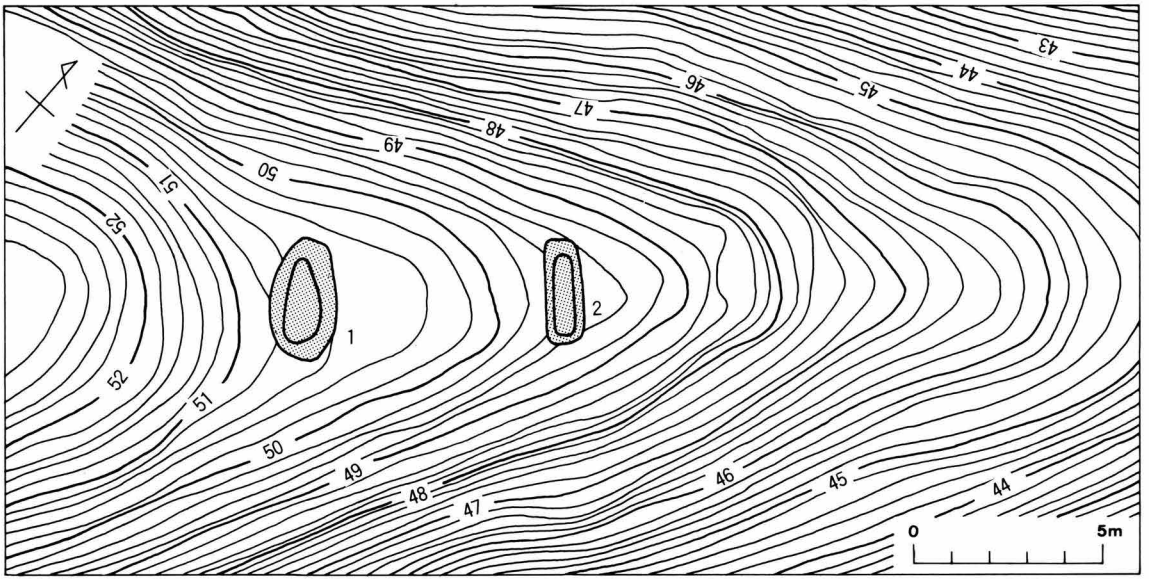
3

0 2m

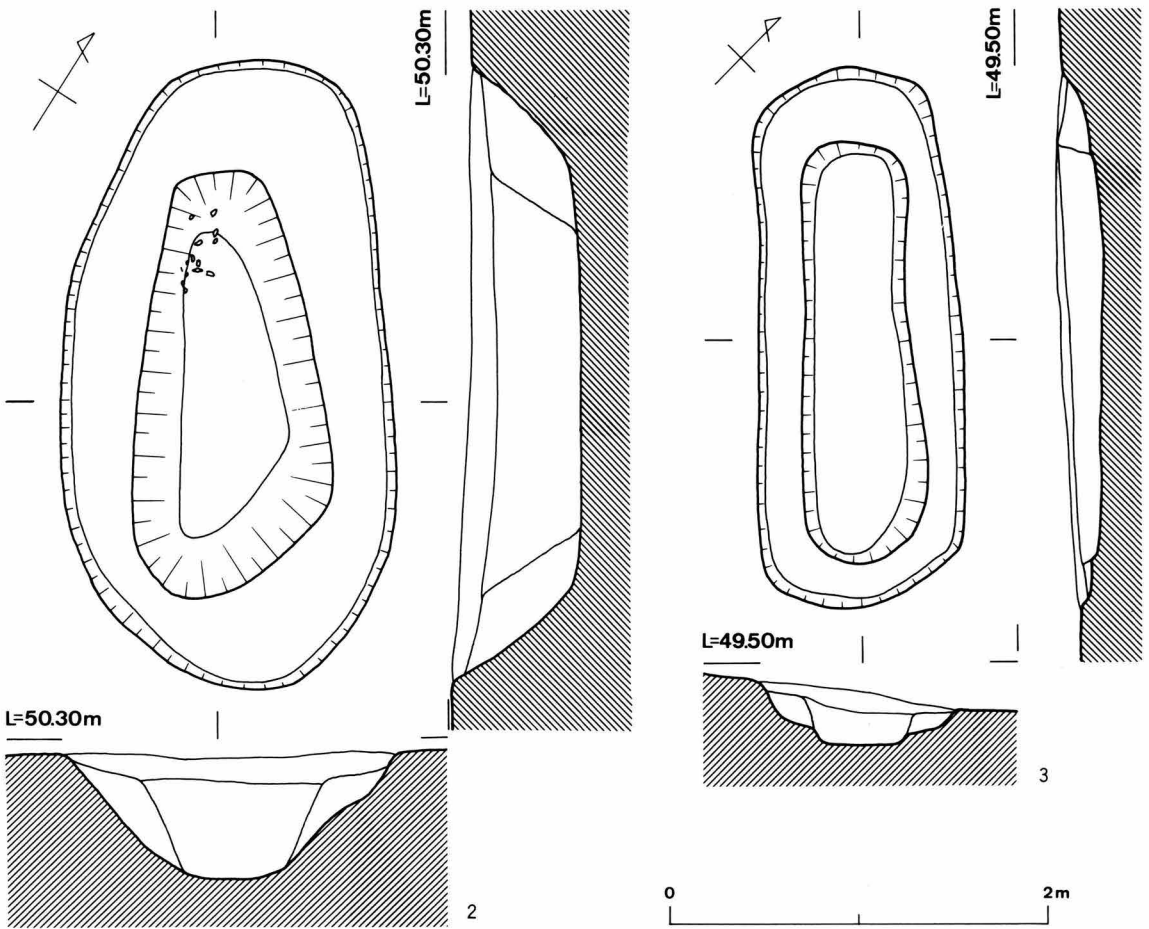
1. DD4号墳第4・5主体部実測図 2. DD4号墳第6主体部・焼土壇実測図
3. DD4号墳第7主体部実測図



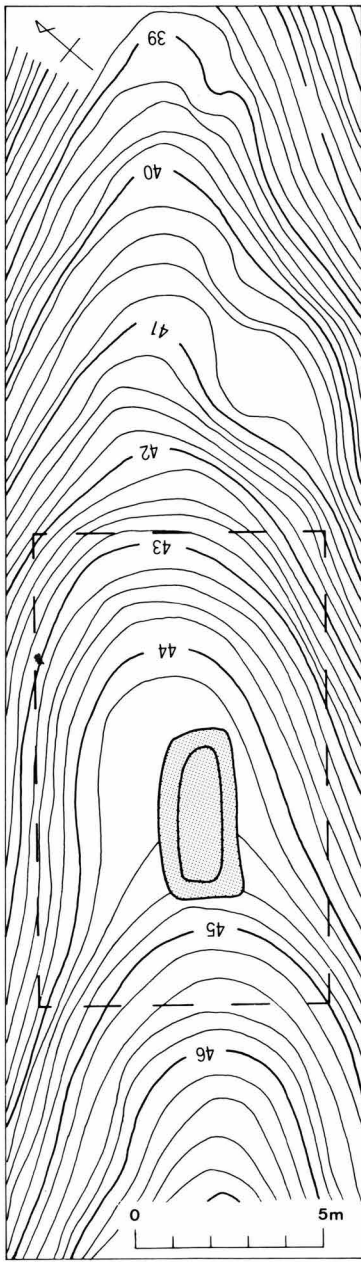
1. DD20·21号墳主体部配置图 2. DD20号墳主体部実測図
3. DD21号墳第1主体部実測図 4. DD21号墳第2主体部実測図



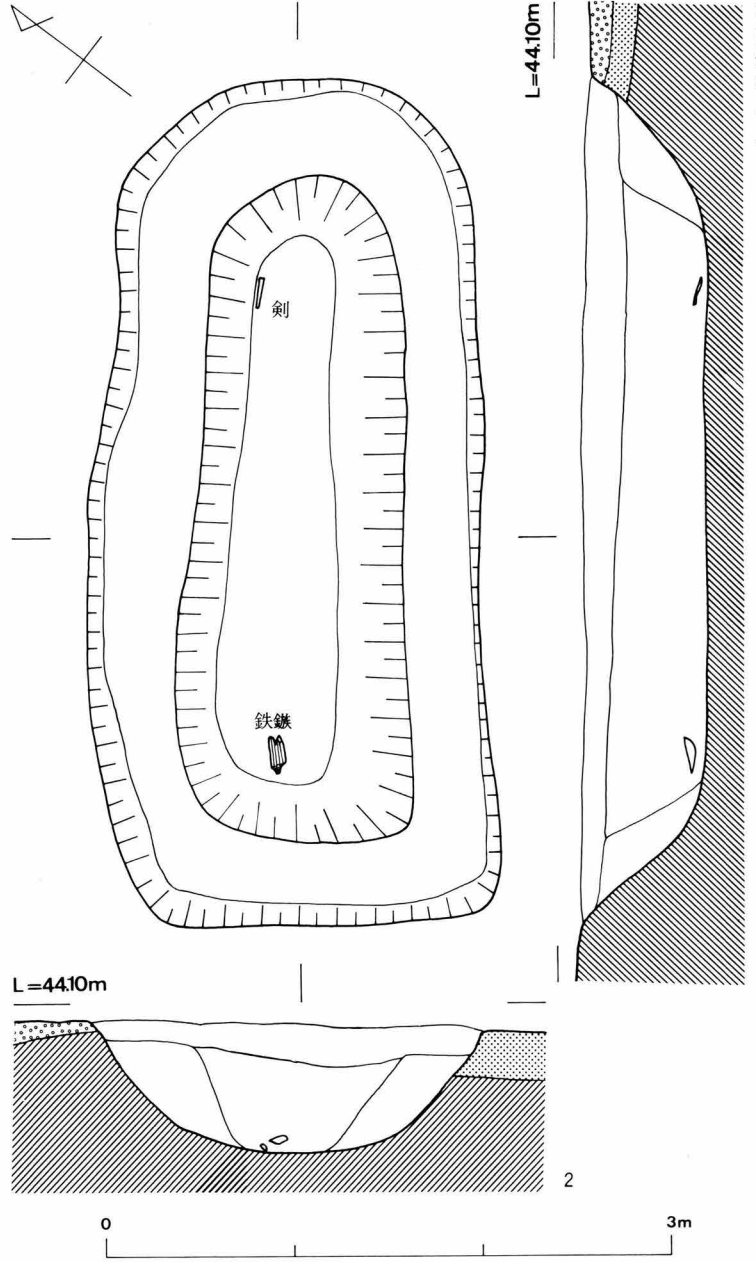
1



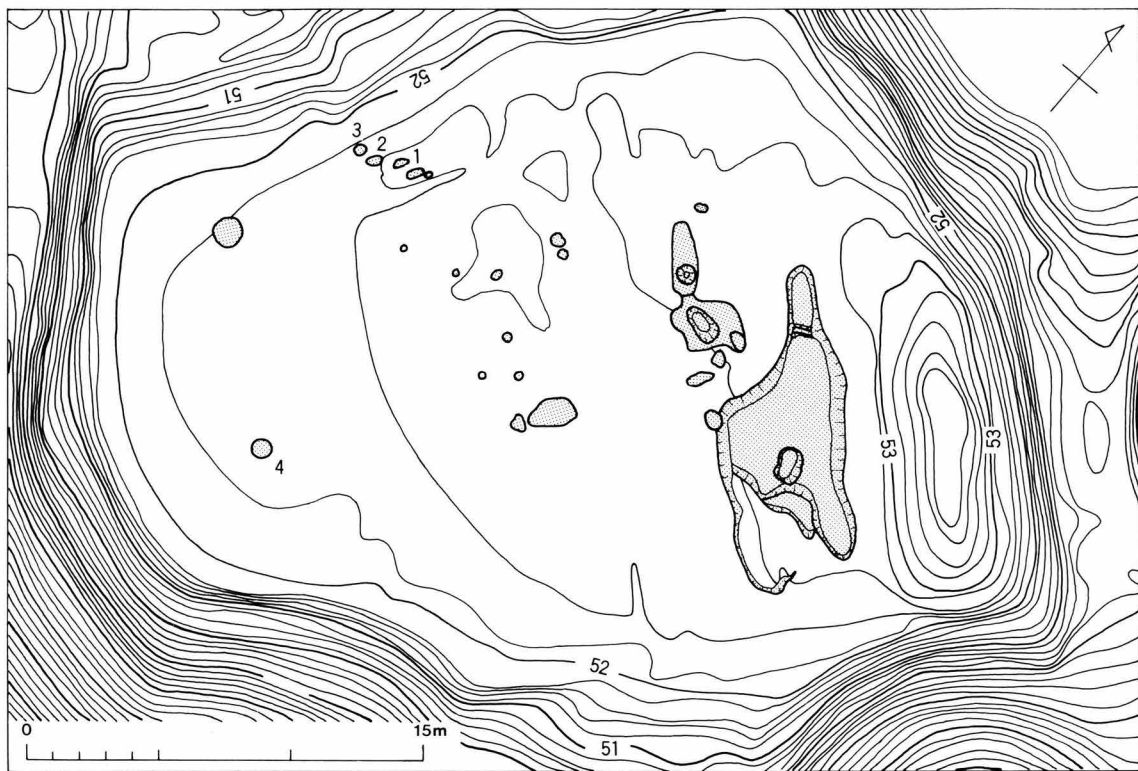
1. DD22号墳主体部配置图 2. DD22号墳第1主体部实测图
3. DD22号墳第2主体部实测图



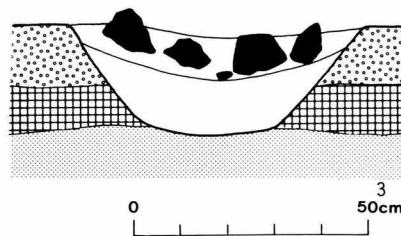
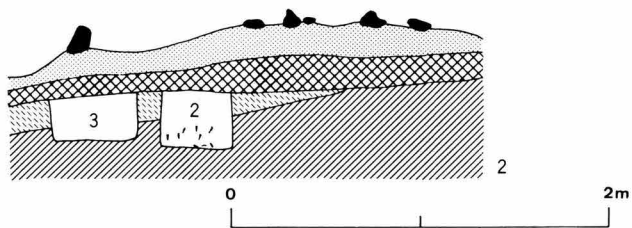
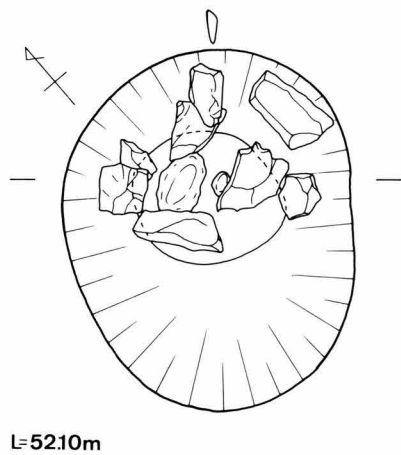
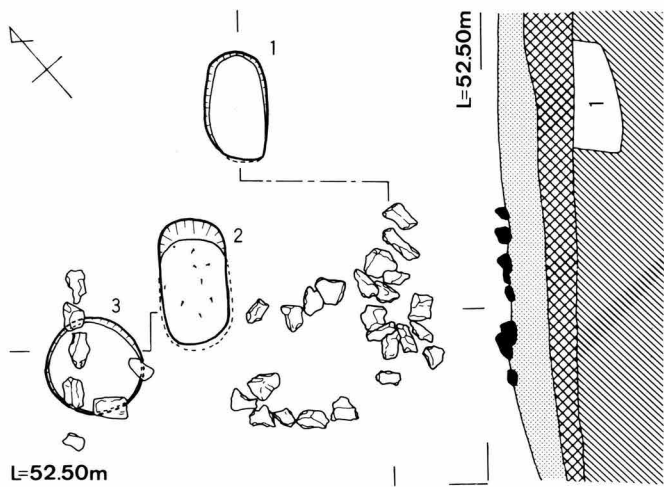
1. DD23号墳主体部配置図



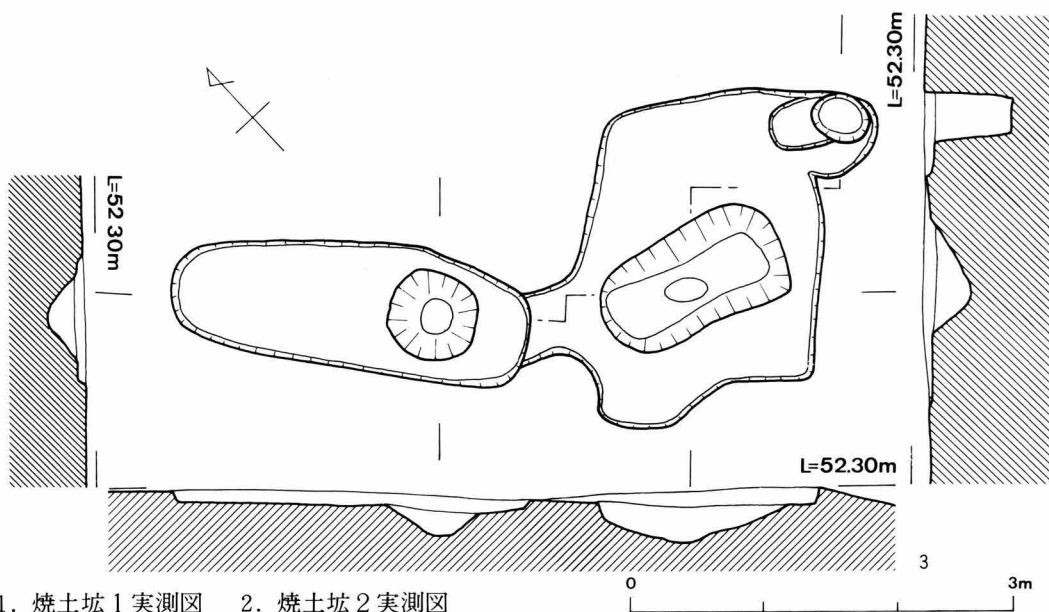
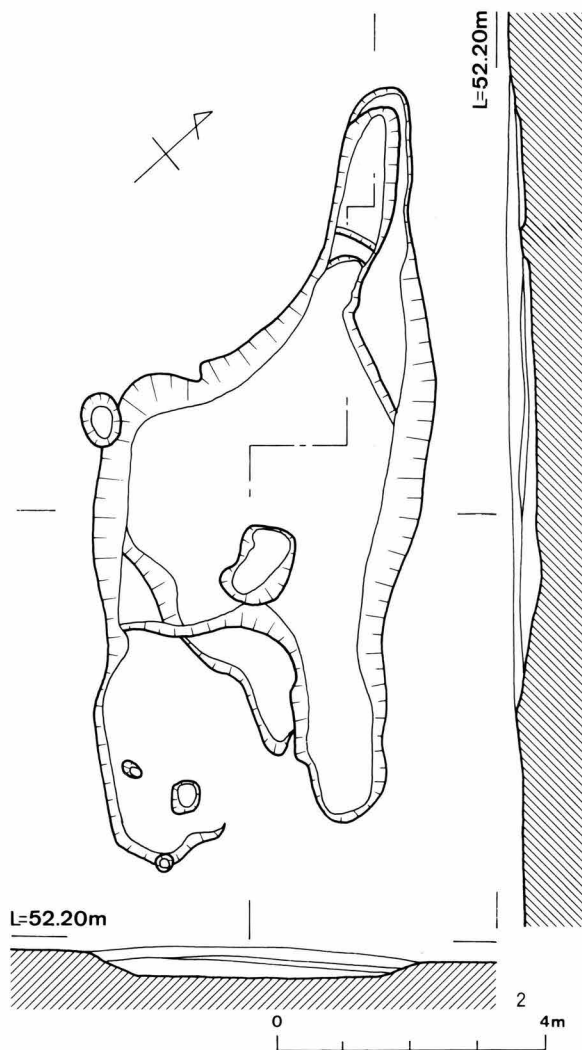
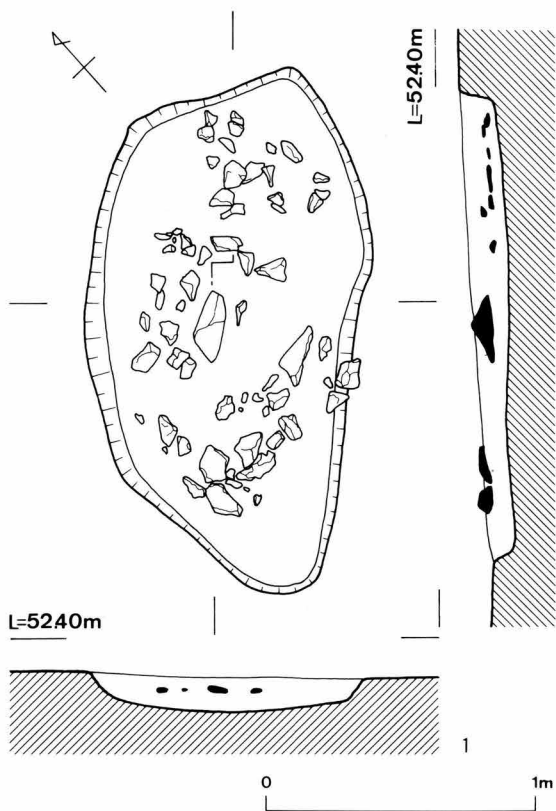
2. DD23号墳主体部実測図



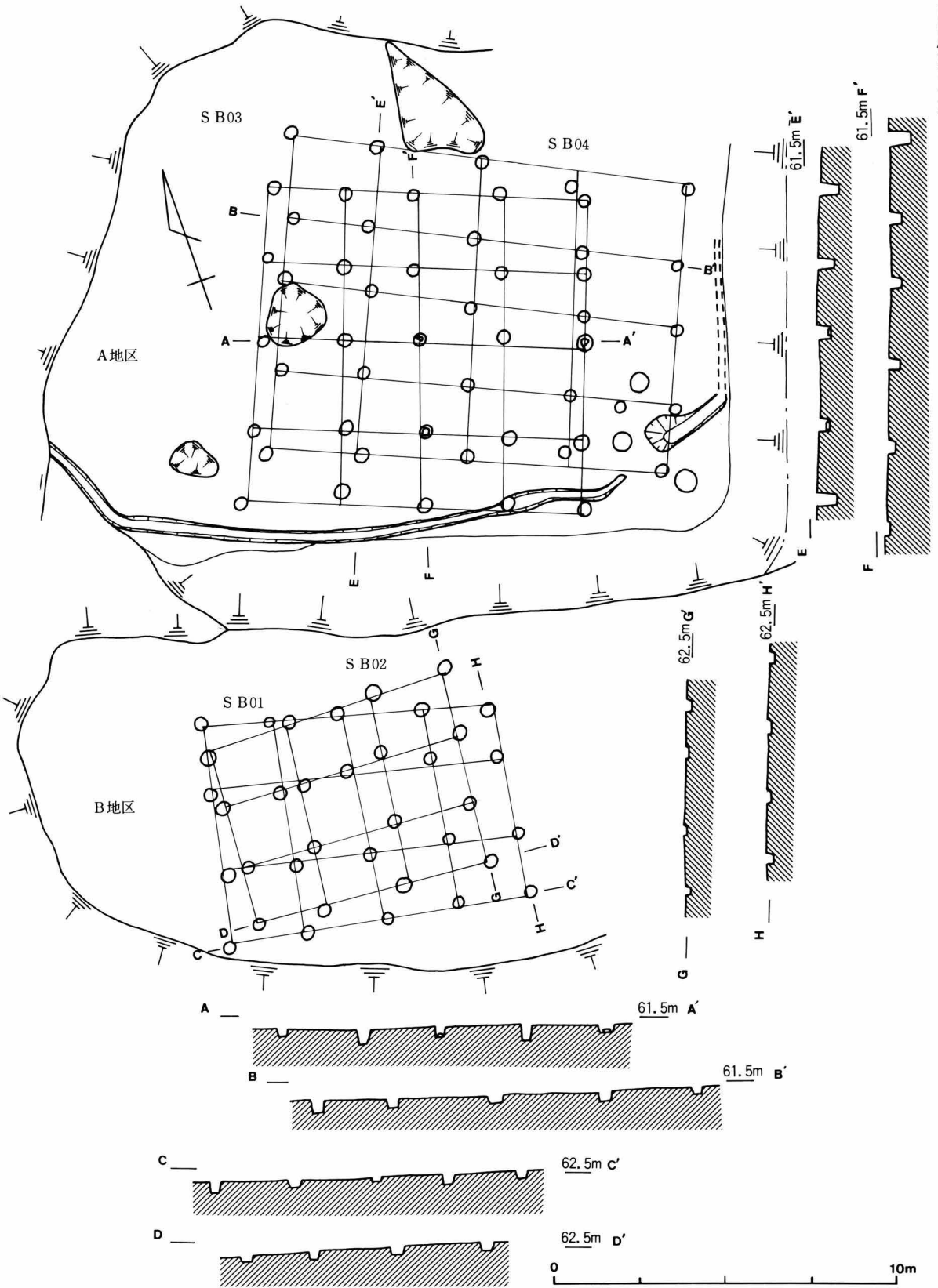
1



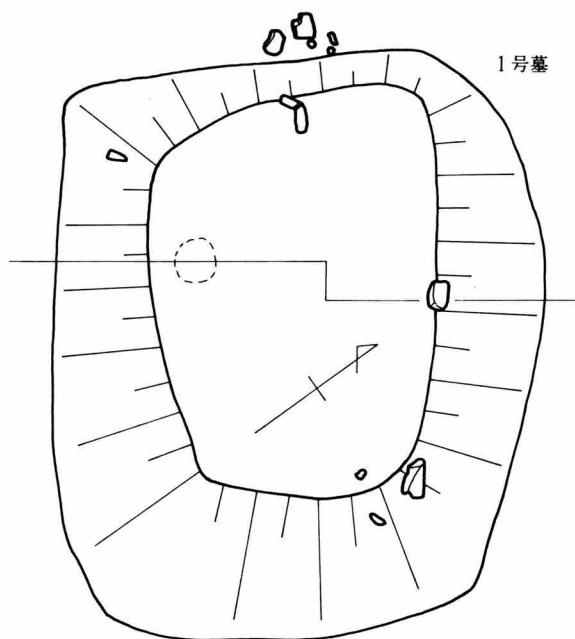
1. TDⅢ地点遺構配置図 2. 1・2・3号墓実測図
3. 4号墓実測図



1. 焼土塚 1 実測図 2. 焼土塚 2 実測図
3. 土塚実測図

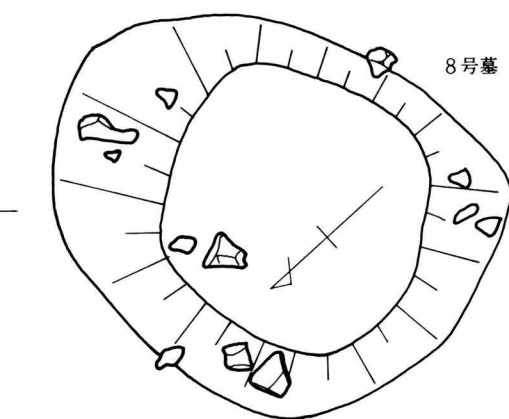
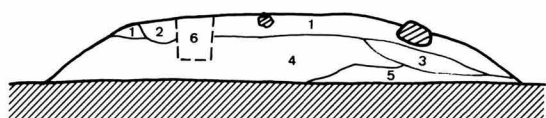


大道廢寺跡 建物平面図



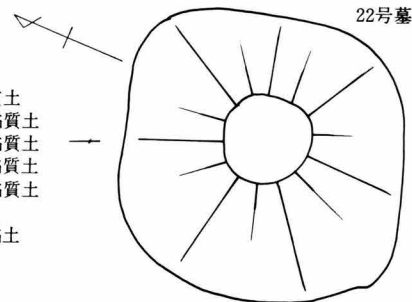
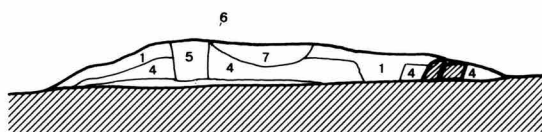
1号墓

L=66m



8号墓

L=66m

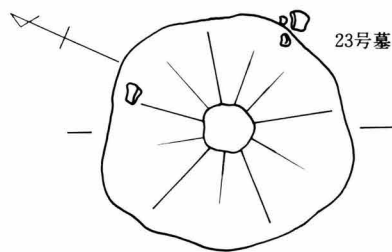
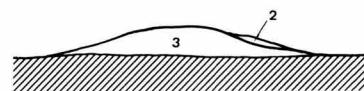
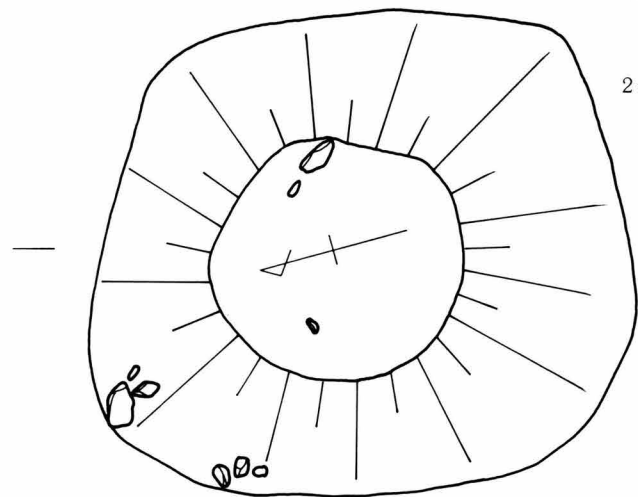


22号墓

- 1. 黄色粘质土
- 2. 暗黄色粘质土
- 3. 褐黄色粘质土
- 4. 黄褐色粘质土
- 5. 暗褐色粘质土
- 6. 骨片
- 7. 明黄色粘土

2号墓

L=66m

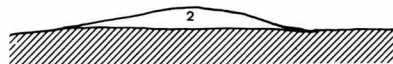


23号墓

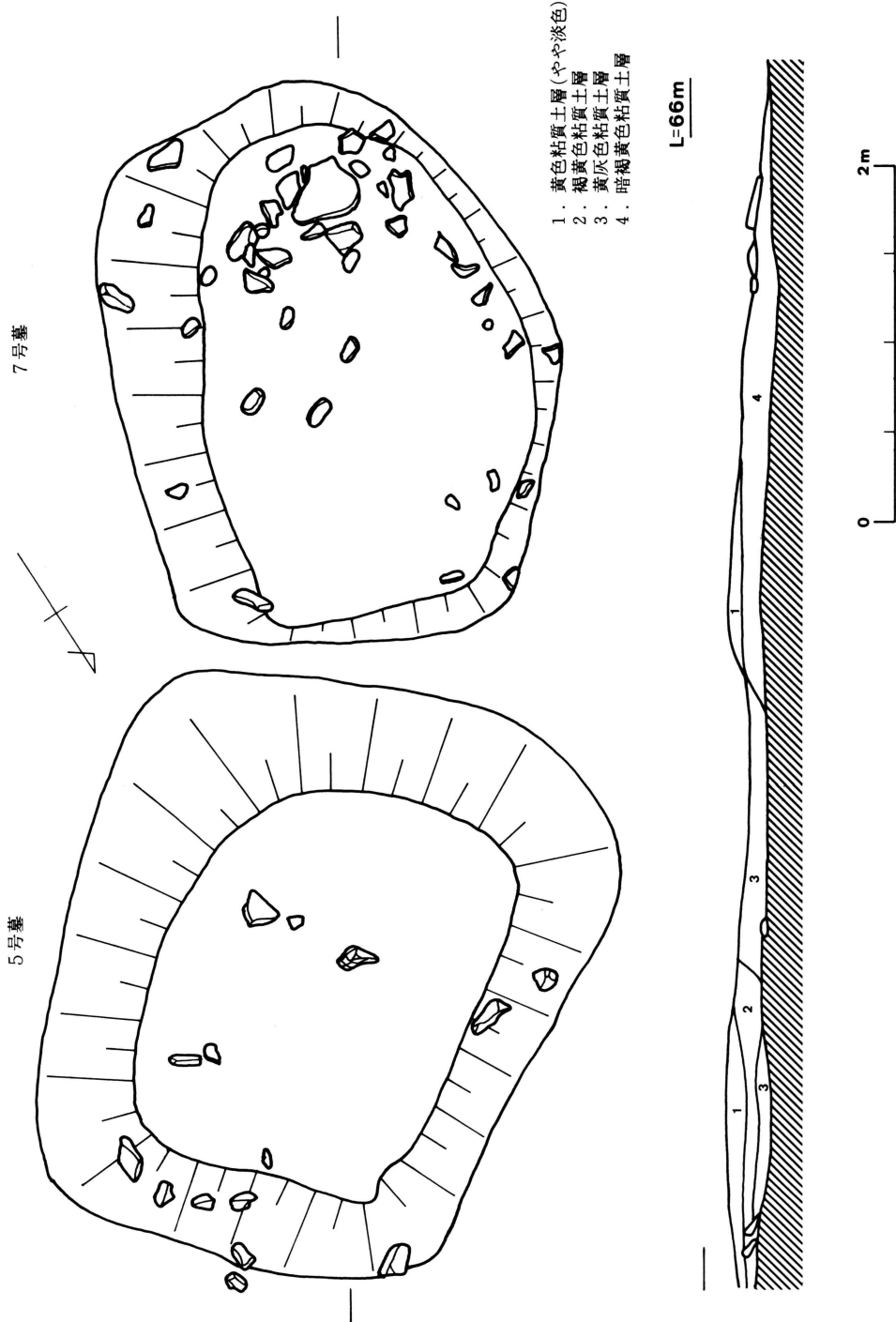
L=66m



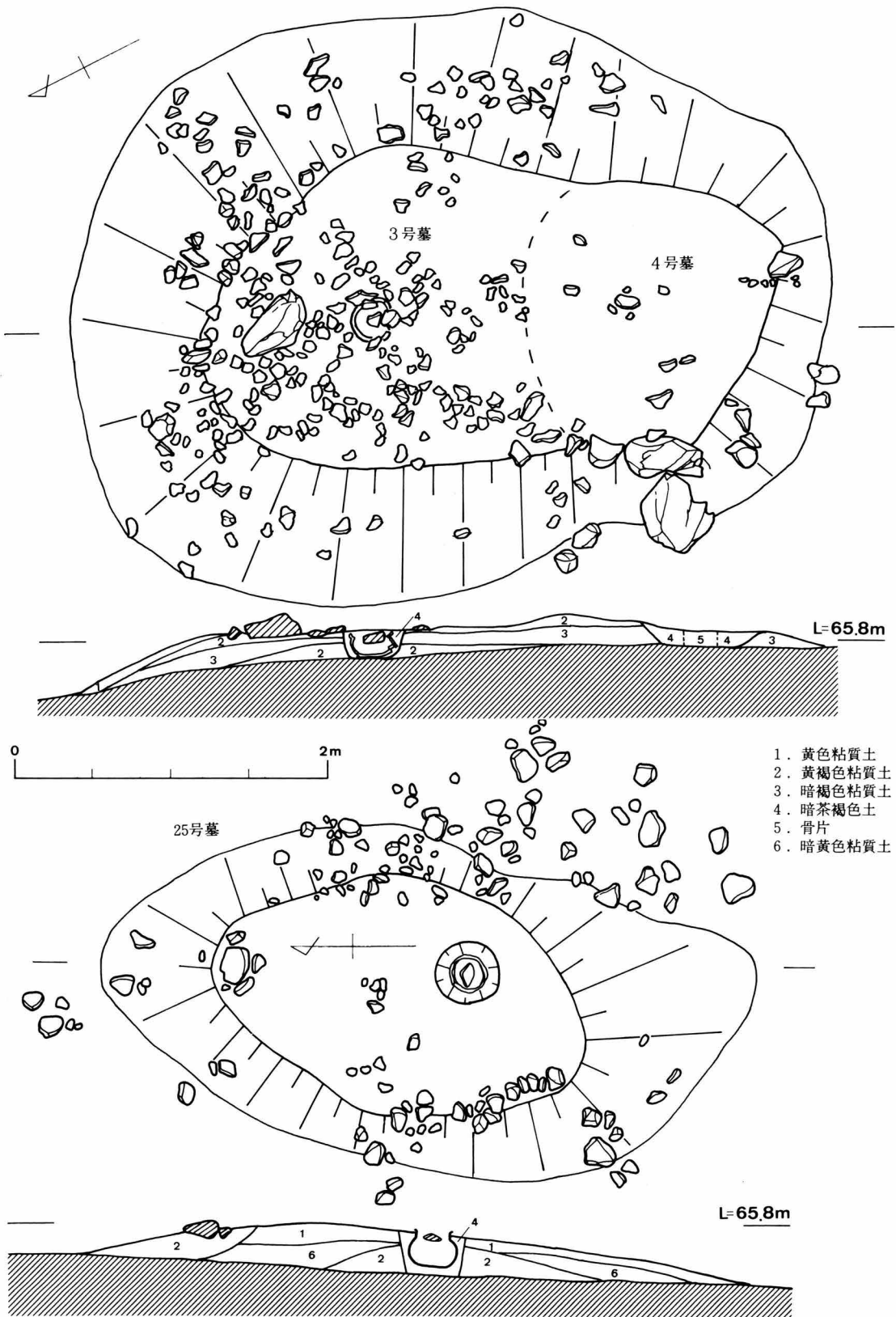
L=66m



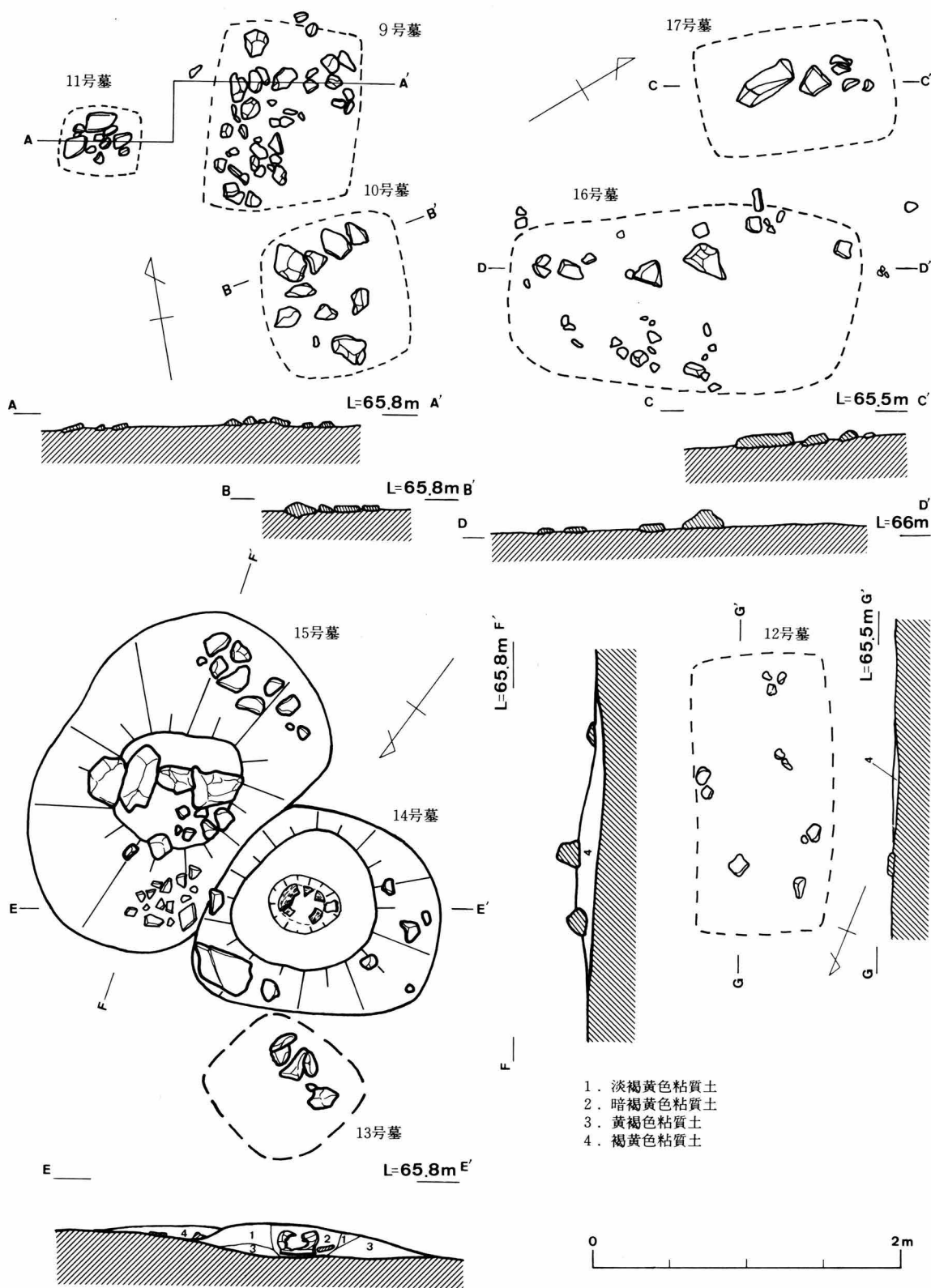
古墓实测图 1



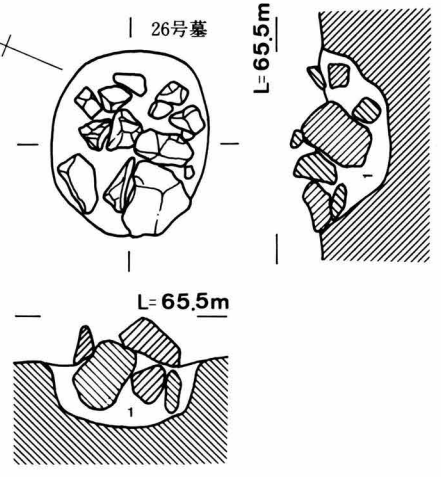
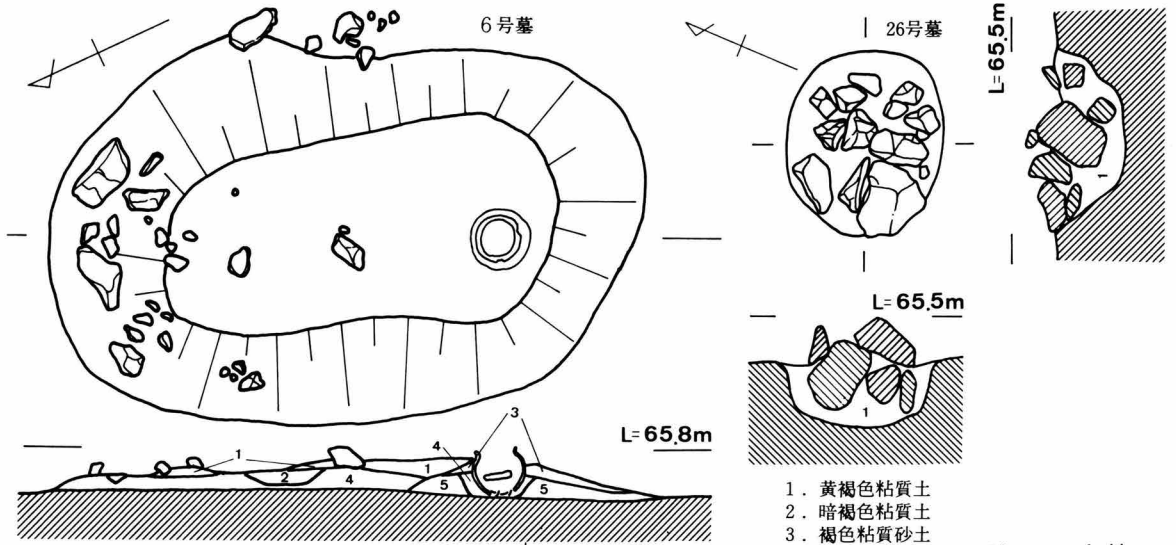
古墓実測図2



古墓实测图3

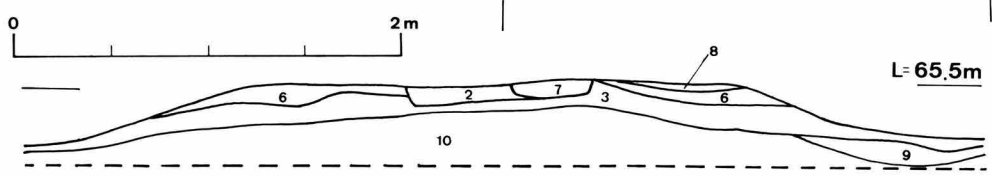
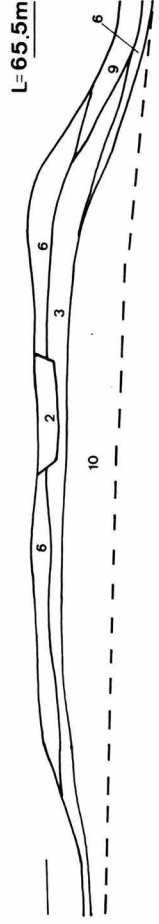
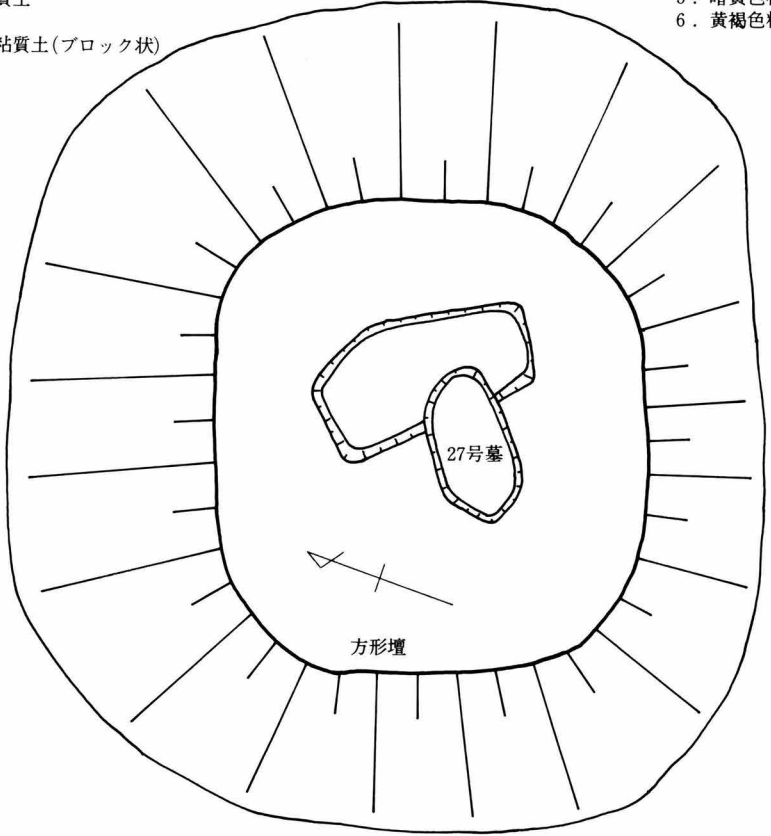


古墓实测图 4

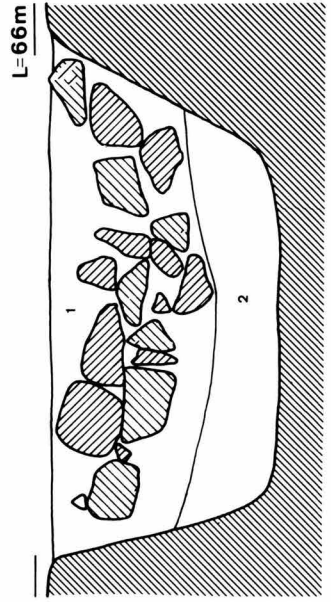
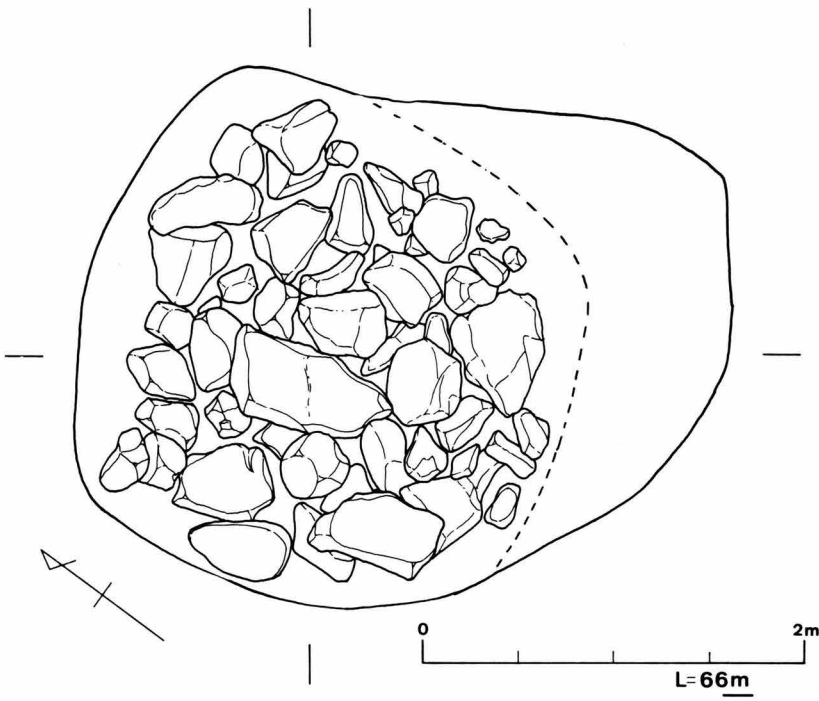


- 7. 濃茶褐色粘質土
- 8. 淡褐色粘質土
- 9. 赤褐色土
- 10. 明赤褐色粘質土(ブロック状)

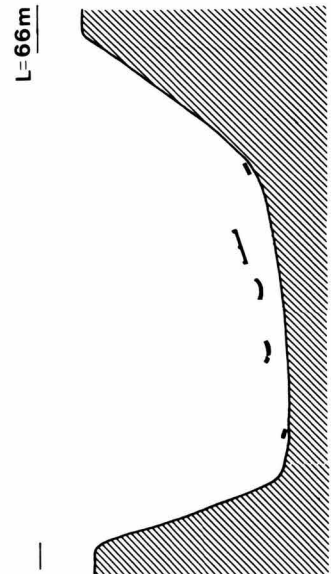
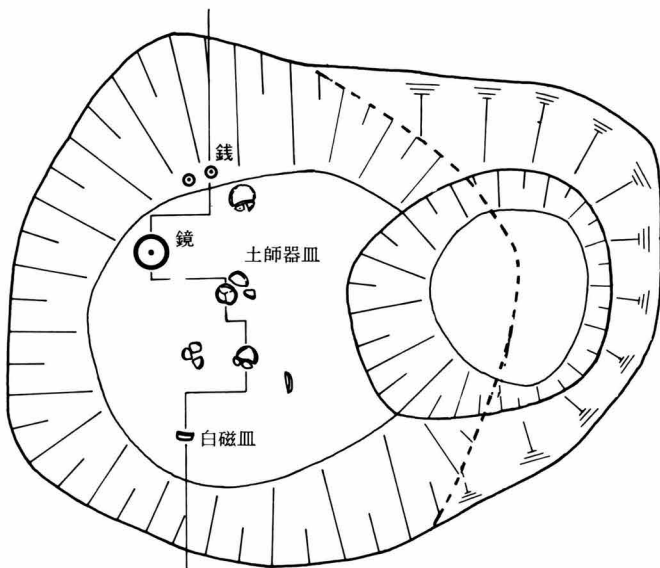
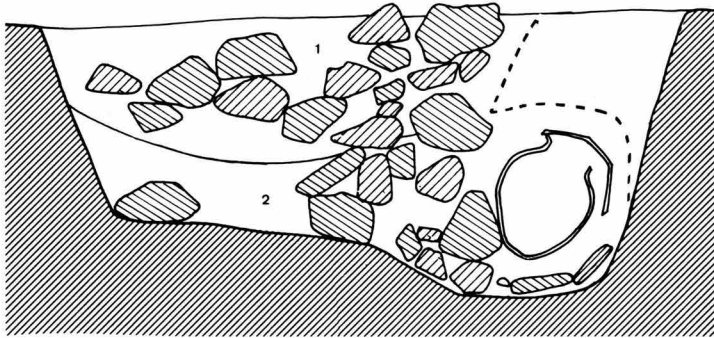
- 1. 黄褐色粘質土
- 2. 暗褐色粘質土
- 3. 褐色粘質砂土
- 4. 暗茶褐色土
- 5. 暗黄色粘質土
- 6. 黄褐色粘質砂土



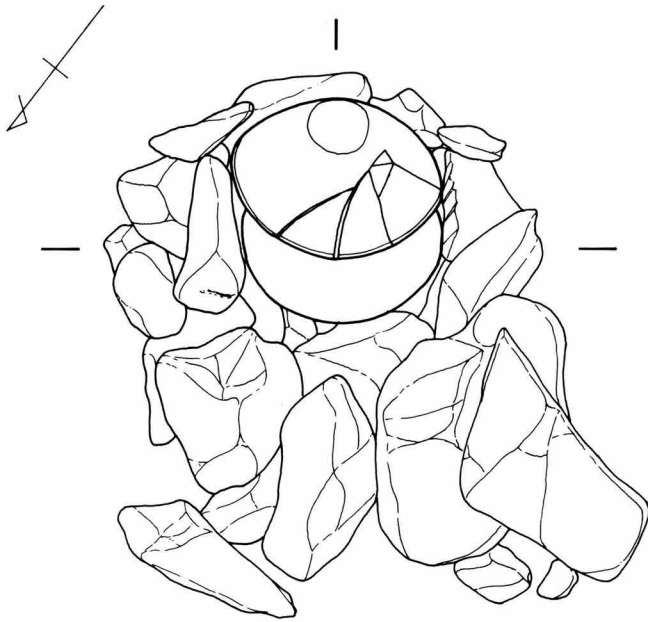
古墓および方形壇実測図



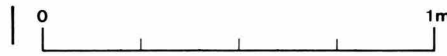
- 1. 暗灰褐色粘質土
- 2. 暗黄灰色粘質土



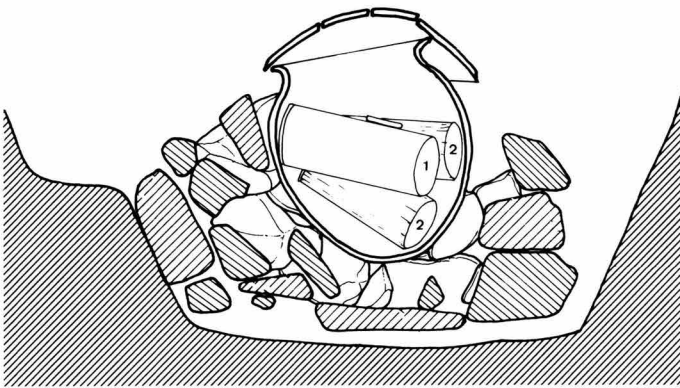
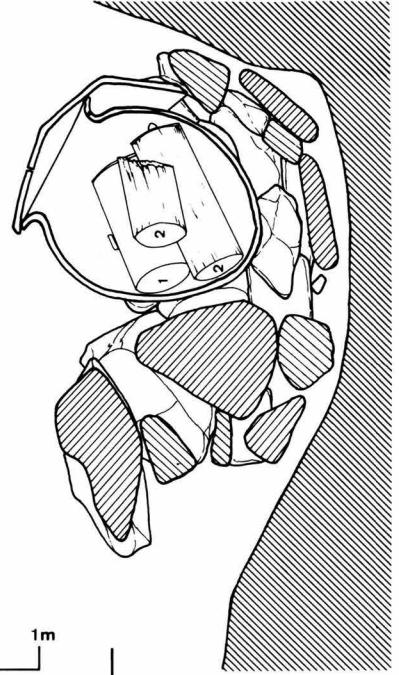
経塚実測図 1



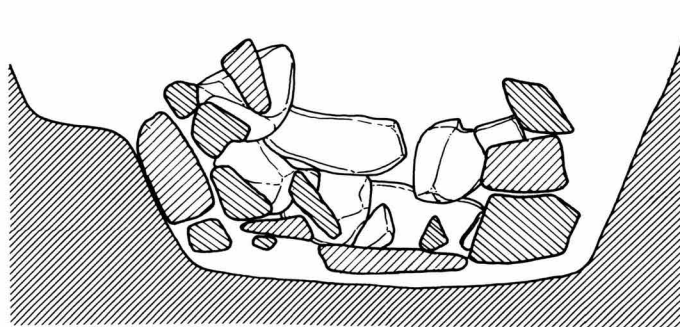
- 1. 銅鑄製経筒
- 2. 竹製経筒



L=65m



L=65m

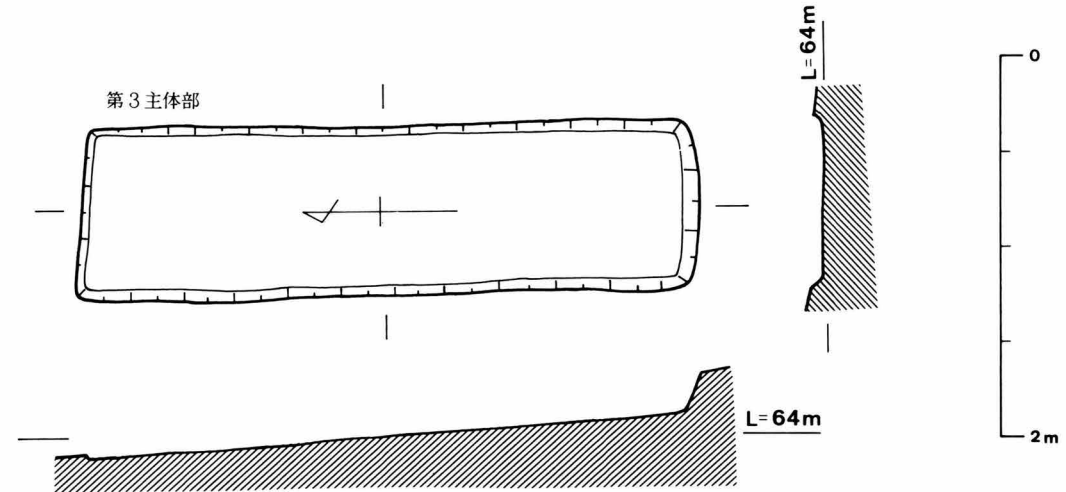
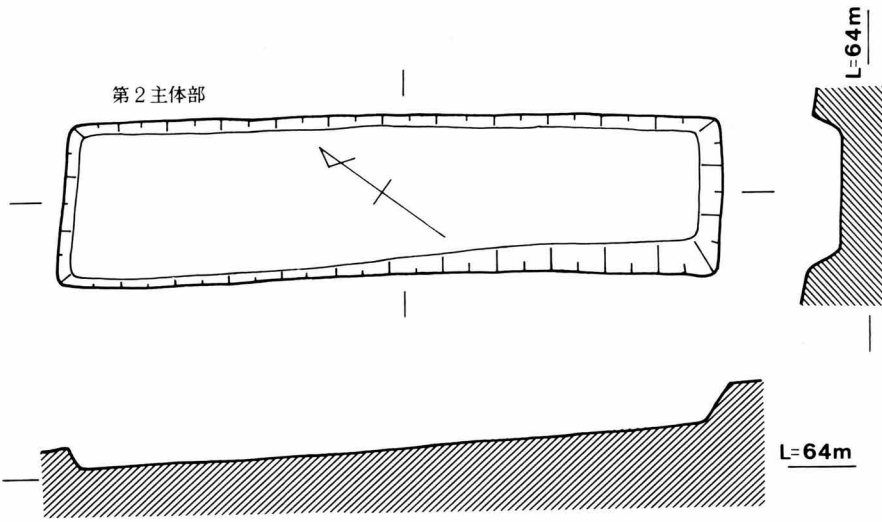
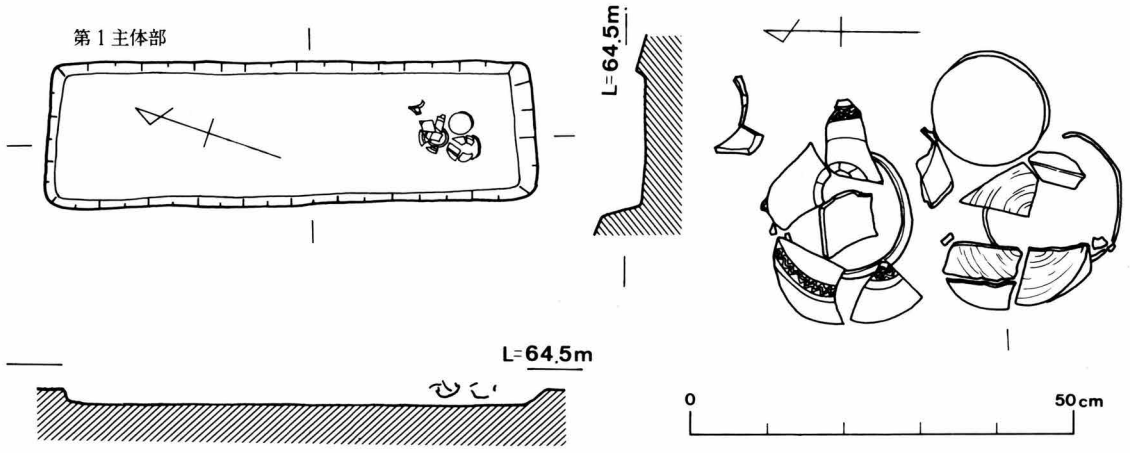


L=65m

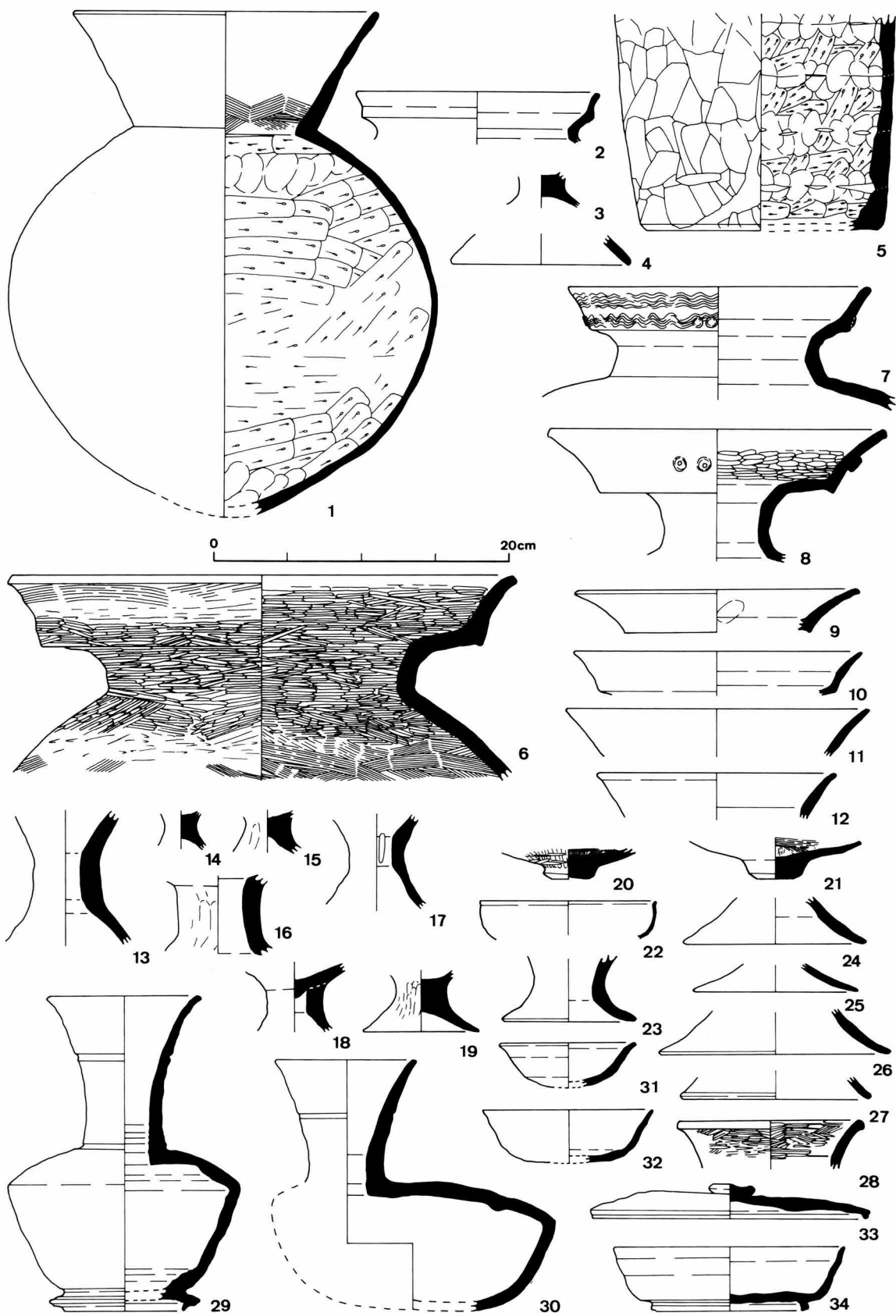
L=65m



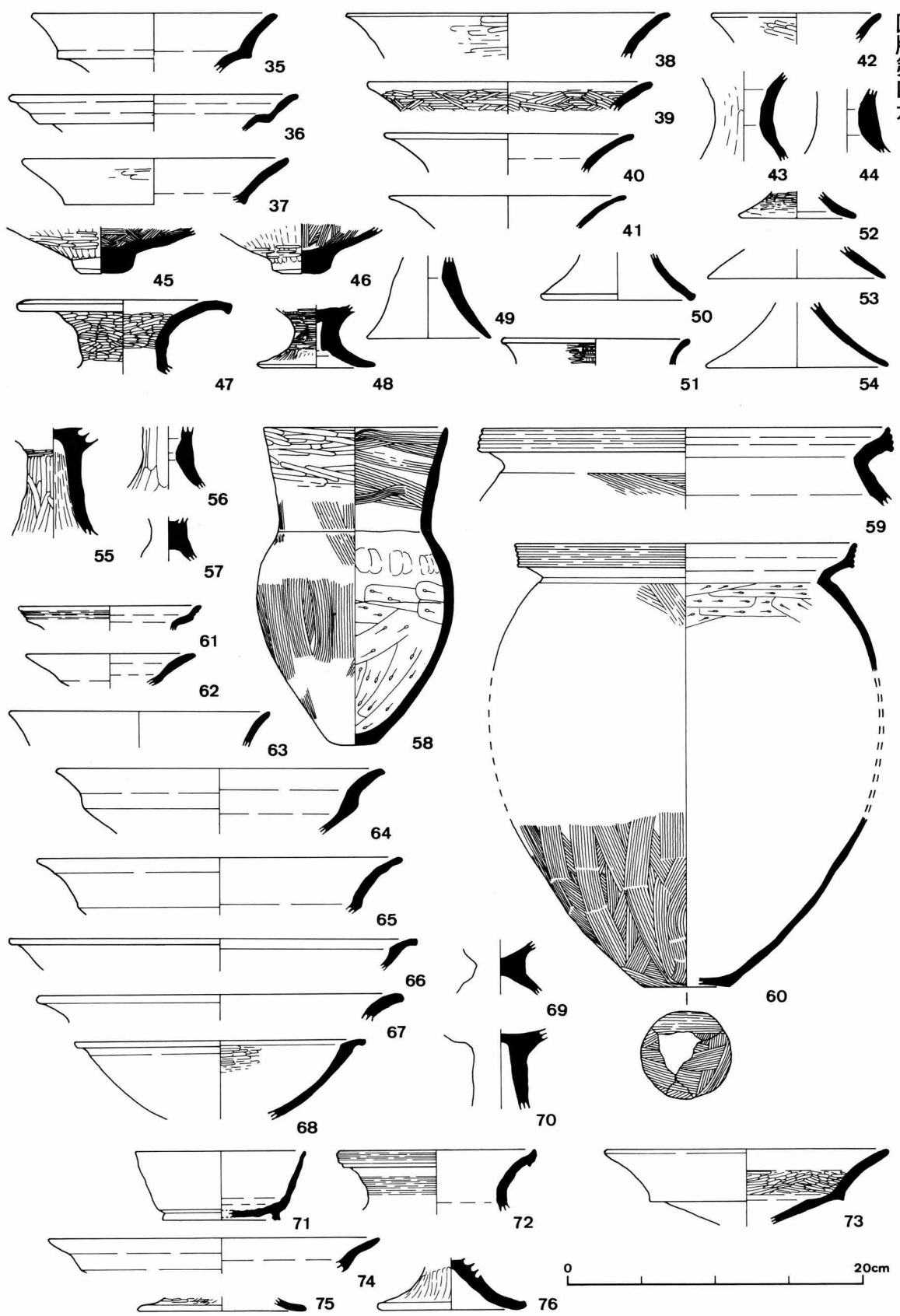
経塚実測図2



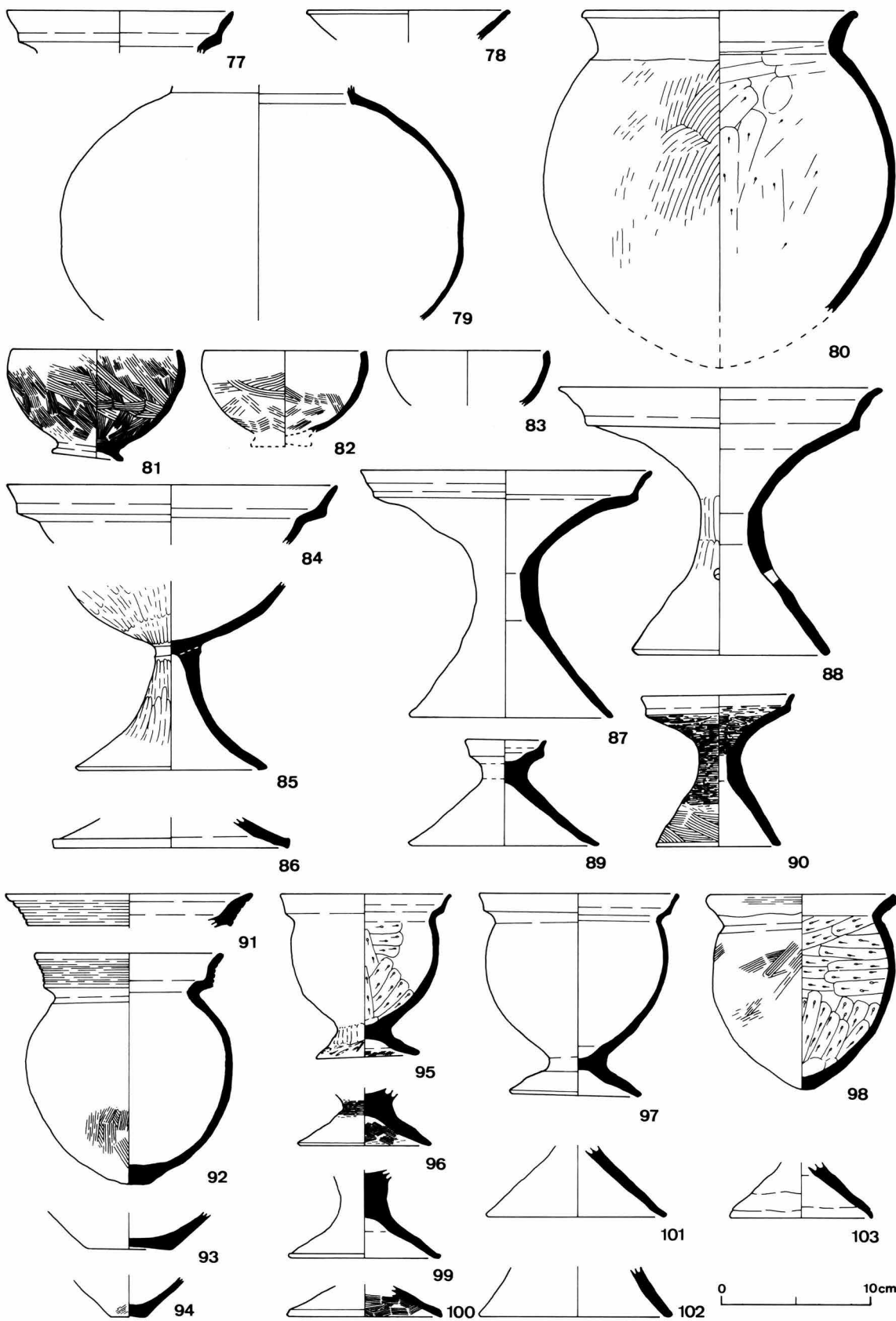
大道廃寺跡古墳時代埋葬主体部実測図



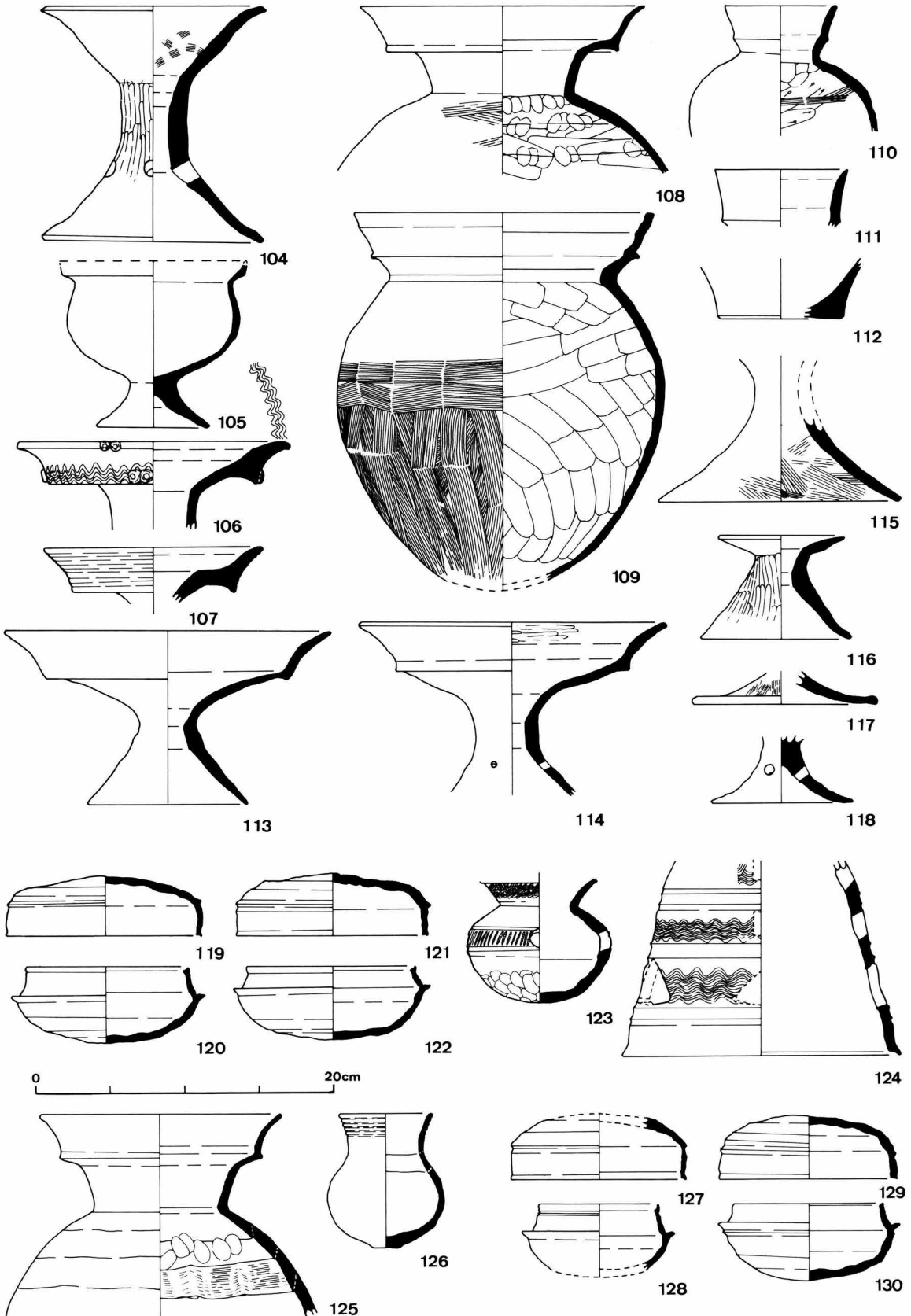
墳墓出土遺物実測図1 (土器)



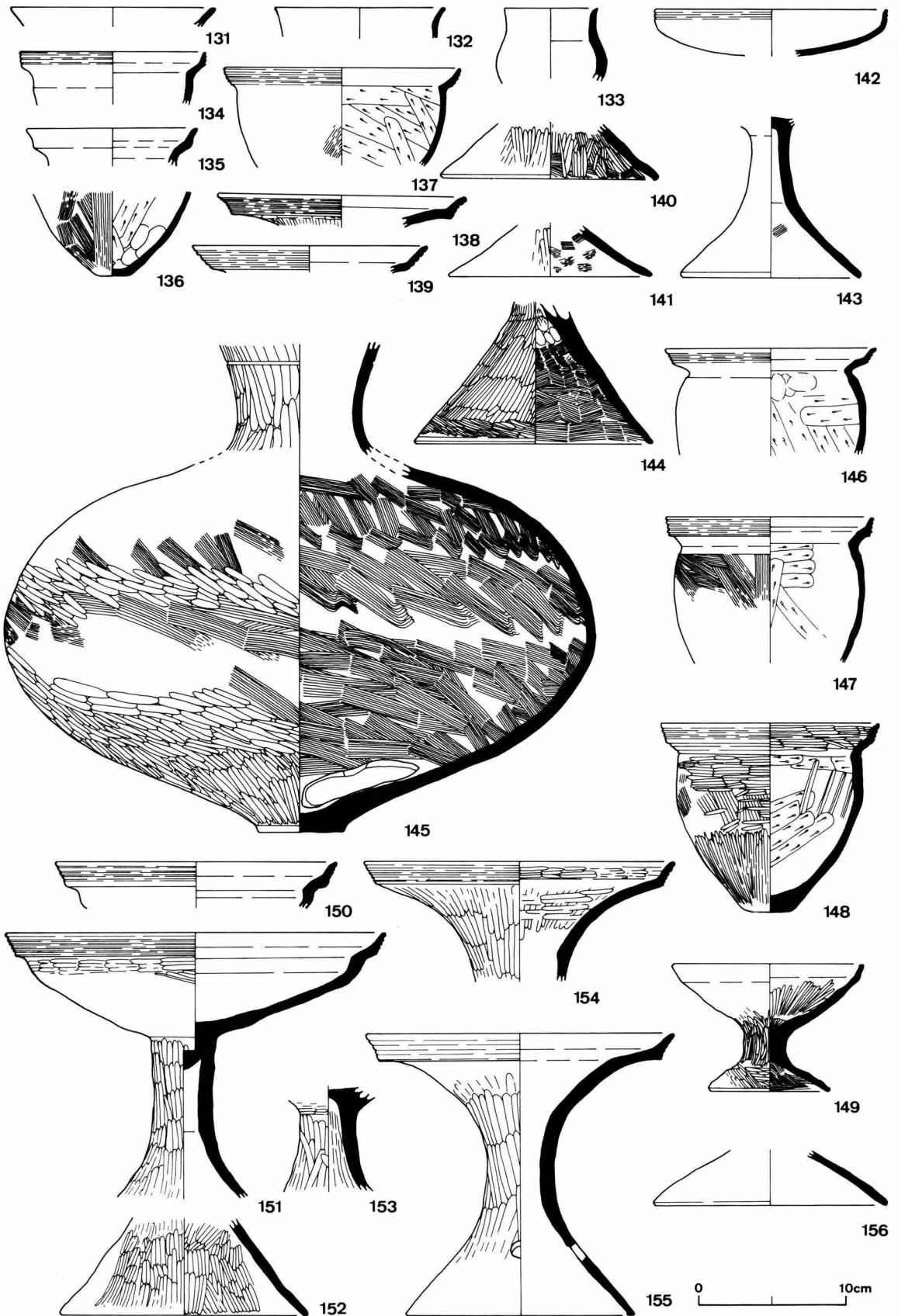
墳墓出土遺物実測図2 (土器)



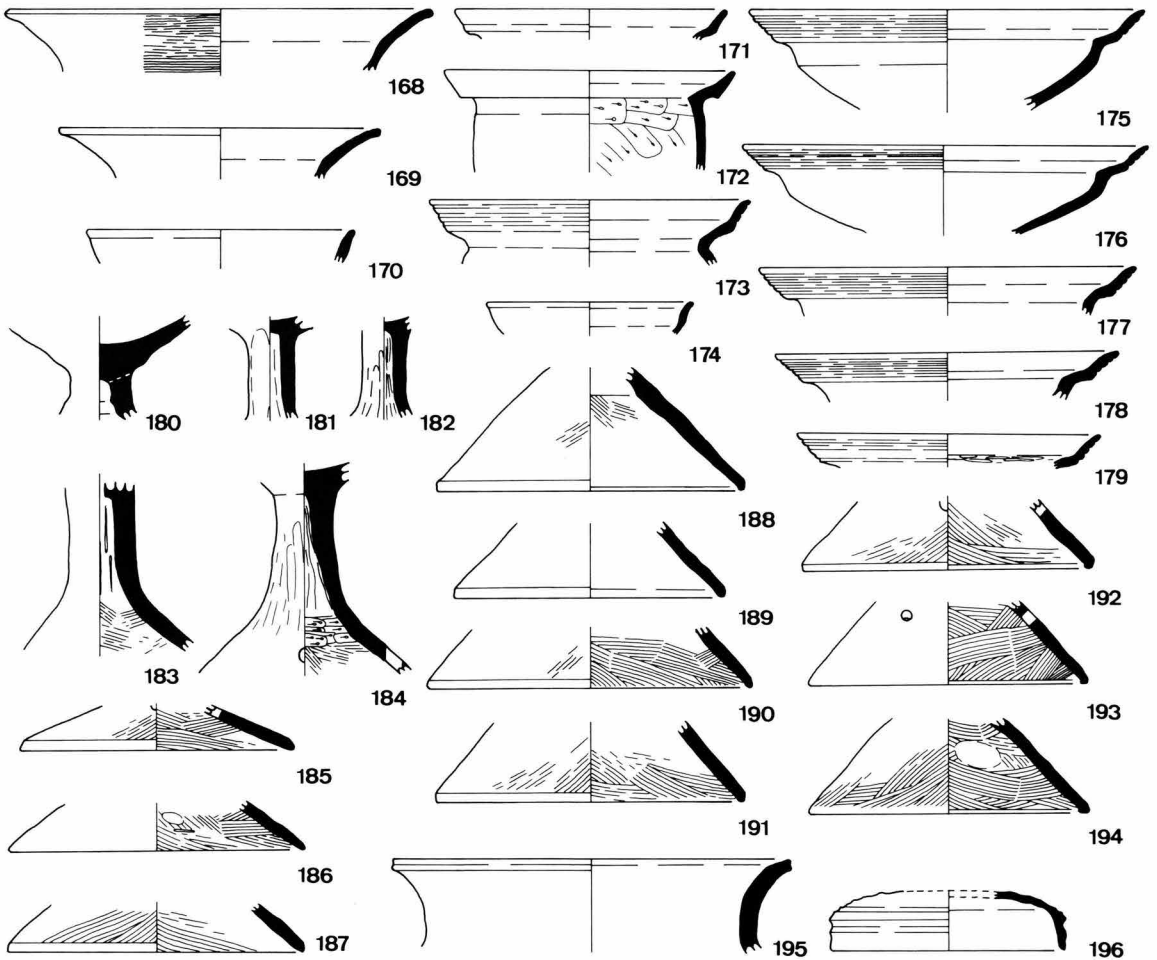
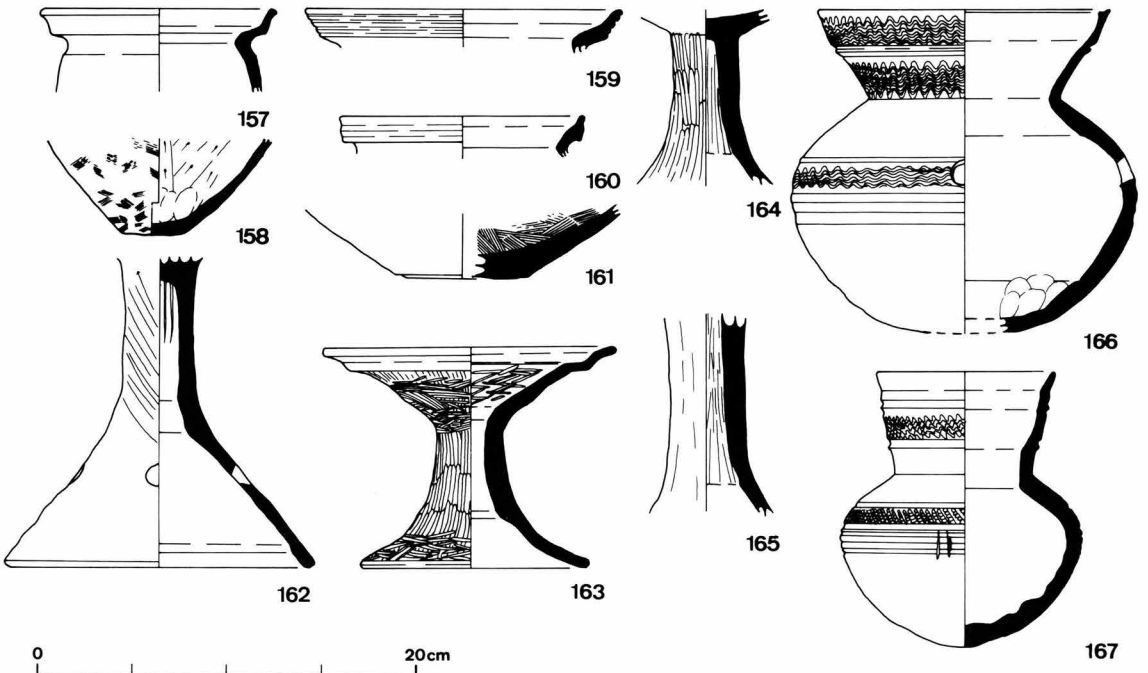
坟墓出土遺物実測図3 (土器)



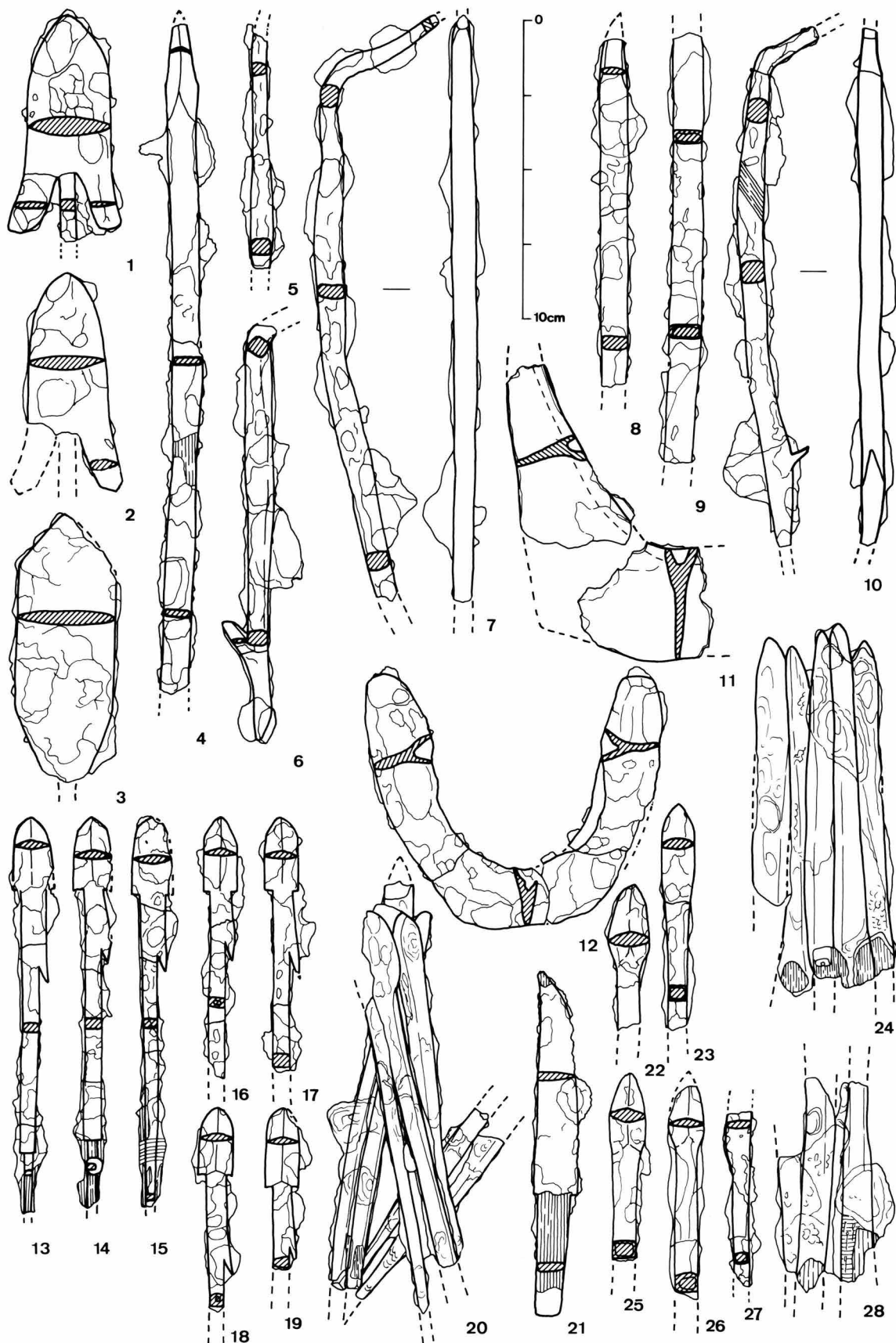
坟墓出土遺物実測図4 (土器)



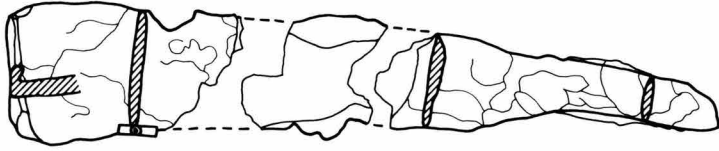
墳墓出土遺物実測図5(土器)



坟墓出土遗物实测图6 (土器)

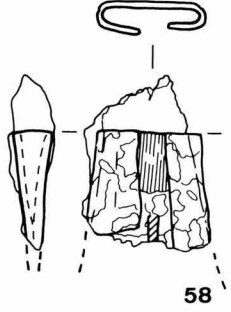


墳墓出土遺物実測図7 (鉄製品)

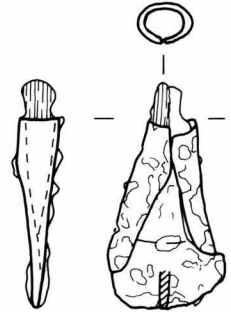
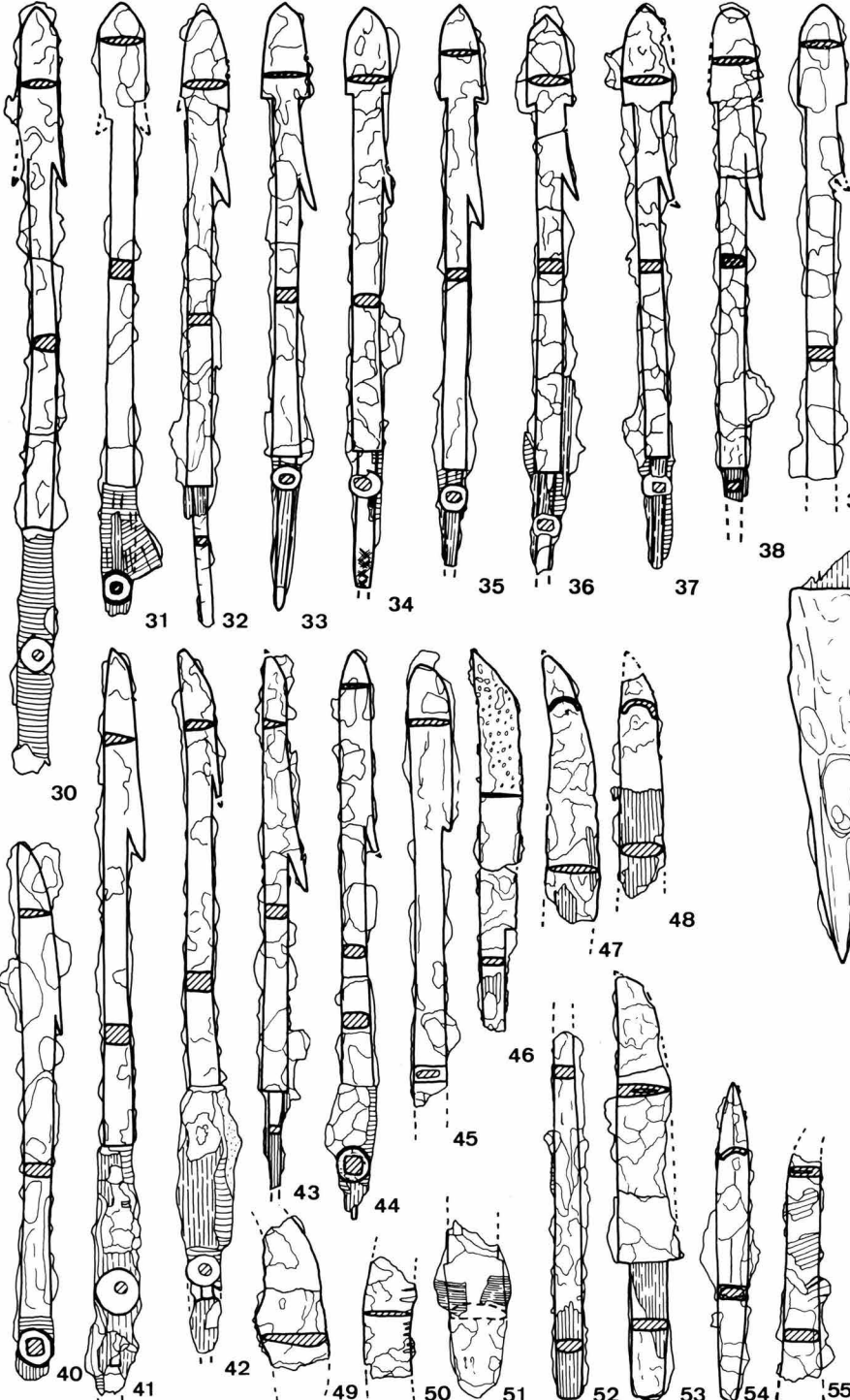


29

0 10cm



58



59

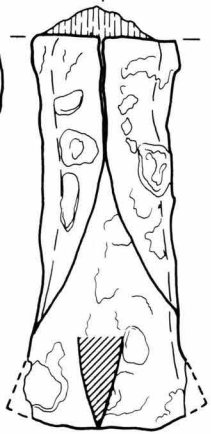


39

38

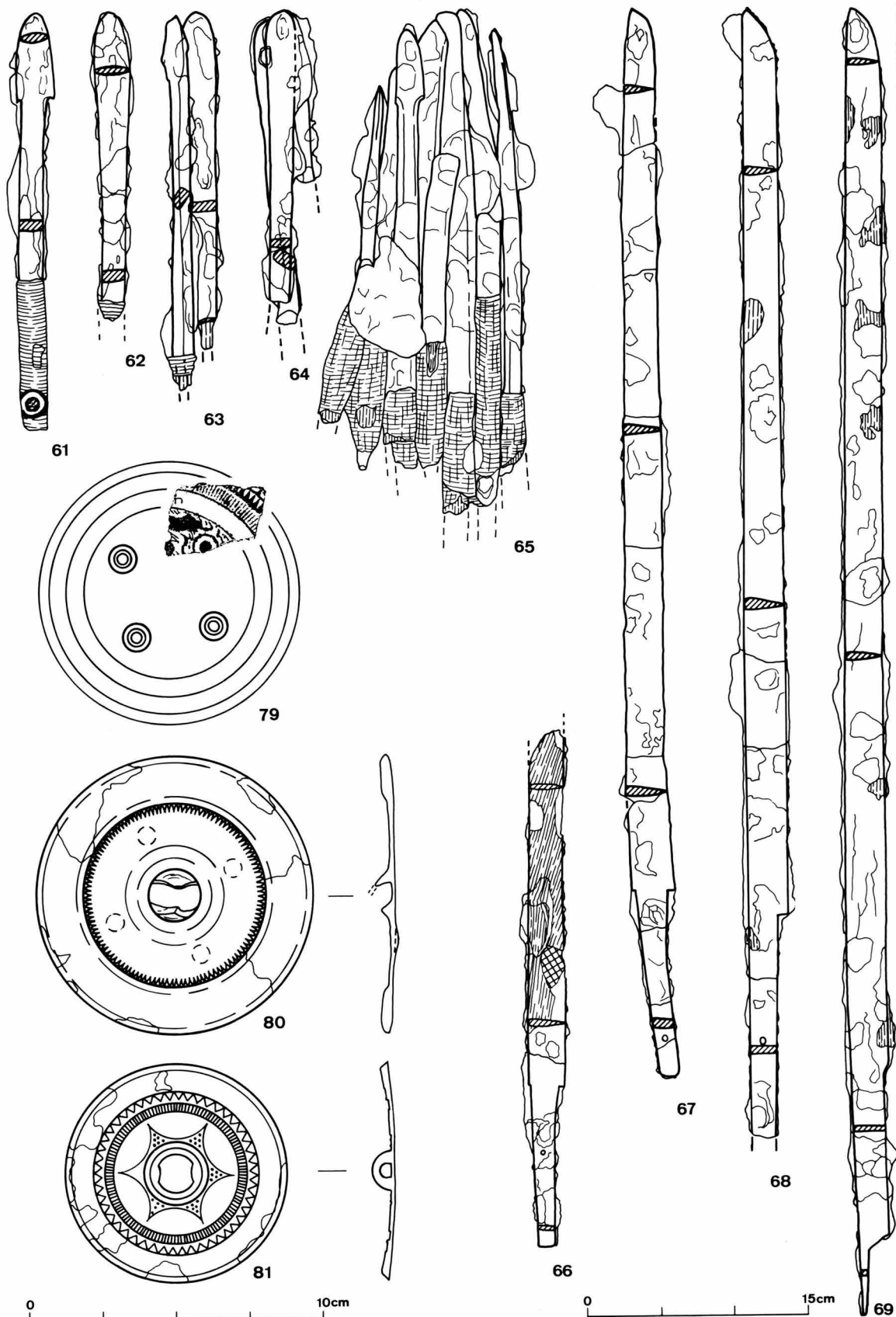


60

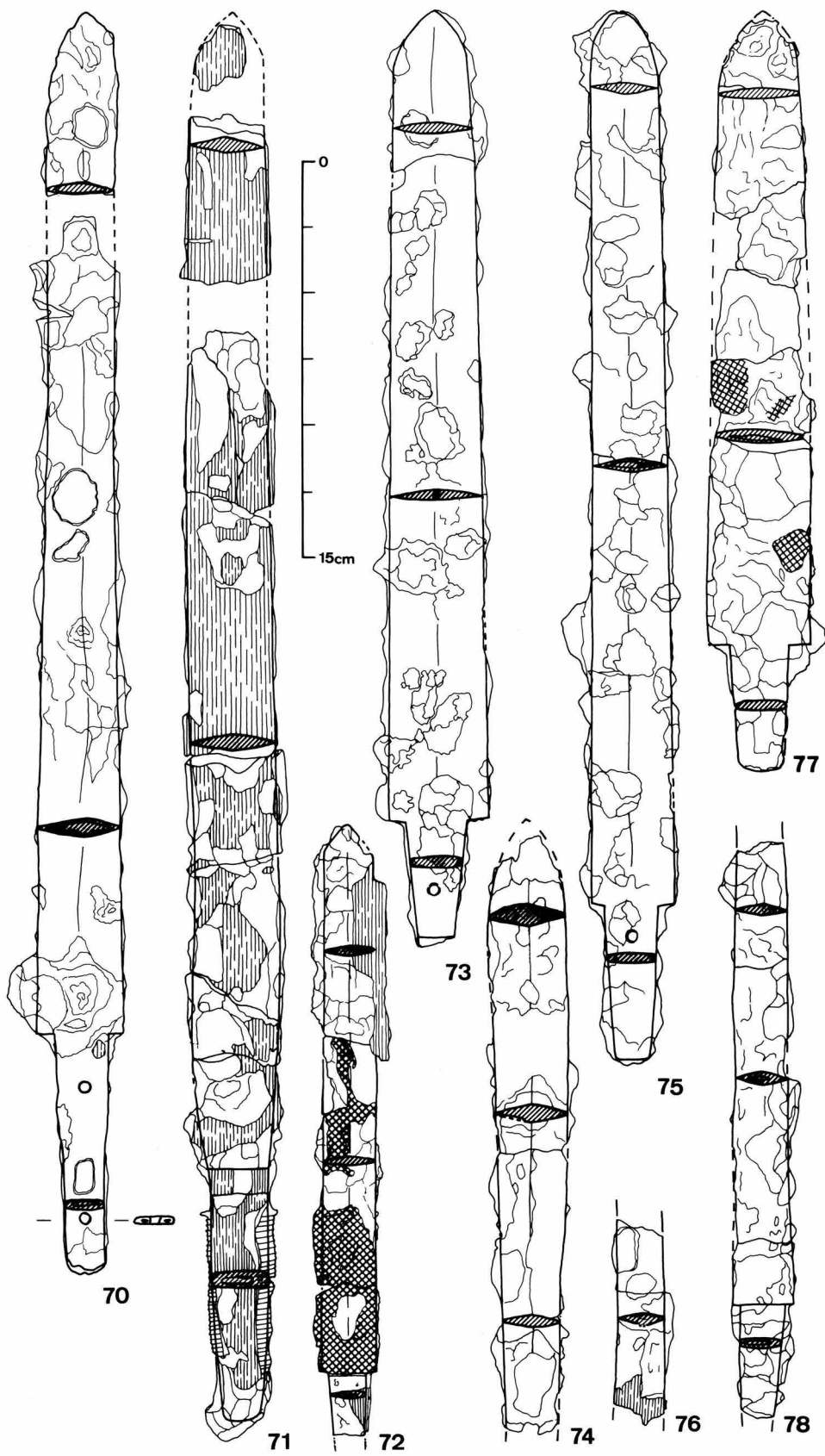


57

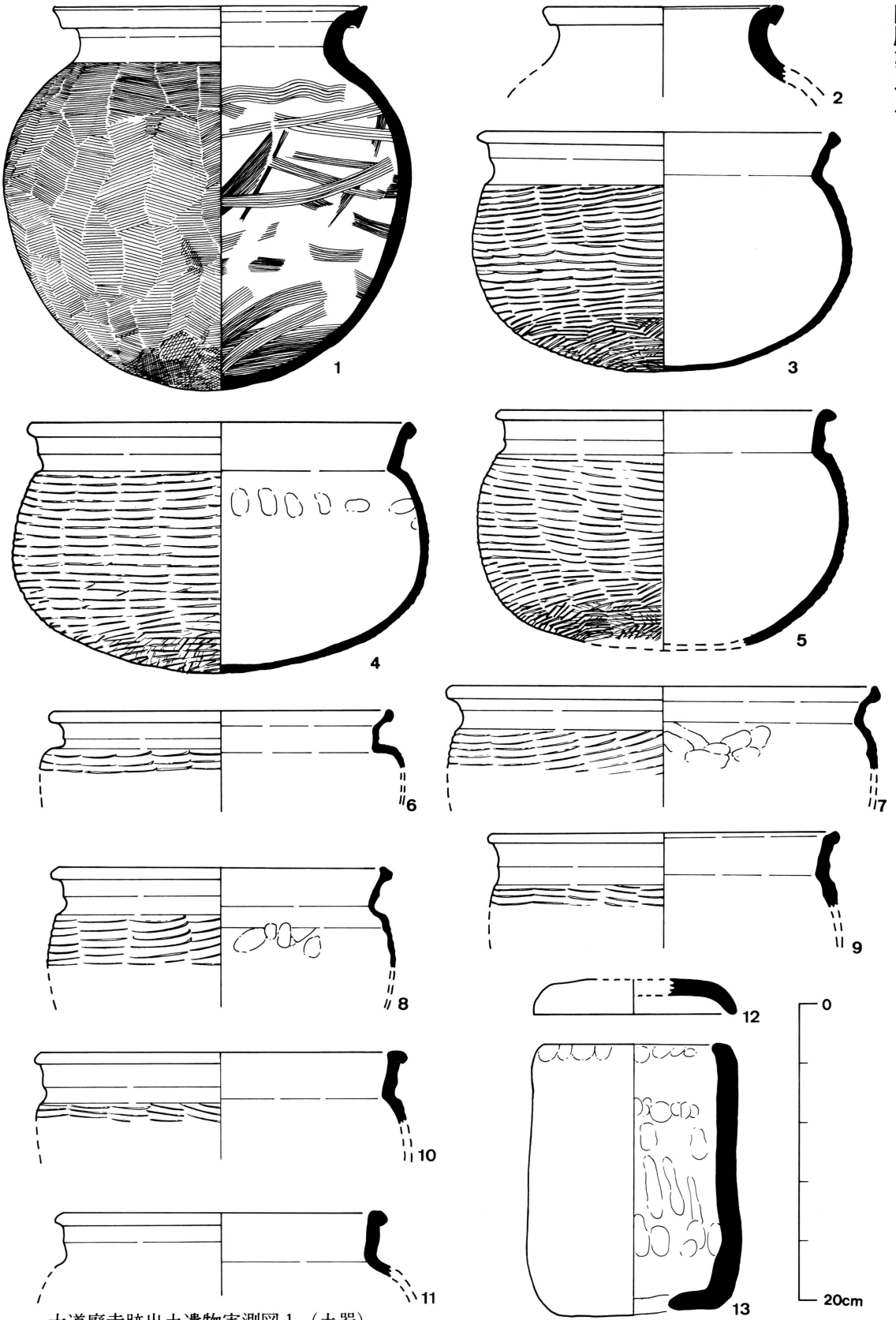
墳墓出土遺物実測図8 (鉄製品)



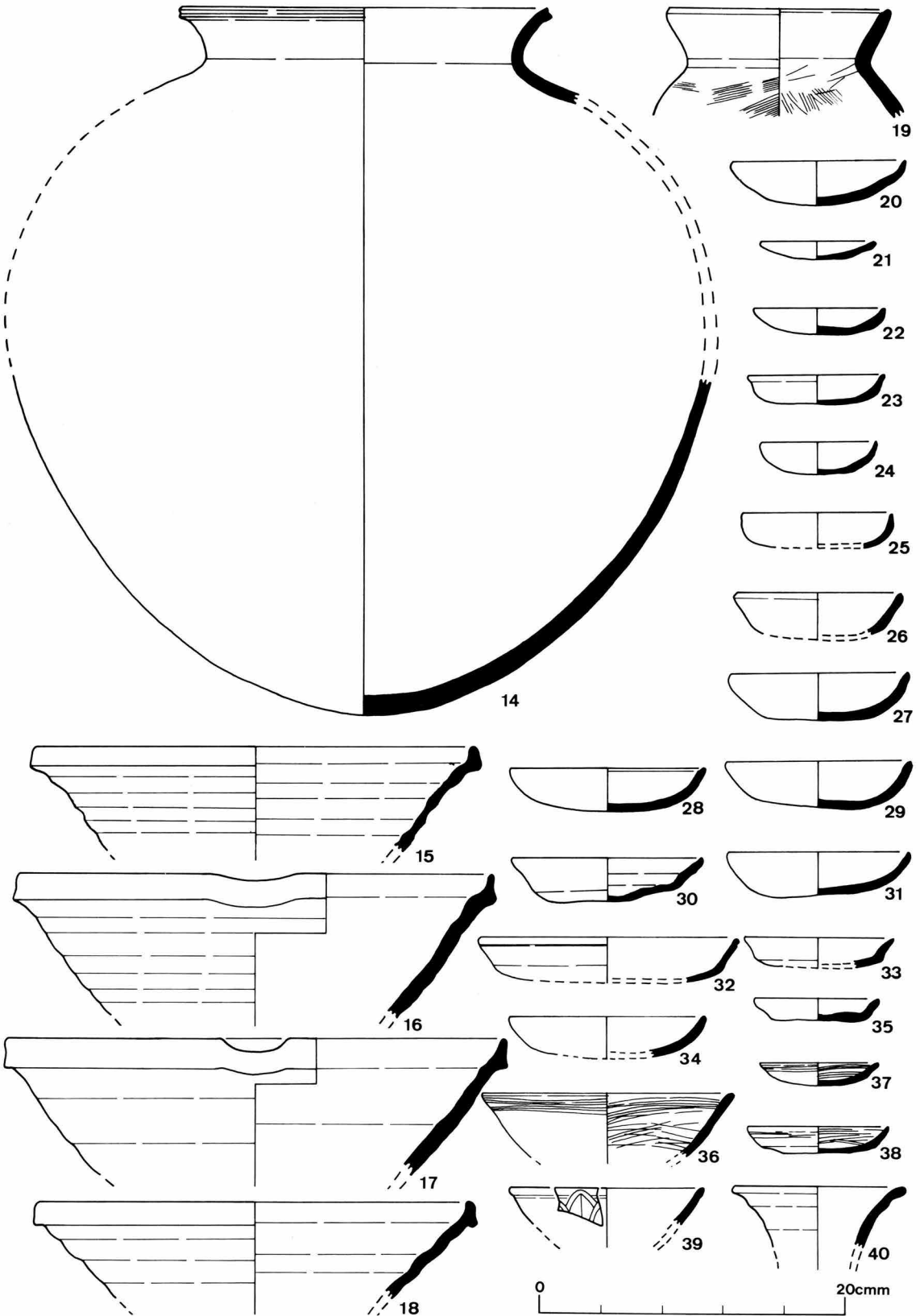
墳墓出土遺物実測図9 (鉄製品)



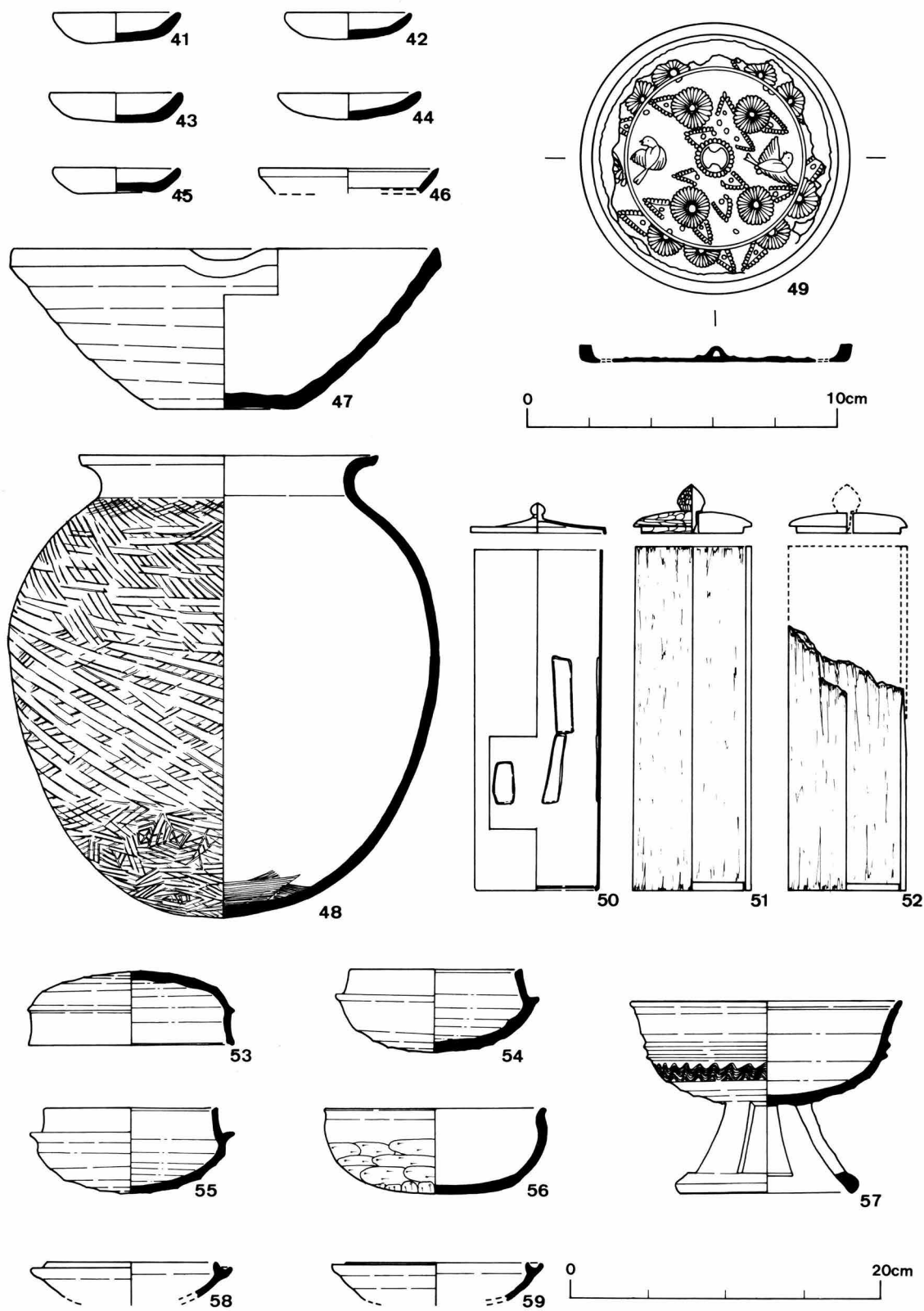
墳墓出土遺物実測図10 (鉄製品)



大道廃寺跡出土遺物実測図1 (土器)



大道廃寺跡出土遺物実測図2 (土器)



大道廃寺跡出土遺物実測図 (経塚・墳墓主体部出土)



(1) 西北からみた豊富谷丘陵



(2) 第I区 (TT1~5号墳, SG1・7・8号墳)



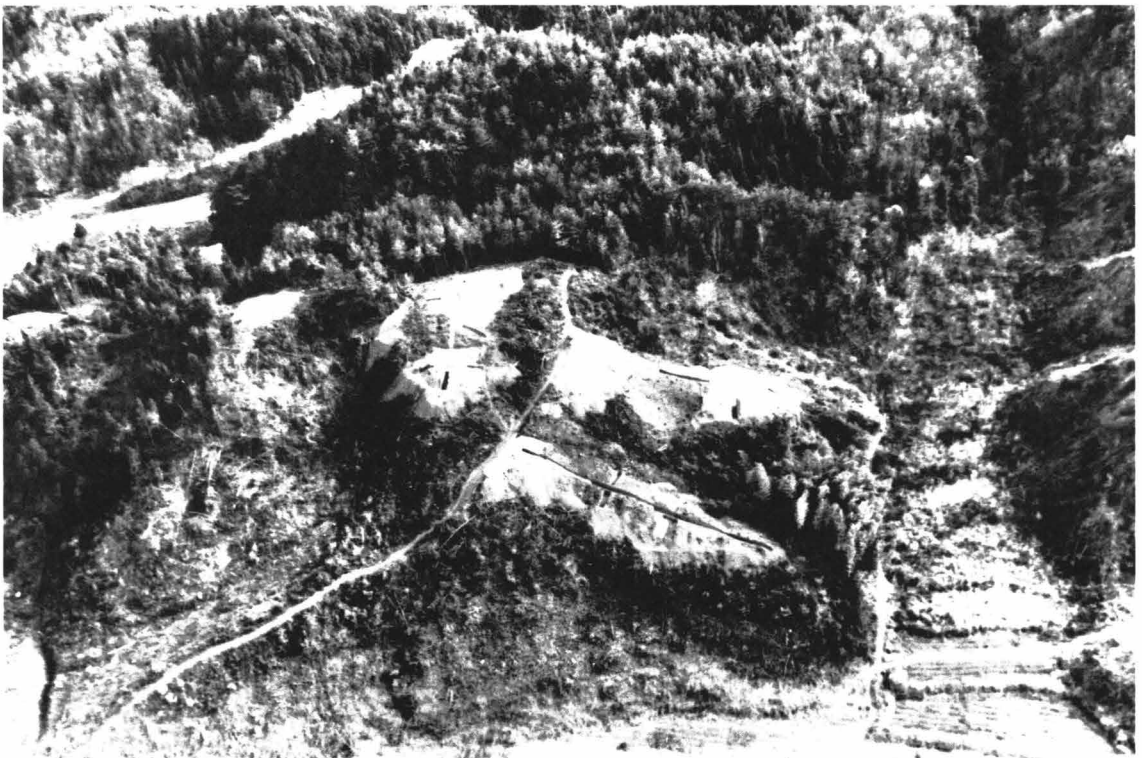
(1) 第Ⅱ区 (TD11・17・18号墳, TD-Ⅱ・Ⅲ地点)



(2) 第Ⅲ区 (RD2~7・9~12号墳, DD1・13・14号墳)



(1) 第Ⅳ区 (D D4・7・17～23号墳, 大道廃寺跡)



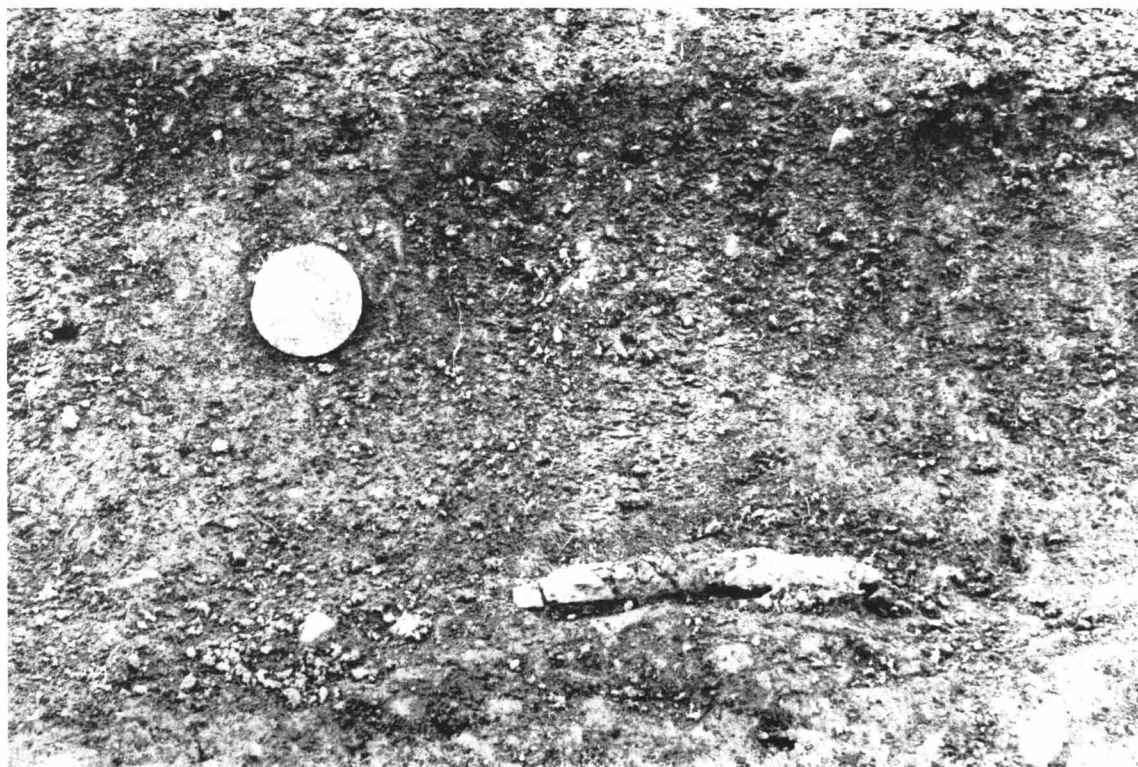
(2) 西北からみた第Ⅲ区 (R D6・7・11～13号墳, D D1・13・14号墳)



(1) T T 1 ~ 4 号墳調査前全景 (東南から)



(2) T T 1 号墳主体部全景 (北上から)



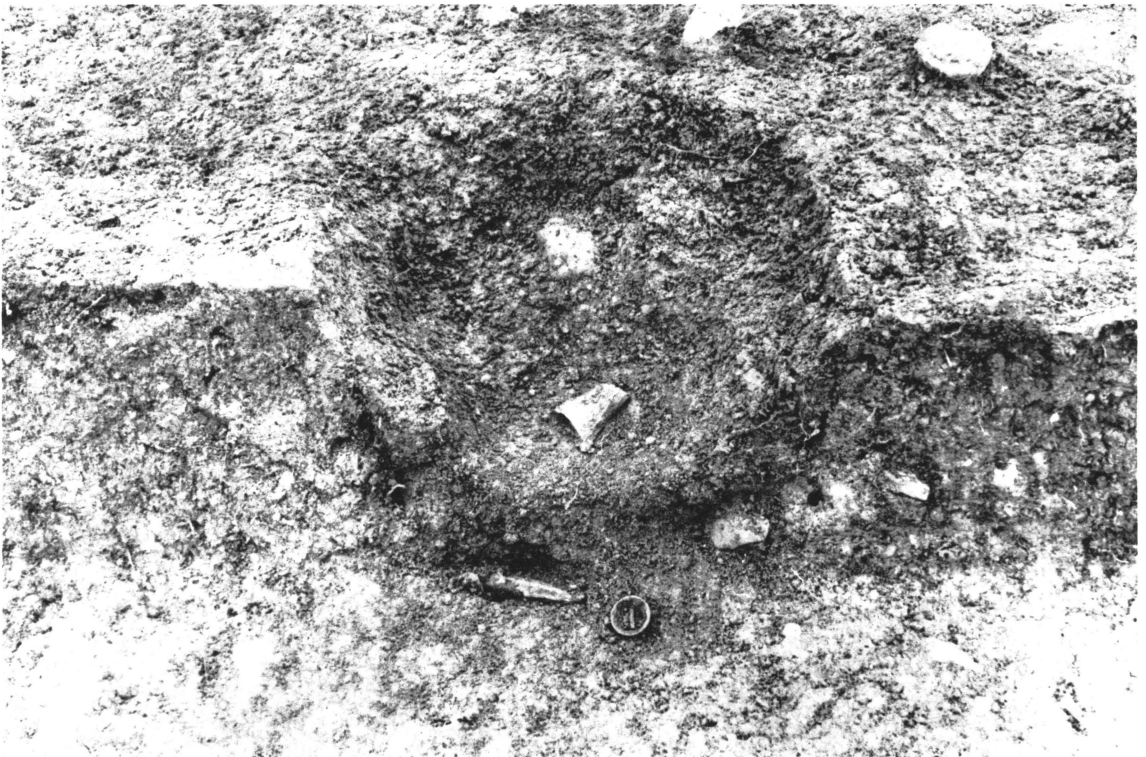
(1) TT 1 号墳第 1 主体部遺物出土状況 (北から)



(2) TT 1 号墳第 2 主体部遺物出土状況 (南から)



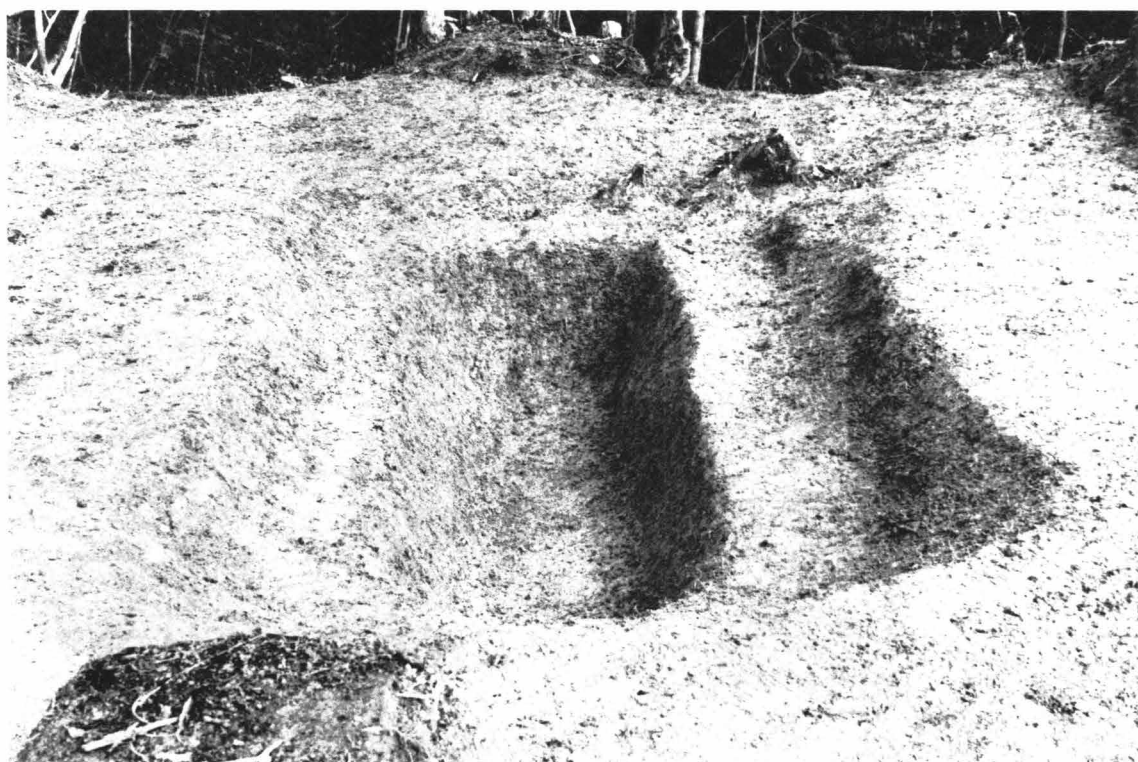
(1) TT 1号墳壺出土状況（南から）



(2) TT 1号墳中世墓遺物出土状況（西から）



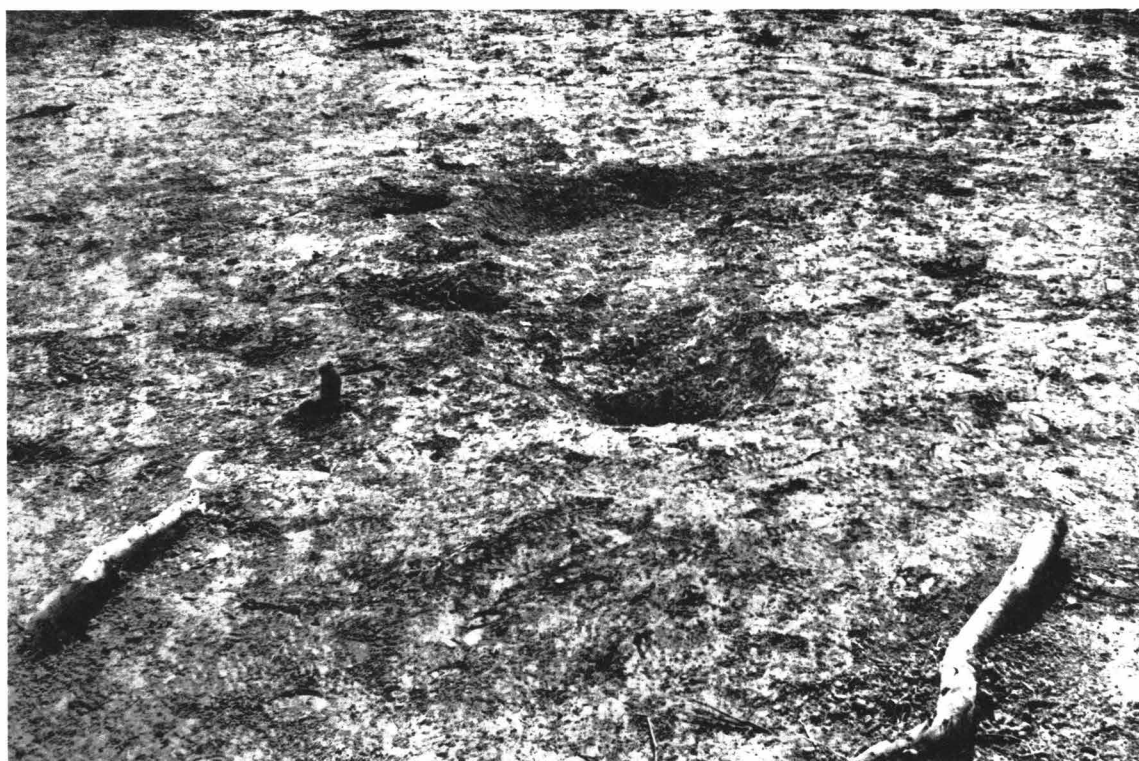
(1) TT3号墳(手前)・4号墳全景(西北から)



(2) TT3号墳主体部全景(西南から)



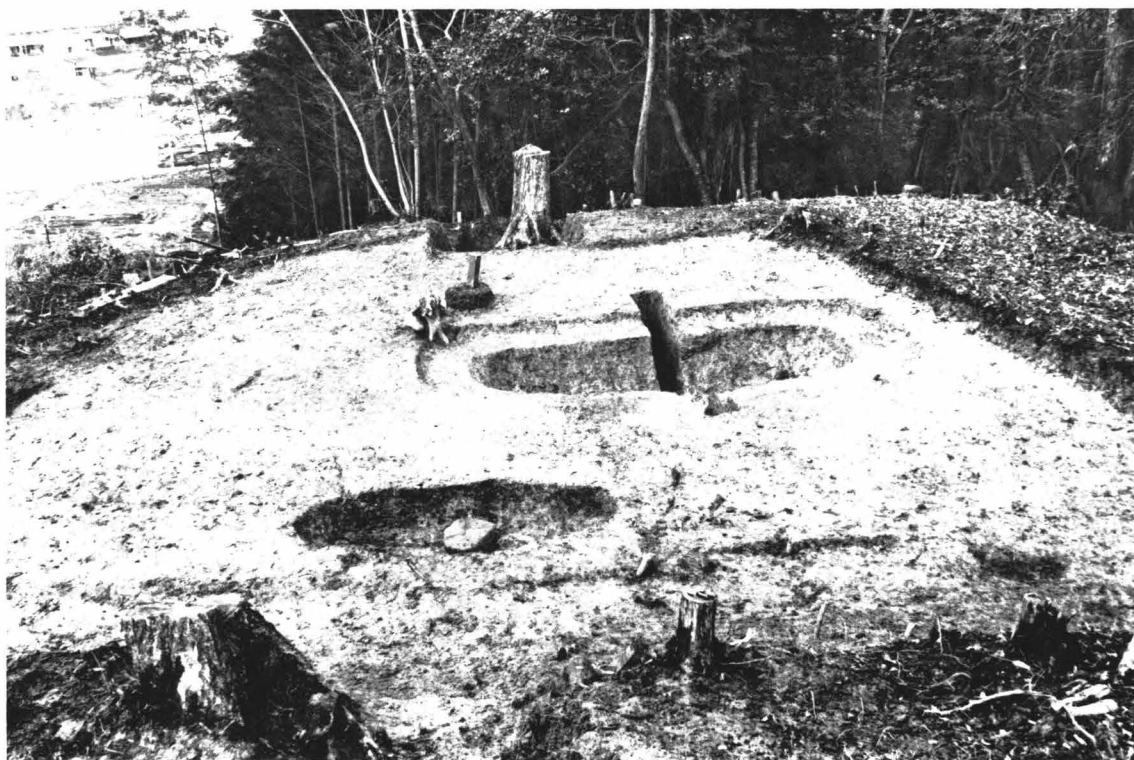
(1) T T 4号墳第1主体部全景(西から)



(2) T T 4号墳第2主体部全景(東北から)



(1) TT4号墳溝全景 (東北から)



(2) TT5号墳主体部全景 (西北から)



(1) SG1号墳主体部全景（西南から）



(2) SG8号墳主体部全景（北から）



(1) S G10号墳主体部全景（東から）



(2) S G18号墳調査前全景（北から）



(1) S G 18号墳主体部全景（西南から）



(2) S G 22号墳主体部全景（西から）



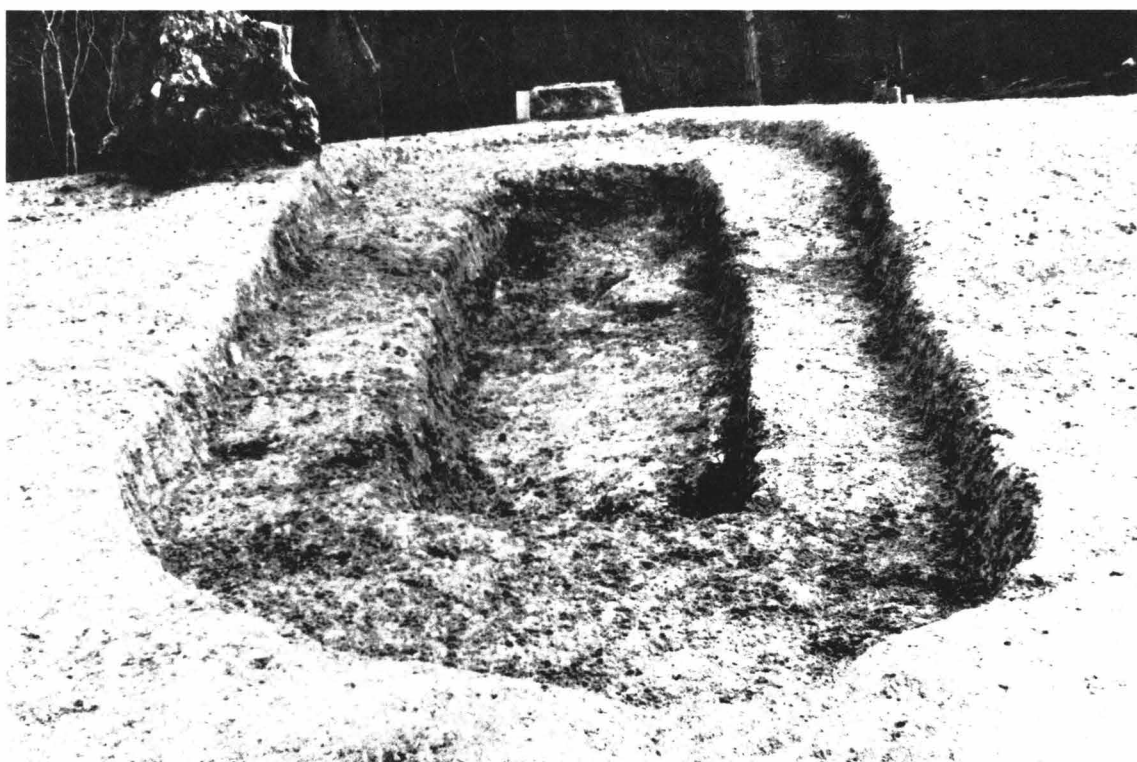
(1) MY 7号墳調査前全景（北から）



(2) MY 7号墳主体部全景（西北から）



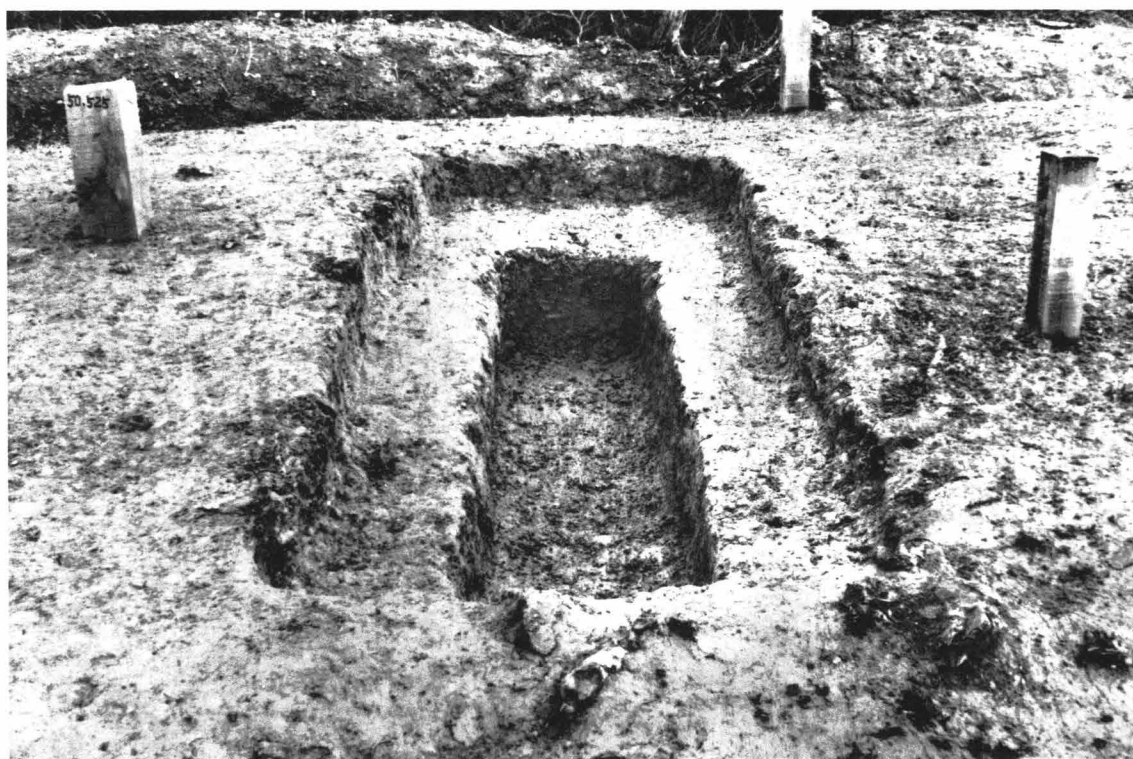
(1) MY 7号墳・TD 1号墳全景 (西から)



(2) TD 1号墳主体部全景 (西北から)



(1) TD 2号墳全景（東から）



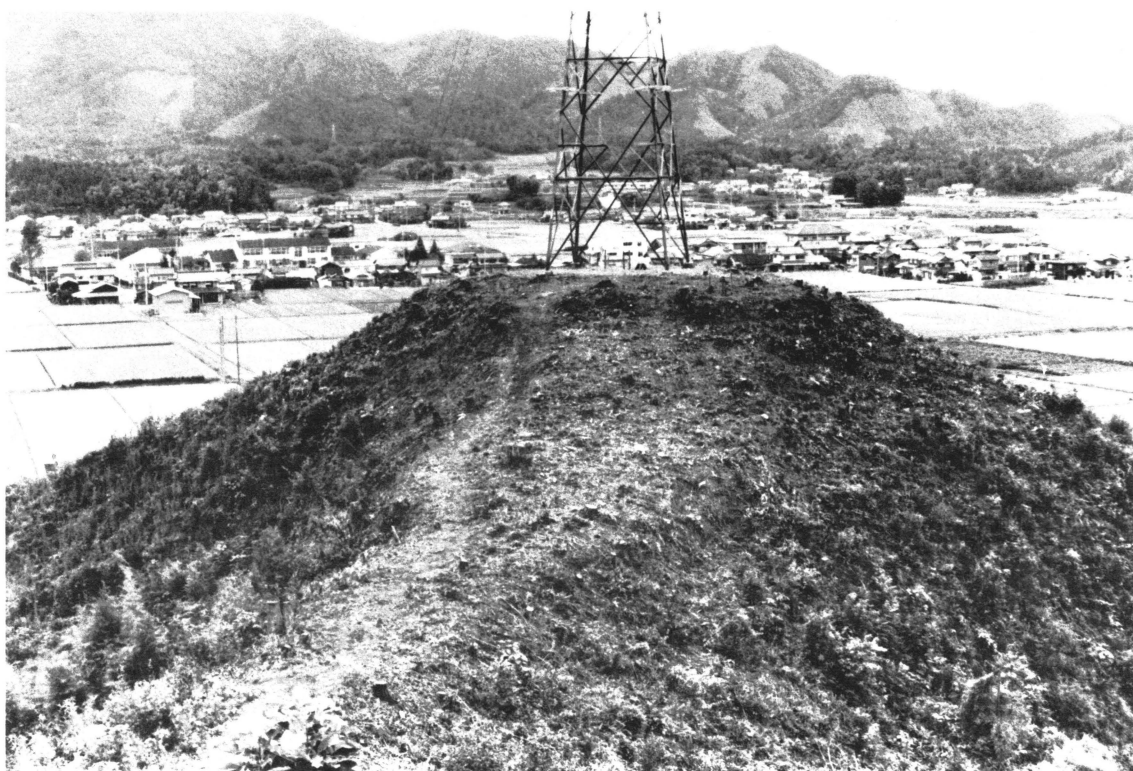
(2) TD 2号墳第2主体部全景（西から）



(1) TD 3号墳主体部全景（西南から）



(2) TD 3号墳第3主体部全景（東北から）



(1) TD-I 地点調査前全景 (南から)



(2) TD-I 地点第1・2主体部全景 (西から)



(1) TD16号墳全景（東南から）



(2) TD16号墳主体部全景（西北から）



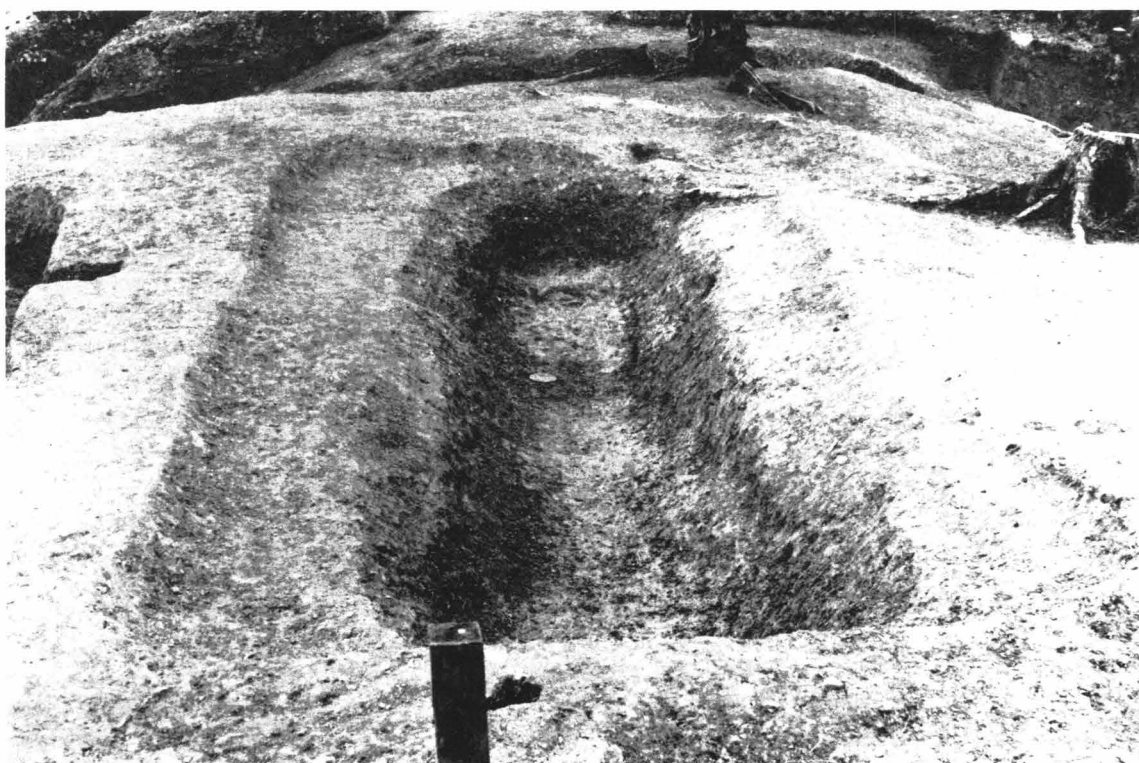
(1) TD17号墳第1主体部全景（西南から）



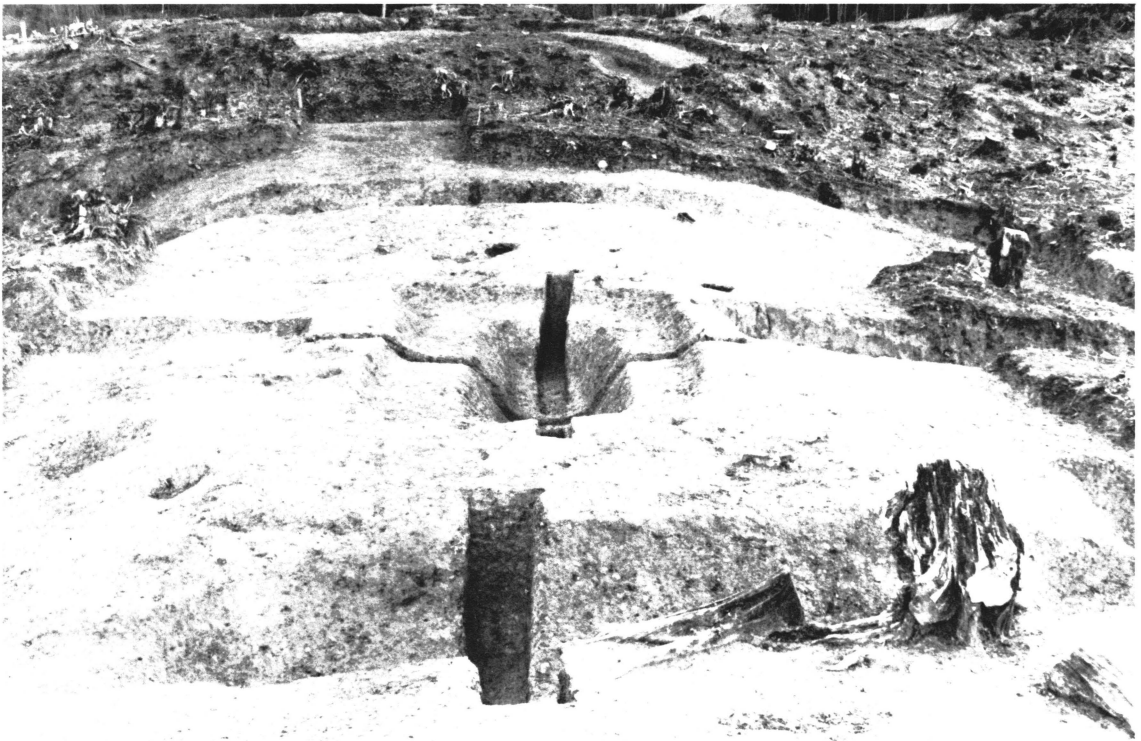
(2) TD17号墳第2主体部全景（西南から）



(1) TD17号墳第2主体部土師器及び鏡片出土状況(西北から)



(2) TD17号墳第2主体部全景(西南から)



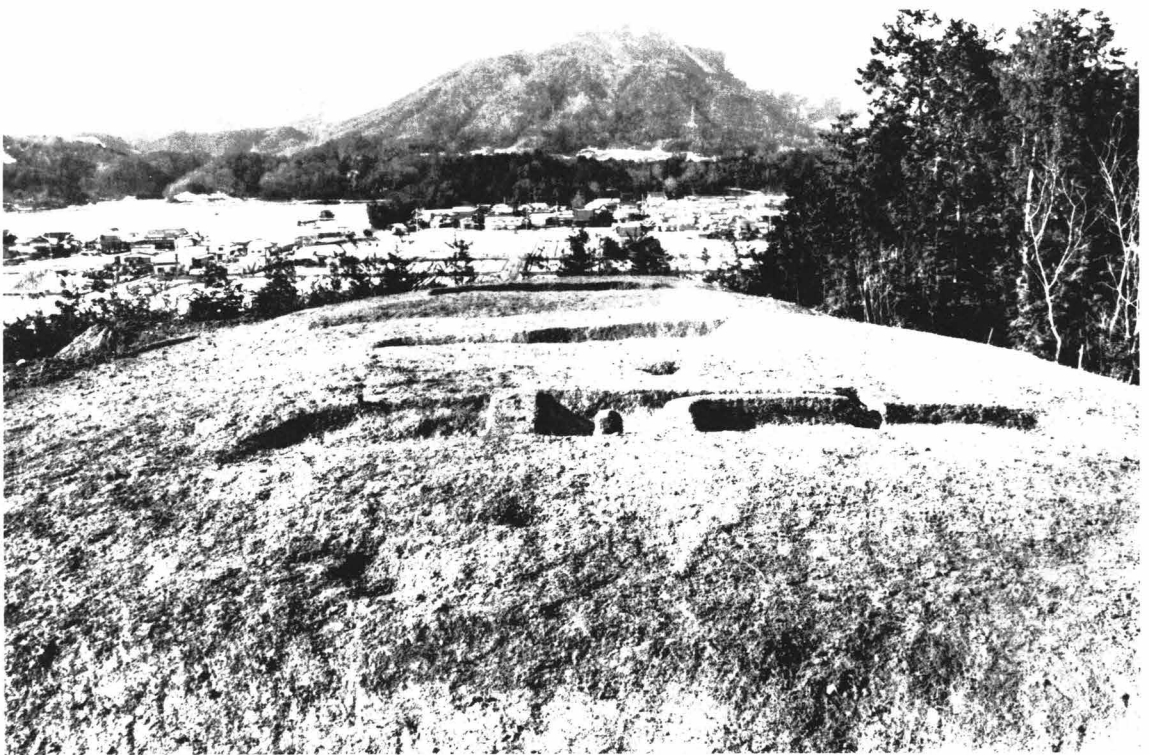
(1) TD18号墳主体部全景（西から）



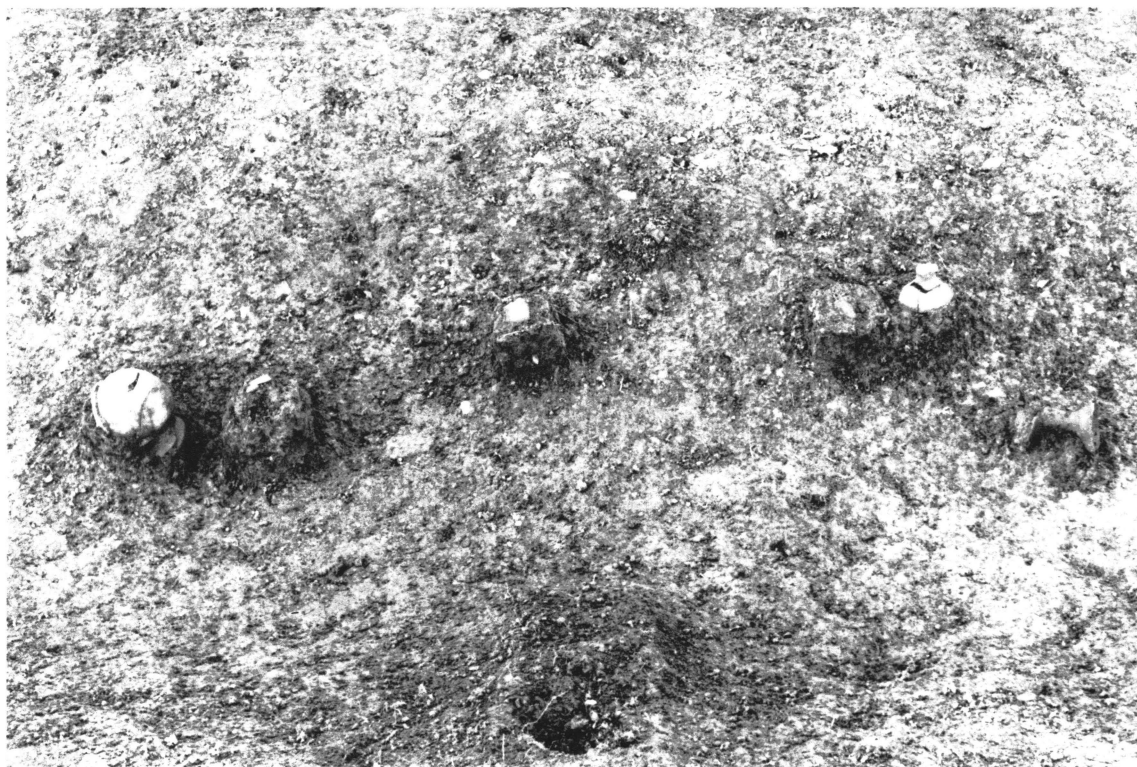
(2) TD18号墳主体部遺物出土状況（北から）



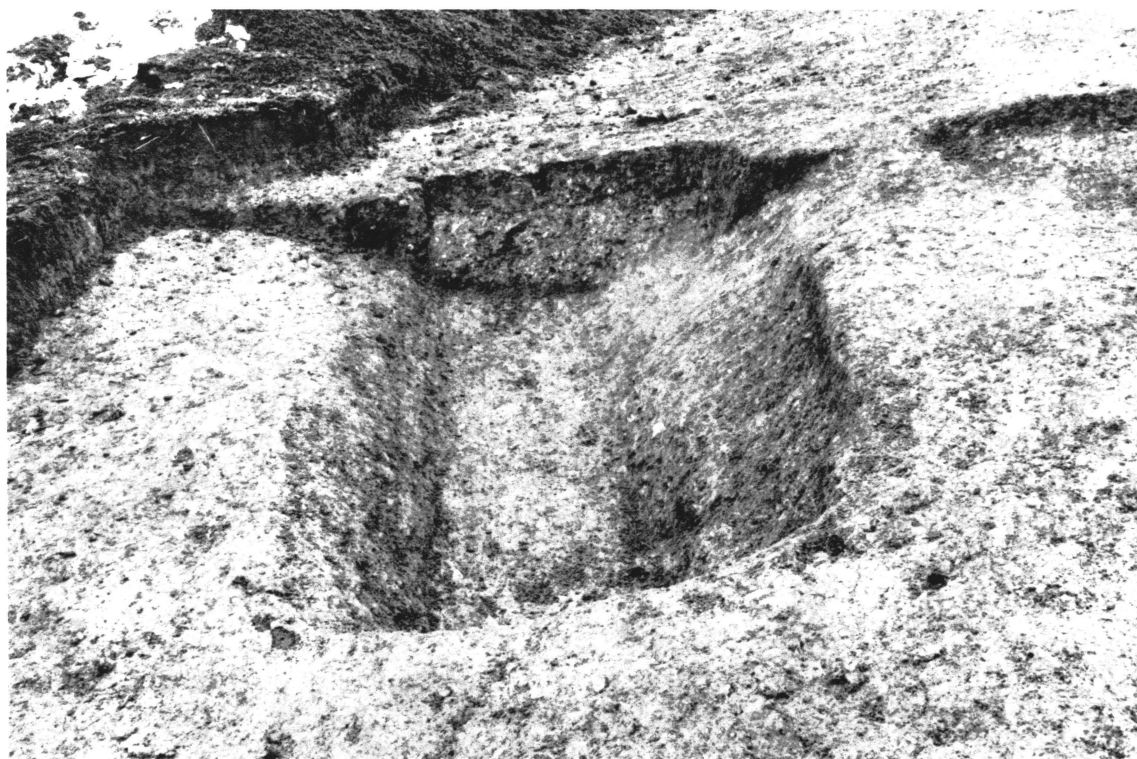
(1) RD 2・9・10号墳遠景（西南から）



(2) RD 2号墳全景（東南から）



(1) RD 2号墳北溝内遺物出土状況（東南から）



(2) RD 2号墳第4主体部全景（西北から）



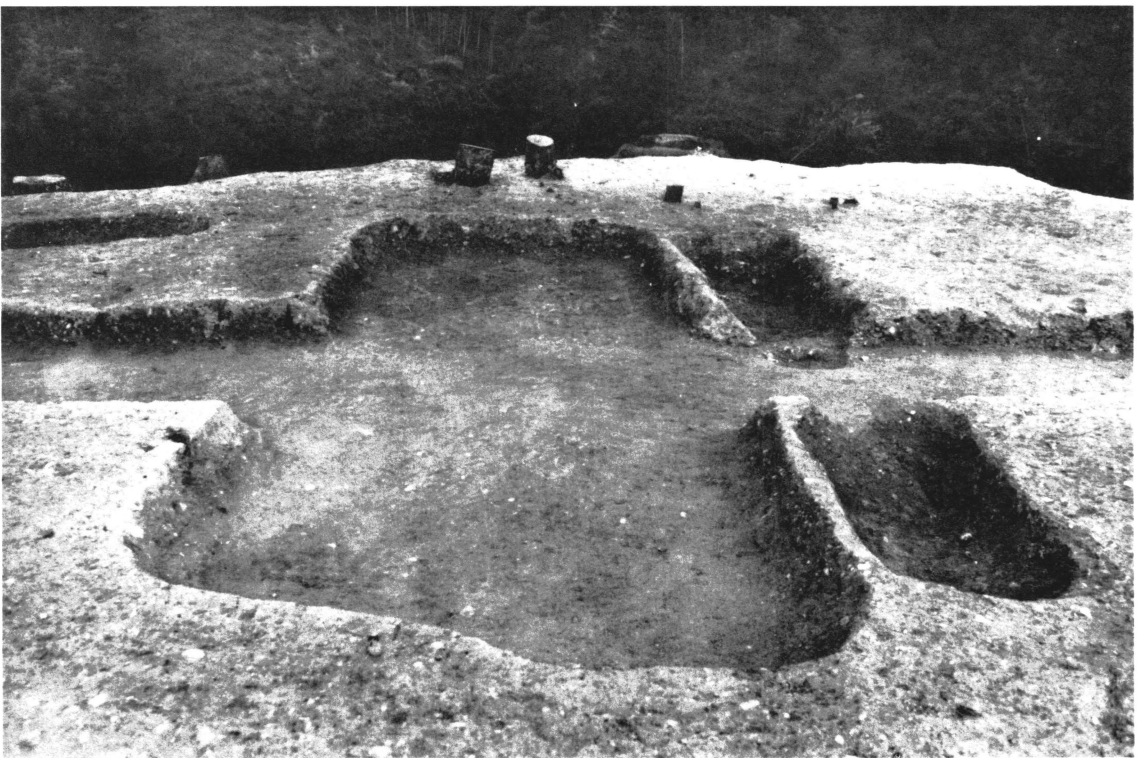
(1) RD 9号墳全景（東南から）



(2) RD 9号墳主体部全景（東北から）



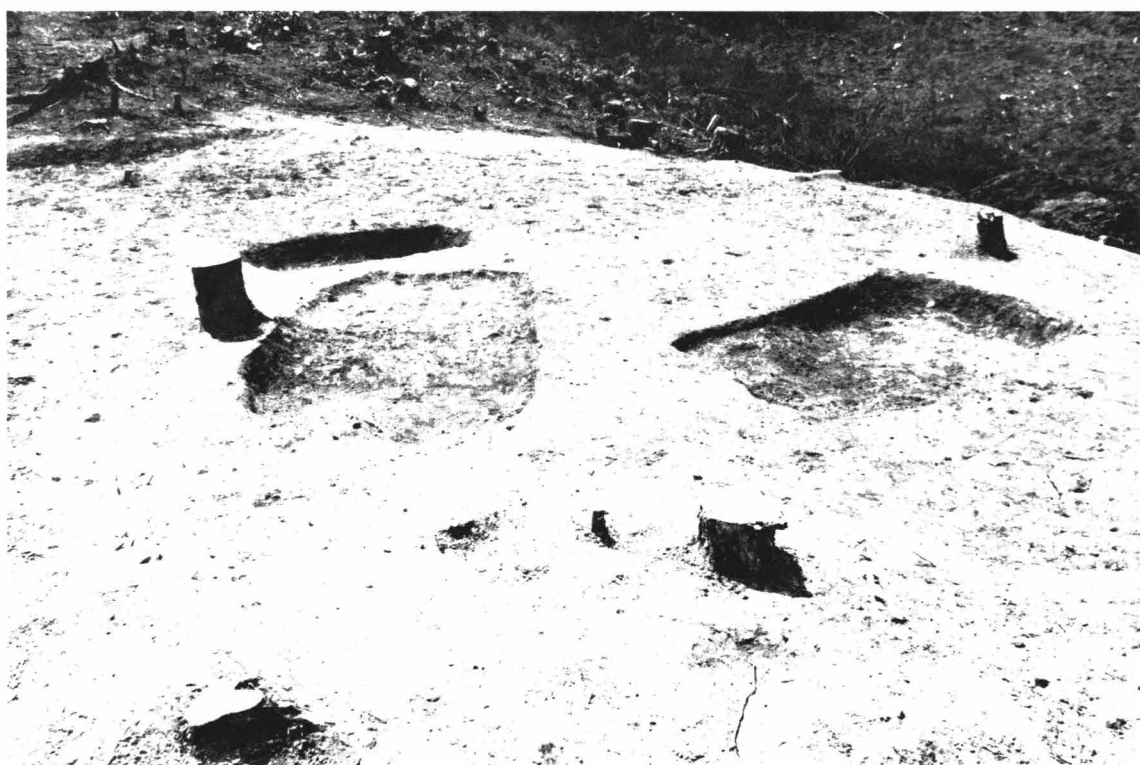
(1) RD3号墳・4号墳(中央)調査前全景(南から)



(2) RD3号墳主体部全景(西から)



(1) RD 3号墳・4号墳(中央)全景 (東南から)



(2) RD 4号墳主体部全景 (北から)



(1) RD 5号墳遠景（東南から）



(2) RD 5号墳第1主体部全景（西から）



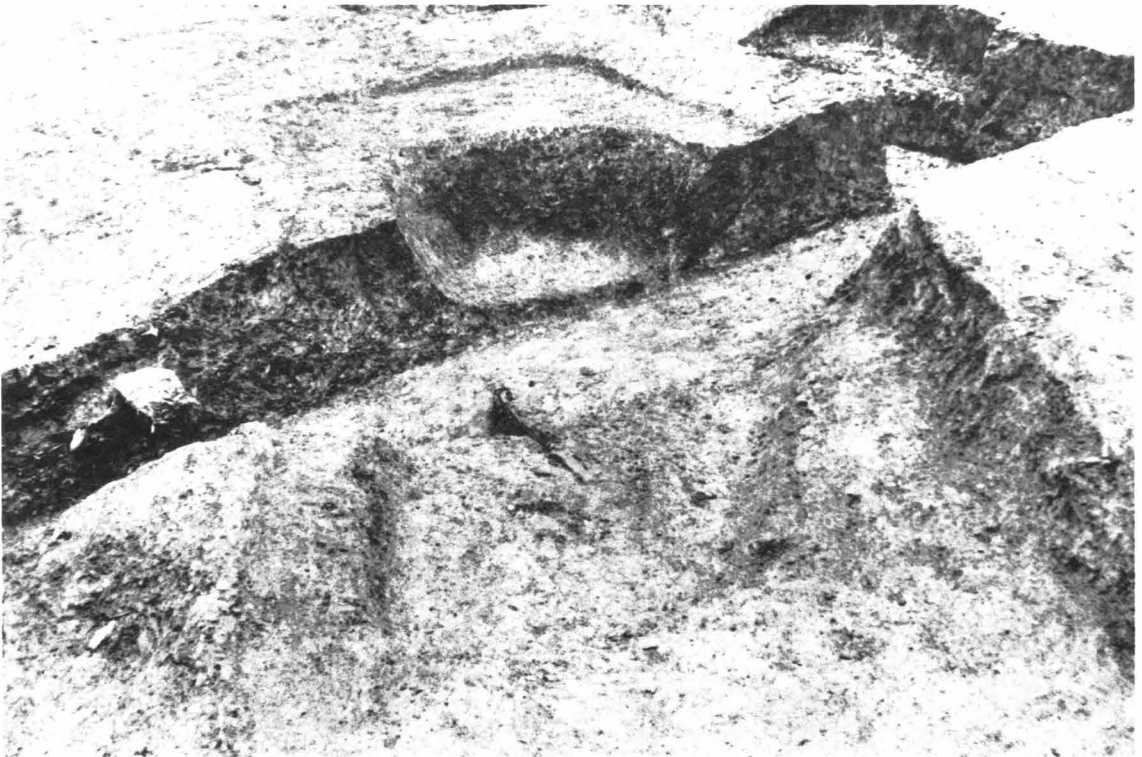
(1) RD 6号墳調査前全景（北から）



(2) RD 6号墳主体部全景（西から）



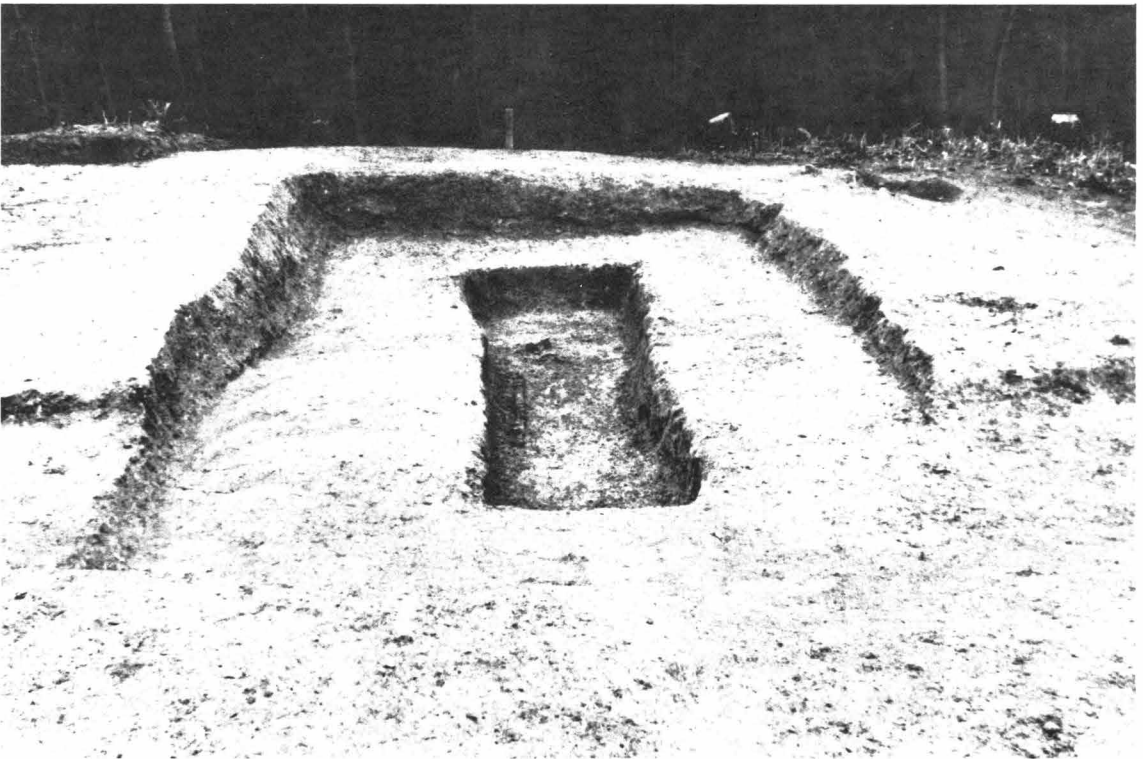
(1) RD 7号墳調査前全景（南から）



(2) RD 7号墳主体部全景（東から）



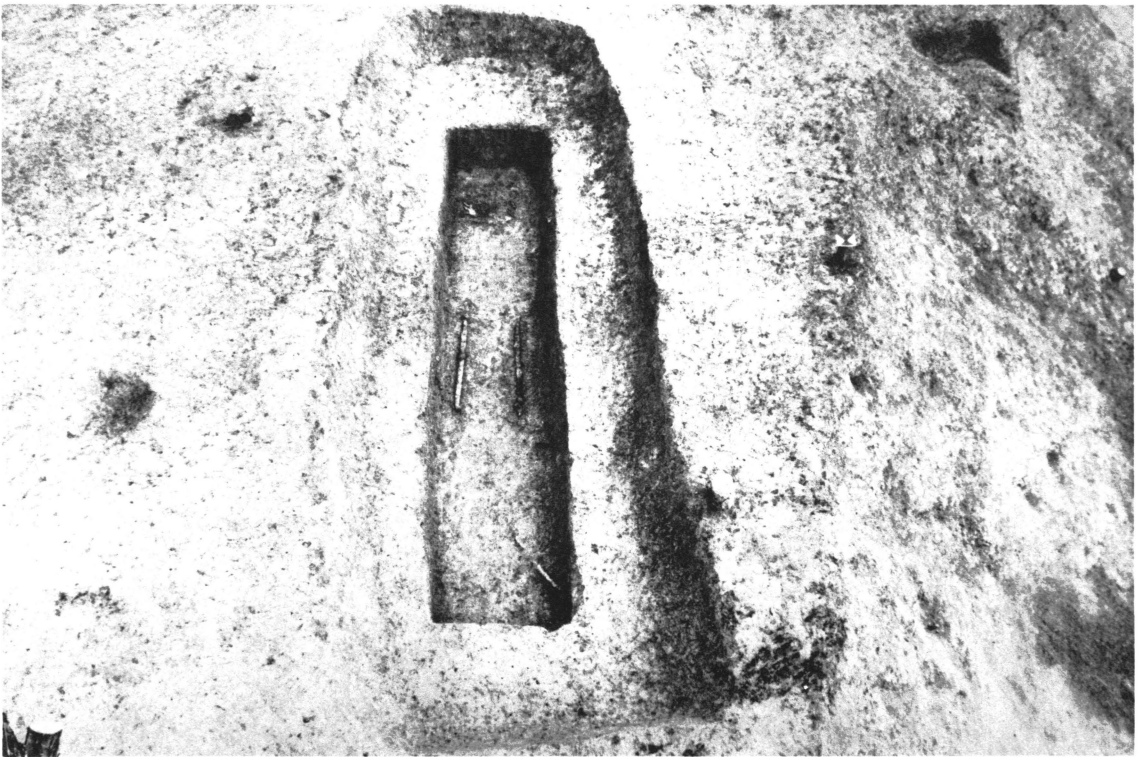
(1) RD13号墳全景（西から）



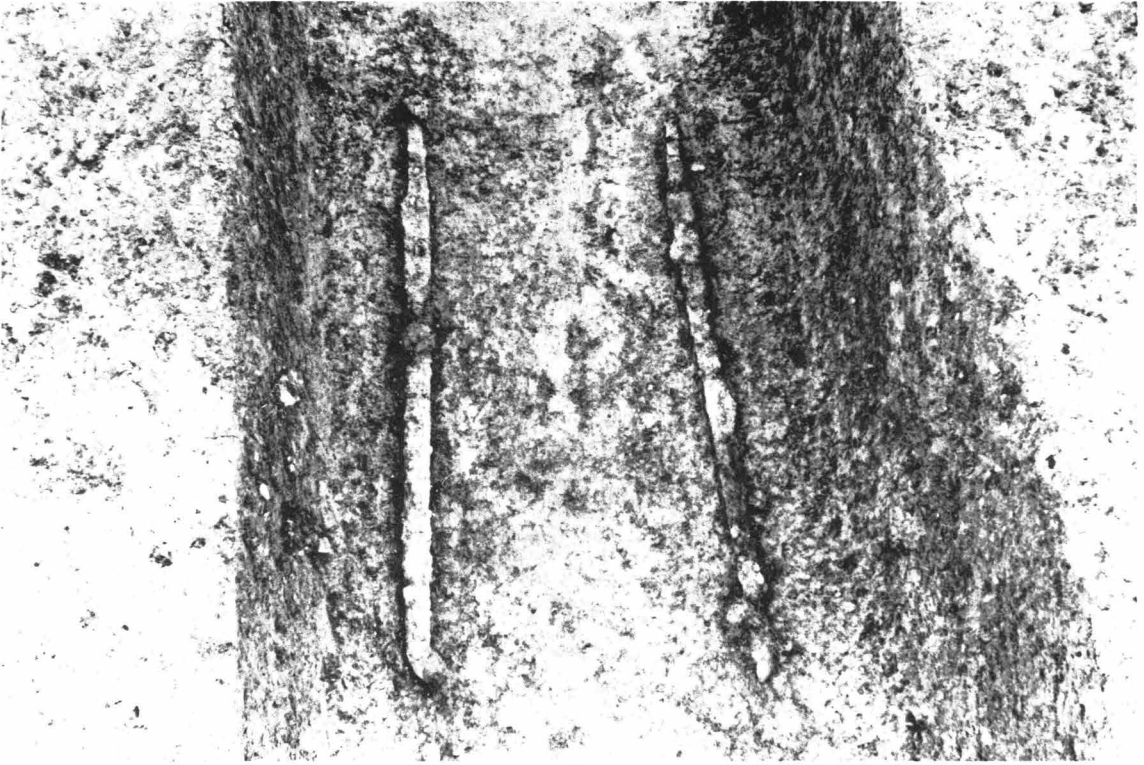
(2) RD13号墳主体部全景（西北から）



(1) RD11号墳調査前全景（東北から）



(2) RD11号墳第1主体部全景（西北から）



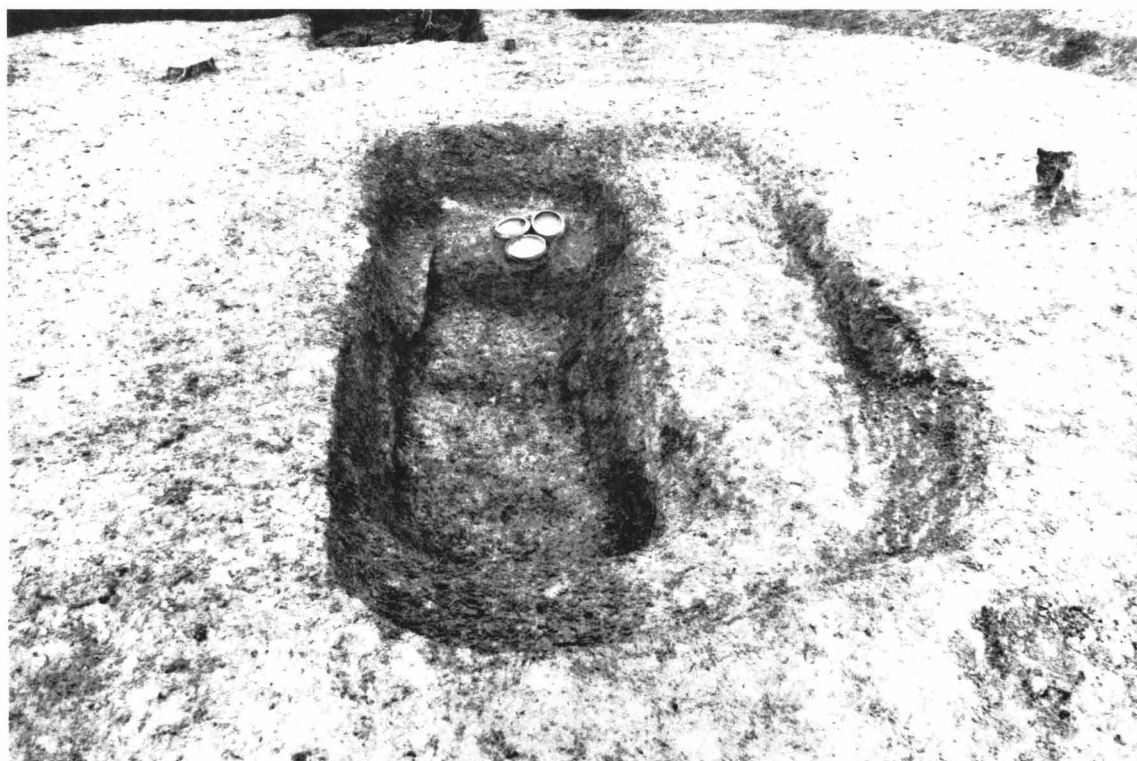
(1) RD11号墳第1主体部刀出土状況(西北から)



(2) RD11号墳第2主体部全景(東南から)



(1) RD12号墳調査前全景（東北から）



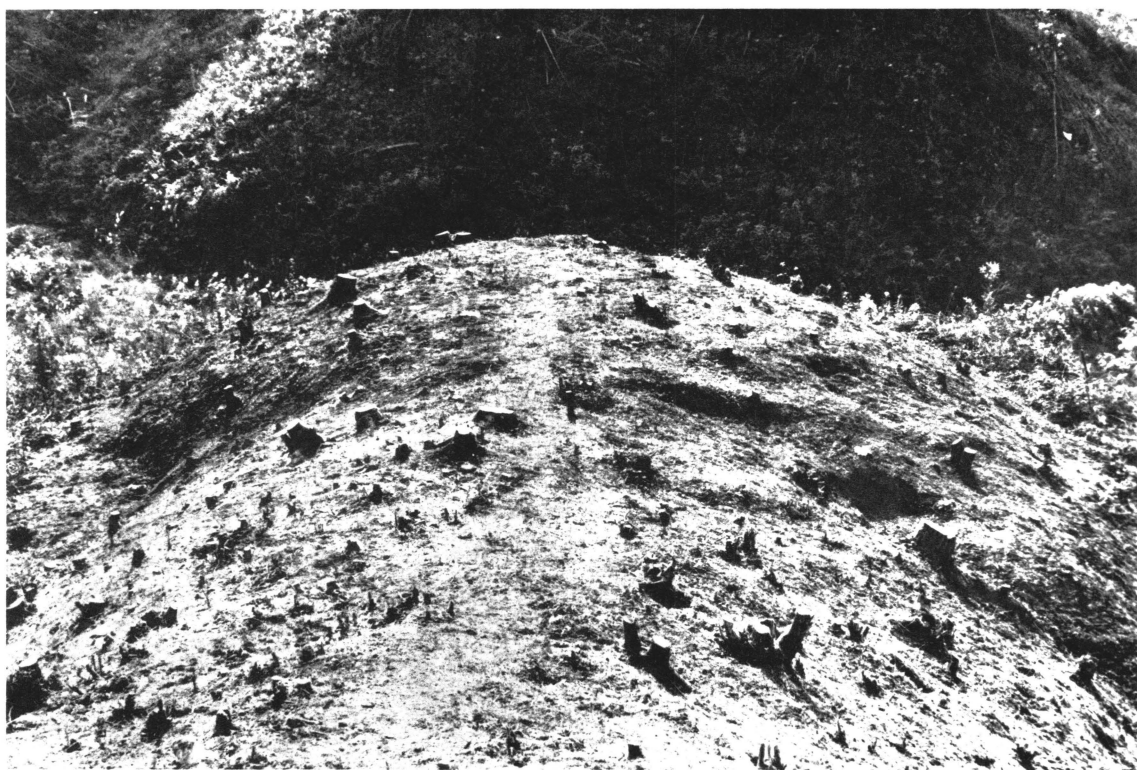
(2) RD12号墳主体部全景（西南から）



(1) DD1号墳調査前全景（東南から）



(2) DD1号墳主体部全景（東南から）



(1) DD13号墳調査前全景（東北から）



(2) DD13号墳全景（東北から）



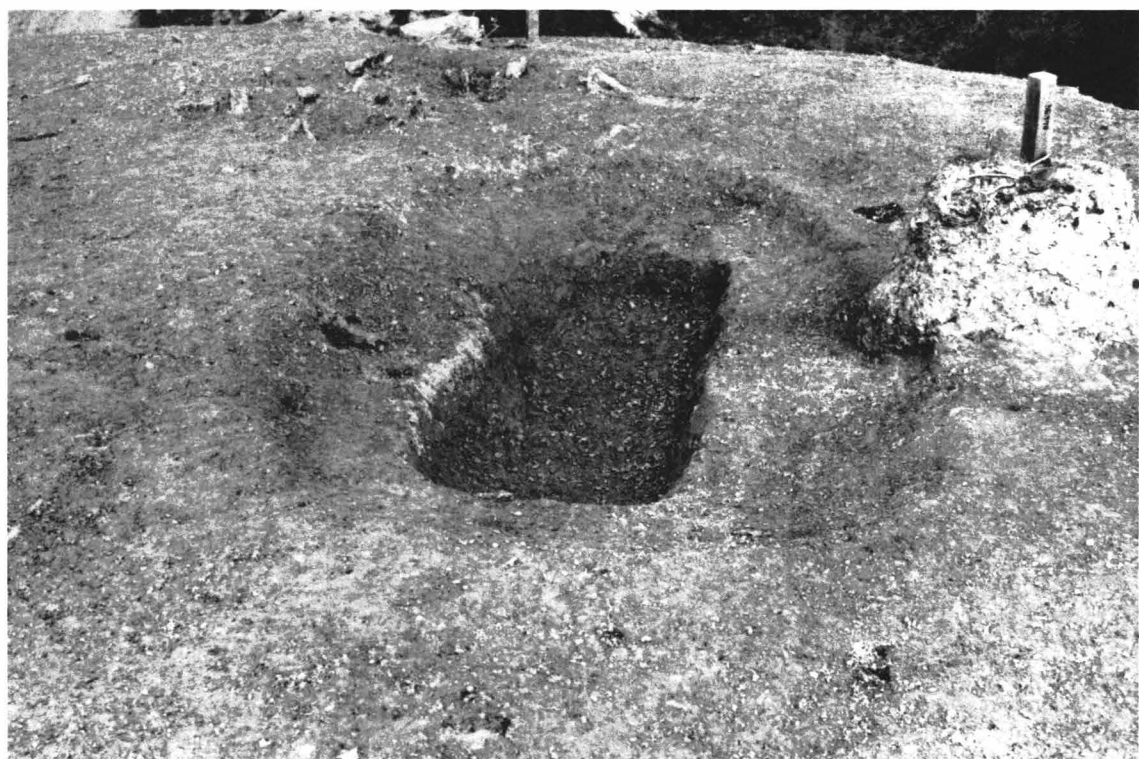
(1) DD14号墳主体部全景（東から）



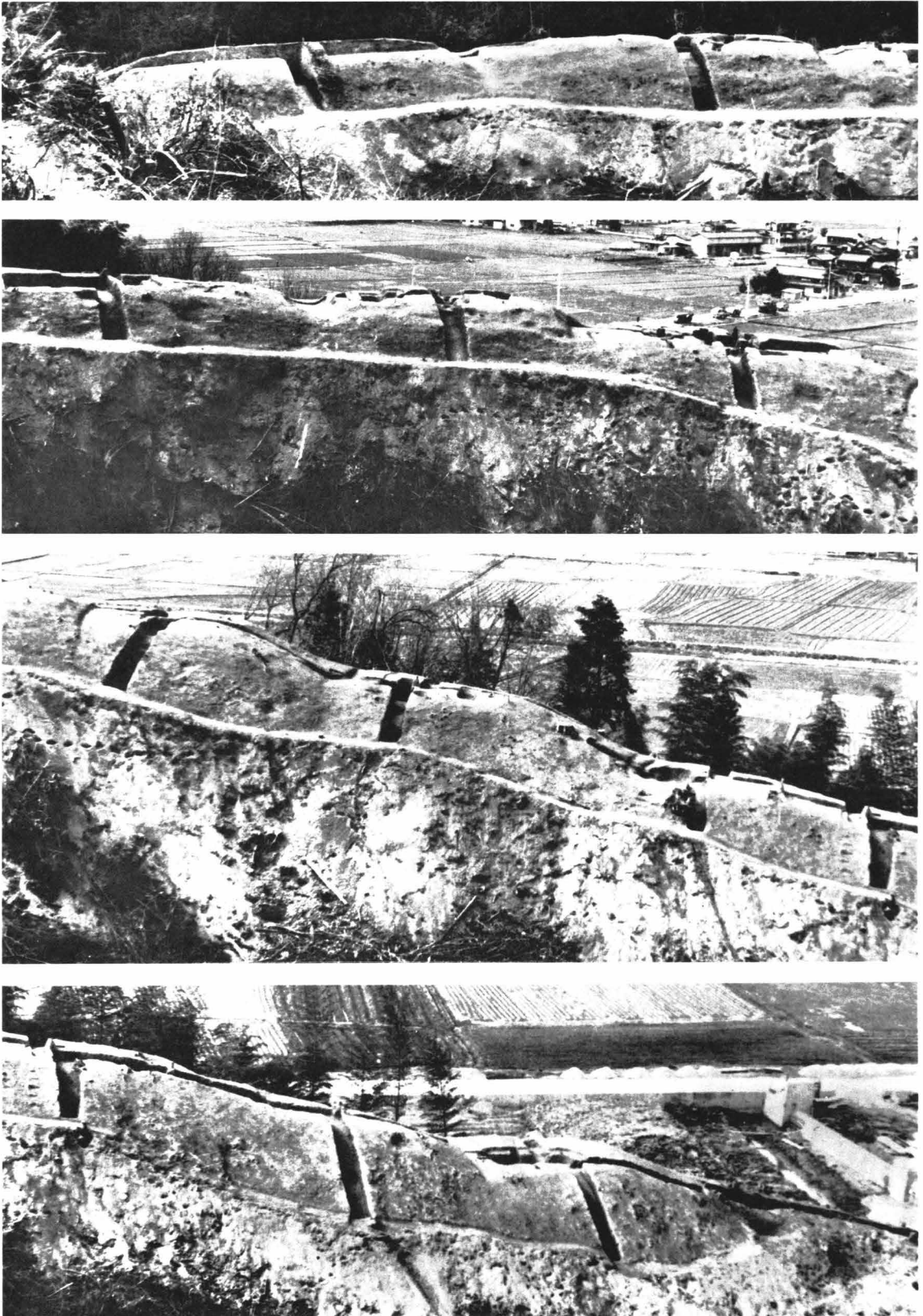
(2) DD17号墳(手前)・18号墳全景（南から）



(1) DD17号墳中世墓(蔵骨器)出土状況(東から)



(2) DD18号墳主体部全景(西から)



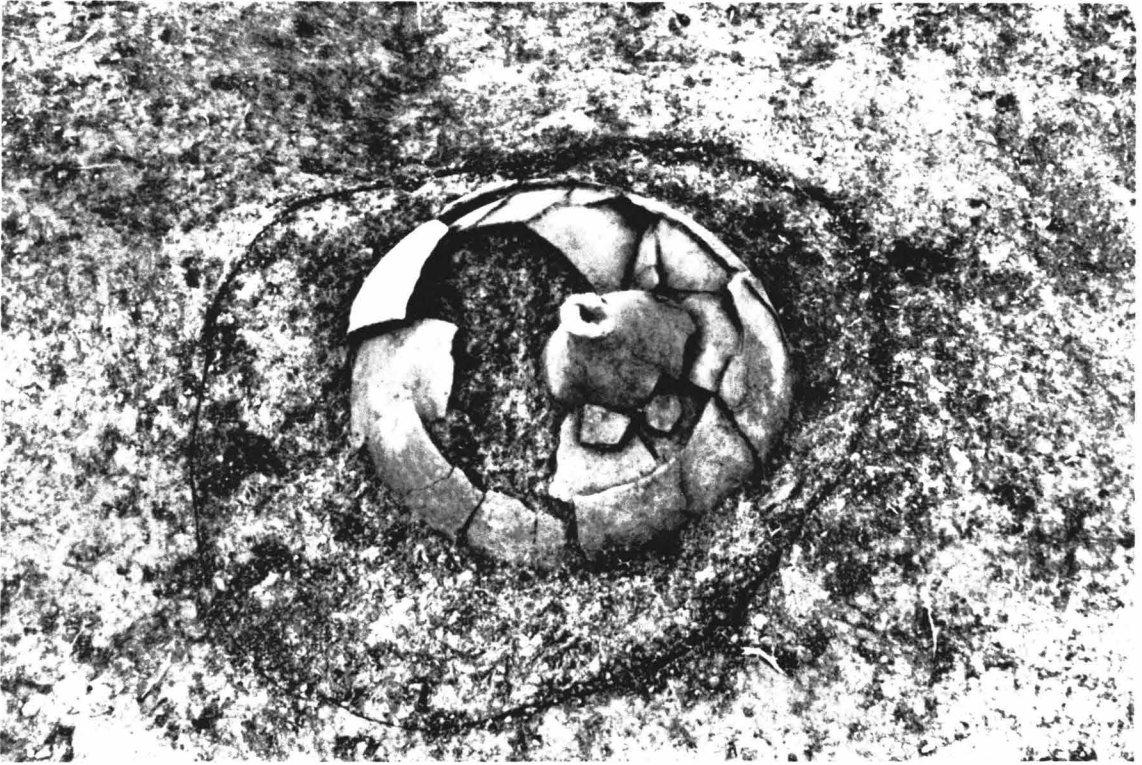
第Ⅳ区南尾根遠景（東から）



(1) DD7号墳全景（南から）



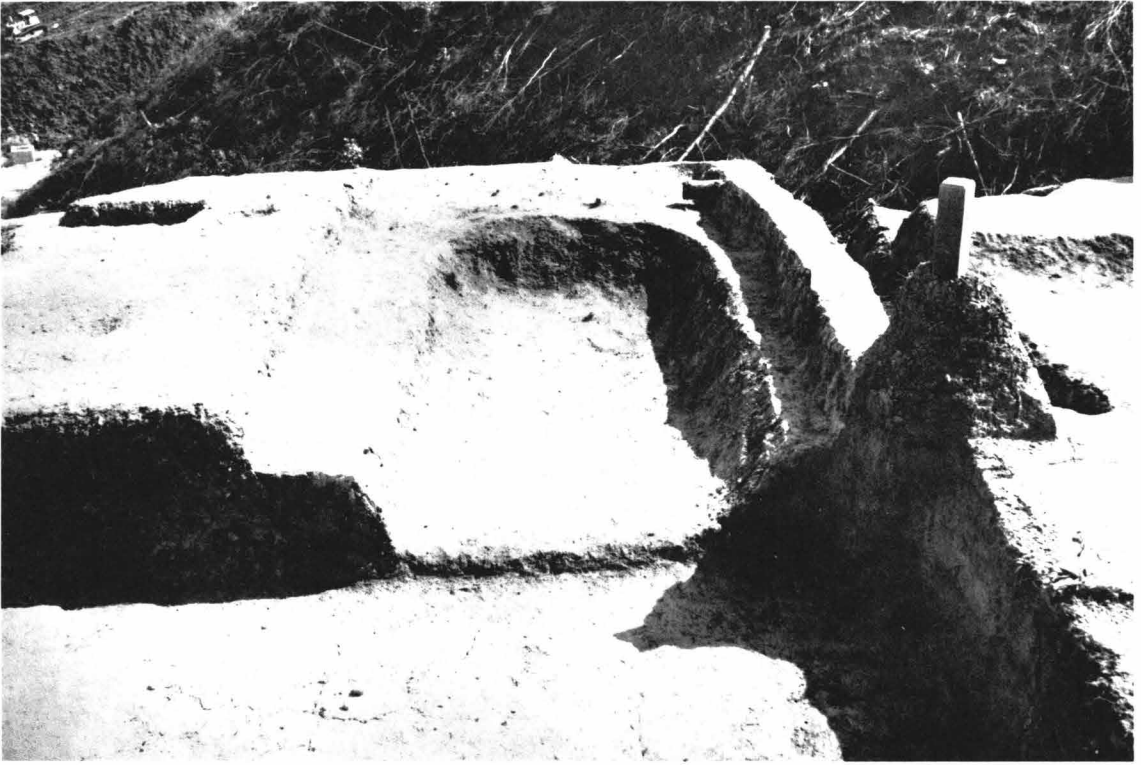
(2) DD6号墳主体部全景（北から）



(1) DD6号墳壺棺出土状況(南から)



(2) DD6号墳第3主体部及び土壇全景(東から)



(1) DD6号墳第5主体部全景(西から)



(2) DD6号墳第6主体部全景(東から)



(1) DD5号墳全景（北から）



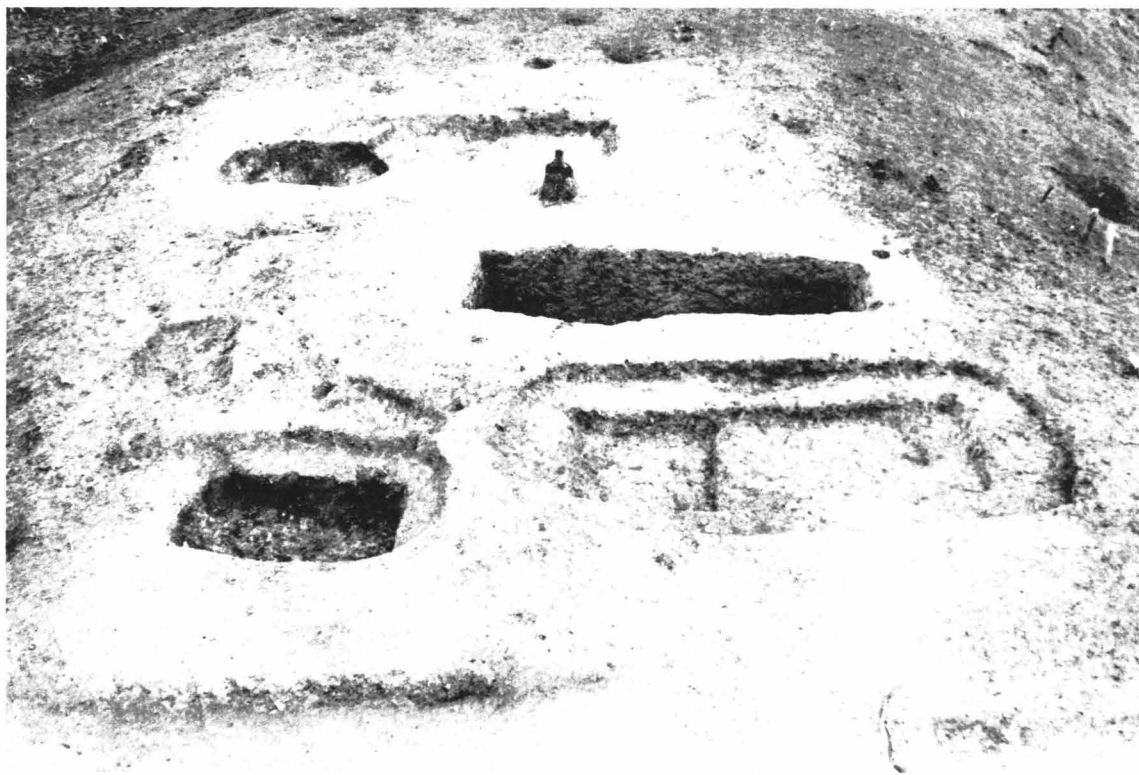
(2) DD5号墳第2主体部全景（東から）



(1) DD5号墳第4主体部全景(西から)



(2) DD5号墳第4主体部遺物出土状況(北から)



(1) DD4号墳全景（南から）



(2) DD4号墳第8主体部全景（北から）



(1) DD20号墳主体部全景（東から）



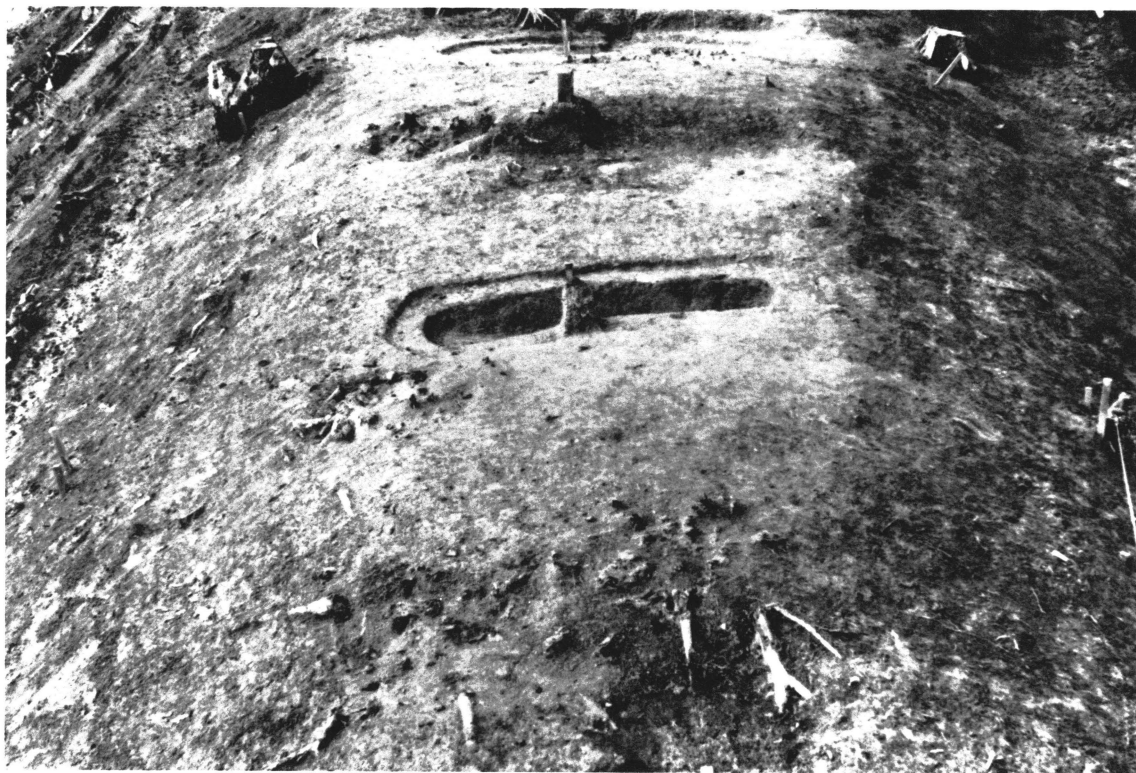
(2) DD21号墳全景（西南から）



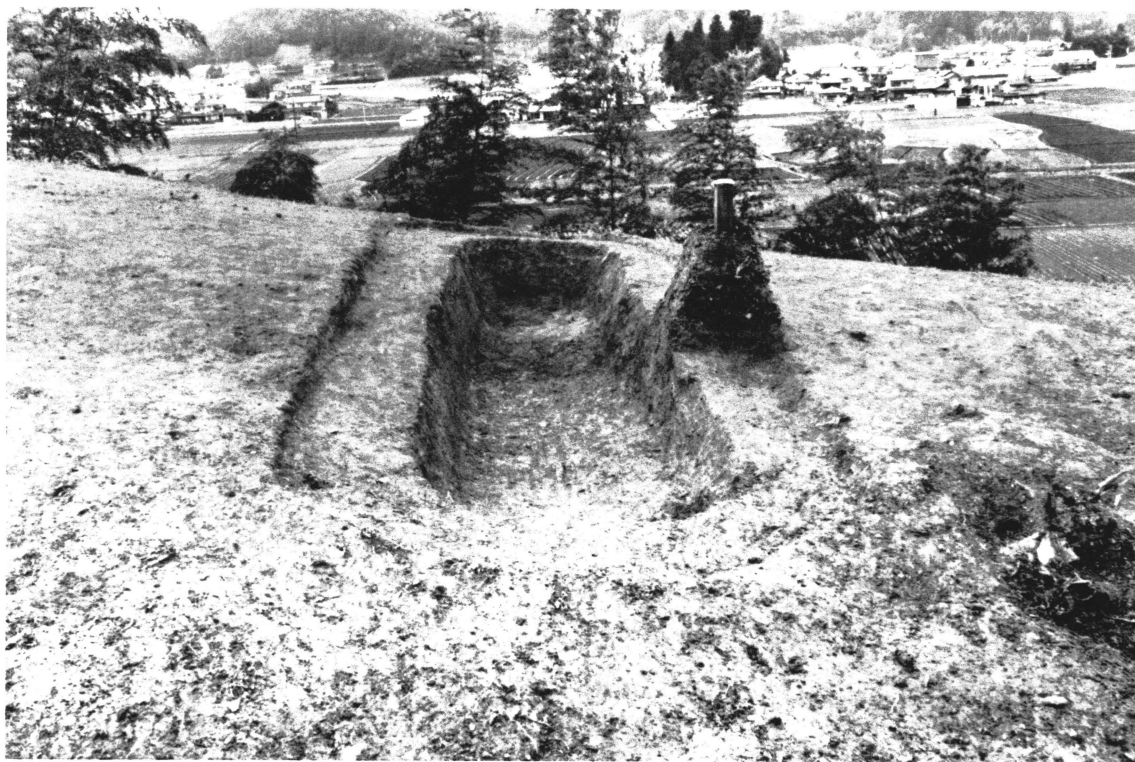
(1) DD21号墳第1主体部全景（東南から）



(2) DD22号墳第1主体部全景（東南から）



(1) DD22号墳第2主体部全景（東北から）



(2) DD22号墳第2主体部全景（東南から）



(1) TD-II地点調査前全景(西から)



(2) TD-II地点トレンチ全景(西南から)



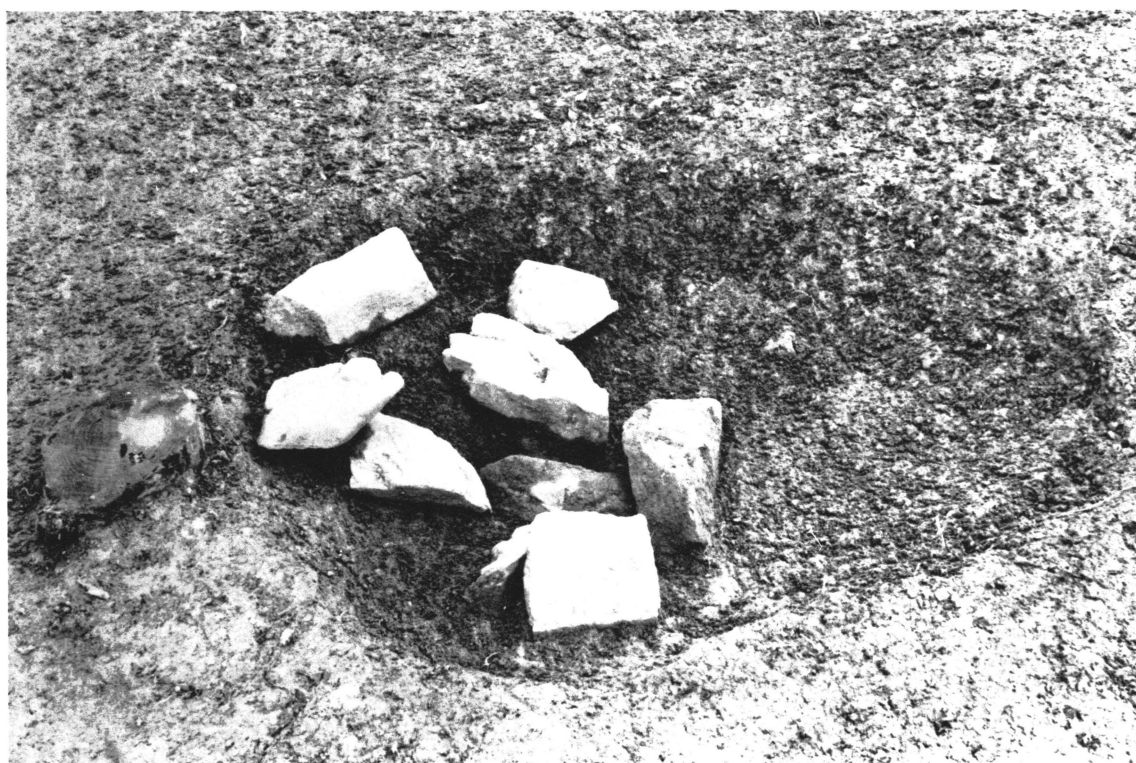
(1) TD-Ⅲ地点調査前全景（南から）



(2) TD-Ⅲ地点墳墓全景（南から）



(1) 墳墓の墓壇（東北から）



(2) TD-Ⅲ地点4号墓（西から）



(1) TD-Ⅲ地点全景（南から）



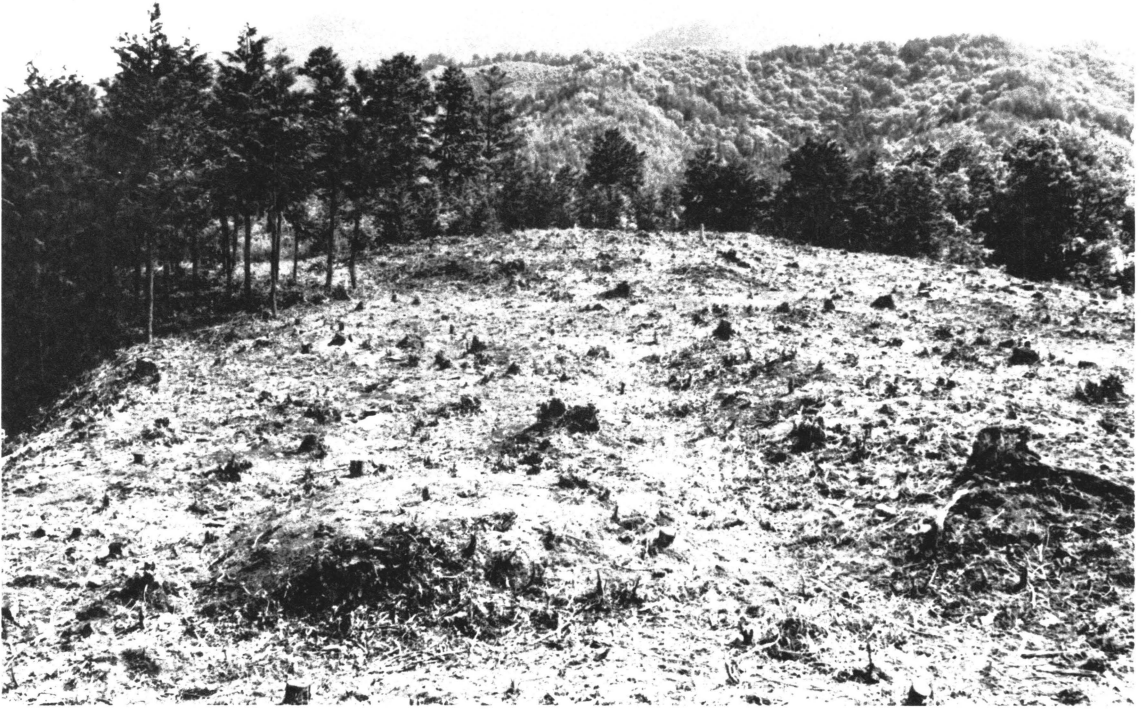
(2) TD-Ⅲ地点全景（西から）



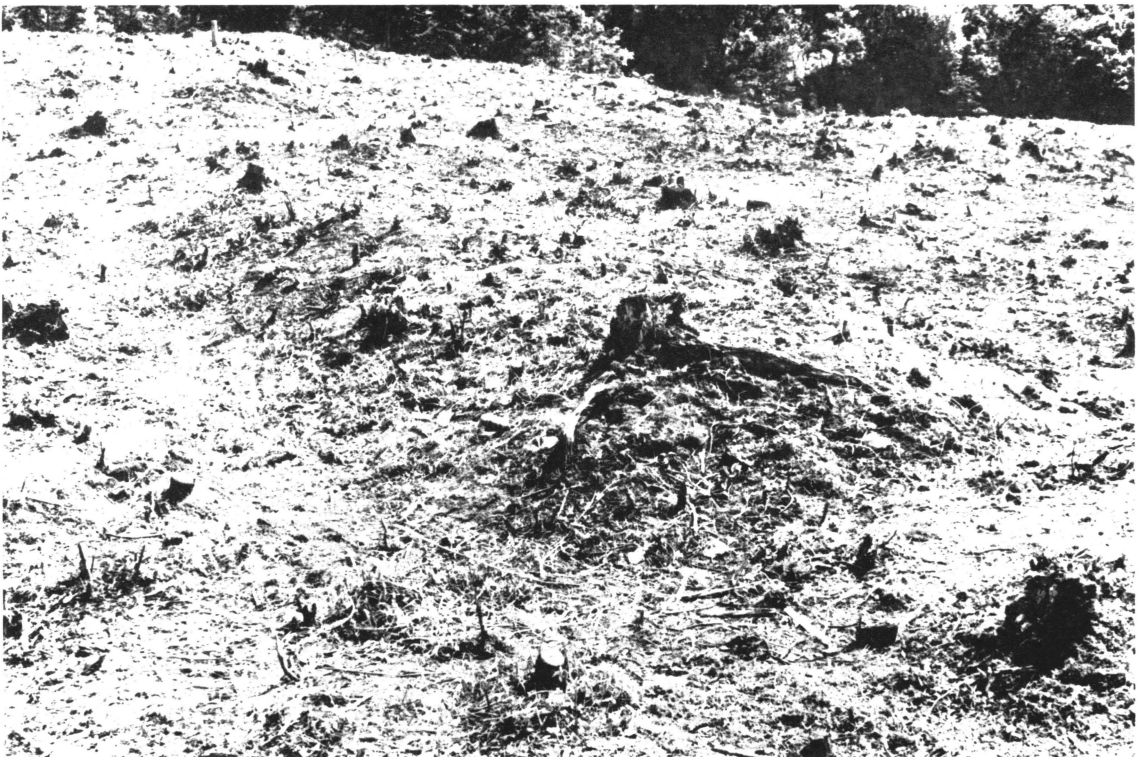
(1) 今安廃寺跡立会調査トレンチ全景（東南から）



(2) 今安廃寺跡立会調査トレンチ全景（東から）



(1) 大道廃寺跡調査前全景（東北から）



(2) 中世墓群調査前状況（東から）



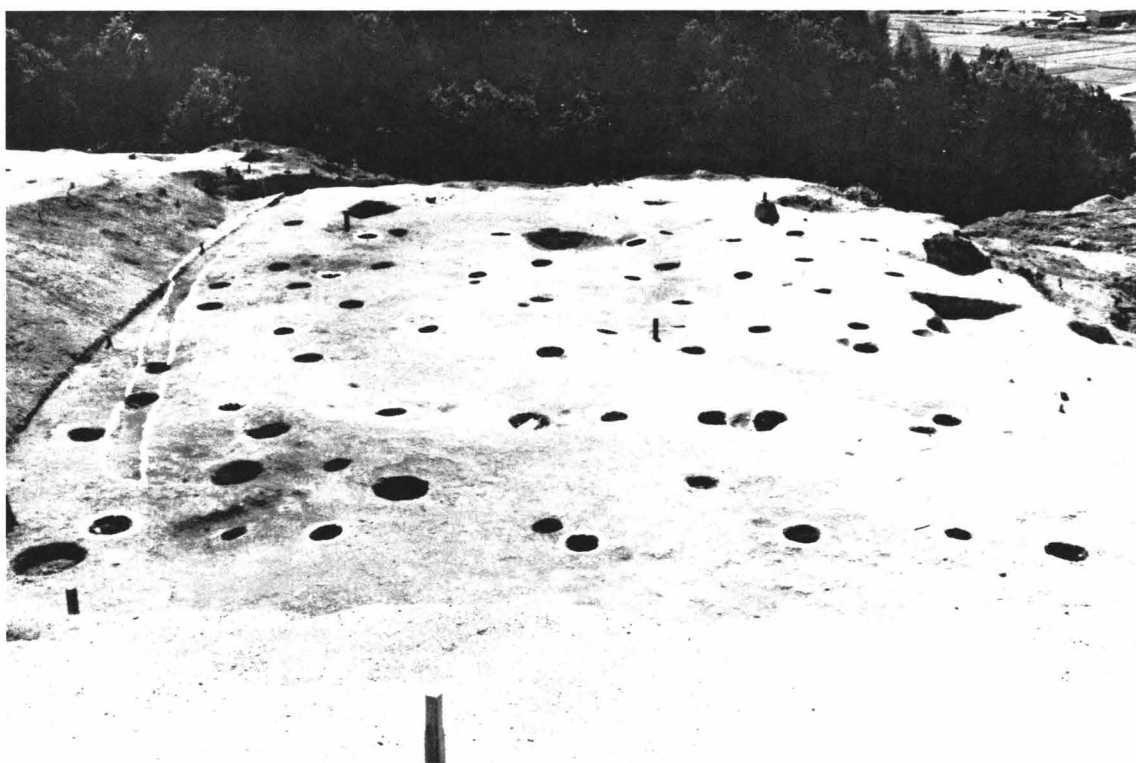
(1) 建物跡 S B01 (東から)



(2) 建物跡 S B02 (東から)



(1) 建物跡 S B03 (東から)



(2) 建物跡 S B04 (東から)



(1) C地区中世墓群 (東から)



(2) 6号墓 (東北から)



(1) 25号墓 (西南から)



(2) 15号墓蔵骨器出土状況 (西北から)



(1) 経塚集石状況（北から）



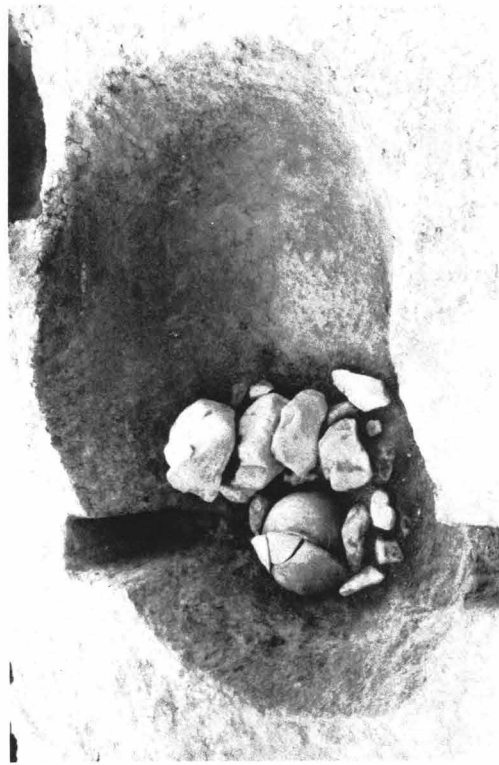
(2) 経塚副室内和鏡出土状況（西南から）



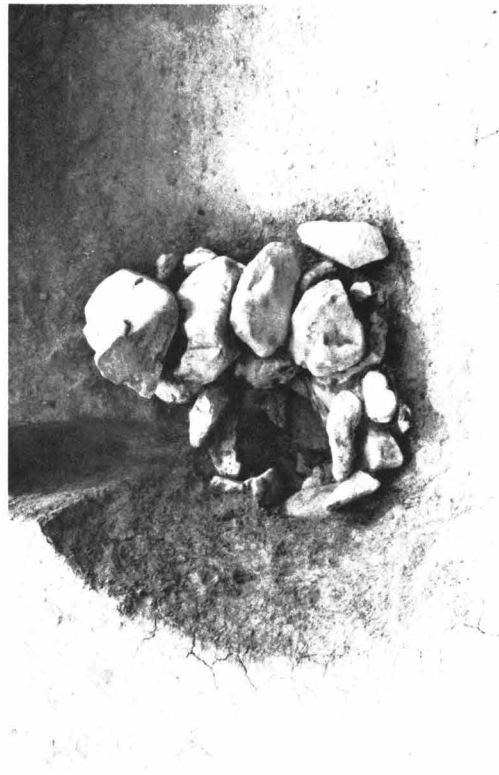
(1) 経筒外容器埋納状況（西から）



(2) 経筒埋納状況（西から）



(1) 経筒外容器出土状況 (東から)



(2) 経筒外容器取り上げ後 (東から)



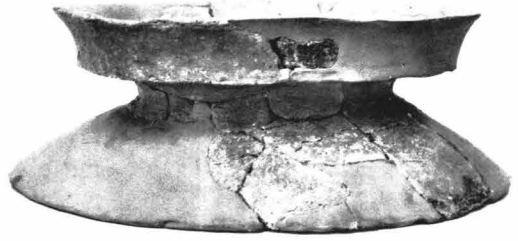
(3) 経筒外容器下部底面 (東から)



(4) 経塚完掘状況 (東から)



45-6



45-6



45-8



45-33



45-29



45-34



45-30



46-71



47-80



46-58



47-82



47-81



47-90



47-89



47-85



46-73



47-88



48-104



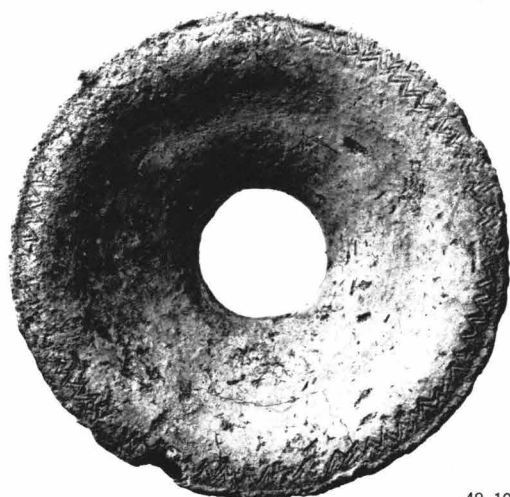
47-87



48-109



47-95



48-106



47-97



48-106



48-108



47-98



48-105



48-109



48-113



48-114



48-116



48-123



48-119



48-121



48-120



48-122



49-144・145



49-147



49-148



49-151



49-149



49-155



48-125



50-163



50-166



50-167



48-126



48-129



48-130



出土遺物(8)



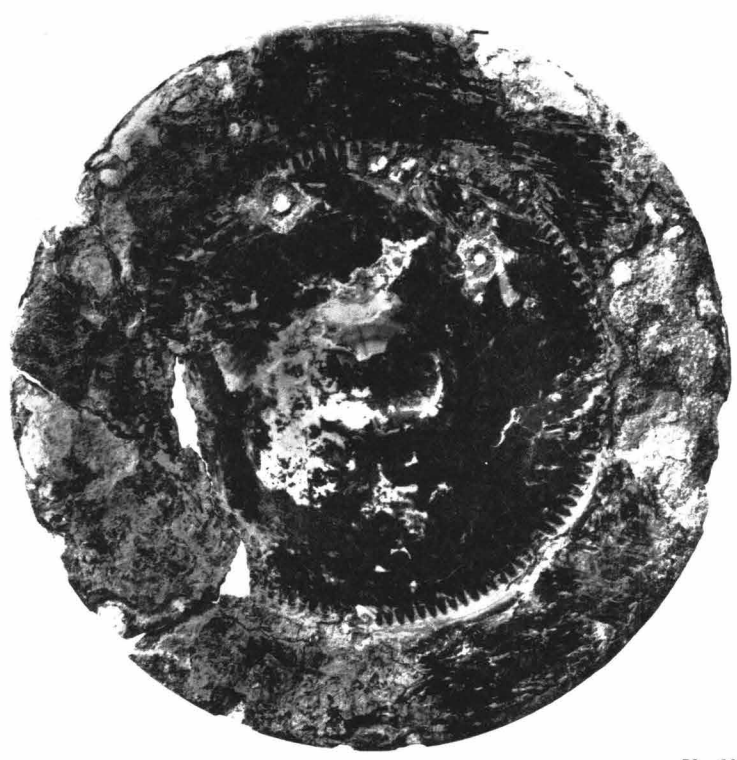
出土遺物(9)



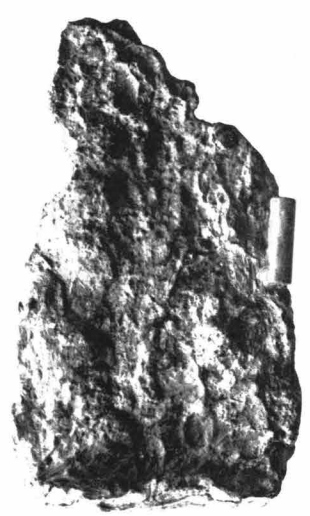
出土遺物(10)



出土遺物(11)



53-79



53-80

29



53-81



出土遺物(12)



57-53



57-56



57-55



57-57



56-28



56-36



56-27



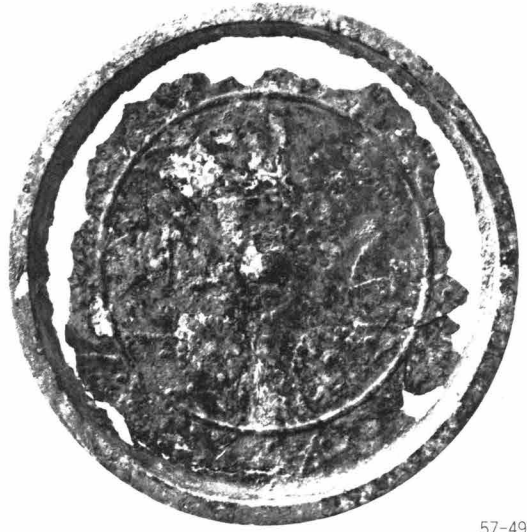
55-4



55-1



57-47



57-49



57-48



57-42~46



57-50

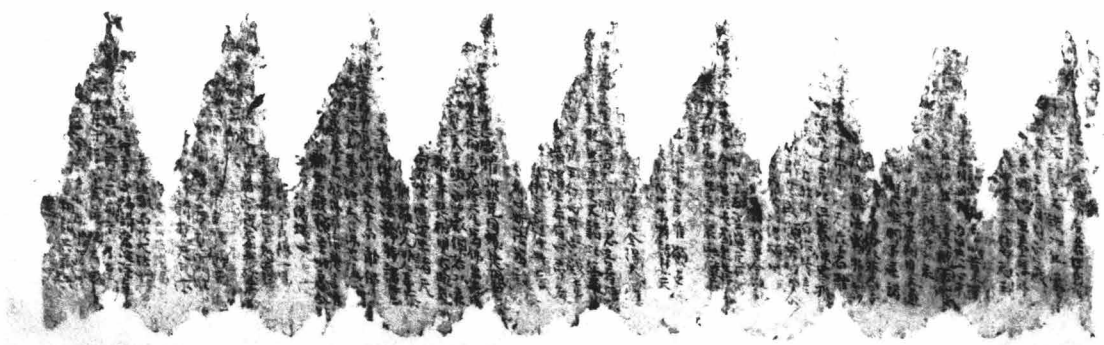


57-51



57-52

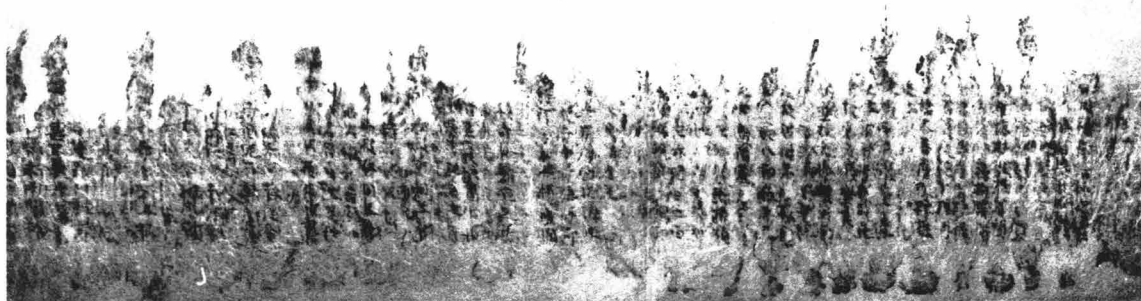
(1)



(2)



(3)



大道寺経塚出土紙本経

(1)妙法蓮華経第3 (2)妙法蓮華経卷第3 (3)阿弥陀经

京都府遺跡調査報告書 第1冊

昭和58年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

TEL (075)256-0416

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

TEL (075)441-3155 (代)